

## 第2章 石器

上黒岩遺跡の発掘調査は1次調査から5次調査まで行われている。これらの調査によって断続的ながら縄文時代草創期から中世にかけての膨大な遺物が検出された。特に縄文時代草創期から縄文時代早期にかけての石器を中心とした遺物が多く、最も岩陰が利用された頃である。縄文時代後・晩期には堆積も進み、底部分の面積が縮小し、居住施設としての岩陰の意義も低下したのか、遺物は少ない。この上黒岩に居住した縄文時代人の生活実態を窺うにあたって、石器類のもつ意味は重要である。また、本遺跡ほど縄文時代草創期の良好な遺物が豊富に出土した例は全国的にも多くないし、近畿・中国・四国において一括性の高い資料に限って言えば指折りの遺跡である。このことから縄文時代草創期を語る時常に本遺跡は話題に上っていた。しかし検討の材料としては調査主担当の江坂輝彌・岡本健児・西田栄による概報・速報しかなく〔江坂・岡本・西田1967, 西田1962・1969〕, その性格上ほとんど実測図が掲載されなかった。石器類については、鈴木道之助, 十亀幸雄, 古田幹, 多田仁, 光石鳴巳等による限定された範囲内での労作もあるが、有茎尖頭器・石斧・チップ・表面採集遺物といった特徴的遺物やマニアックな研究対象についての研究論文という極めて断片的で、隔靴搔痒の思いを解消するに至っていなかった〔鈴木1972, 十亀1985, 古田1988・1989, 多田1997・2000, 光石他2005〕。

上黒岩遺跡の発掘・採集資料は、慶應義塾大学民族学考古学研究室・上黒岩遺跡考古館・愛媛県歴史文化博物館・国立歴史民俗博物館・竹口渉氏の機関・個人の元に分散して収蔵されている。報告書作成にあたっては各収蔵施設に保管されている加工を施した石器を主体に実測図を作成することと、石器類の組成表を作成することによって全貌を窺えるものにするを第一に考えた。しかし力及ばず組成表の作成は断念せざるをえなかった。この点は今回のプロジェクトとは別に、古田幹・津村宏臣・河原林薫による「石器群全体の資料化ならびにそれに基づいた石器資料総体の再検討を目的」としたプロジェクトも並行して行なわれているので石器組成についてもいずれ詳らかとなるよう〔古田・津村・河原林2005〕。

調査区ごとの量的な内訳を簡単に提示すると概ね次ぎのとおりである。

A区：約1,700点(2次・3次・4次・5次), A拡張区：約50点(4次・5次), B区：約1,450点(2次・4次), C区：2,150点(2次・3次・4次), C拡張区：約530点(3次), D区：約270点(2次・3次?), F区：数点(ほとんどが西田栄氏から愛媛県歴史文化博物館へ移管), その他約300点, これに上黒岩考古資料館に約50点弱の石器(2次～4次)を加えた約6,500点～約6,600点が発掘調査にかかる石器類の全貌に近い数であろう。県博に所蔵されているF地区の出土数は把握していないが、4次調査時の日誌からすると膨大な数ではないようである。主要な器種については、石鏃が100点前後, 有茎尖頭器が64点, 有茎尖頭器の未成品が44点, 槍先形尖頭器9点, 石篋約85点, 石斧3点, 石錐2点, 削器28点, 大型石器65点(凹石・磨石・敲石・台石), 楔形石器6点である。いま、層位別の詳しい組成を示すことはできないが、石鏃の大半が2～4層, 有茎尖頭器(未成品を含む)と石篋が7～9層, 大型石器が6層から主に出土している。

石鏃については2～4層以外に6層から推定15点前後が出土しているほか7～9層から1, 2

点ずつ出土しているにすぎない。また上記の点数のうち、石鏃や石鏡、大型石器のなかには2次調査で出土した層位不明のものも数多いが、出土傾向からおよその出土層は推定できよう。本報告書に収載した以外の石器類が層位不明の石器であることに概ね対応する。なお、鈴木道之助や古田幹が尖頭器としたものについては〔鈴木1972, 古田1989〕上端を尖らせず下端を丁寧に半円形に成形した特徴から半円形部分を刃部とする「石鏡」や「小型石斧」に類似するので石鏡とした。

出土遺物は、1960年代と1970年に行なわれた発掘調査に係わるもので、最終調査であった第5次調査(1970年10月)から40年の歳月が経過しようとしている。その間、遺物に注記がされていなかったこともあって当初の出土地点・層位とは異なってしまったものもある。例えば「日本の洞穴遺跡」の写真図版に掲載されたD区6層出土の石鏃がC区出土のラベルとともに袋に同封されていたのはほんの一例であった。遺物については、調査次ごとの写真・日誌・概報類・ラベル・日付等を参照し、可能なかぎり本来の出土区・出土層位の復元を行なった。しかし判明できなかったものもあり、これについては挿図の終わりに一括した。また2次調査において出土した遺物のラベルに「第3黒色土層」・「褐色土層」・「黄褐色土層」・「黄褐色土粘土層」と記されており、少なくとも2次・3次調査では7・8層から遺物が出土していないこと、遺物の出土日付や記載内容から3次調査における9層の細分(9I層～9VI層)に対応するものと考えられた。結局前後関係の判明する土層断面図が見当たらず、「9層：黄褐色土層」というように一覧表で記載するに止めざるをえなかった場合もある。

なお、『日本の洞穴遺跡』に第2次調査D2区深掘区(通称鎌木トレンチ)14層(青褐色粘性土層)から旧石器時代の石器が出土という記載がある〔江坂ほか1967:229〕。これは上黒岩遺跡における人類の岩陰利用の開始を意味することから、意識的に探索したが見当たらなかった。なお第4次調査B区第11層から剥片が2点出土していることが判明し、図化したが帰属する時代を特定できるものではなかった。旧石器の有無については今後も機会があれば追求したいと考えている。

草創期の出土石器類のうち、二次加工が加えられ、出土区・出土層位の判明した石器類のうち80%近くを図化した。したがって本報告書に収載した石器は、上黒岩遺跡で出土した量的・器種的な要素の全貌を窺えるレベルには達することができたと考えている。

## 1 A区・A拡張区

A地区・A拡張区は東西に長い岩陰の東側奥部で最も高い部分にあたり、東から西へA拡張区、A区と隣接する。A区の調査経過は、1961年の1次調査時にA区・B区・C区(第2次調査の1トレンチ)として調査されたうちのA区が最初である。翌年8月の第2次調査で1次調査のA区北側にA区、その東側にA拡張区が新たに設定され、1970年の第5次調査まで継続調査をしている。その理由としてA地区・A拡張区は第4層において人骨が密集して検出されたことから精査に時間を要し、第8b層の途中で調査が終了している。

なお、6層は無紋土器の文化層とされているが、下位文化層(7～9層)と同様な遺物をも含む文化層と認識している。7層については2・3次調査C区・D区では第II破碎礫層とされていたが、A区では6層の下に「粘性褐色土層」があり(4次調査8月13日の日誌)、これを7層(Eセクション

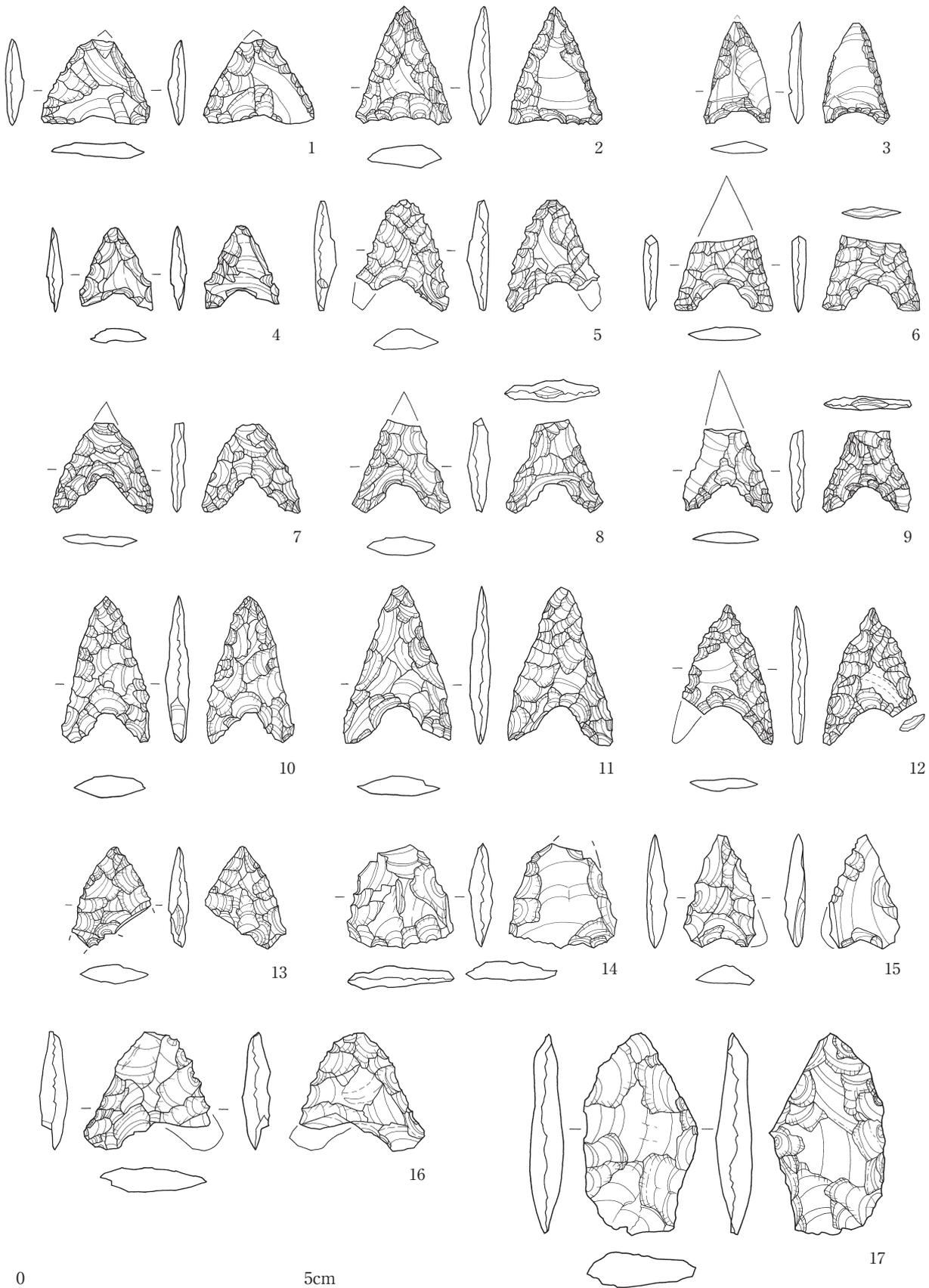


图66 上黒岩遺跡3次調査A区3層出土石器 (S=1/1)

ン7層)としている。また6層と7層の区別も「殆んど差異を見出せない。……第Ⅵ層と第Ⅶ層を同一層とみなすのが至当かもしれない。」と記載し(4次調査8月13日の日誌),更に「C, D区の第9層に相当する……。」と鈴木道之助は日誌に書いている(4次調査8月11日の日誌)。このような理解の背景には,調査時における隆起線文土器の出土や有茎尖頭器等の遺物構成が驚くほど共通していたこともあるようで,本報告書作成にあたっては,そうした問題点を認識しつつ石器類を観察した。

### (1) 3層出土

**石鏃**(図66-1~16) 16点を確認した。これらの形態は,浅く弧状の抉りをいれた例と(1~3, 14, 15),脚部が逆V字形になるような抉りをいれたものがある(4~13, 16)。前者の中には縄文時代草創期や弥生時代早期に比率が増加する二等辺三角形の例がある(2)。層位的な位置と,本遺跡の2層から弥生時代早期の刻目突帯文土器が出ているので関連が推定できる。このほか明らかに縄文時代早期の石鏃である鋏形鏃は出土していない。

石材は赤色硅質岩が6点(3・4・7~9・12),推定金山産サヌカイトが4点(1・11・14・15),その他外来系のサヌカイトが1点(16),無斑晶質安山岩が2点(2・13),チャート質の硅化岩が1点(5),頁岩が1点(6),姫島産黒曜石が1点(10)である。遠隔地の石材である姫島産黒曜石・推定金山産サヌカイトを石材とした石鏃が注意される。破損部位は16点中,7点に先端部の破損,4点に脚部の破損が観察された。

**石鏃未成品**(図66-17・図67-18) 17は赤色硅質岩を石材とした凸基式の完成品とも考えられる。18は硅質頁岩を石材とした三角形の未成品で,剥離が粗いままである。

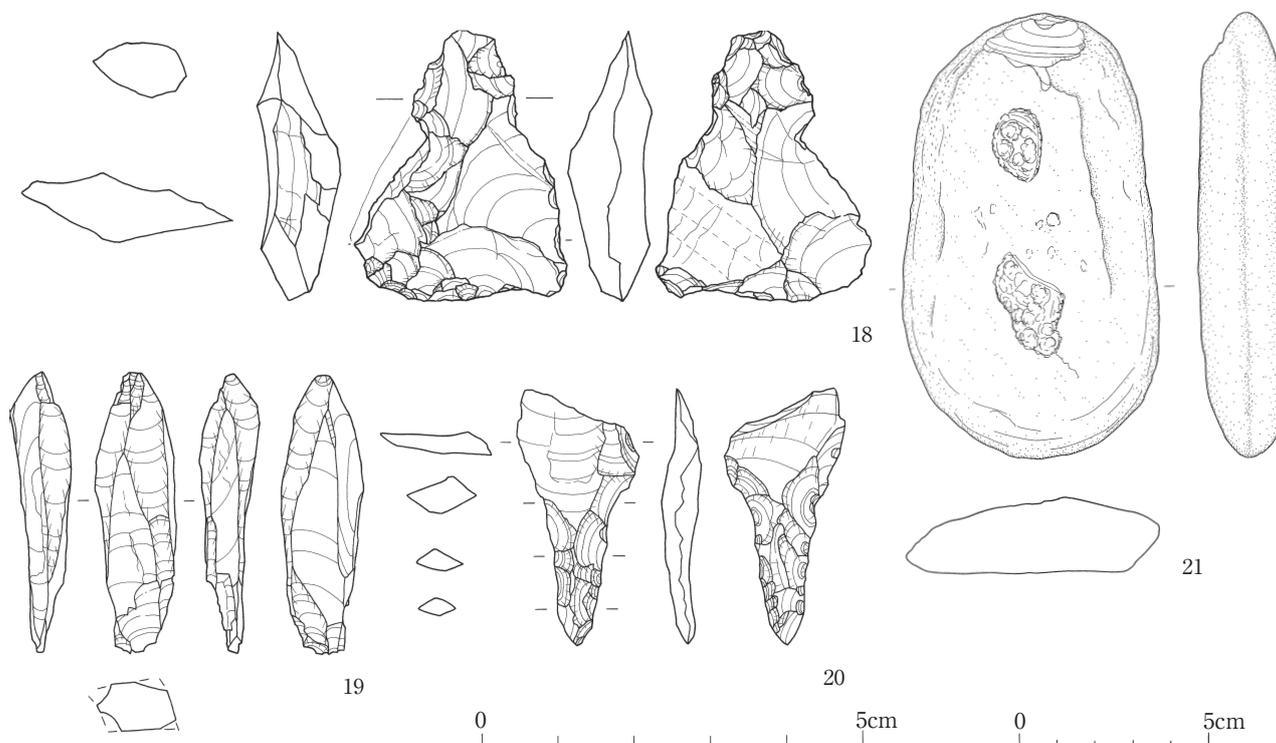


図67 上黒岩遺跡3・5次調査A区・A拡張区3層出土石器(S=1/1・1/2)

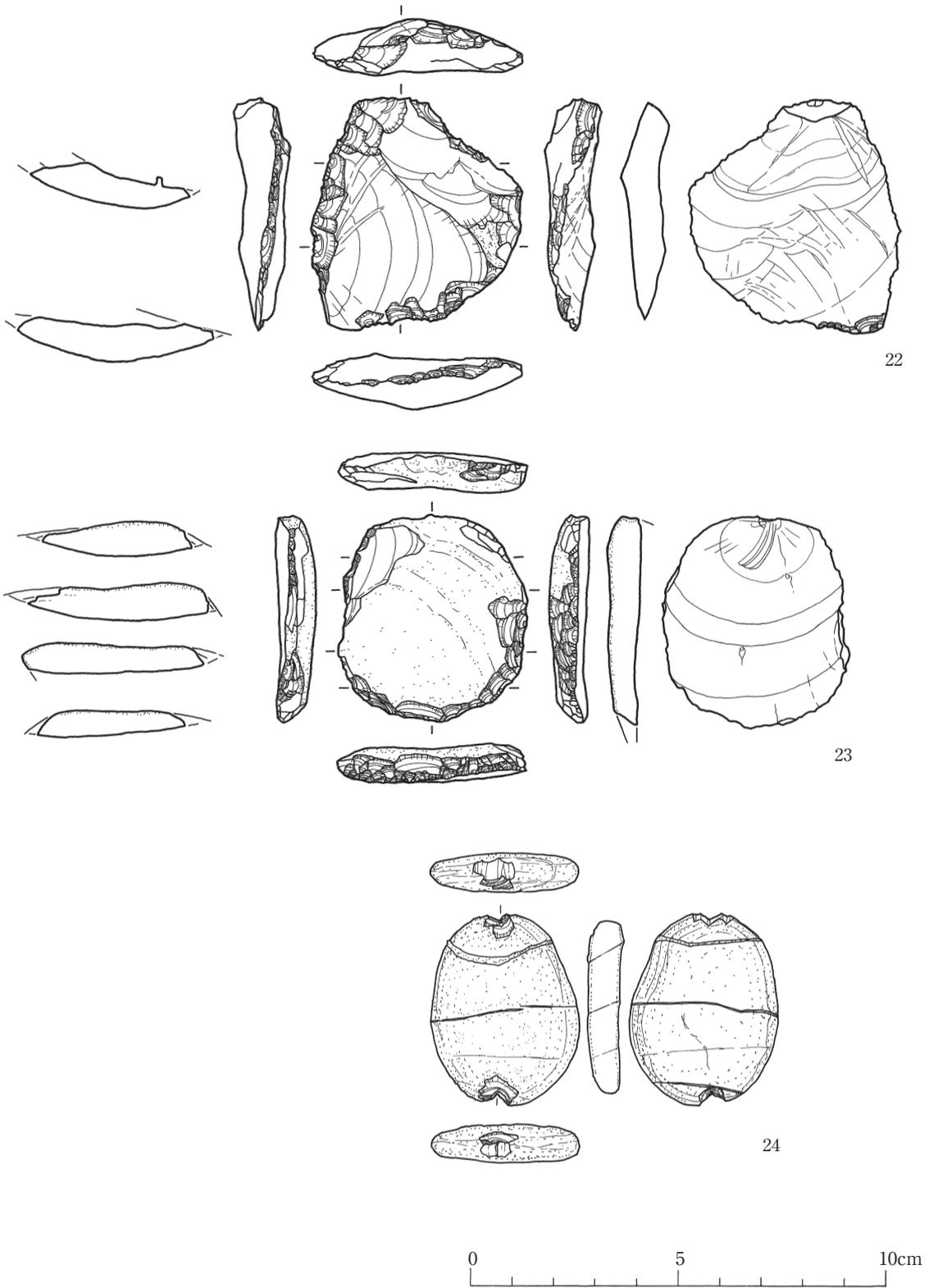


图 68 上黒岩遺跡 3・4 次調査 A 区・A 拡張区 3 層出土石器 (S = 2/3)

**楔形石器** (図 67-19) 上下に細長い形で、両極方向からの剥離痕が走る。姫島産黒曜石である。

**石錘** (図 67-20) 平たく幅広い基部と、細長く断面が平行四辺形をした錐部からなる。石材は推定金山産サヌカイトである。

**削器** (図 68-22) 打面部を残し、右側縁から下縁にかけての調整加工によって左側縁より下端が切出し状となる。また左側縁と右側縁上位の調整加工は打面より内傾した平面形で左側縁との間が石匙のつまみ状となる。調整加工はほぼ表面側のみに施されるが、緩い傾斜角で、平坦剥離に近い。石材は香川県産のサヌカイトである。

**搔器** (図 68-23) 楕円形の小板から生産された表面と打面部に礫面が残る剥片を素材としている。素材剥片の下半側をやや急角度の整形加工で半円形に整形しており、平面形は短い楕円形となる。石材は在地系の頁岩である。

**石錘** (図 68-24) 長軸の両端部を打ち欠いているが、その後打ち欠き部分で器体に直交する条痕が形成されている。これは両面方向に切れ込みの入った切目石錘と違っている。法量は長軸 4.6 cm、短軸 3.6 cm、厚さ 0.9 cm、重さ 23 g である。緑色片岩の扁平で楕円形の小板を用いている。

**石核** (図 187-456) 姫島産黒曜石を石材とする高さ 3.1 cm、幅 1.7 cm、厚さ 1.2 cm の小型。あるいは楔形石器かと考えたが、剥離が表面で下から、裏面で横から行なう。

## (2) 4層出土

**石鏃** (図 69-25~29, 31~18, 40~44) 18点を確認した。小型石鏃(25)を除く全てに抉りがある。脚部が尖る例と(31・32・35・38)、脚端部が幅広い例がある(26~29・33・34・36・37・40~44)。全体的な傾向として前者には華奢な例が多く、それに較べて後者はやや大きい例が多い。特に大きい例として、40は長さが3.22 cm・重さ2.62 g、43は長さが3.23 cm・重さ2.29 g、44は長さが3.95 cm・重さ3.16 gである。また大型例の中には縄文時代早期に特徴的な鋏形鏃とみて差し支えない例もある(41・43)。また25は長さ1.15 cm・幅1.04 cm・厚さ0.35 cm・重さ0.28 gの小型品であり、賀川光夫が大分県川原田洞穴の押型文土器に伴って出土した極小の石鏃を「細石鏃」と呼んだことがあるが[賀川1970]、大きさはこれに該当するものの、本例には抉りがない。大型例と小型例を除く石鏃は長さ1.46 cm・重さ0.54 gの例から(34)、長さ2.62 cm・重さ0.83 gまでの範囲に収まる一群であり(31)、これを中型に区分する。A地区・A拡張区4層の石鏃の成品は大中小に区分される。石材は赤色硅質岩が6点(32~34・36・38・41)、推定香川県産等外来系のサヌカイトが5点(27・28・31・37・43)、無斑晶ガラス質安山岩が3点(29・35・42)、無斑晶質安山岩が1点(25)、頁岩が1点(26)、硅質頁岩が1点(44)である。以上のなかで無斑晶ガラス質安山岩とした石は香川県産のサヌカイトと看做してよいものも含まれている。44はパリノ・サーヴェイ株式会社の石岡氏から日本海沿岸の硅質頁岩である可能性を指摘された例である。なお、当然含まれてよいはずのチャートのないことが注意される。破損部位は18点中、1点が尖端部の破損例、4点に脚部の破損が観察されたが、ほかは欠損していない。

**石鏃未成品** (図 69-30・39) 30は推定香川県産サヌカイトで、39は無斑晶ガラス質安山岩であるがサヌカイトと考えられる。なお2点のうち1点は尖端部から左脚の縁沿いにファシット状の破損を生じている。

**石錘** (図 70-45・46) 緑色片岩の扁平で楕円形の小板を用いた例が2点ある。3層出土例と同じ

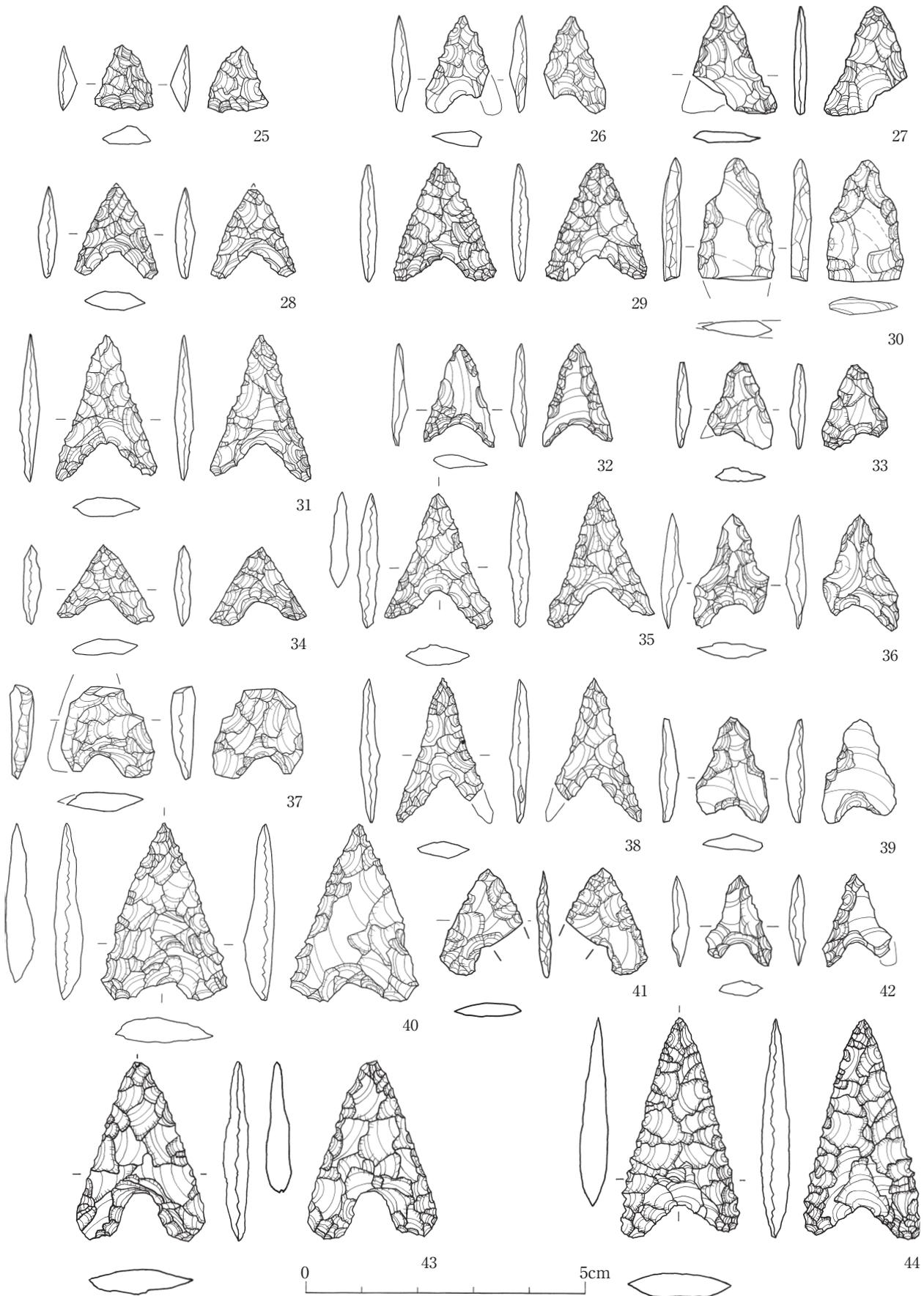


图 69 上黒岩遺跡 3・4 次調査 A 区・A 拡張区 4 層出土石器 (S = 1/1)

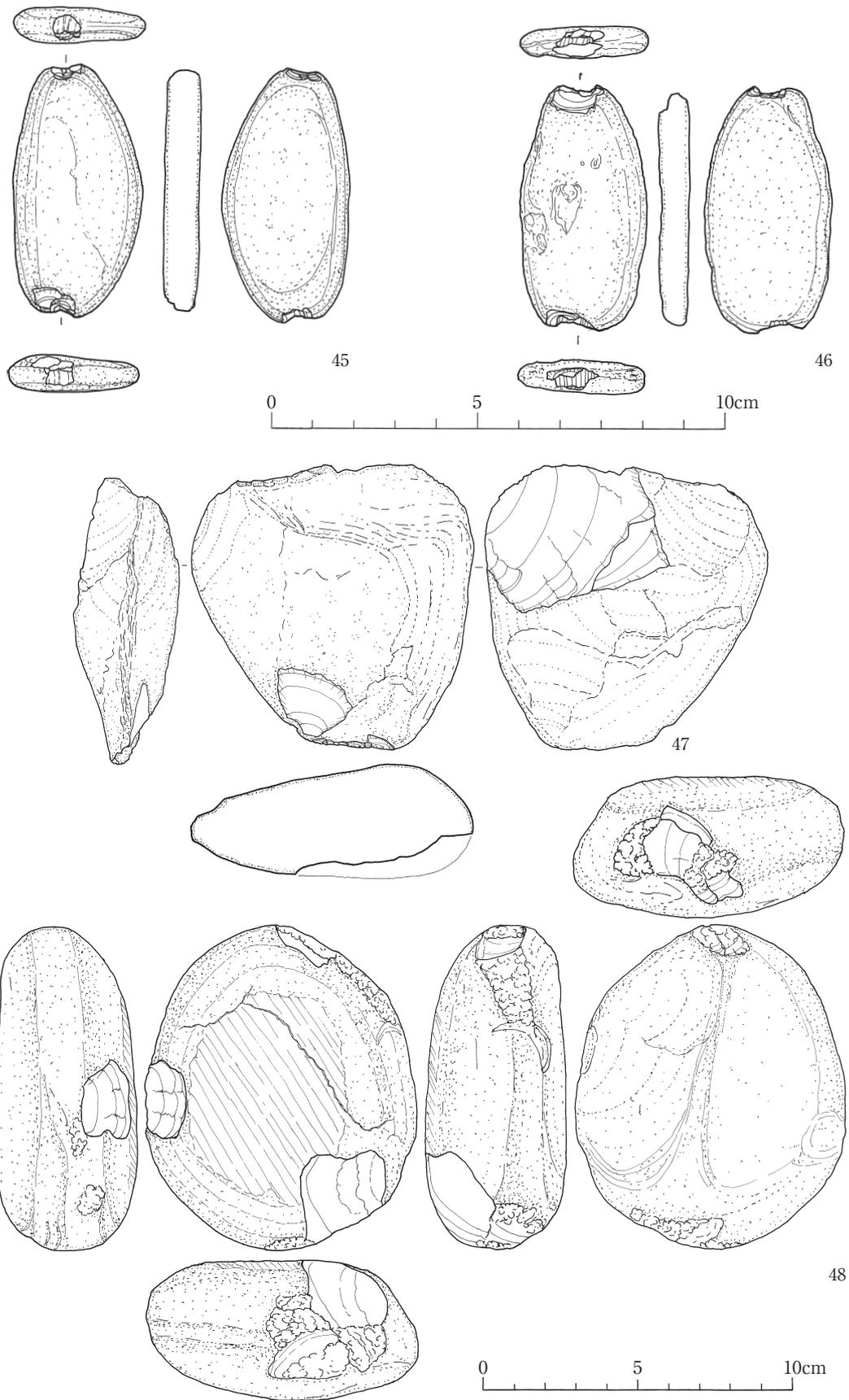


図70 上黒岩遺跡3・5次調査A区・A拡張区4層出土石器 (S = 2/3・1/2)

く長軸の両端部を打ち欠いているが、その後器体の端部に直交（厚さ方向）する条痕が形成されている。両面方向に切れ込みの入った切目石錘と違っている。45は長軸6.15cm，短軸3.15cm，厚さ0.95cm，重さ29.47gで，46は長軸6.0cm，短軸3.1cm，厚さ0.8cm，重さ23.76gである。

**楔形石器**（図187-457） 両極方向からの剥離。石材は赤色硅質岩である。

**敲石・磨石**（図70-47・48） 47はやや扁平な緑色岩を石材とし，表面の下半部と裏面の上半部左辺に敲打による剥離痕と細かい剥離上の潰れ痕が観察される。重量は339gである。48は輝石安山岩の分厚く重量のある円礫を用いており，558gを測る。この例は表面側の上端・下端・左側に敲打による潰れと，剥離痕が生じている他，表面に磨った痕跡がある。

### (3) 5層出土

5層は遺物の出土数が少なく，6層に帰属すると考えられる。

**石鏃**（図71-49～51） 3点とも浅い抉りの入る例で，脚部が大きく開き，両側縁に肩部を持つことで共通しており，3・4層の石鏃と平面形が大きく異なっている。石材は赤色硅質岩が1点（49），推定金山産サヌカイトが1点（51），推定金山産以外の推定香川県産等外来系のサヌカイトを用いた例が1点（50）である。破損部位は3点中，2点に脚部の破損が観察されたが，ほかは欠損して

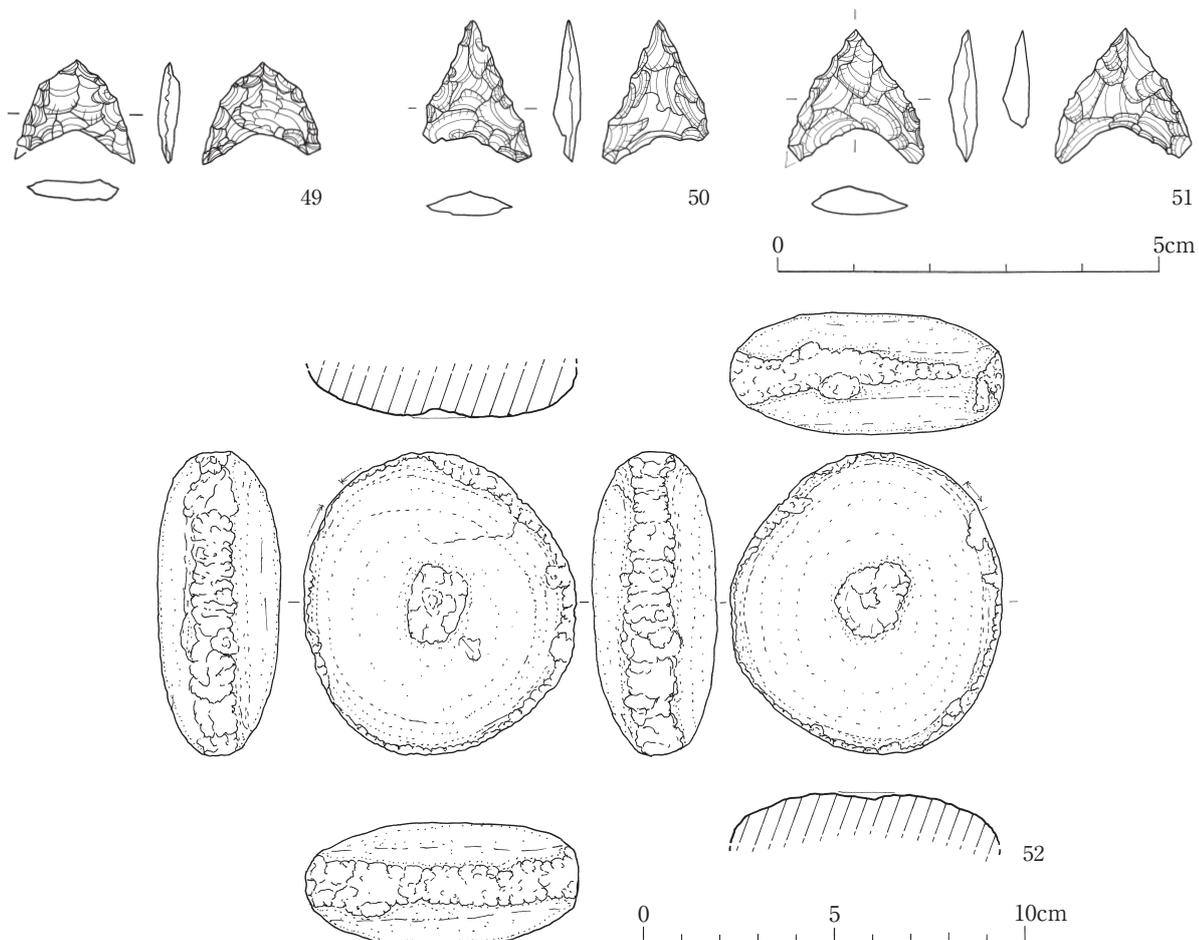


図71 上黒岩遺跡4次調査A区5層出土石器（S=1/1・1/2）

いない。

**凹石・敲石** (図71-52) 分厚い円形の緑色岩を用い、両面中央に直径1.5cm前後の円錐形の凹部が生じている。全周囲には著しい敲打痕が残る。

#### (4) 6層の石器類

6層に至って明確に縄文時代草創期的な石器が出土しはじめる。

**石鏃** (図72-53) 浅い抉りが入り、脚部が大きく開き、両側縁に肩部を持っている。5層の石鏃と共通している。石材は赤色硅質岩である。

**有茎尖頭器未成品** (図72-54・55) 後述する7・9層の有茎尖頭器の形態から推測して有茎尖頭器の未成品と考える。54は調整加工が粗く、側面にみる縁部が直線的ではなく波状をなしている。長さは4.63cm、幅2.82cm程度であることから本遺跡に最も多い有茎尖頭器の大きさに対応する。基部側に最大幅があり、半円形に成形している。55は長さ6.7cm、幅4.5cmであり、有茎尖頭器の未成品としては例の少ない大型例になるが、明確な茎部作り出しの意図が窺える例である。裏面の下半に平坦な調整加工があるが、表面周辺にやや傾斜のある調整加工が施されたことで、横断面が概ね台形を成す。こうした断面の状態からは、通常の有茎尖頭器に見られる凸レンズ状断面に調整することは困難であったことから、先端部を作出せずに未成品のままとなったと考える。

**有茎尖頭器** (図73-56) 基部側を欠くが、長幅の大きさから本例程度の大きさで、表裏両面の調整加工の一つ一つは大小様々で不均一であるが、押圧剥離で斜状平行剥離の意図が窺える例であることから有茎尖頭器と考える。

**槍先形尖頭器** (図73-57) 弓形にカーブする縦長剥片を利用している。調整加工も限定的で、奥深く延びる剥離の意図は窺えないが、基部と先端部を明らかに作りわけた柳葉形である。

**搔器** (図73-58, 図74-59~61) 4点確認した。58は遠位が短く乳首上に突出し、近位を半円形に成形しており、ずんぐりした形態である。表面側に奥深く延びる幅広い剥離があるが、押圧剥離ではない。表面側周辺にはやや急傾斜の細部調整が施され、断面形が扁平な台形となる。また裏面は当初、ヒゲ状フィッシャーが観察される節理面で、これに周囲から短い調整加工を施している。このような形態的・技法の特徴から、有茎尖頭器などへの作出意図は窺えない。下端におけるやや急傾斜な部分を刃部とした搔器と考える。59は小型例で、拇指状搔器と呼ばれるものである。下端を半円形に細部調整を施し、刃部としている。60は表面側の左辺及び下端を主に加工しているが、下端の平面形は半円形ではなく、直線的である。基部方向と推定される遠位側が欠損している。61は幅広剥片を素材とし、表面側の下端部を急斜度の加工を施し刃部とする。更に、この加工をした部分を裏面方向へ加撃している。この加工によって刃部の正面観が円盤状となる。平面形はやや細長い。

**石篋** (図74-62~64) 4点を確認した。62は表面に礫面を残す幅広剥片を素材とし、その打面部と対極の端部を短い両面調整で加工している。石材は無斑晶質安山岩を用いている。63・64は直接打法による両面調整であり、側縁が大きく波状を示す。中ほどに最大幅があり、刃部側の下半を欠く。石材は無斑晶質安山岩を用いている。65はソフトハンマーによる両面調整と推定するが、側縁部から刃部にかけて細部調整を施すので縁部の振れ幅は大きくない。中ほどで破損しており、基部側の下半を欠く。石材は無斑晶質安山岩を用いている。江坂輝彌や鈴木道之助が木葉形尖頭器

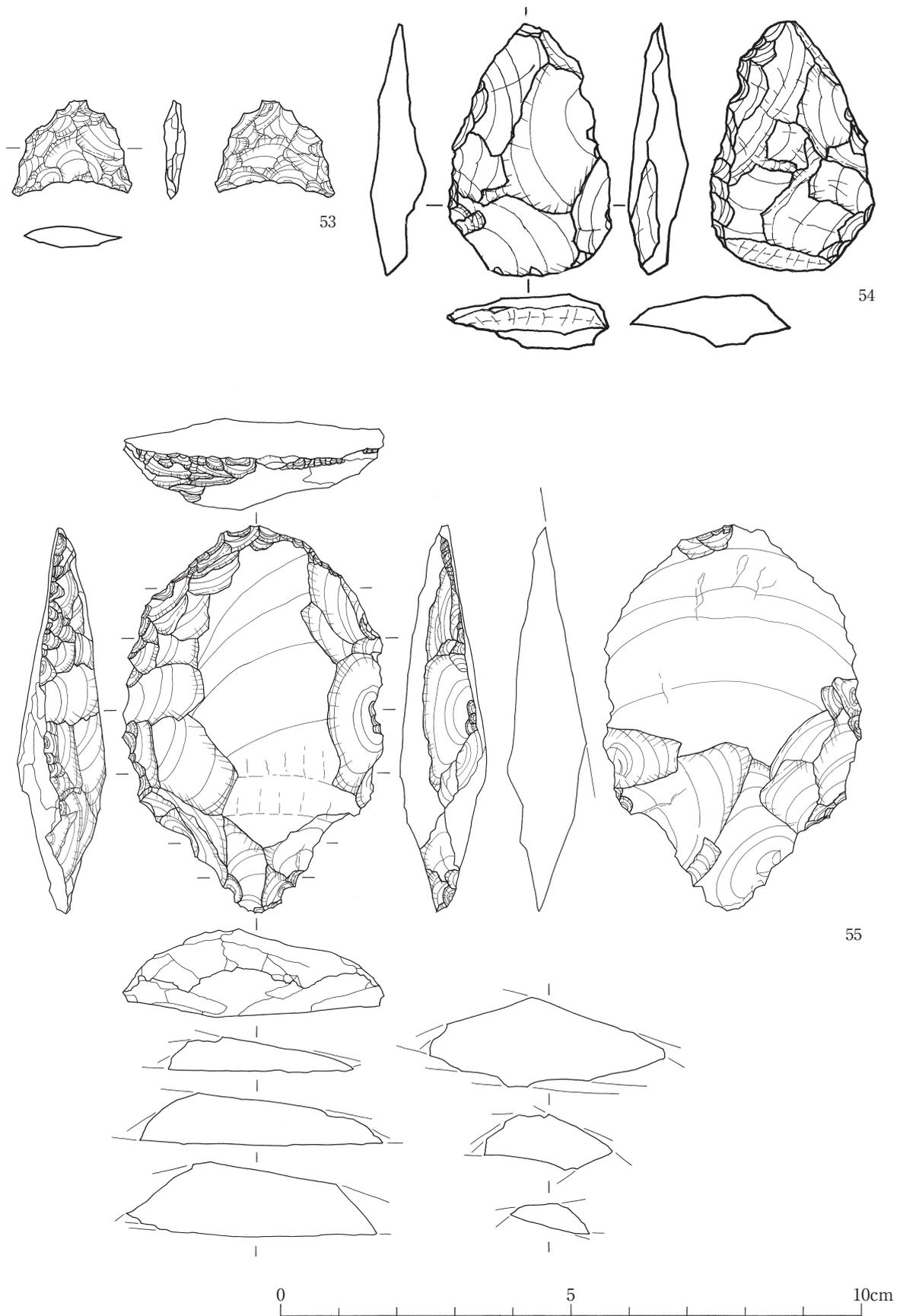


图72 上黒岩遺跡4・5次調査A区6層出土石器 (S=1/1)

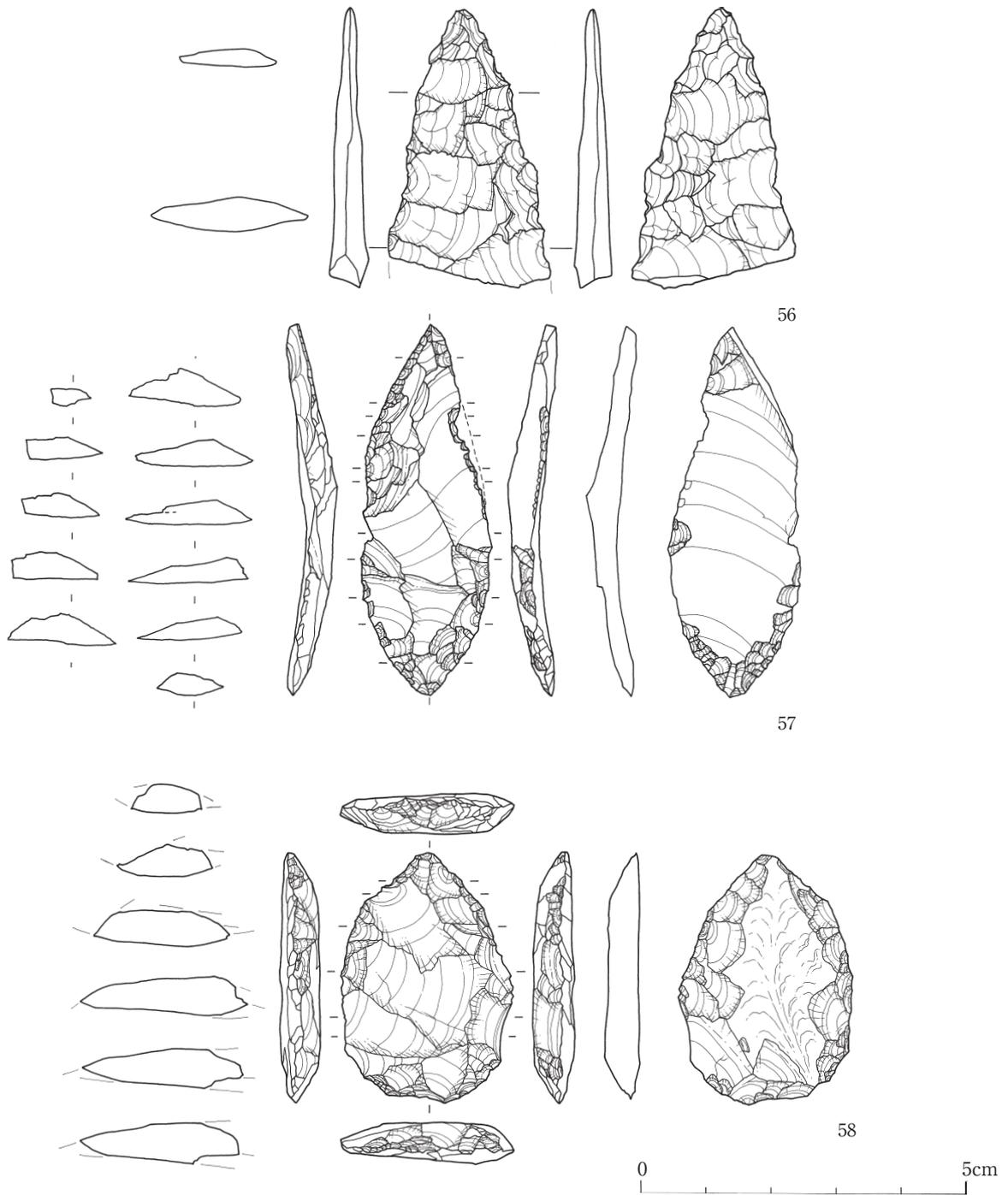


图 73 上黒岩遺跡4次調査A区6層出土石器 (S = 1/1)

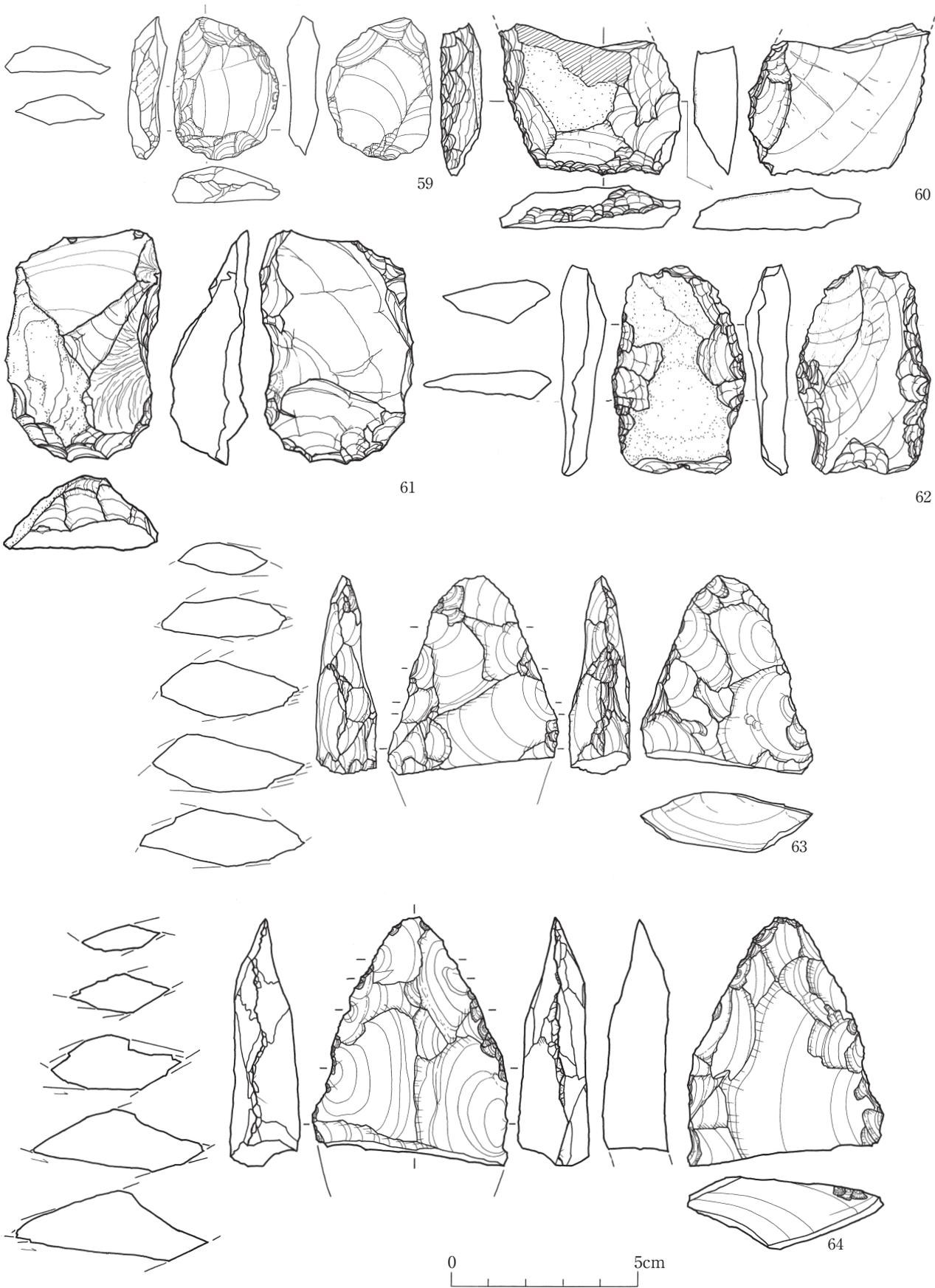


图74 上黒岩遺跡4次調査A区6層出土石器 (S = 2/3)

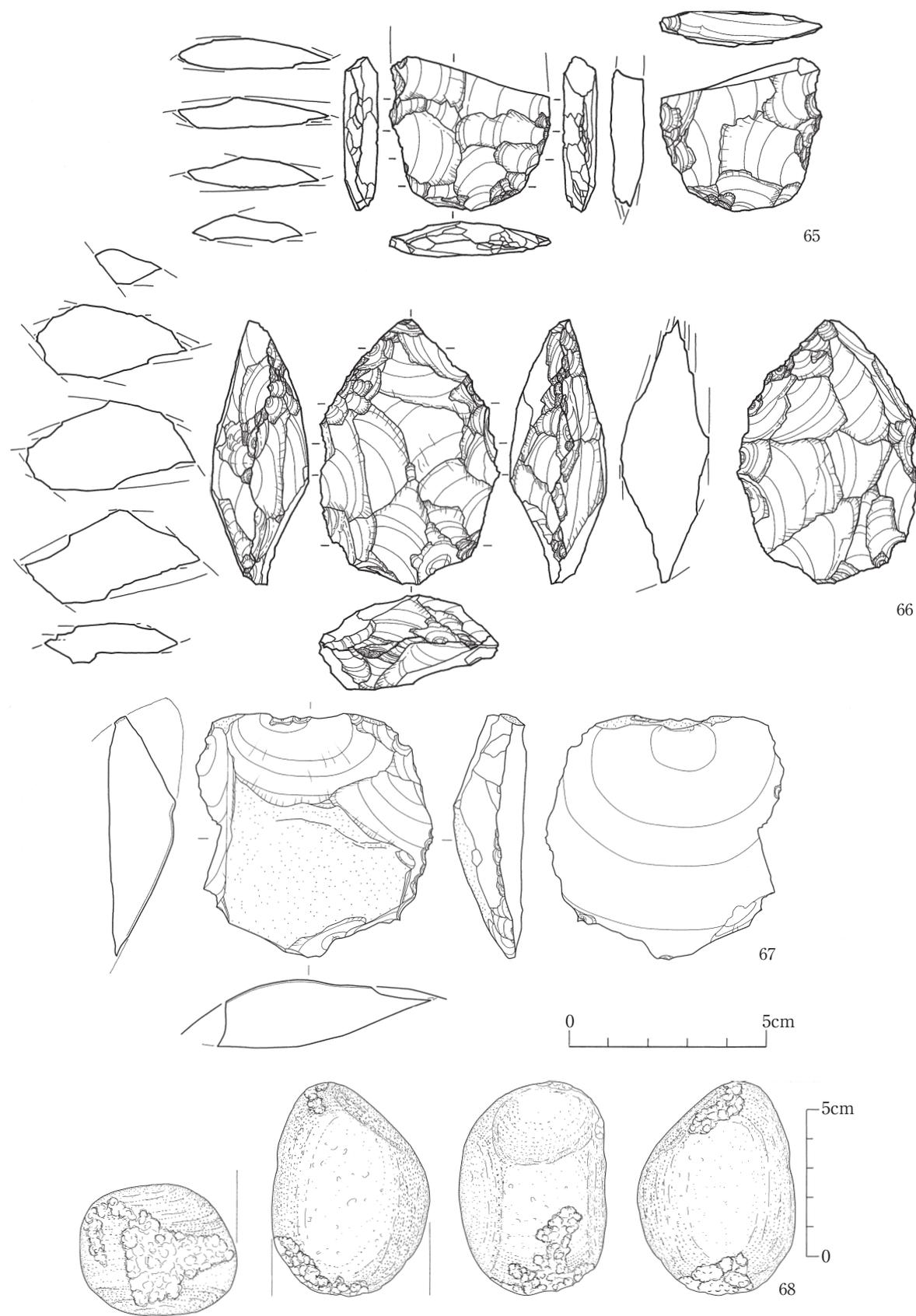


图75 上黒岩遺跡4次調査A区6層出土石器 (S = 2/3 · 1/2)

(杏仁形尖頭器)とする例を含んでいる [江坂・森本・小片他 1969]。この石器の特徴は先端部とされていた上端が鋭く尖らず、入念な調整加工も施されていない。むしろ基部とされていた下端を入念に半円形となるように加工している。また使用等に係わる先端部の細かい欠けがある例はなく、ほとんど中ほどで折れた例である。したがって先端とされていた部分が基部で、基部とされていた部分が刃部と考えられる。

**石篋未成品** (図 75-66) 水滴形を成すが、側縁や刃縁の側方観は波状となっている。上端付近の縁部にはやや細かい調整がほどこされているが、上端の平面角度が90°近くもあり槍先形尖頭器類を意図したものでないことがわかる。裏面右半部の盛り上がり部分でステップが生じ、除去できなかった例であろう。

**削器** (図 75-67) 平面形態は長幅がほぼ同一となる方形状の剥片で、打面部や表面に礫面が残るので石核調整時の剥片を利用していると推定する。表面右側縁下半部に鋸歯状の加工を施すが、限定的であり、あるいは未成品か。

**敲石** (図 75-68) 長さ 7.25 cm、幅 5.3 cm、厚さ 5.0 cm、重さ 217.67 gの大きさを有する川原石を用いている。石材は砂岩か。遠位の緩く窄まる部分に若干の打痕と、下端の幅広部分に著しい打痕がある。大きさと重量からみて、石器加工用の敲石か。

#### (5) 7層の石器類

**石鏃** (図 76-69・70) 層位から隆起線文土器に伴う例である。69は平面形が二等辺三角形で、長さ 1.72 cm・幅 1.57 cm・厚さ 0.36 cm・重量 0.64 gの大きさを有する。丁寧な押圧剥離で調整される。石材は安山岩である。70は長さ 2.17 cm・幅 2.02 cm・厚さ 0.245 cm・重量 0.76 gの大きさを有し、左脚を欠くもののその復元幅は 2.25 cmとなる。ほぼ平面形はほぼ正三角形であるが、底辺部が緩やかな弧状を成す。丁寧な押圧剥離で調整される。

**有茎尖頭器** (図 76-71~74, 図 77-75~77) 7点出土している。石材の内訳は、サヌカイトが1例、赤色硅質岩が3例、硅質頁岩が2例、チャートが1例である。71と72は特殊な有茎尖頭器で他に類例を知らない形態である。71の平面形は蝙蝠が翼を広げた様な形で、逆刺部は円く突出し、刃部～体部は肩の部分が一旦内側へ丸く回りこみ、先端部へと内傾する。茎部は底辺にあたる部分が幅広で、茎部長は短い。表裏に斜状平行剥離的な細長い押圧剥離痕がある。石材はサヌカイトである。72の先端部―刃部は通常の平面形を成すが、茎部が幅広く・短く突出し、突出部の両隅部が磁器高台断面のように円く突出する。調整加工がやや粗いせいか側縁の上下が最大で0.2cmもある。調整加工はあまり奥部に達せず、貝殻状の剥離痕が縁辺周辺部に施されている。石材は赤色硅質岩である。73は上半部で緩い肩部を有し、先端に至る平面形態と思われるが破損している。肩部からやや裾広がりとなり、茎部との境界にある逆刺部が口ばし状に突出している。左の逆刺部を欠く。調整は押圧剥離による両面調整であるが、剥離痕の大きさは様々である。石材は硅質頁岩である。74は上半部で緩い肩部を有し先端に至る平面形態と思われるが、破損している。肩部から内反しながら逆刺部になる。調整はソフトハンマーを用いた剥離と押圧剥離による両面調整であるが、剥離痕の大きさは様々である。石材は硅質頁岩である。75は先端部から僅かに内反しながら裾が広がる平面形態と思われるが、逆刺付近で破損している。器面調整は表面側で左右両縁とも斜め下方向へ延びる斜状平行押圧剥離が観察される。したがって正面観はV字形の斜状平行剥離である。裏

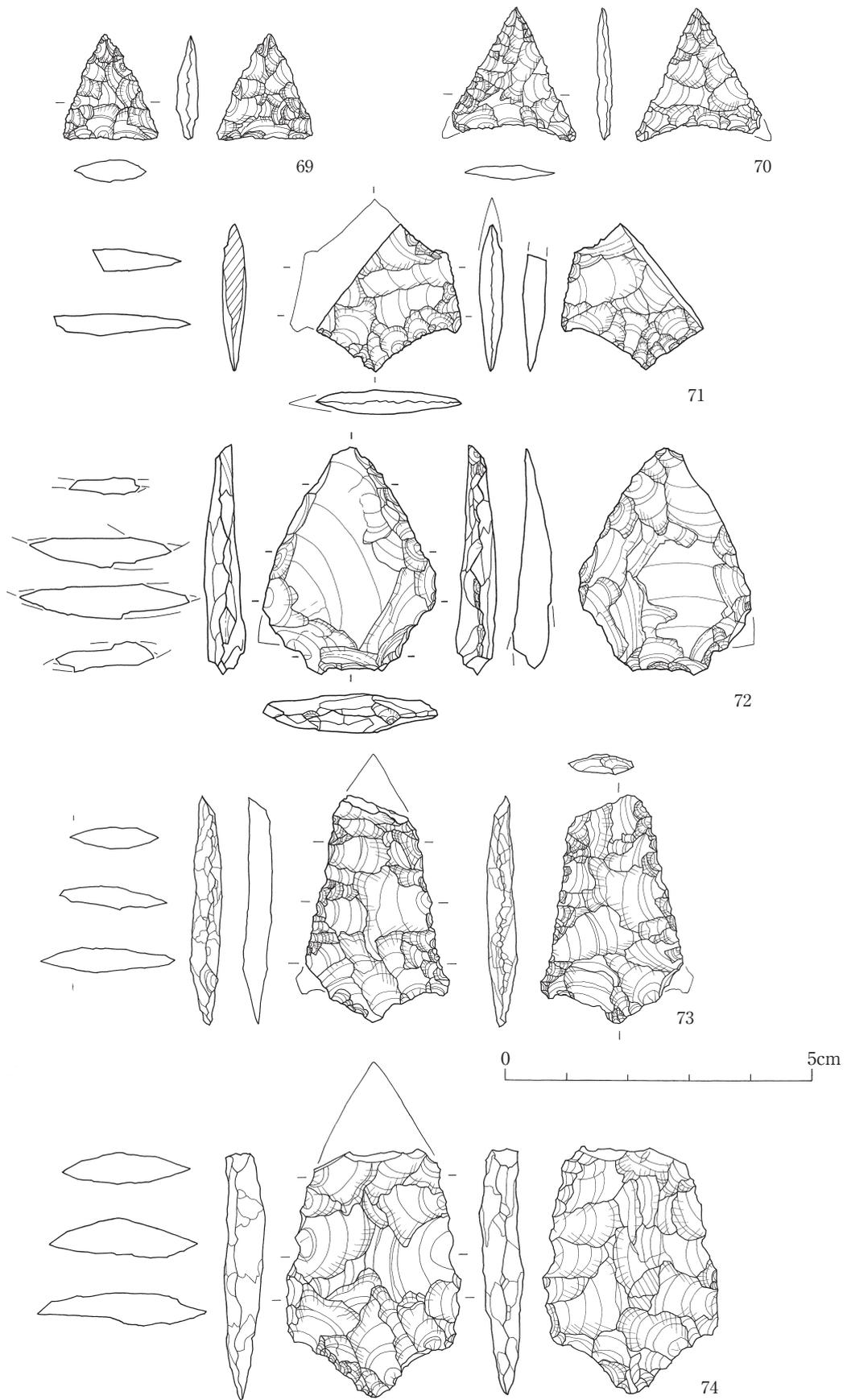


图76 上黑岩遺跡4・5次調査A区7層出土石器 (S=1/1)

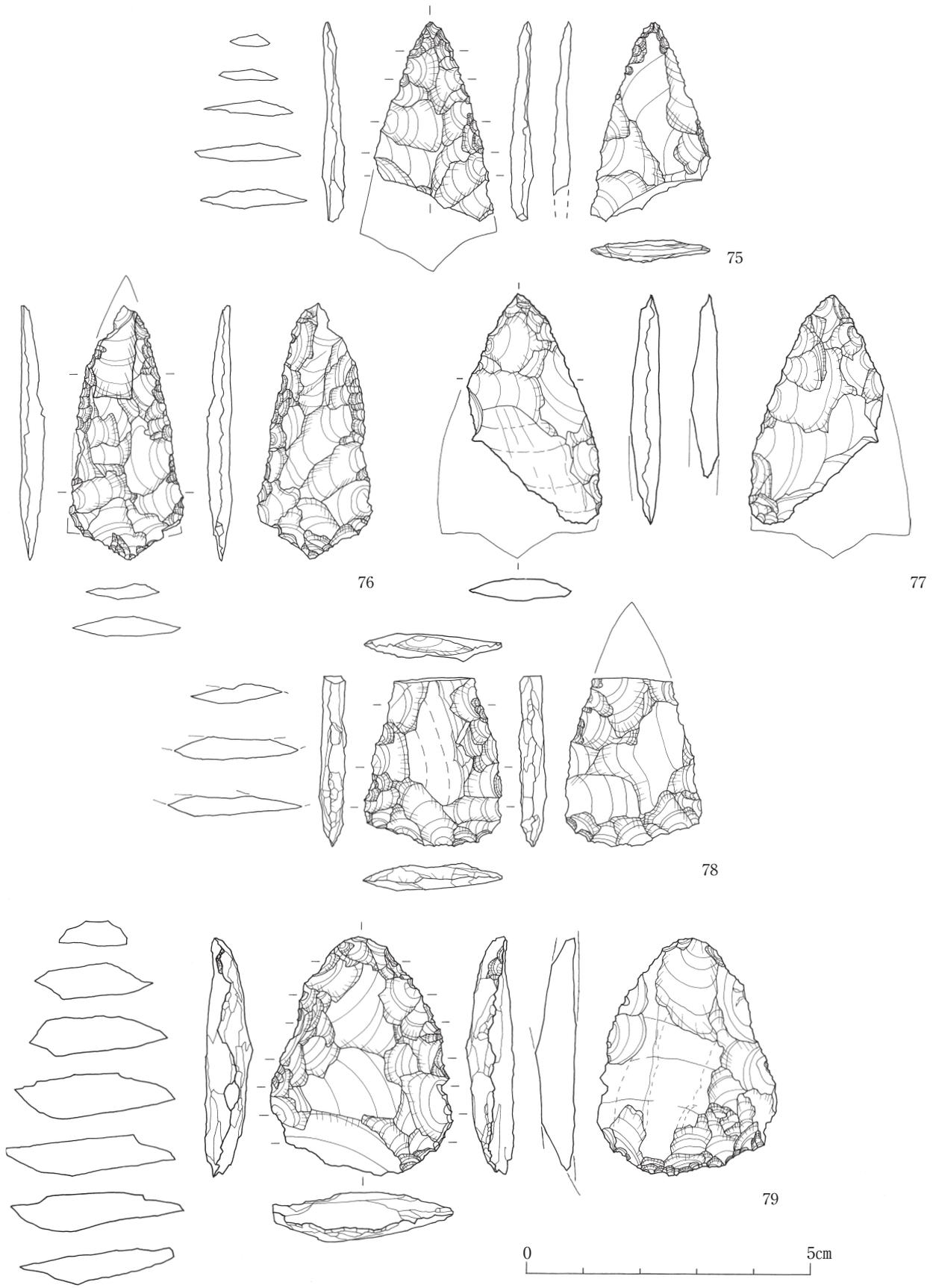


图 77 上黒岩遺跡 4 次調査 A 区 7 層出土石器 (S = 1/1)

面も部分的に押圧剥離を施すが、素材剥片のポジ面も大きく残している。石材はチャートである。76は先端部から僅かに外側へ張りながら裾が広がる平面形態で、逆刺に至る。ここから急に幅を減じ、茎部となる。茎部は底辺が幅広で茎部長の短い逆二等辺三角形である。器面調整はソフトハンマーと推定される部分が従で、主に押圧剥離によるものである。押圧剥離には斜状平行剥離を志向しているかのような剥離もある。先端部と両逆刺部が破損している。先端部の破損は上方からの衝撃によるもので、表面側に男女倉型彫器や有樋尖頭器に観察されるようなファシットである。石材は赤色硅質岩である。推定される大きさは、長さ5.0cm、幅2.0cm、現状での厚さと重さは0.42cm・3.72gである。細長い有茎尖頭器である。77は先端部から幅広に裾が広がり、逆刺に至る平面形態と推定されるが、表面側左側縁のやや上位から右逆刺部付近にかけて節理面で袈裟懸状に破損している。器面調整はソフトハンマーが主か。石材は赤色硅質岩である。

**有茎尖頭器の未成品** (図77-78・79, 図78-80~82, 図79-83・85・86) 8例あり、完成直前に破損した例から水滴形の原型までである。石材は赤色硅質岩が3点、硅質頁岩が2点、無斑晶質安山岩が2点、チャートが1点である。78は先端部から僅かに外側へ張りながら裾が広がる平面形態で逆刺となる。ここから急に幅を減じ、茎部となるが、僅かに作出意図が窺える程度である。完成直前に上半付近が破損した未成品で、肩部の存在は不明である。茎部も器面調整はソフトハンマーが主で押圧剥離が従か。79は水滴形で、先端部分がまだ円い。調整加工はソフトハンマー等による器面調整と推定される。横断面をみると各部分でヒンジフラクチャーやステップが生じており、薄い凸レンズ状の断面や押圧剥離による効果が期待できないので未成品となったのであろう。80は水滴形で、表面側の右側が破損している。左側縁部には礫面が残存しているほか、縁部の側面観は上下幅が大きく、ソフトハンマー等による器面調整と推定される。81は木葉形で、素材に幅広剥片を用いており、表面に素材剥片以前のネガ面を残す。上端・下端の両側の中央付近を中心に表裏両面に僅かに器面調整が施されている。82は身部(刃部)の平面形が将棋駒の下に小さい逆台形の茎部を付けた形態である。調整加工はすべてソフトハンマーと推定されるが、中央部には達していない加工もあるなど調整加工は粗く、未成品と考える。茎部作出の意図が窺えるので大型の有茎尖頭器作出を目論んだ未成品か。83は水滴形である。調整加工は表裏両面で行なわれ、一部押圧剥離もあるが、ソフトハンマーによる大小の平坦剥離である。これを反映するように縁部の側面観も大きく波状となる。85は下膨れした木葉形の平面形である。表裏両面で押圧剥離が施されているが、特に裏面の上半部を中心に斜状平行剥離を志向したと推定される部分がある。86は下膨れした木葉形の平面形である。調整加工は表裏両面で行なわれるが、ソフトハンマーによる幅広い貝殻状の剥離痕である。周辺部分に細部調整を施す。

**搔器** (図80-87・88・93・94) 4点あるが、形態は様々である。87は水滴形で、最初に裏面側のバルブ・打面を除去する平坦な剥離を加え、次に表面側の整形加工を行なう。下端を半円形に整形して刃部とする。石材は輝緑岩である。88は両面調整素材を用い、下端を鼻状に丸く細部調整を加える。石材は赤色硅質岩である。93は両面にポジ面を有する小剥片の両側を「ハ」の字状に切断する。下端を裏面側からの細部調整で半円形に整形し、刃部とする。平面形は扇形を成す。縄文時代草創期に多いとされる拇指状搔器と考えられる。石材は硅質頁岩である。94は不定形剥片のポジ面側下端に極簡単な細部調整を加え刃部としている。平面形は徳利形であるが、これも拇指状

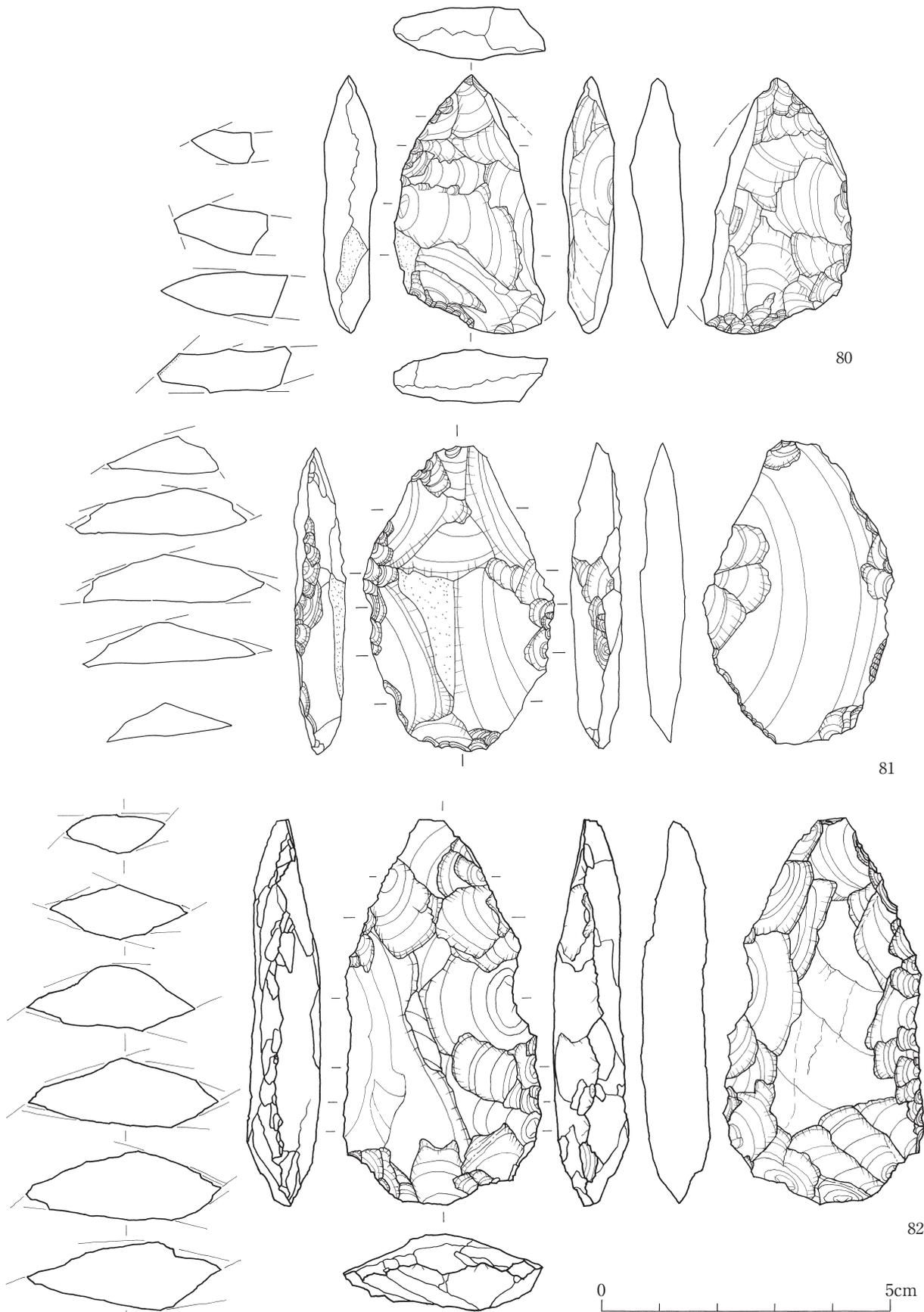


图78 上黒岩遺跡4次調査A区7層出土石器 (S = 1/1)

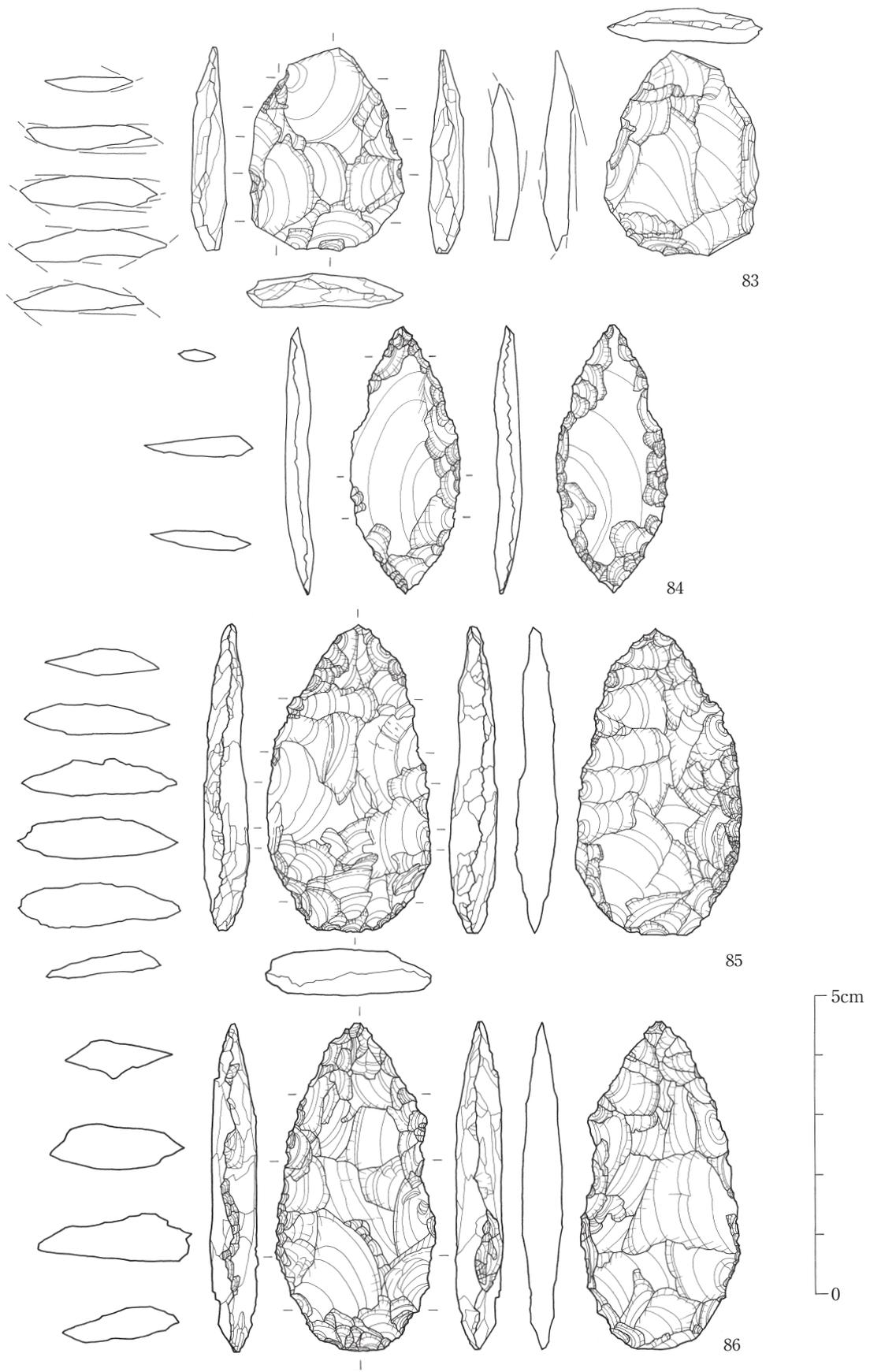


图 79 上黒岩遺跡4次調査A区7層出土石器 (S = 1/1)

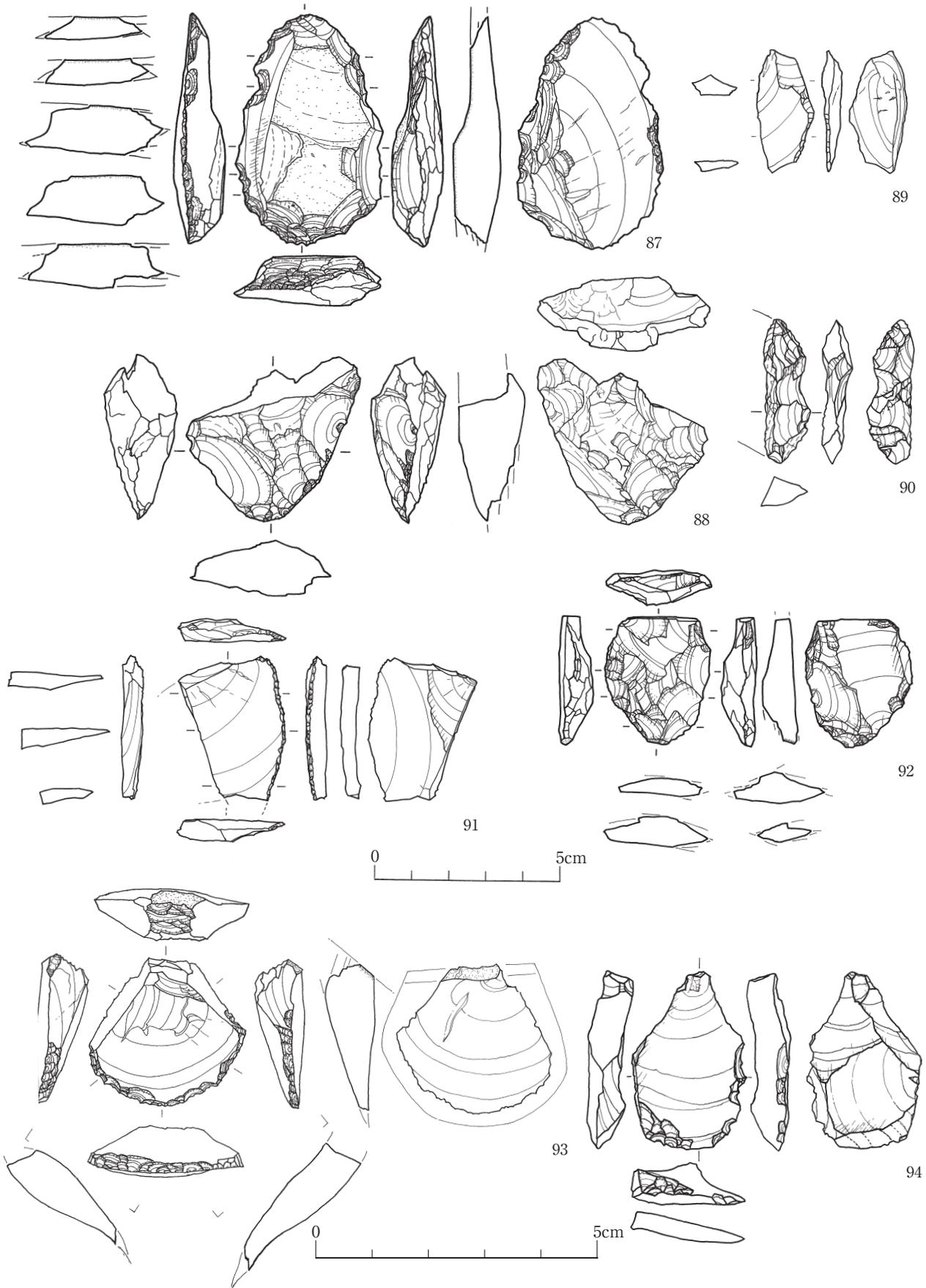


图80 上黒岩遺跡4・5次調査A区7層出土石器 (S=2/3・1/1)

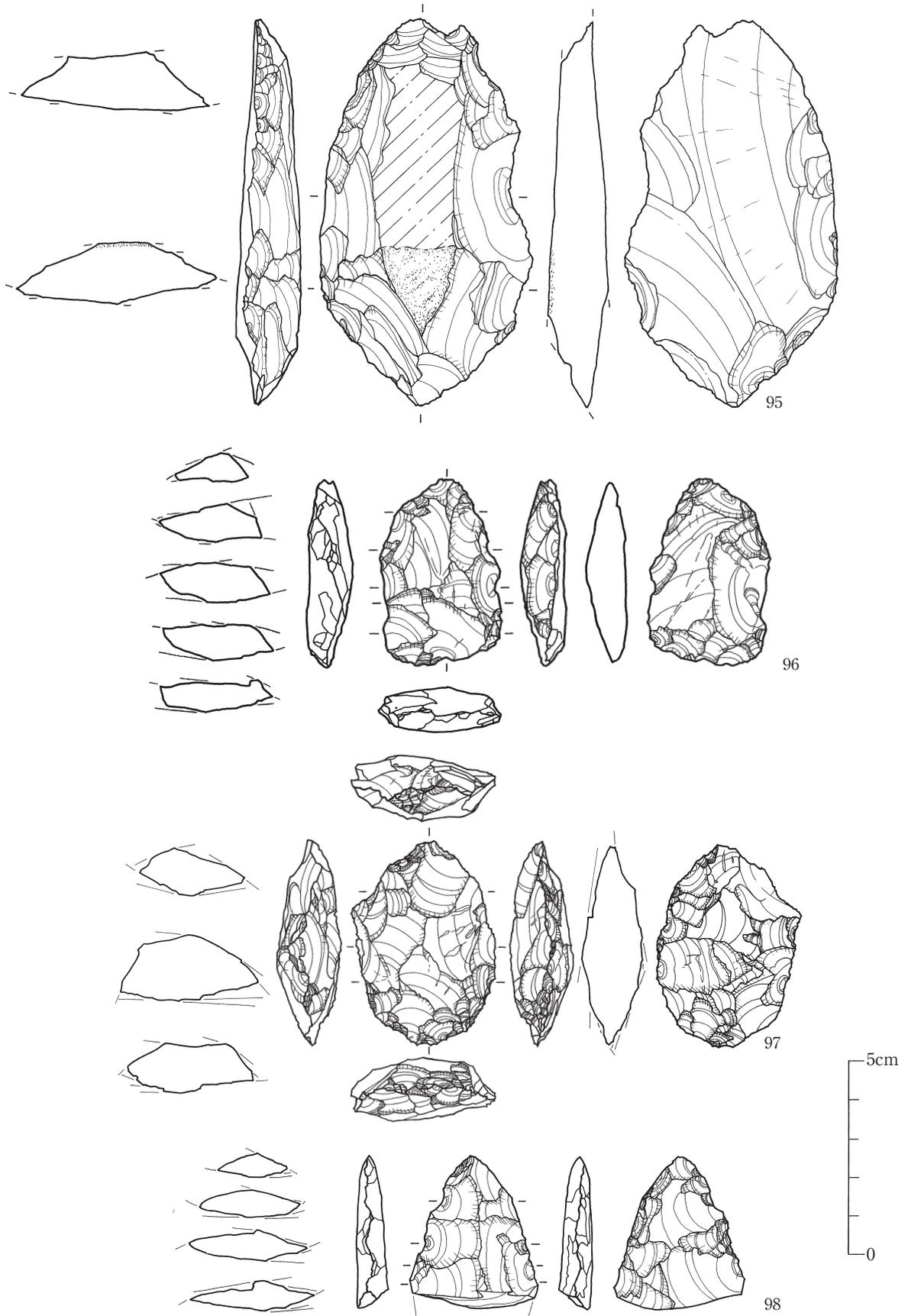


图 81 上黑岩遺跡 4・5 次調査 A 区 7 層出土石器 (S = 2 / 3)

搔器であろう。石材は頁岩か。

**削器** (図 80-89・91・95) 3点あるが、形態は様々である。89は小さな破損剥片の右側縁に刃こぼれ状の細部調整を加える。石材は赤色硅質岩である。91は幅広い剥片のポジ面側の右側縁に刃こぼれ状の細部調整を加える。下端と左辺は破損している。石材は推定金山産サヌカイトである。95は幅広い剥片を用いている。裏面の右側辺に平坦な加工が施すが、主な加工は表面側の両側辺を弧状に調整加工を加え、平面形を木の葉状としている。表面側右側縁には大きめの剥離痕も残り、出入りのある平面感となっている。左側側に細かい細部調整が施され、ここが刃部であろう。石材は無斑晶質安山岩である。

**加工痕ある石器** (図 80-90・92, 図 84-109・110) 4点抽出したが、実のところ器種分類に苦慮した例である。石材は2例が硅質頁岩である(90・92)。90は左辺が破損していると思われるが、はっきりしない。あるいは楔形石器か。92は扁平な器体であり、両面調整をしている。楔形石器、または石鏃未成品か。109は平面形からすれば、石鏃の未成品とするべきか。110は何かの未成品かもしれないがはっきりしない。下端に若干の加工がある。

**石鏃** (図 81-97・98, 図 82-99~102, 図 83-103~105) 9点を確認している。石材は無斑晶質安山岩が7例と多く(98・100~105)、サヌカイトが1例(99)、脈石英が1例のみである。いずれも基本的な調整加工はソフトハンマーの直接打撃による調整加工である。97は下端に細部調整がみられ、刃部としている。石材は脈石英で本遺跡出土ではこの1点だけである。98は上半部側の破片。両面でほぼ平行する剥離が施される。99は斜めに破損した上半部破片。上端は尖らない。縁の側面観縁部の上下もさほどない。100は斜めに破損した下半部破片。下端を丁寧に調整し、半円形の刃部とする。101は加工途上の未成品段階に剥離による失敗破損が起きたのだろう。102は斜めに破損した下半部破片。下端を丁寧に調整し、半円形の刃部とする。103は水滴形の形態と推定するが、半円形の刃部側が破損。縁の上下も少なく丁寧。104は水滴形の形態と推定するが、半円形の刃部側が破損。縁の上下も少なく丁寧。105は水平に破損した下半部破片。下端を丁寧に調整し、やや直線的な刃部とする。上記の資料のうち102・103は古田幹によって既に報告されている資料である〔古田1989:239〕。

**石鏃の未成品** (図 83-106, 図 84-107) 106は長楕円形。加工が粗く、縁部側面観が大きく波状で、縁の平面観は鋸歯状。石材は無斑晶質安山岩である。107は製作時の粗割段階で、下半側が厚い。断面も鋭い稜を有する平行四辺形である。石材は硅質頁岩である。

**礫器** (図 85-111) 扁平な方形か長楕円形の礫を素材とし、両端部の表面側のみにハードハンマー等による直接打撃で片刃の刃部を作出。石材は輝緑岩である。

**敲石** (図 85-112~114) 3点確認した。石材は細粒砂岩か。112はほぼ円形の周辺部に沿ってアバタ状の打痕がある。打痕と重さからみて細部調整用の敲石であろう。113は小型の長楕円形の敲石である。打痕と重さからみて細部調整用の敲石であろう。114は小型の長楕円形の敲石である。打痕と重さからみて細部調整用の敲石であろう。

**石核** (図 85-115・116) 115は剥片を素材に、残存する礫面を打面とし表面側を中心に若干の剥離を行なう。石材は詳細な岩石名は不明であるが、硅質分の多い石である。116は左右に長い石核で、幅狭い打面から表面側で剥離作業を行い、手前に180°回転させて裏面側で剥離作業を行なう。

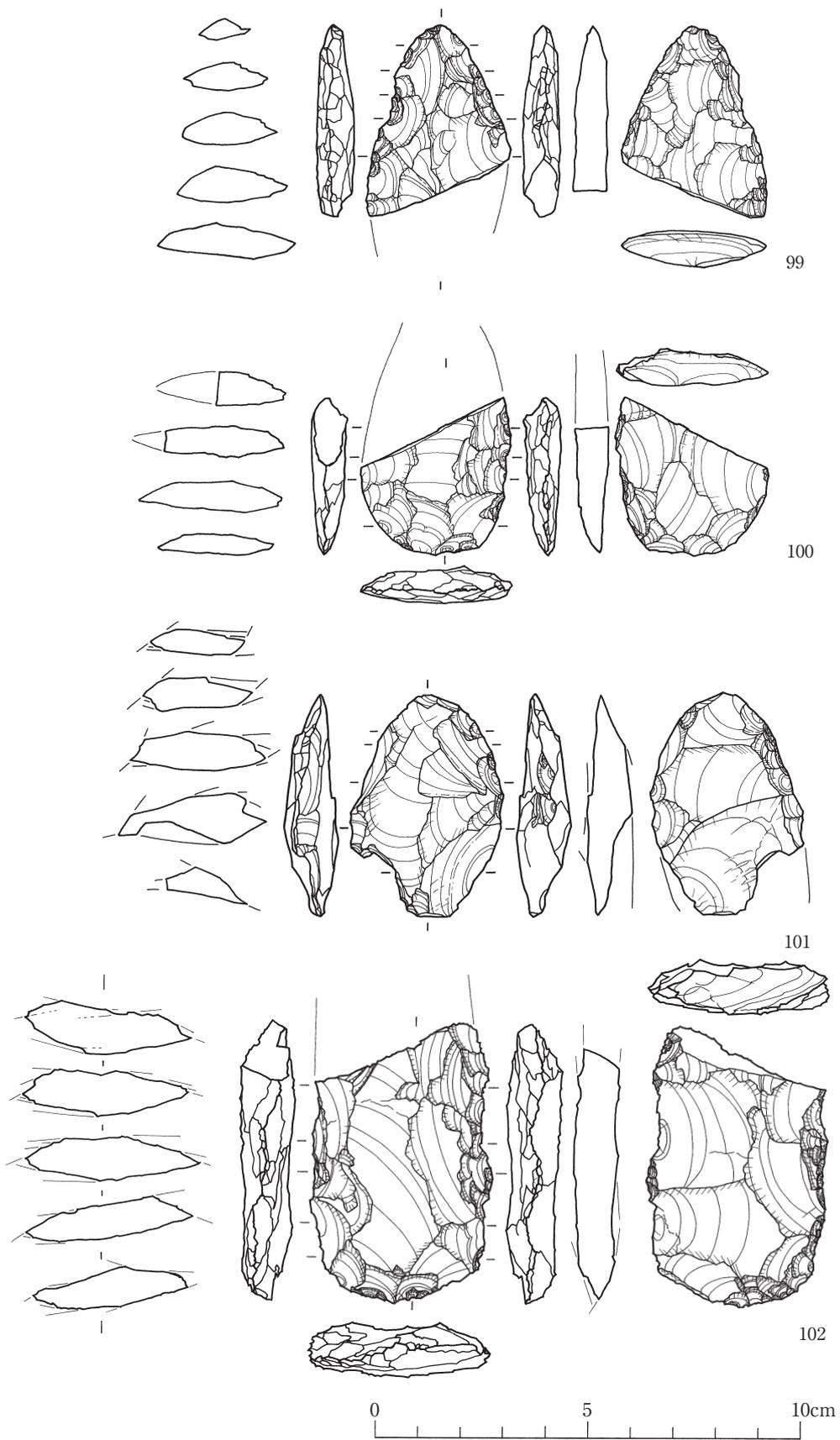


图 82 上黒岩遺跡4次調査A区7層出土石器 (S = 2/3)

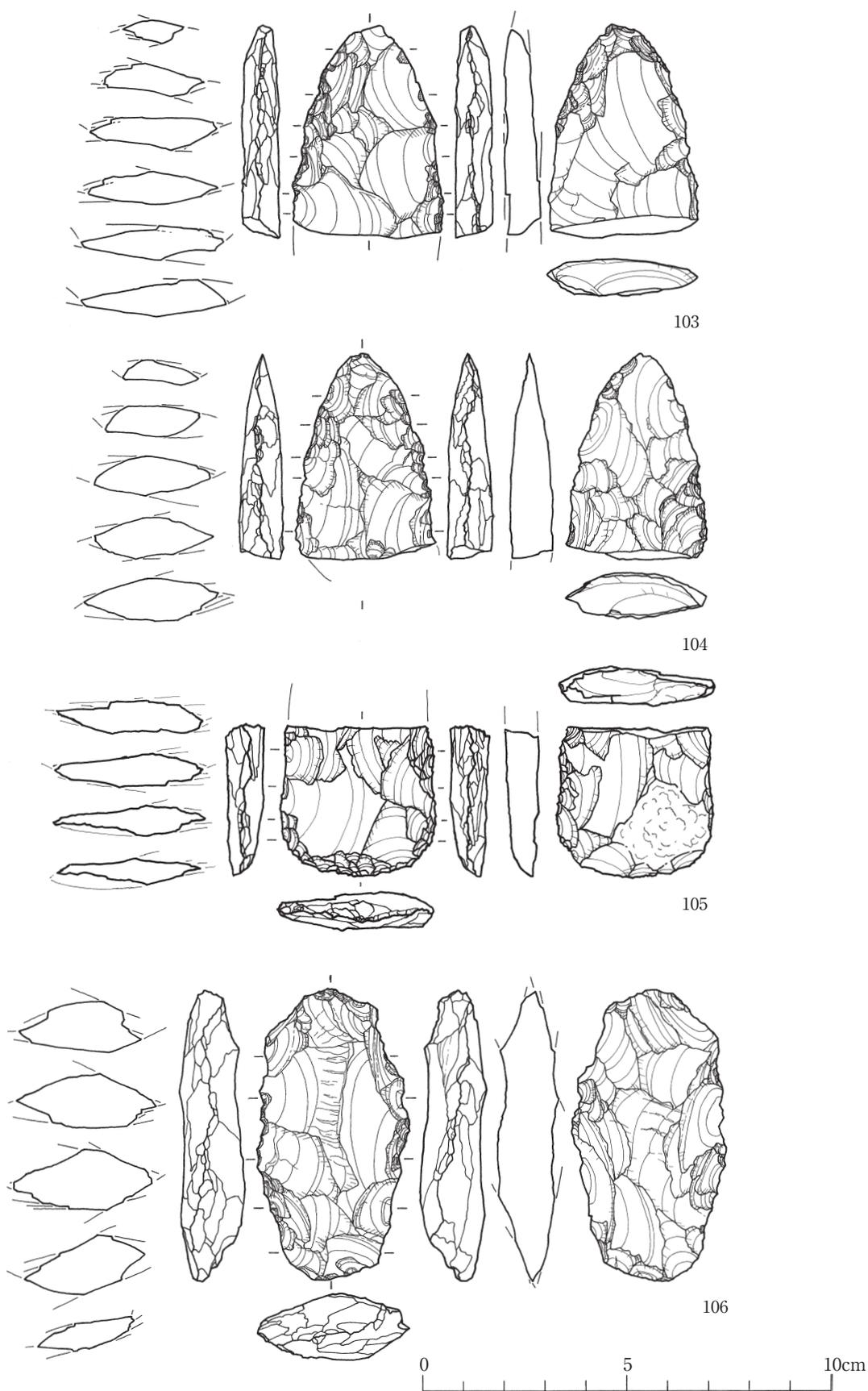


图83 上黑岩遺跡4次調査A区7層出土石器 (S = 2/3)

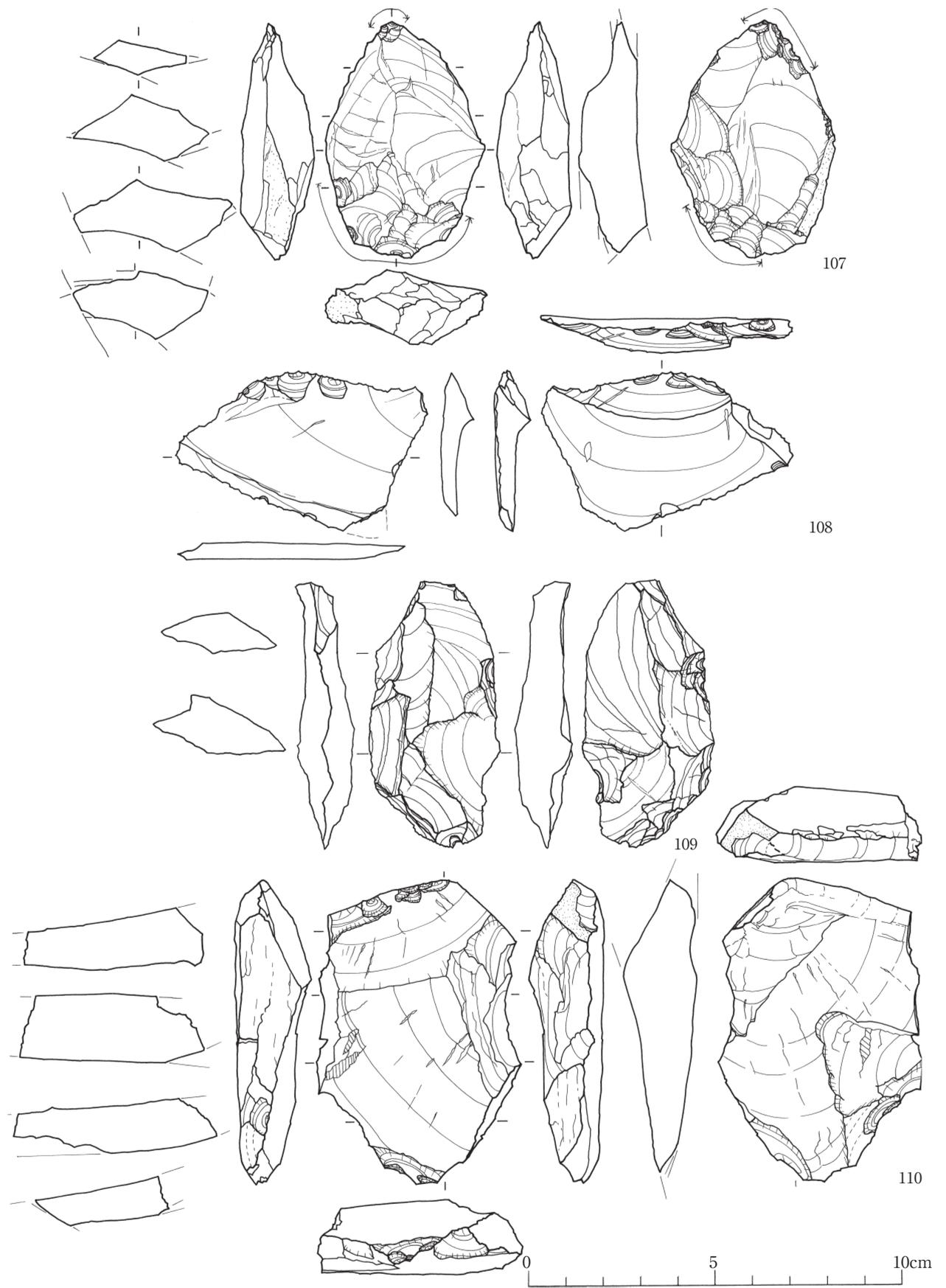


图84 上黒岩遺跡4・5次調査A区7層出土石器 (S = 2/3)

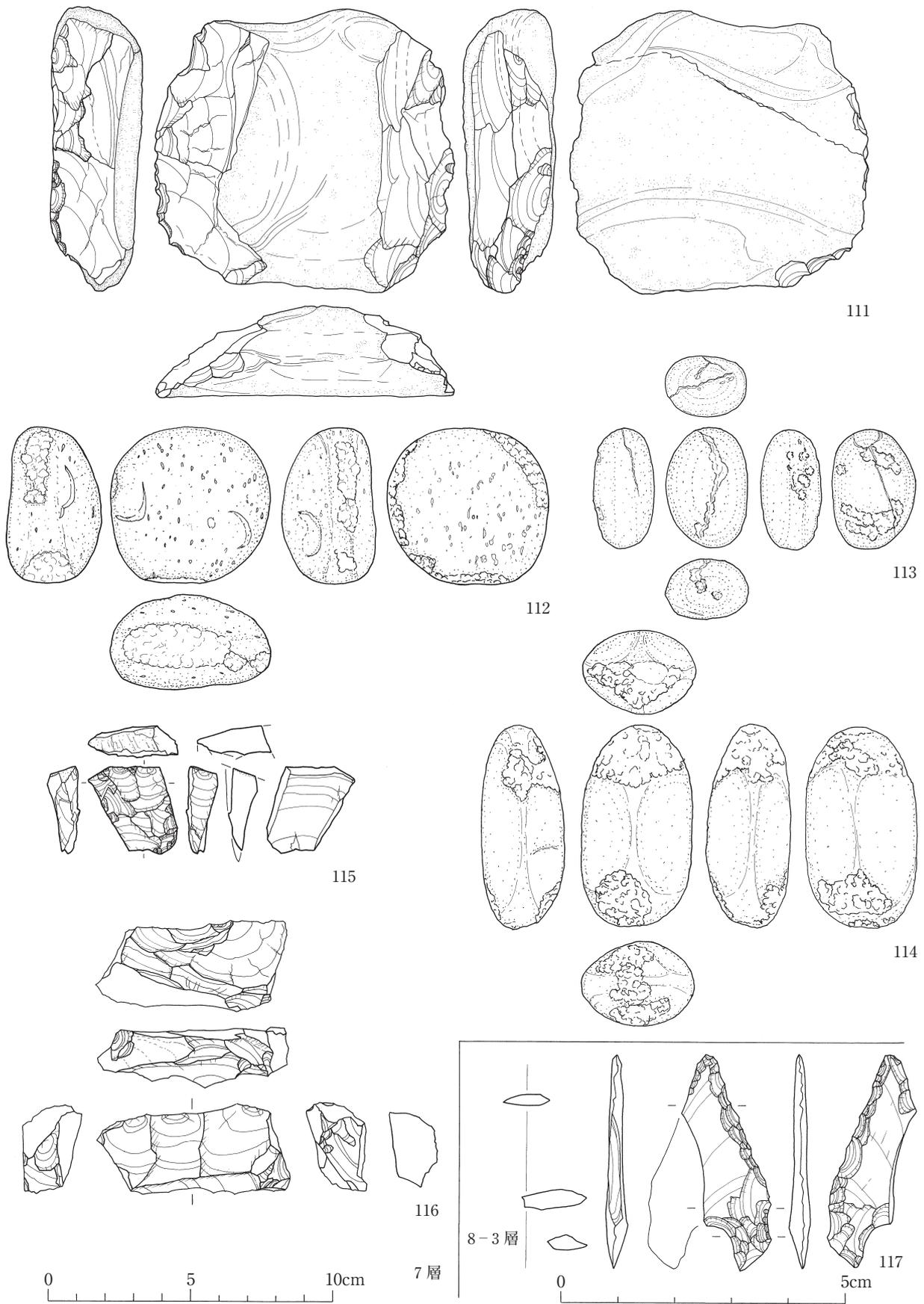


图85 上黒岩遺跡4・5次調査A区7層・8-3層出土石器 (S=1/2・1/1)

したがって石核の断面形は平行四辺形である。石材は赤色硅質岩である。

#### (6) 8-3層(9層相当)出土

発掘調査時の日誌では8-3(8c)層は「B区での9層の最上端と考えられるが決定的な確証となるものがない。(5次:1970年10月29日)」とある。8-3層の遺物は石鏃1点・有茎尖頭器1点と剥片数点出土と日誌に記載されている。8-3層は層位的には隆起線文土器の段階である。

**石鏃**(図85-117) 石材は推定金山産サヌカイトを用いる。脚部の端部が内側に内傾している。加工は周辺部のみ。

## 2 B区

B区はA地区・A拡張区と同様に岩陰の東半部にあたり、A地区の西側に隣接する。B区の調査経過は、1961年の1次調査時にA区・B区・C区(第2次調査の1トレンチ)として調査されたうちのB区が最初である。翌年8月の第2次調査で1次調査のB区は1トレンチB区として調査が継続する。また2次調査ではA区との境界側に3トレンチB区が設定される。3トレンチB区の西側は永久保存地区になっているので、実質1トレンチB区と3トレンチB区の面積5m<sup>2</sup>がB区的面積である。また遺物取り上げ時のラベルをみるとB区は3次調査の対象からはずれ、4・5次調査で再びB区として調査されているが、上記の経緯からその調査区は2次調査1・3トレンチB区のことになる。

1~6層の遺物は異常に少ないが、1トレンチB区は1次調査時(実質的には試掘調査)に一括取り上げされた他、2次調査時の遺物に地点・層位不明遺物が存在することに関係があると推定する。

#### (1) 1層出土

**石鏃**(図86-118~125) 8点確認している。挟りが深い例と(120・122)、挟りが浅く弓形にカーブする例(118・119・121・123・124)、ほぼ正三角形で挟りのない例(125)に区分できる。正三角形の例がやや大きく、他は通常の大きさで、長さ1.58cm~長さ2.72cmの間に収まる。石材は赤色硅質岩が3点(118・119・121)、推定金山産サヌカイトが1点(120)、硅質頁岩が1点(122)である。破損例は3例(119・123・124)あり、いずれも脚部を欠く。

#### (2) 2層出土

**石鏃**(図86-126~128・130) 4点確認している。挟りが浅く弓形にカーブする例と(126)挟りが深い例(127・128・130)に区分できる。「人」字形の華奢な形態と(127)、ずんぐりした形態に区分できる(128・130)。石材は挟りの浅い例では赤色硅質岩、挟りが深い華奢な例は流紋岩、挟りが深いずんぐりした例はいずれも赤色硅質岩である(128・130)。なお挟りが浅い例は長さ1.24cmであり、小型の部類に入る(126)。

**有茎尖頭器**(図86-129) 下層に由来する石器であると考え。両面とも押圧剥離で調整加工されているが、石材が粘りのある硬い緑色チャートで綺麗な仕上がりではない。また上部の縁部平面形がやや斜行するが、破損に伴う再加工と推定される。両側の逆刺を欠く。

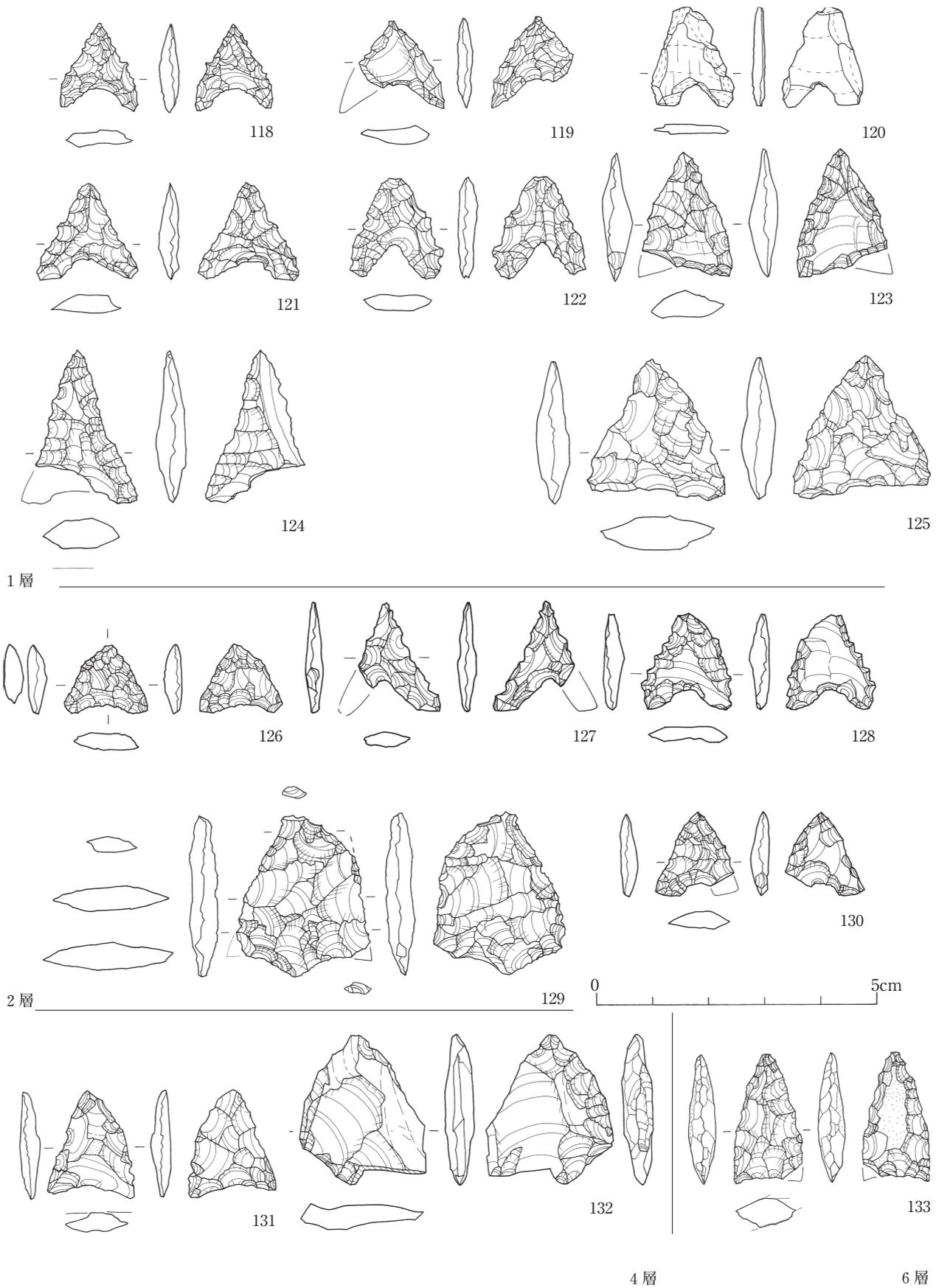


图86 上黒岩遺跡2次調査B区1層・2層・4層・6層出土石器 (S=1/1)

### (3) 4層出土

**石鏃** (図 86-131) 挟りが浅く弓形にカーブする例である。尖端近くの右側縁が僅かに斜行しているが、あるいは再加工のなごりか。石材は無斑晶質安山岩である。

**石鏃の未成品** (図 86-132) 表面側近位から右上方へ延びる剥離痕と上端右側縁の細部調整、裏面右側辺に細部調整を施す。本例には尖端部作出する意図が窺える。石材は赤色硅質岩である。

**石錘** (図 87-134) 裏面に回り込んだ礫面の存在から楕円形で扁平な緑色片岩の小石を用いていることが推定できる。素材は長軸 5.4 cm・幅 4.3 cm・厚さ 1.3 cmの小礫を短軸方向から節理を利用して分割し、短軸方向の表裏両面側に整形加工を施す。

**敲石** (図 188-461) 短く厚い礫の両端の角部に打痕がある。石材は不明である。

### (4) 6層出土

**石鏃** (図 86-133) 長さは 2.33 cm・幅 1.22 cm・厚さ 0.48 cm・重さ 1.01 gであり、幅に対し長さが約 2 倍ある。正面観は体部がやや張る細長の二等辺三角形で、基部底辺が水平気味であり、挟りは浅い弧状を示す。裏面には礫面を残す。石材は無斑晶質安山岩である。

**石篋** (図 87-135, 図 97-167) 135 は形態が撥方を呈し、167 は表面にソフトハンマーによる調整加工を施し、裏面も縁沿いに細部調整を施す。表面側に素材時のステップが残存するほか、両側縁の側面観が著しく波状で有茎尖頭器などの未成品ではない。

### (5) 8層出土

**石鏃** (図 88-136・137) 層位から隆起線文土器に伴う例である。136 は長さ 2.25 cm・幅 1.55 cm・厚さ 0.35 cm・重さ 0.95 gであり、正面観がやや細長の二等辺三角形で、基部底辺は水平。石材はチャートである。137 は大きく破損しており、現状で長さ 3.97 cmと大型である。形態は瓢箪形で、おそらく脚部が長脚鏃風に尖るのだろう。表面側は調整剥離を加え、裏面にポジ面を大きく残す。

**石篋** (図 88-138・図 89-139) 138 は中ほどで下半側を大きく破損しており、削器とも考えられたが平坦剥離を志向した調整加工が見られることから石篋と推定する。材質の影響もあるのか、表面側にはステップやヒンジが多く、裏面に較べて凸状である。139 は中ほどで破損し、基部側の上半を欠くが、下端側の刃部は半円形を成す。ソフトハンマーによる両面調整と推定する。側縁部から刃部にかけて細部調整を施すが、刃部付近は特に入念である。

**石篋の未成品** (図 89-140) 平面形は達磨形で、表裏両面ともソフトハンマーか石による直接打法による不均一な調整剥離による整形である。下端よりの右側辺と刃部付近に僅かな細部調整が施されているに過ぎない。

**石核** (図 188-462) 石材は不明。打面を入れ替え両面で剥片剥離する。あるいは石篋の未成品か。

### (6) 9層出土

**石鏃** (図 90-141) 層位から隆起線文土器に伴う例である。大きさは長さ 1.77 cm, 幅 1.83 cm, 厚さ 0.52 cm, 重さ 1.3 gである。ほぼ正三角形である。石材は輝石安山岩であるが、かなり軽く感じる重さである。表裏両面に大まかな剥離痕もあるが、表裏両面の縁周辺に施された細部調整によって整形されている。またその細部加工がやや急角度であることや、表裏両面が平坦であることから凸レンズ状の断面をしていない。

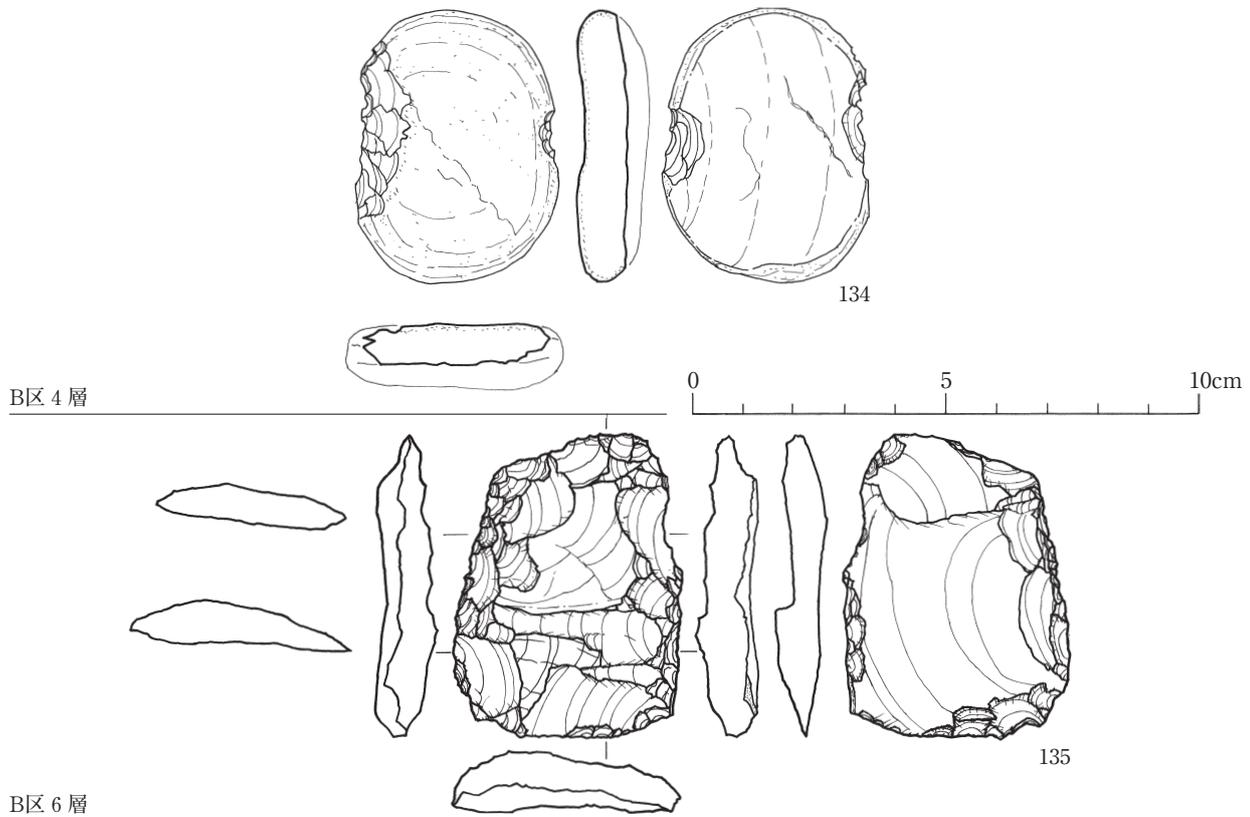


图 87 上黒岩遺跡 2・4次調査B区 4層・6層出土石器 (S = 2/3)

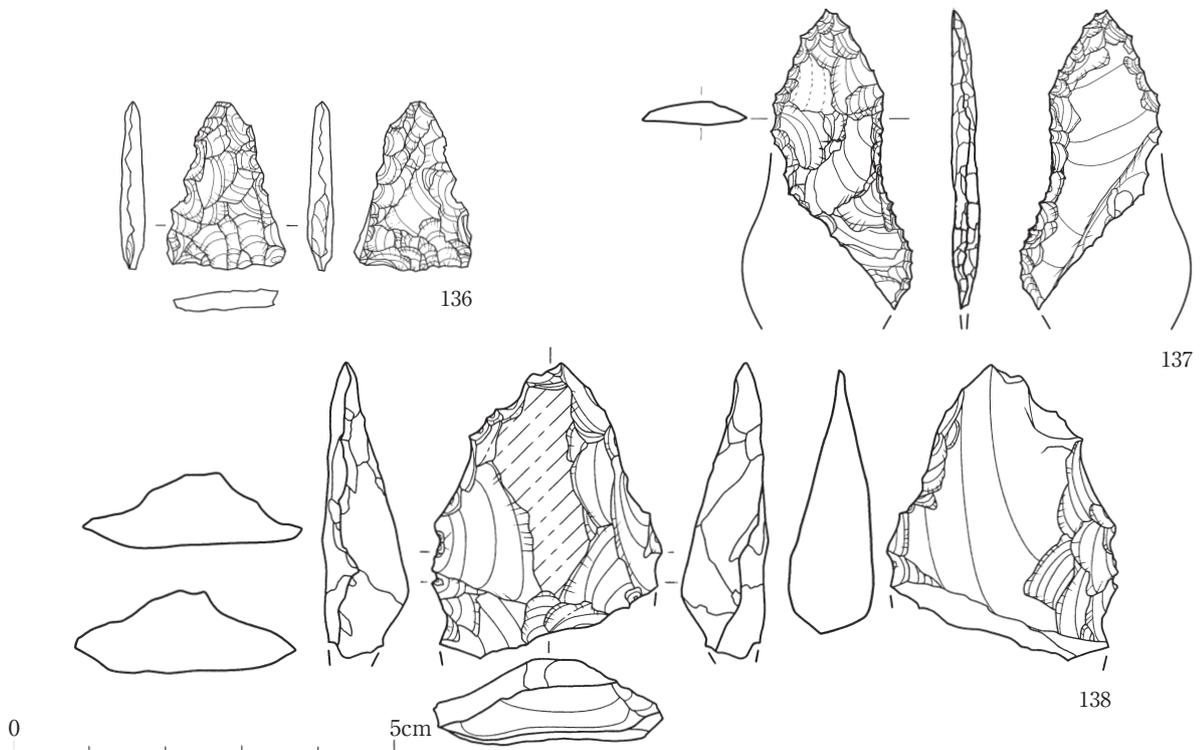


图 88 上黒岩遺跡 4次調査B区 8層出土石器 (S = 1/1)

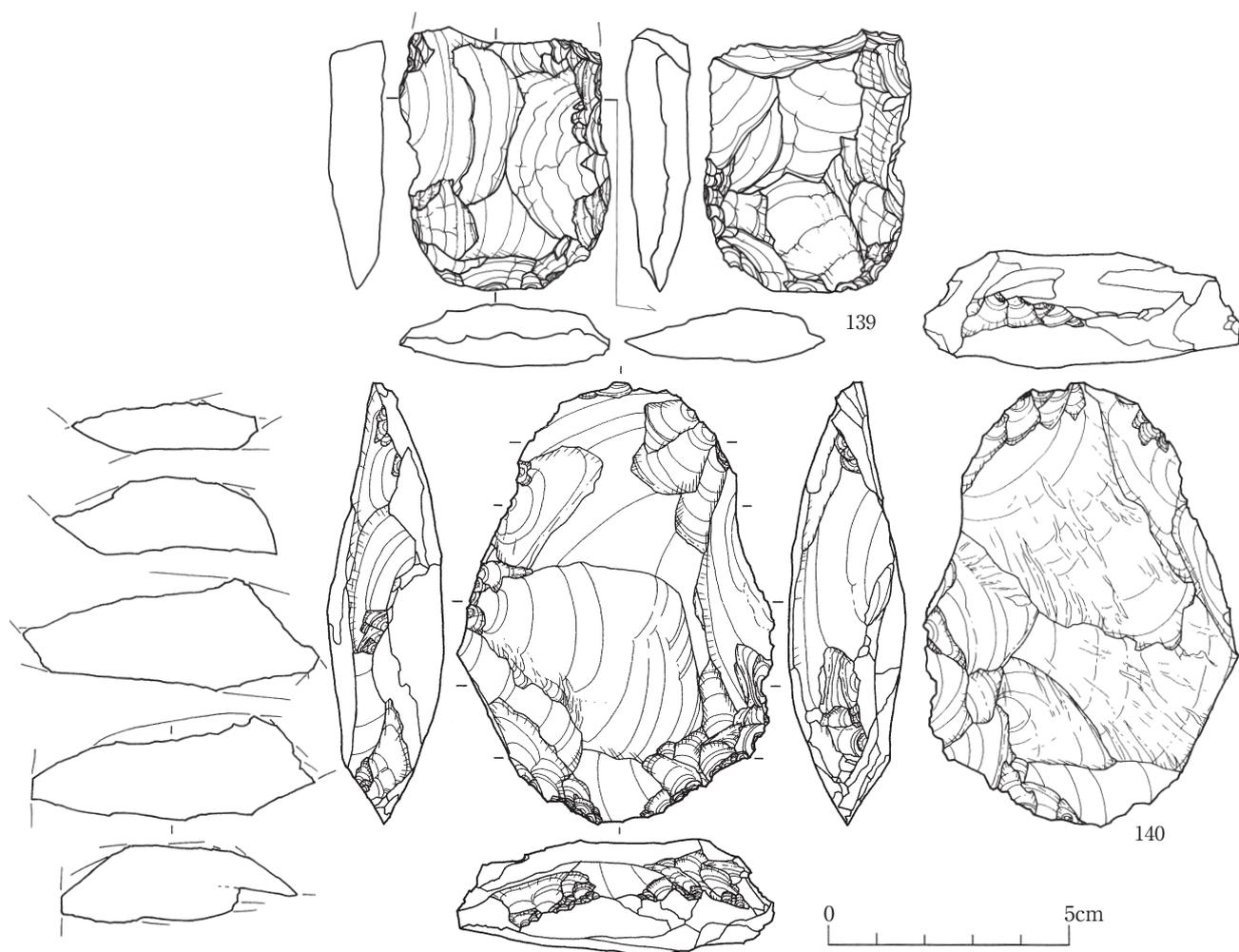


図89 上黒岩遺跡4次調査B区8層出土石器 (S = 2/3)

有茎尖頭器 (図90-142~147, 図91-148・149, 図92-152~154, 図94-158) 12点を確認している。石材の内訳は、推定金山産サヌカイトが2例、赤色硅質岩が7例、無斑晶ガラス質安山岩が1例、サヌカイト1例、無斑晶質安山岩が1例である。142・143は他に類例のない特殊な形態である。平面形は圭頭式鉄鍬の形に似ており、基部変化点までの身部(刃部)長より茎部長のほうが長い。144は先端直下の両側に僅かに肩部もつ。茎部長が短く底辺の幅広い逆三角形の茎部である。正面側はほぼ斜状平行剥離で、裏面の右側は斜状平行剥離であるが、左側は乱れる。145は身部(刃部)の上半部で破損。また先端部方向からの衝撃により右縁部上端に彫刻刀形石器に観察されるファシット状剥離痕が生じている。茎部は左の基部変化点からそのまま茎部に移行するが、右側では逆刺部より内側で茎部がはじまる。146は直線的な裾広がりの例で、逆刺部を欠く。表面側はソフトハンマーによる調整で、裏面は斜状平行剥離風である。その後周辺部付近で同一の奥行きを有する細部調整を行なう。したがって断面が凸レンズ状に至る縁でなく、「く」字形になっている。茎部は茎部長が短く、底辺が幅広を呈する逆三角形の茎部である。147は基部側の下半を破損している。先端部から両側にかけての開きの角度と調整加工から有茎尖頭器と推定する。一部にソフトハン

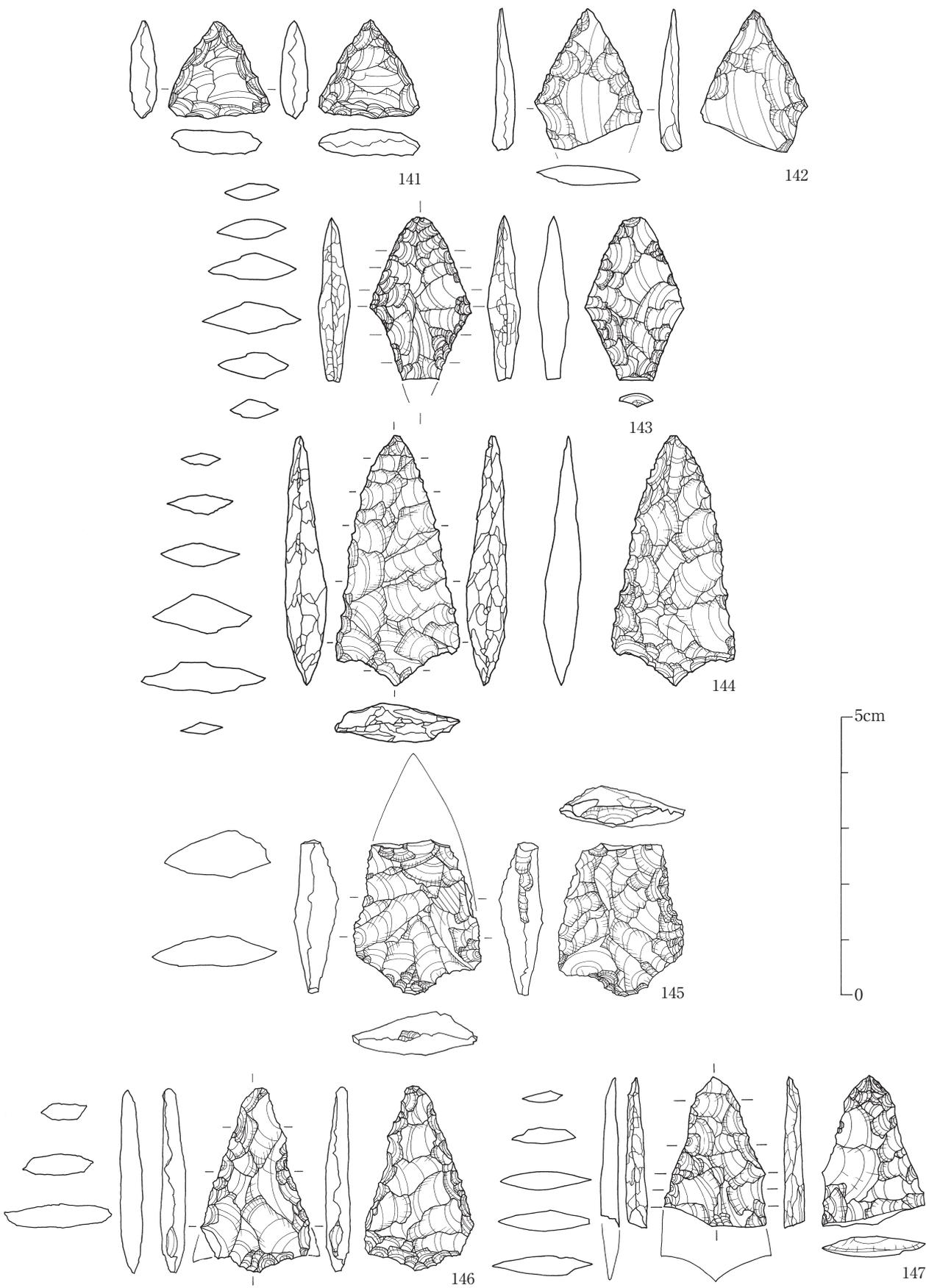


图 90 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

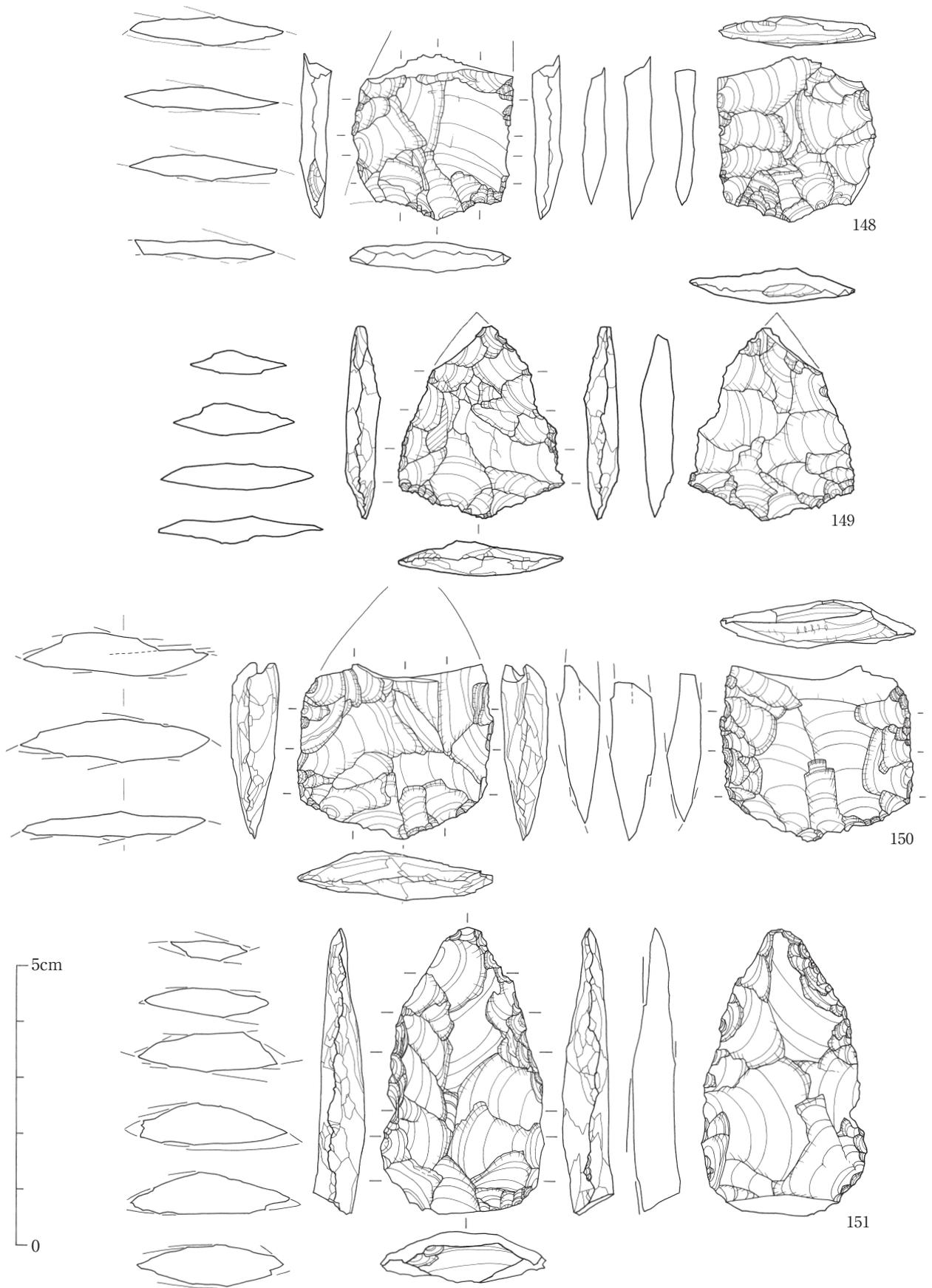


图91 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 1/1)

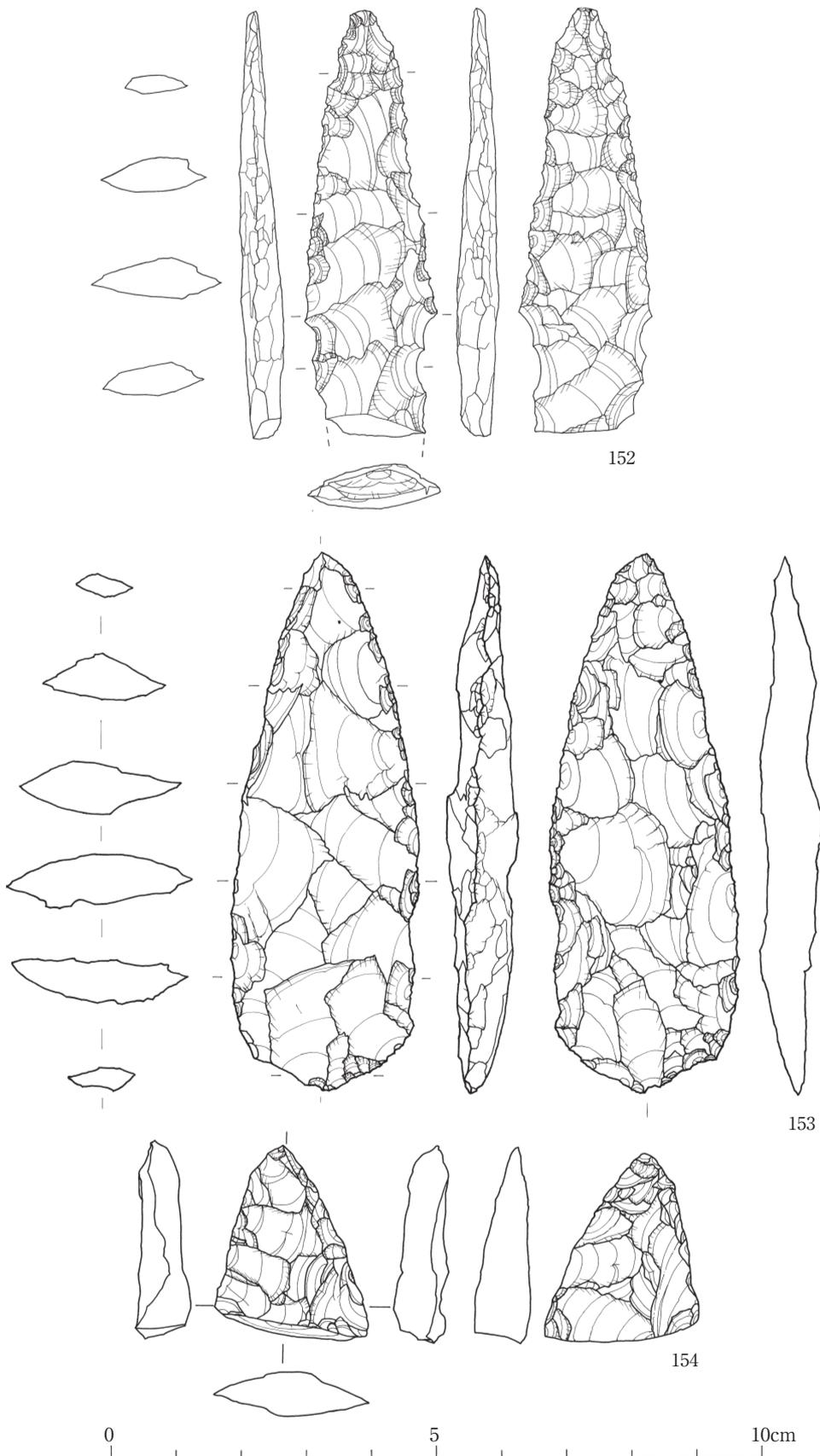


图 92 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

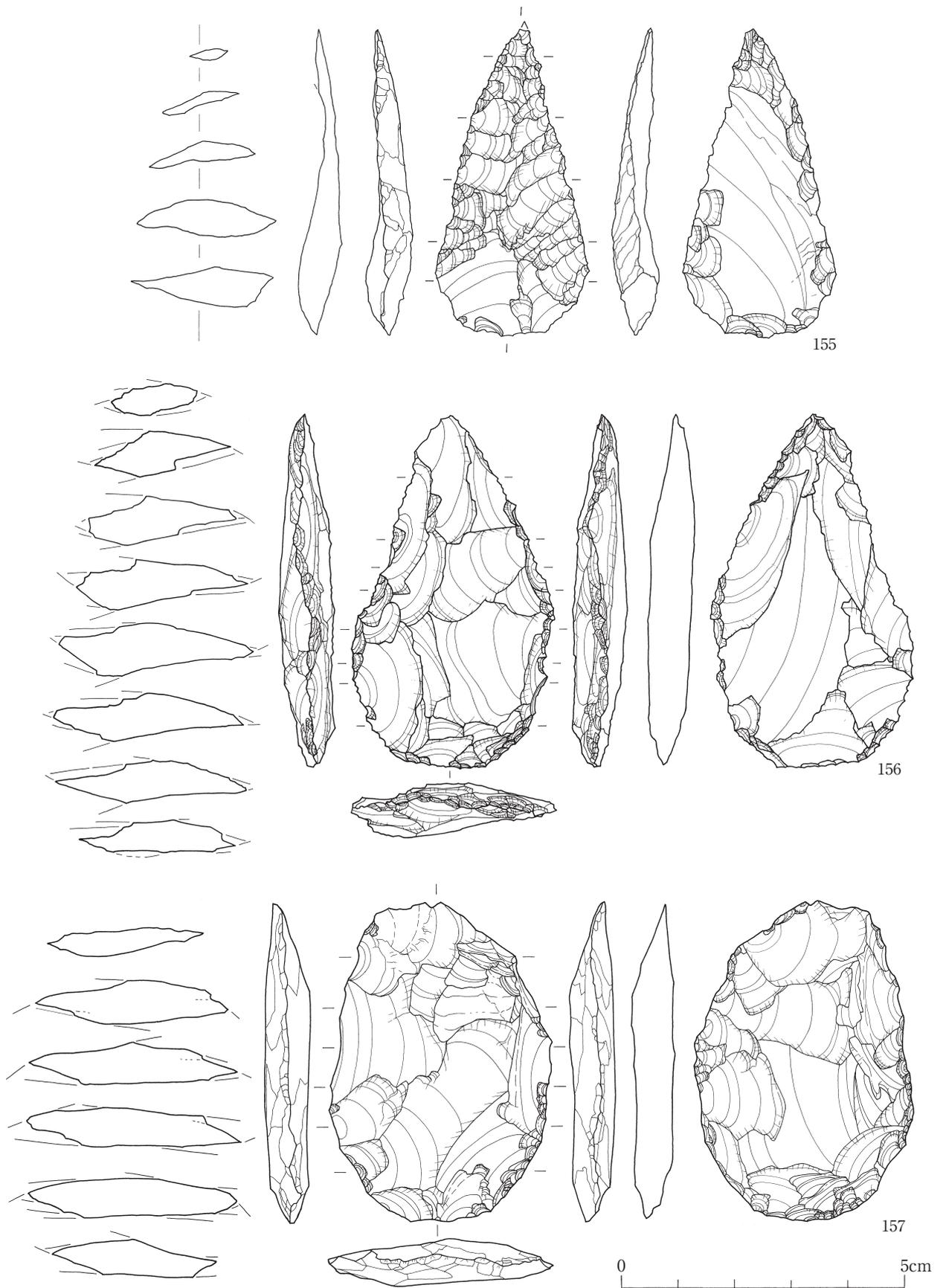


图93 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S=1/1)

マーによる打撃の部分もあるが、表裏両面とも押圧剥離による平行剥離痕も観察され、横断面は凸レンズ状である。石材は赤色硅質岩である。148は先端部側の上半を破損している。表面側には素材時の剥離痕も残存し、剥離痕の大きさも様々である。このため裏面側で丁寧な押圧剥離による調整加工が行なわれているが、有茎尖頭器としては残存部分の先細りがなくいびつである。石材は赤色硅質岩である。149は先端から幅広く広がり、最大幅付近で逆刺部分となる。最大幅付近で大きく窄まり、そのまま茎部長が短く茎部幅の広い逆二等辺三角形の茎部となる。調整加工はソフトハンマーと押圧による調整加工である。石材は赤色硅質岩である。152は一見すると柳葉形であるが、器体の中央縁部に基部変化点がある。逆刺部分から0.2, 3cm程度幅を減じ、そのまま茎部端方向に延びると推定されるが途中で破損し明瞭ではない。有茎尖頭器と呼ぶに躊躇する例である。調整加工は押圧平行剥離である。石材はサヌカイトである。153は先端部からやや弧状に張る縁部から木葉形に大きく延びる体形である。明瞭な逆刺はないが、屈曲部分からそのまま茎部長が短く茎

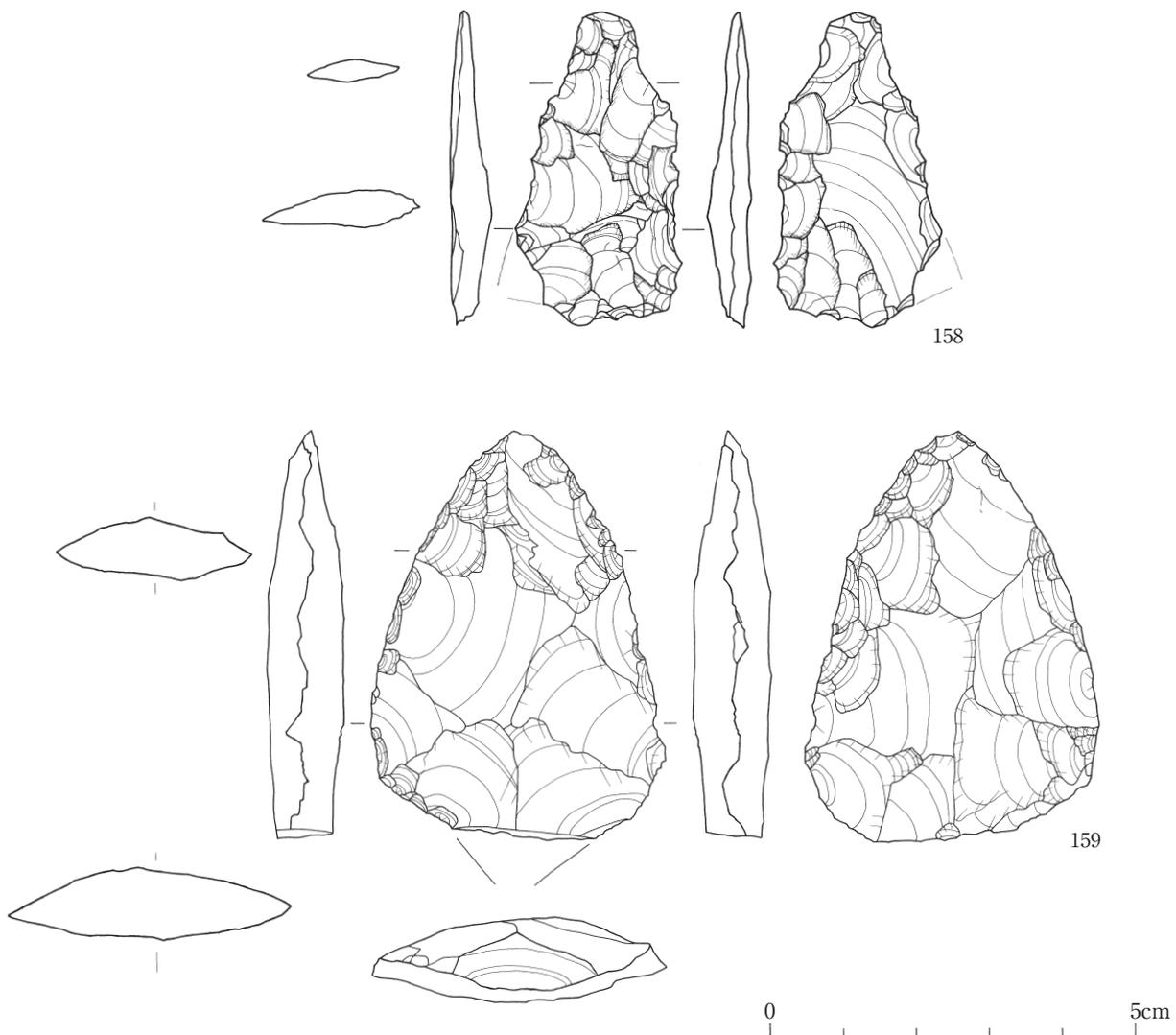


図94 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 1/1)

部幅の広い逆二等辺三角形の基部となる。調整加工はソフトハンマーを主とし、押圧による調整加工である。154は基部側の下半を破損する。先端部から両側にかけての開きの角度と調整加工から有茎尖頭器と推定する。部分的に斜状平行剥離が観察される。石材は赤色硅質岩である。158は先端部と逆刺を欠き、肩部が緩く変化する。調整加工は大小様々な剥離痕がある。裏面には素材時のボジ面が残る。裏面の加工痕はあるいは押圧剥離か。石材は赤色硅質岩である。

**有茎尖頭器の未成品** (図 91-150・151, 図 93-155~157, 図 94-159, 図 95-160~162) 9点あり, 石材は赤色硅質岩が3点, 無斑晶質安山岩が4点, 不明2点である。150は水滴形の原型から器面調整と基部作出の途中, 刃部上半の肩部付近で先端側が破損した未成品である。表裏両面は押圧剥離に先立つソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。表面側の上端付近で節理と亀裂ともなって, 器体が脆弱となっていたことに原因が想定される。石材は赤色硅質岩である。151は水滴形の原型である。ソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。石材は無斑晶質安山岩である。155・156は水滴形をした有茎尖頭器の原型である。155は斜状平行剥離でも正面観が「V」字形を成す例である。縦断面をみると上半部で弧状に薄くなったことが成品に至らなかった理由であろう。156はソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。157は水滴形直前の段階で楕円形。ソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残る。159は水滴形の原型から基部作出段階であり, 逆刺の鋭さに欠ける。ソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。石材は無斑晶質安山岩である。160は平面形はまだ水滴形の名残を残しているが, 基部作出の意図が窺われるほか両側をやや直線的にしている。ソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。161は基部側の下半が破損している。器体の厚さから考えて有茎尖頭器の未成品と推定するが, あるいは石篋か。石材は無斑晶質安山岩である。162は水滴形に調整する直前の段階で, 楕円形を成す。ソフトハンマーによる調整加工痕が大きく残存している。石材は無斑晶質安山岩である。

**石篋** (図 69-163・164, 図 97-168~170, 図 98-172, 図 99-181, 図 100-182, 図 101-185, 図 102-187~190, 図 103-191~194, 図 104-195~197) 20点あり, 石材は, 無斑晶質安山岩が10例, 硅質頁岩が1例, 秩父帯頁岩が1例, サヌカイトが2例, 輝石安山岩1例, 頁岩が1例, 不明5例である。無斑晶質安山岩の利用が目立っている。いずれもソフトハンマーによる調整加工である。上端(基部)が窄まるが, 鋭く尖る例はない。163は上半側が大きく破損し, 刃部が半円形をなす小型の例である。164は下半側が破損している。両側がやや張る。168・169・170はいずれも楕円形。169は下半が破損。172は上端が破損する。調整加工は縁の周囲のみ。181は卵形。調整加工は丁寧。182は上端が斜行し, 下半は破損。厚さは薄い。小型。185は縁部周辺に細部調整。裏面の並列的な剥離は間接打撃か。刃部半円形。上半破損。186は長楕円形で, 下半部・刃部を入念に細部調整。刃部半円形。大型で厚い。石斧か。187は刃部を半円形に細部調整。小型。188は刃部を半円形に細部調整するが, 全体的な平面観は方形で小型。189は水滴形の形態で, 細部調整は僅か。190はズんぐりした水滴形の形態。基部は急角度の整形で厚い。191は楕円形の形態で, 刃部はやや斜行する平面形で, 表面に入念な細部調整。小型。192は刃部が斜行し, 上半は破損。193は上部が破損。刃部は表裏の1次剥離痕の利用と僅かな細部調整による。194は上部が破損。刃部は半円形で入念な細部調整。195はハード~ソフトハンマーによる調整加工である。基部破損。裏面にハジケ。196は基部破損。側面形が弧状となる。197は細長い水滴形で半円形の刃部と裏面の縁に細部調整。

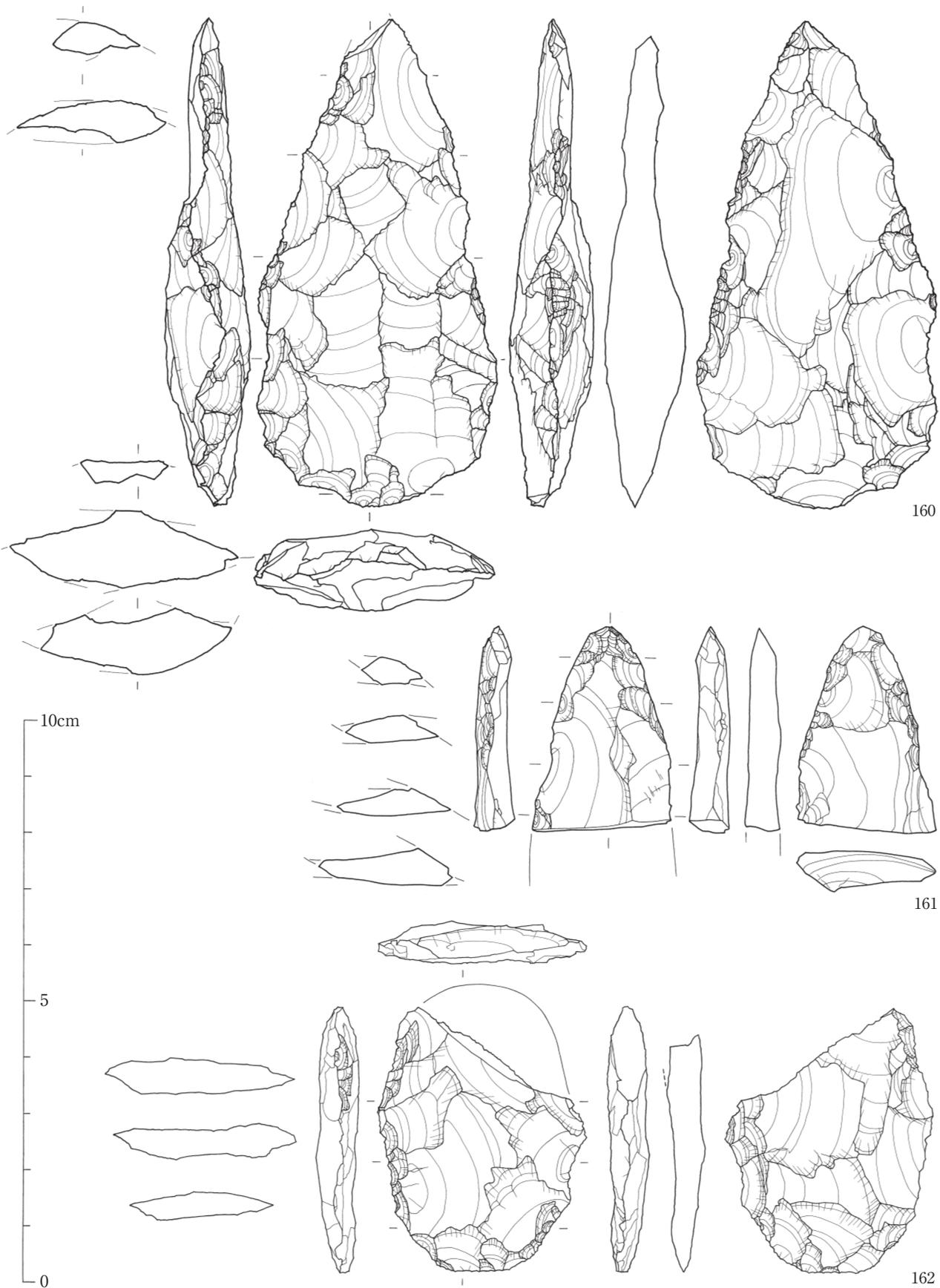


图95 上黑岩遺跡2・4・5次調査B区9層出土石器 (S = 1/1)

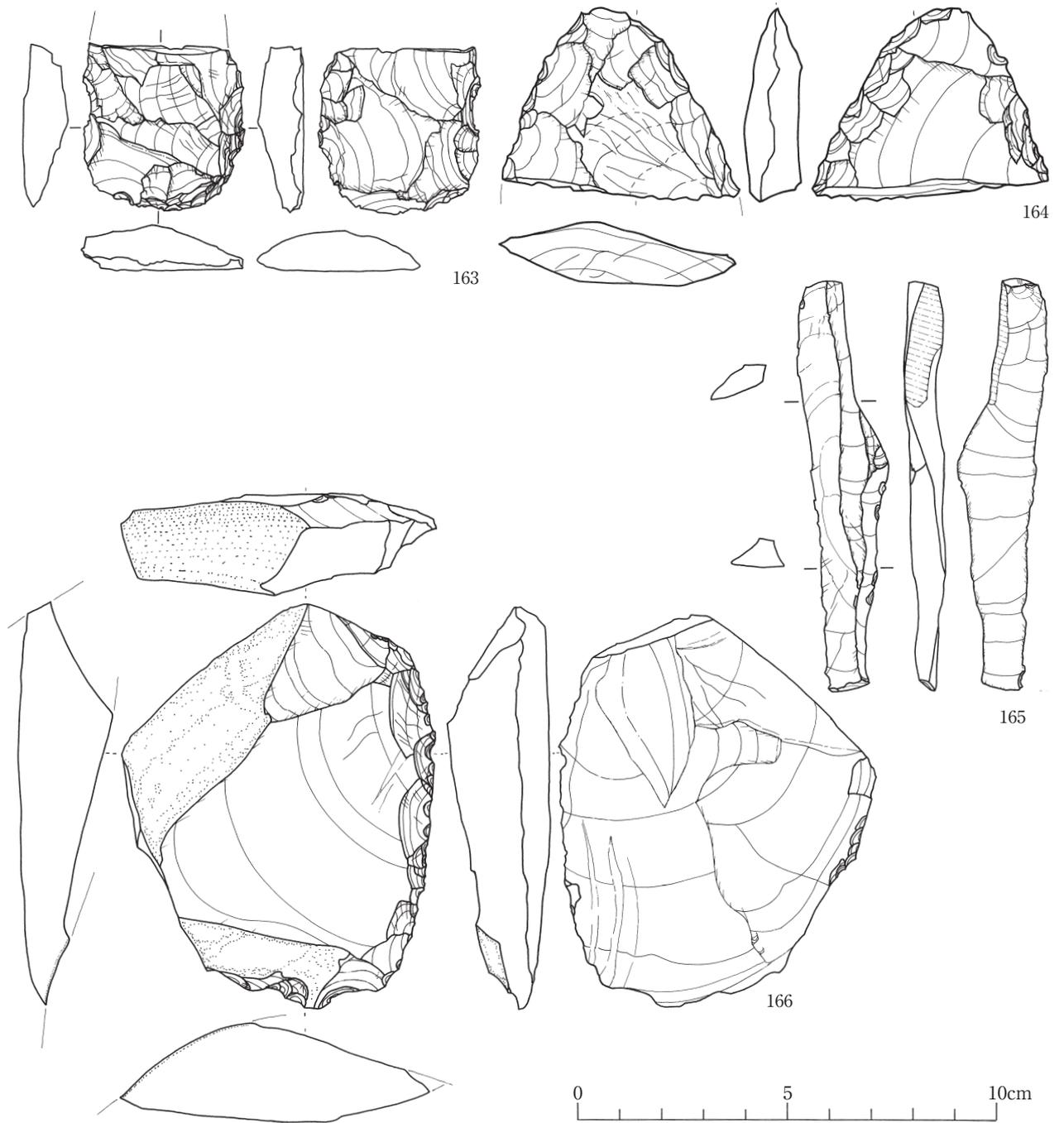


図96 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

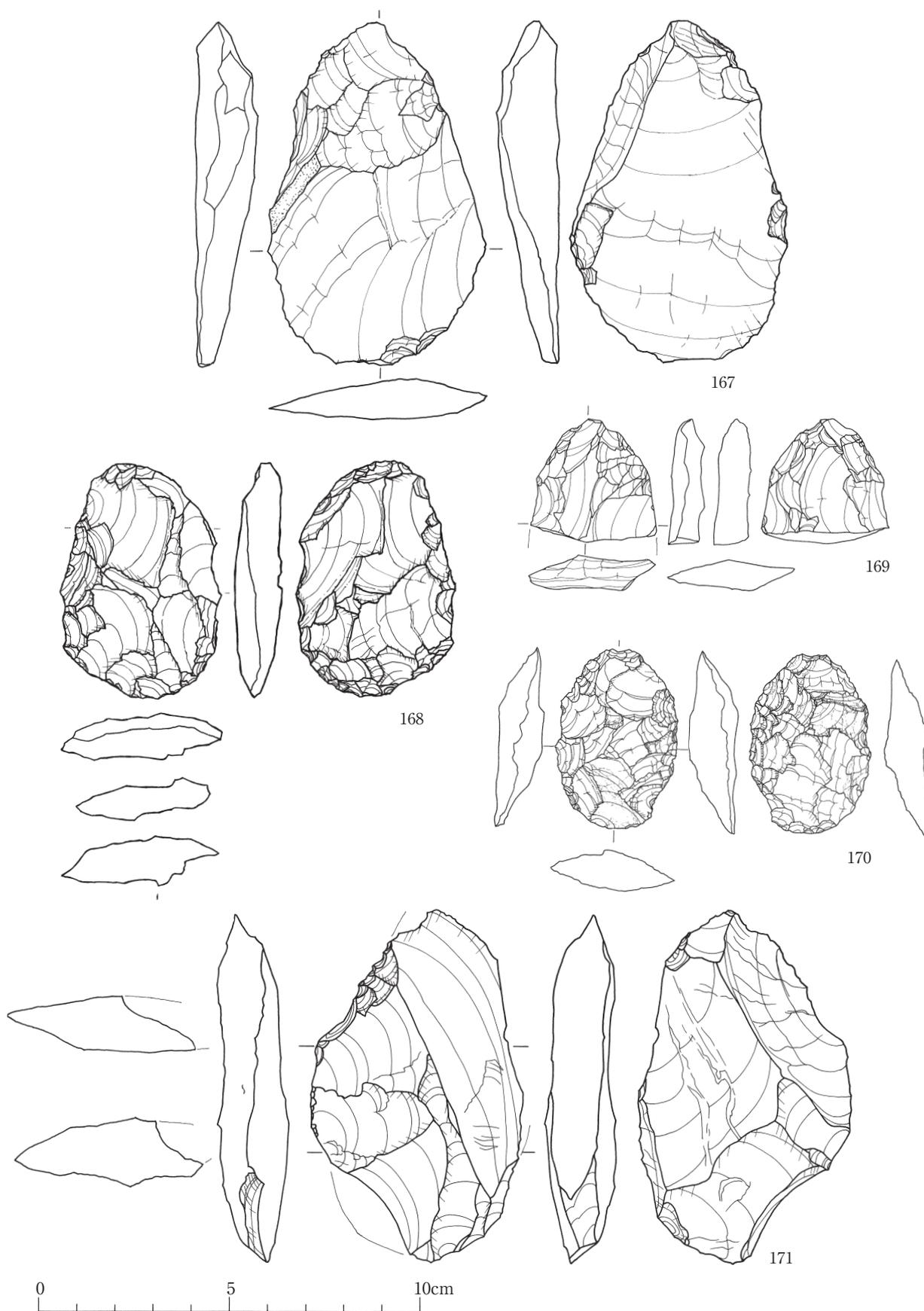


图 97 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 2/3)

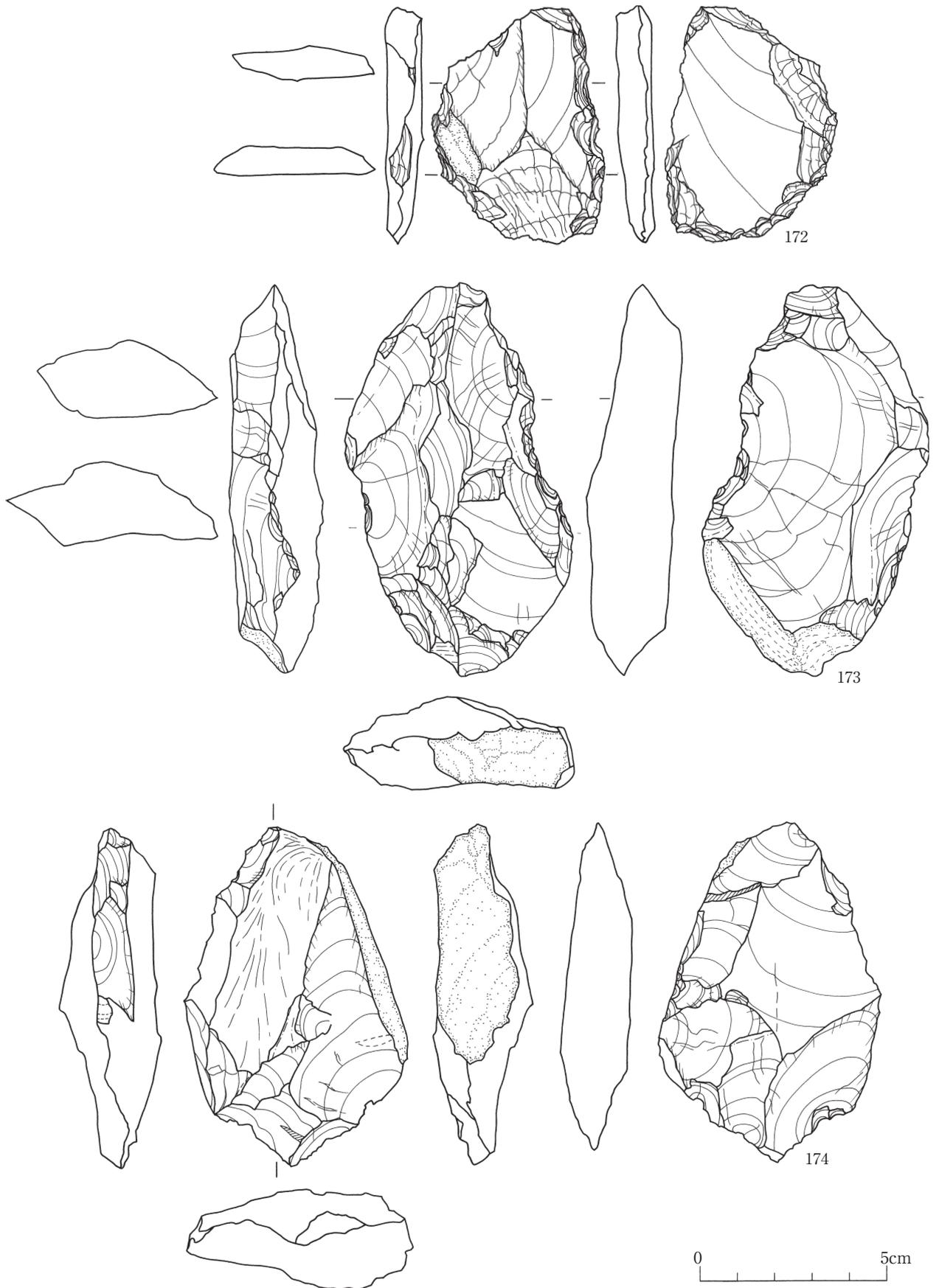


图 98 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

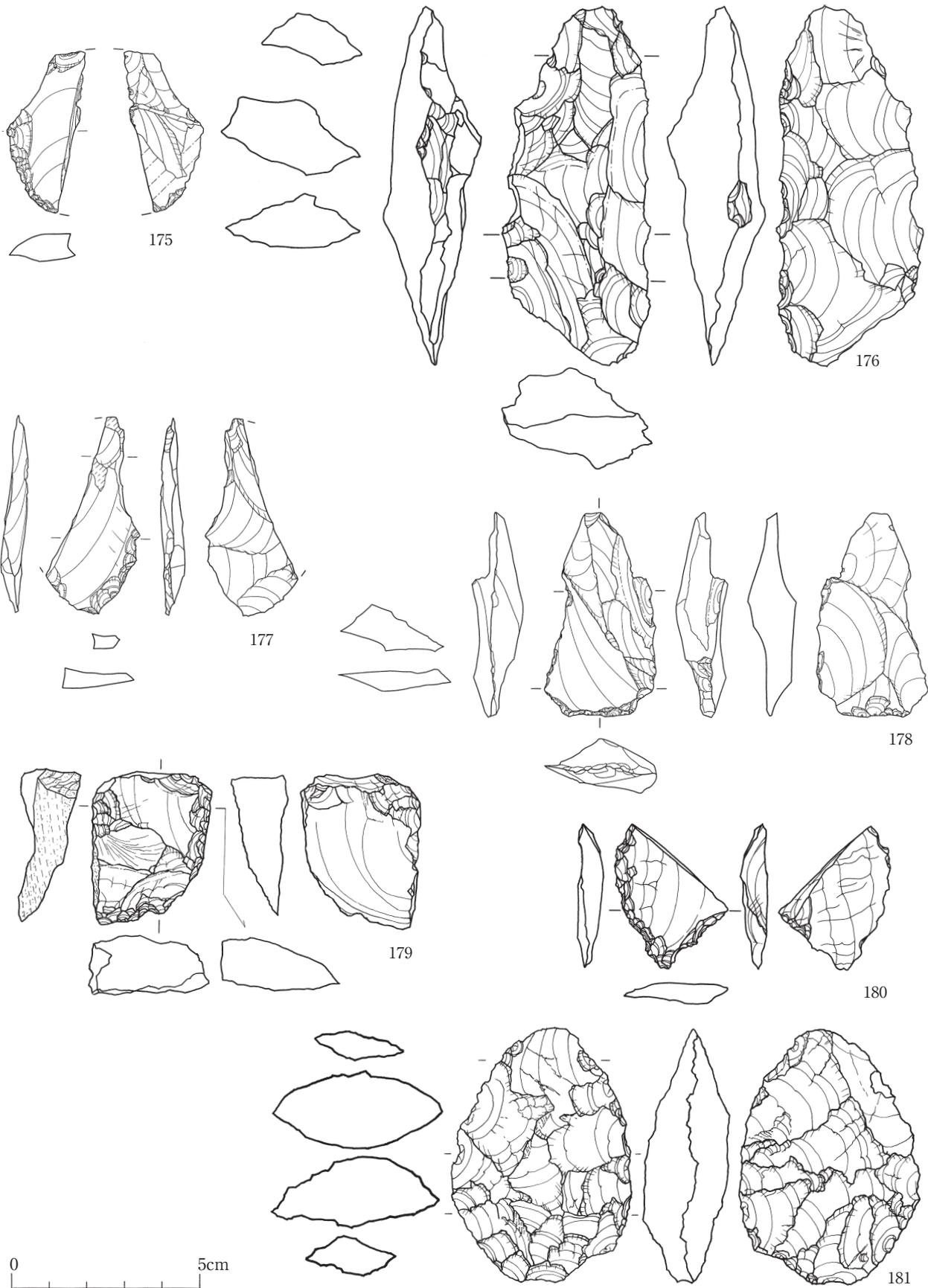


图99 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

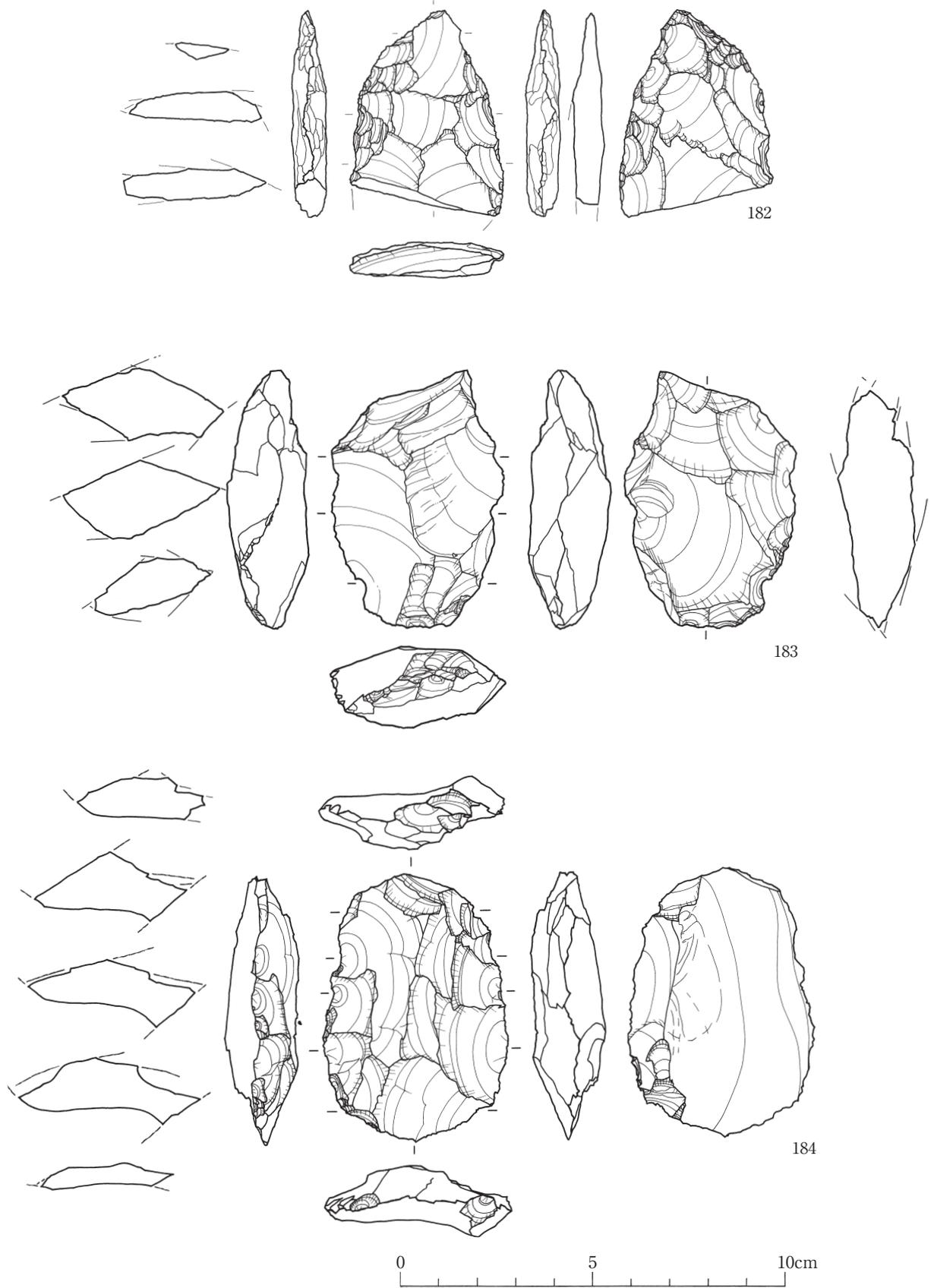


图 100 上黒岩遺跡 2・4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 2/3)

基部（上端）は尖らない。

**石筥未成品**（図 97-171, 図 98-173・174, 図 99-176, 図 100-183・184, 図 105-198・199, 図 106-200） 9点あり, 石材は無斑晶質安山岩が3例, 赤色硅質岩が3例, サヌカイトが1例, 緑色岩が1例, 石材不明が1例である。基本的にソフトハンマーによる調整加工である。171は水滴形の素材を用い, 破損後にも左側縁加工をしている。173は平行四辺形に近い形態で, 両側から幅広い剥片を剥離する。あるいは石核か。174は素材から, 粗割り整形初段階のものか, 細部調整はない。176は裏面の左側縁からの剥離が刃部方向に延び破損している。剥離は大きく粗い。183は円錐体が大きく, ハードハンマーによる直接打撃か。細部調整は刃部のみ。184は下半がやや幅広の楕円形。粗割り整形初段階のものか, 細部調整はない。198は下半が幅広の水滴形。粗割り整形段階のものか。199は水滴形。表面左側縁に細部調整。刃部側の縁は大きく波状をなす。200は柳葉形に近く, あるいは尖頭器の未成品か。赤色硅質岩で, 節理が多い。

**剥片**（図 96-165） 多量にある中1例を提示する。石材は赤色硅質岩である。

**削器**（図 96-166, 図 99-175・177・179, 図 106-201） 5点確認している。厚い剥片の片側側縁に細部調整を施す例と（166）, 破損しているが細長い素材の端部に近い側縁をやや弧状になるように細部調整した例（175・177・179）, 表面側の側辺部と裏面側の側辺部を細部調整した例（201）に区別できる。石材は無斑晶質安山岩が2点, 赤色硅質岩が2点, 推定金山産サヌカイトが1点である。

**搔器**（図 99-178） ヒンジフラクチャーが著しい細長で下膨れした平面形の素材を用いている。細部調整は下膨れした近位端の片面に施される。石材は推定金山産サヌカイトである。

**石錐**（図 99-180） 破損例で, おそらく楕円形の器体から錐部が突出した形態。基本的には奥行きのない細部調整を片面側に施す。石材は推定金山産サヌカイトである。

**有溝砥石**（図 106-202） 横断面は半円形でなく, 4箇所には大小の溝があるため複雑な断面となっている。平面形は長方形で, 研いだ際の溝は長軸方向である。表面側に一条, 側面部分に二条ある。表面側の細長溝は下端溝口部分がやや幅広いことと, 溝内底部が中央付近から下半側でやや深い。これは研磨対象物を溝に密着させて平行運動したのではなく, 被加工物の端部を溝底部に対し, やや角度をつけて近位側から研磨したと推定できる。このような動作からは骨角器等の先端部作出に伴うことが想定される。したがって二個一対で研磨する「矢柄研磨器」とは異質なものである。この溝内底部には白い粒子が付着しており, 江坂輝彌は骨角器等を研磨した際の残滓であると記している [江坂他 1969]。白い粒子が何に由来するのかが研磨対象物を詳らかにする上で重要な事柄であるが, 今回の整理作業での探求を果たせなかった。今後の課題である。左側面側の細長い溝も表面側の溝と同質的な溝である。この側面の溝は本来砥石の表面側と裏面側で別々に研磨していたが, 溝底部付近の厚さが薄くなり破損している。擦りきり石器や奈良県下で出土の有溝砥石を思わせる部分である。また裏面には楕円形凹面が形成されているほか, 右側面にも研磨の痕跡がある。

**敲打・磨石・台石**（図 109-204・205） 204は輝石安山岩を用い, 長さ 8.26 cm, 幅 6.1 cm, 厚さ 3.45 cm, 重量 234.49 gで, 平面形は楕円形である。205は輝石安山岩を用い, 長さ 9.25 cm, 幅 6.85 cm, 厚さ 5.2 cm, 重量 410 gで, 平面形は隅丸方形。両例とも石の角部・両端部・側面部に著しい敲打痕を残し, 法量から石器製作に伴う敲石か。

**石核**（図 107・108-203 AB, 図 110-206・207） 203は長さ 15.0 cm, 幅 13.0 cm, 厚さ 3.0 cm程度

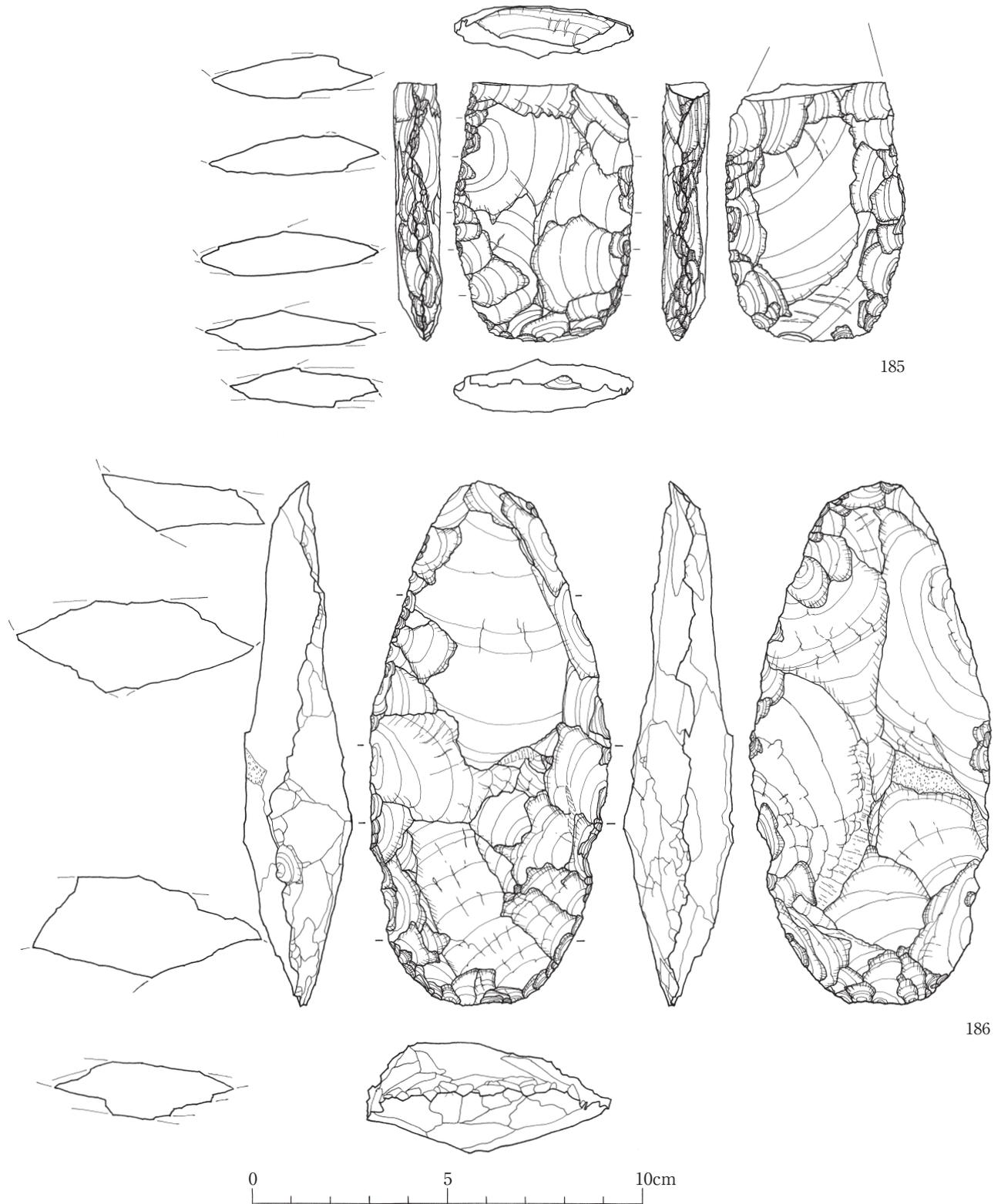


图 101 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

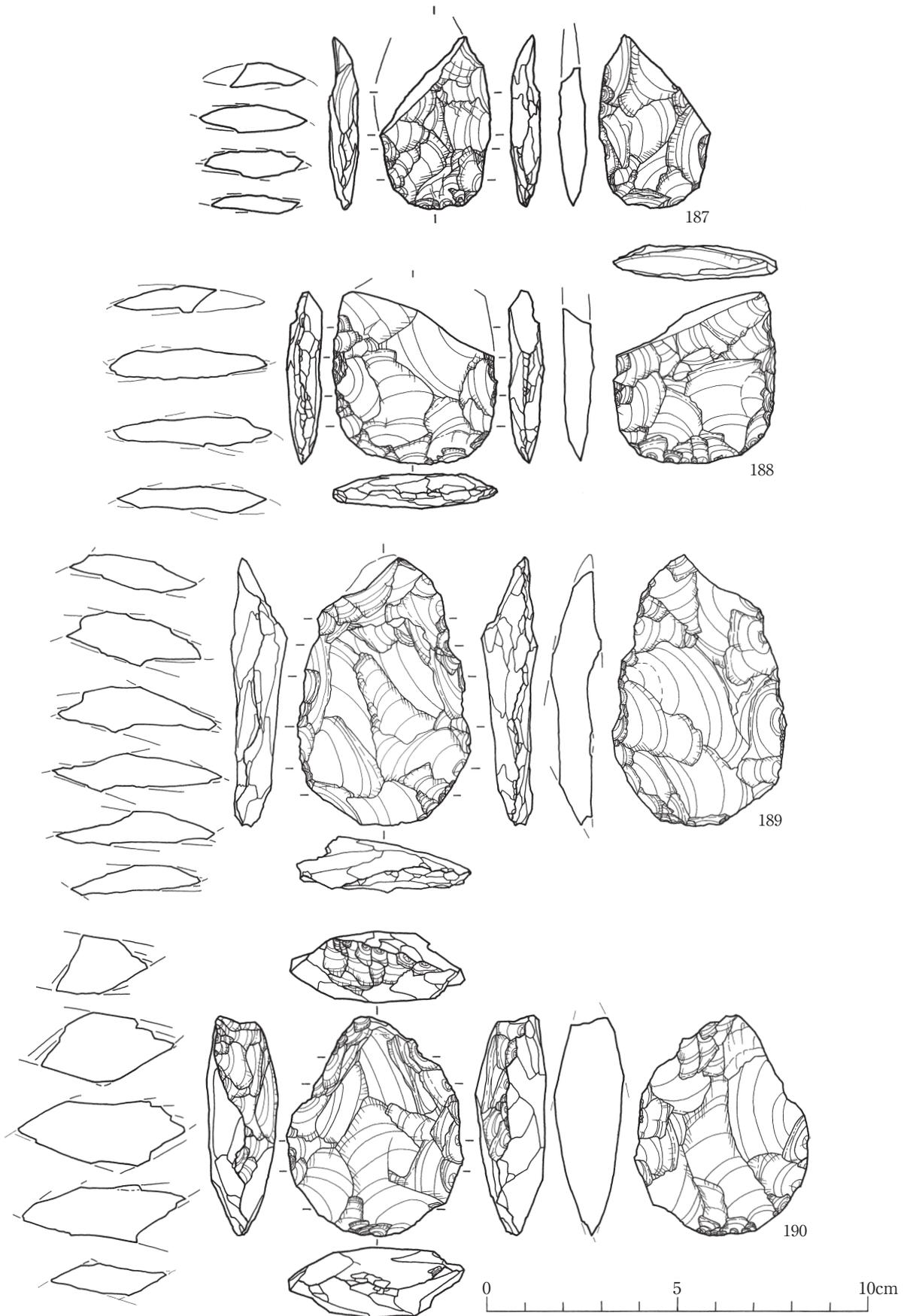


图 102 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 2/3)

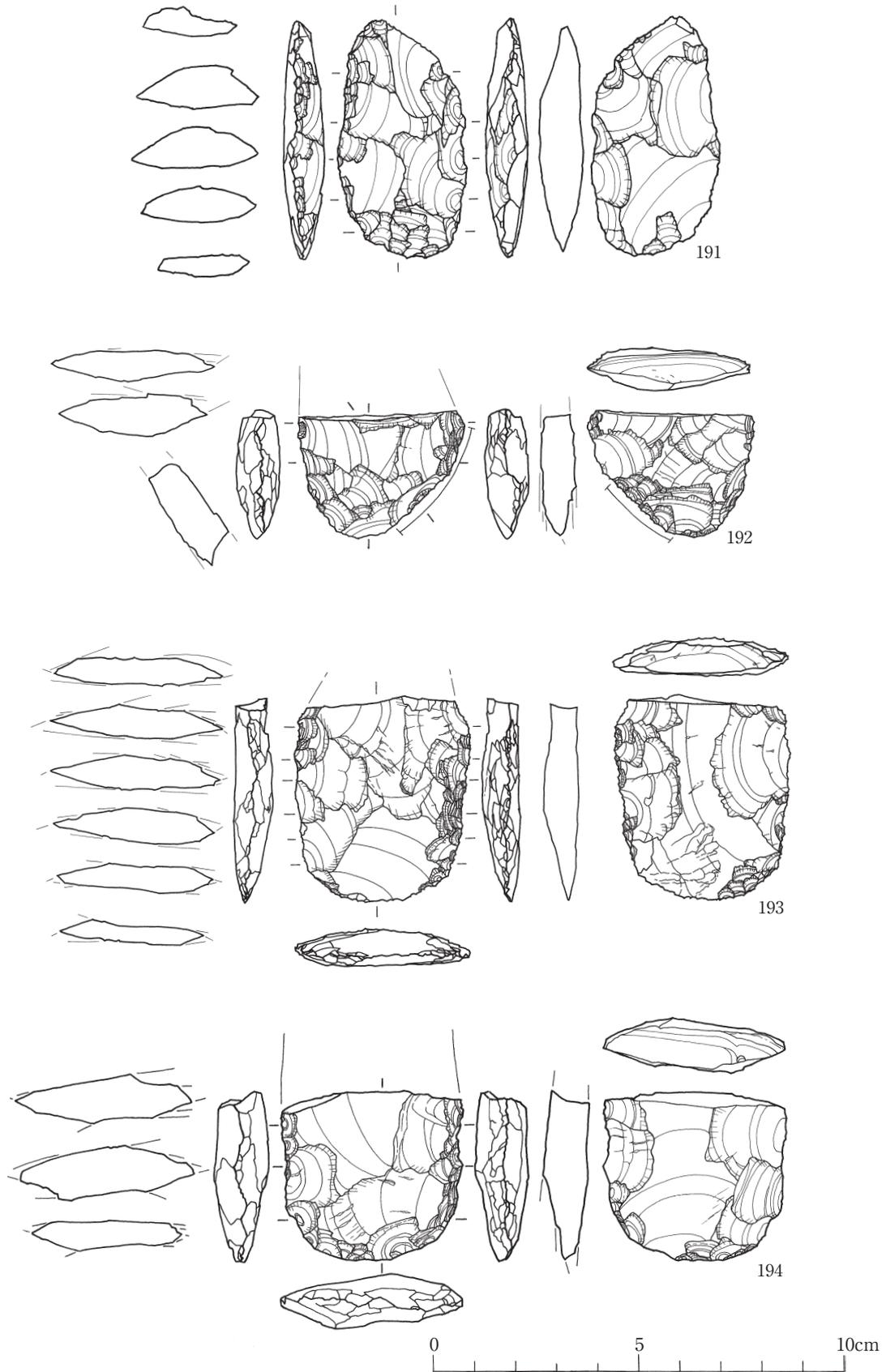


图 103 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

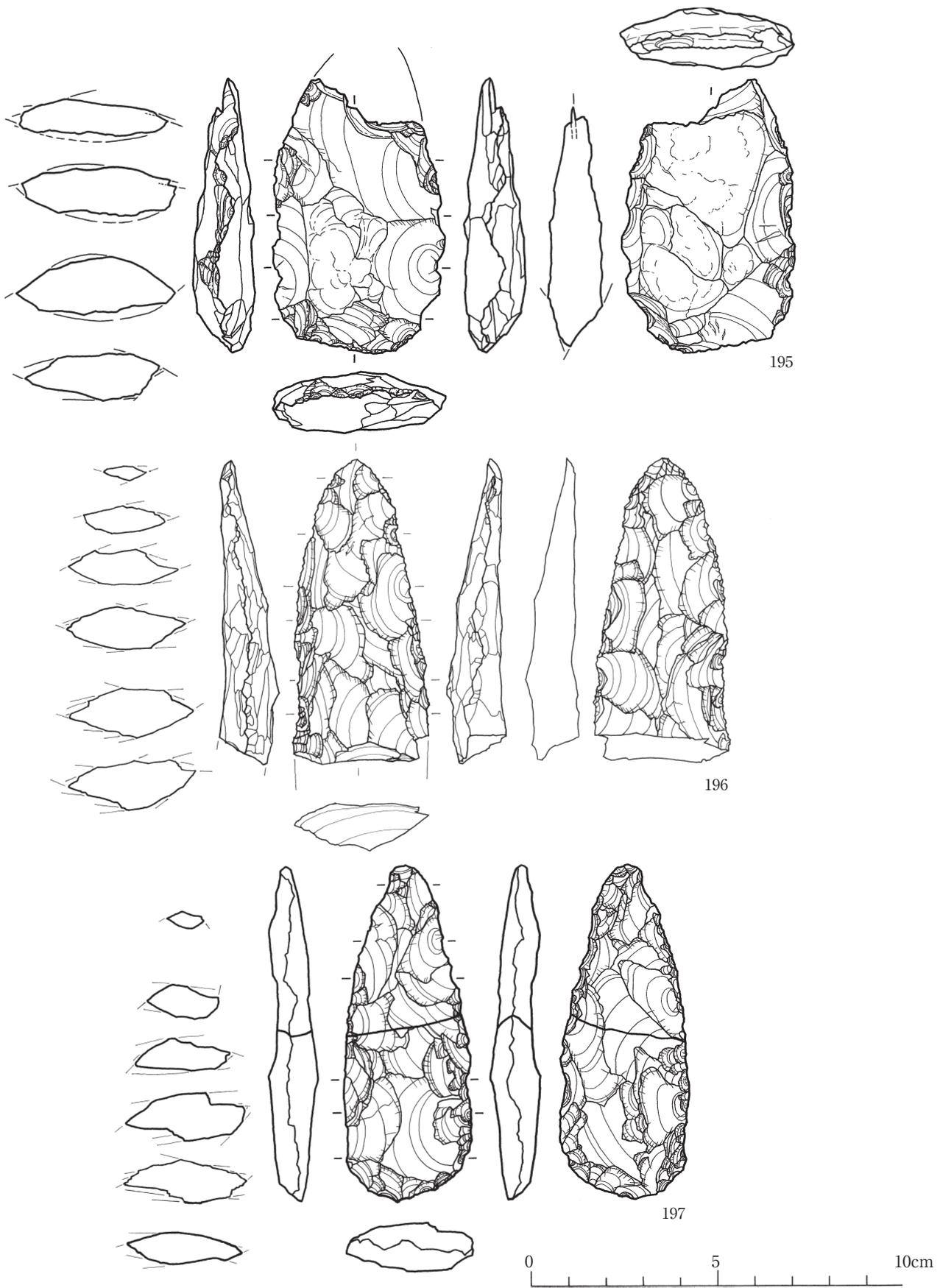


图104 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

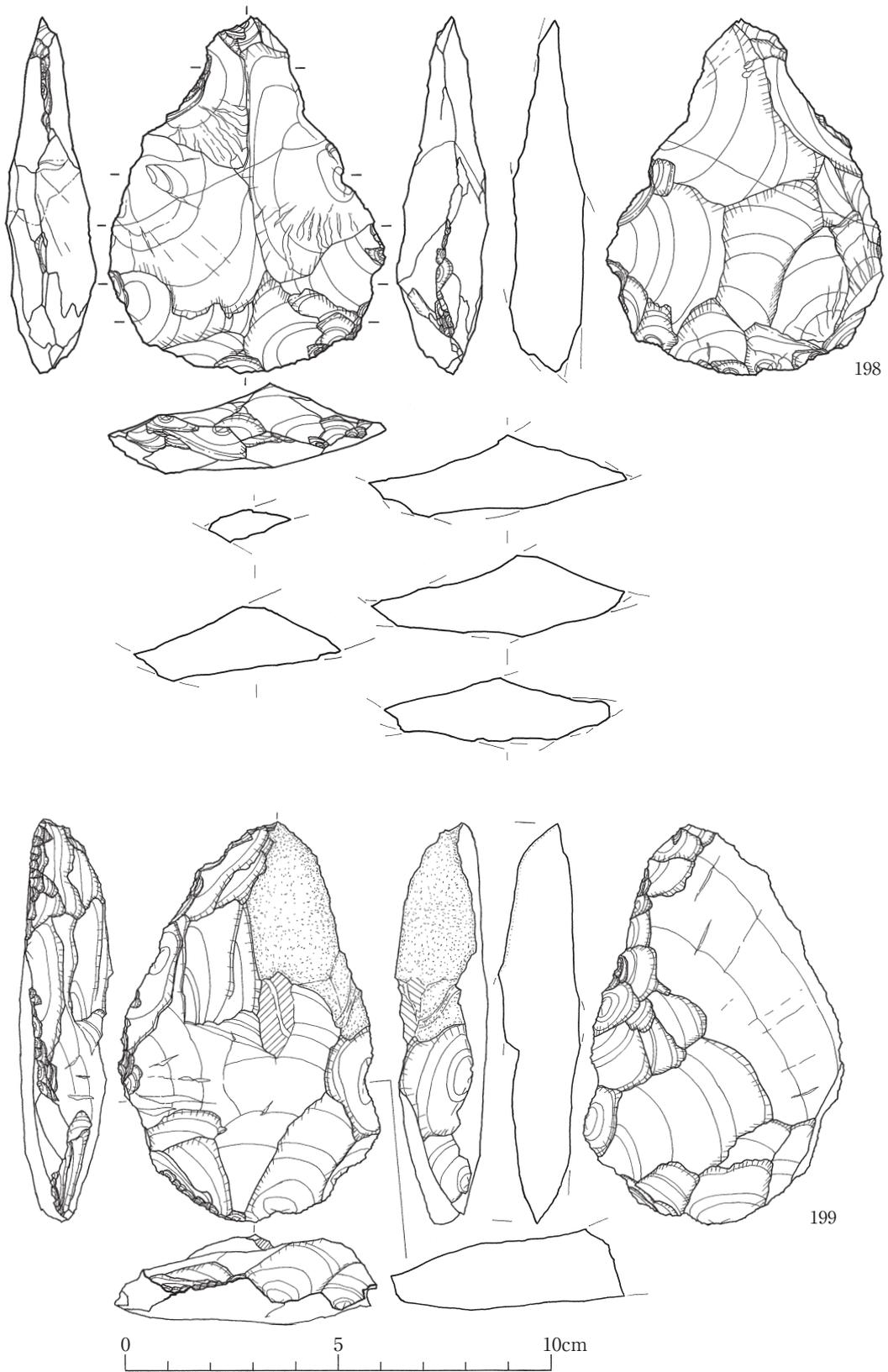


图 105 上黒岩遺跡 4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

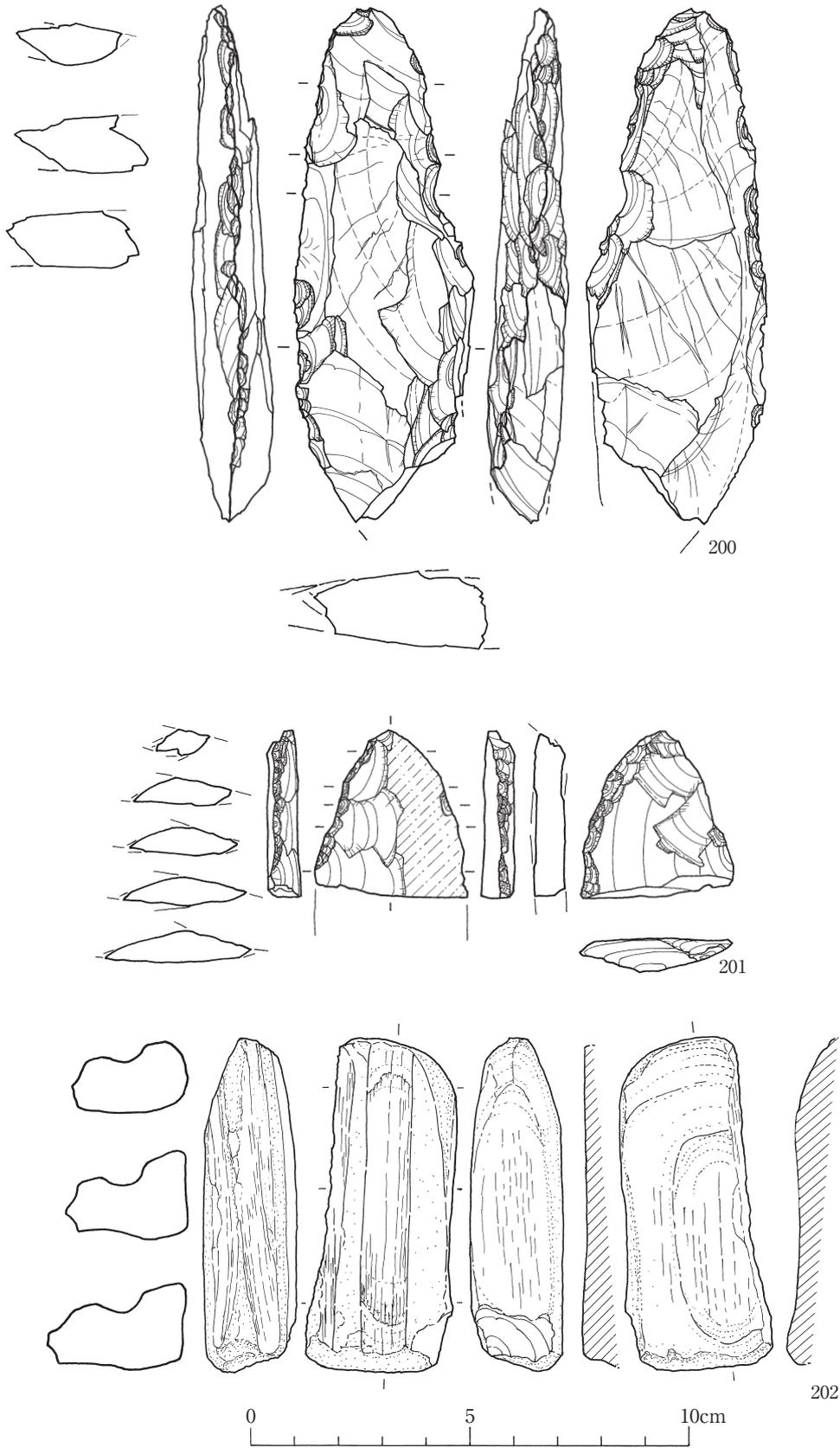


图 106 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 2/3)

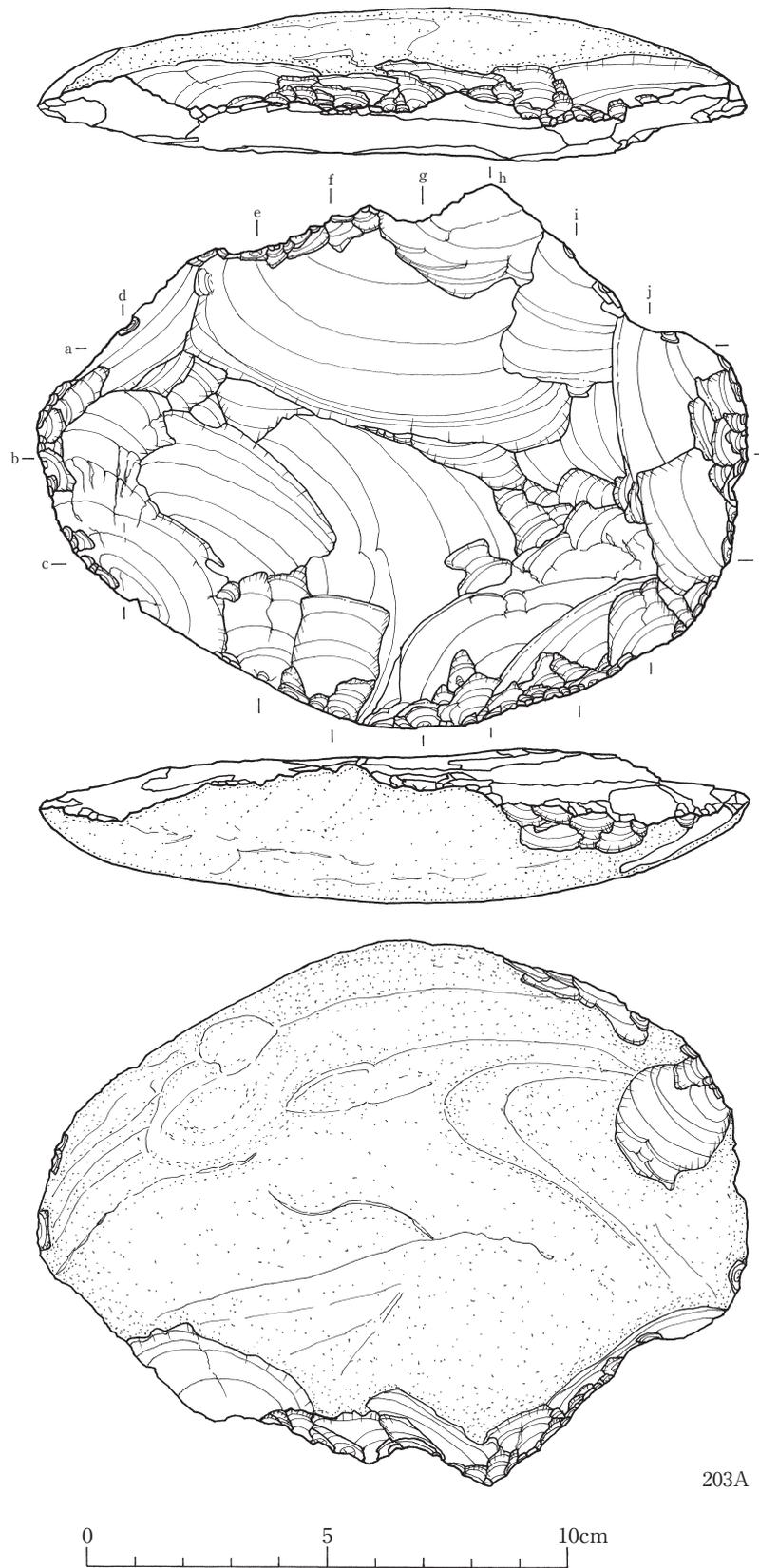


图 107 上黒岩遺跡 4 次調査 B 区 9 層出土石器 (S = 2 / 3)

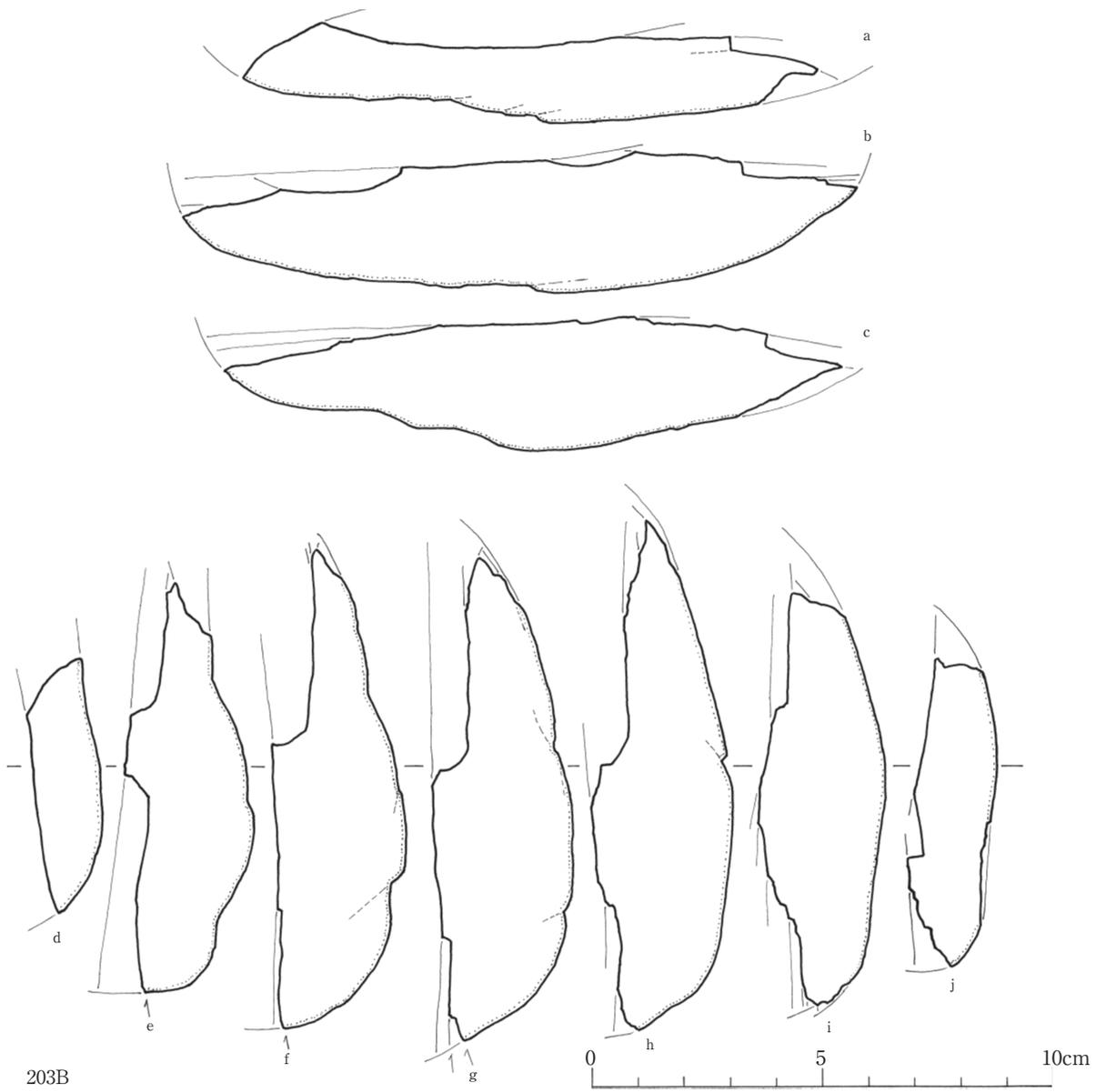


图 108 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

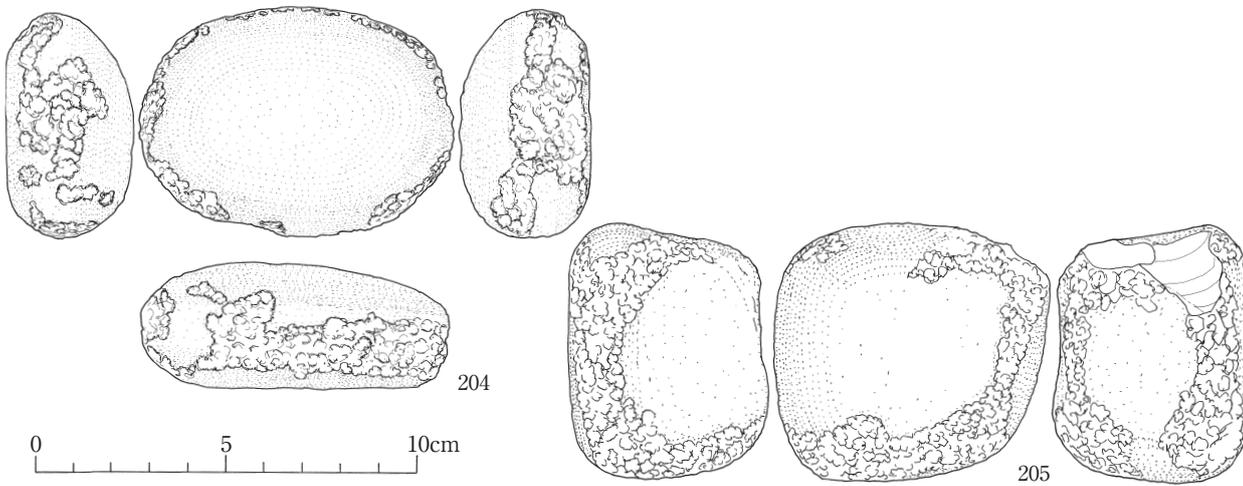


图 109 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 1/2)

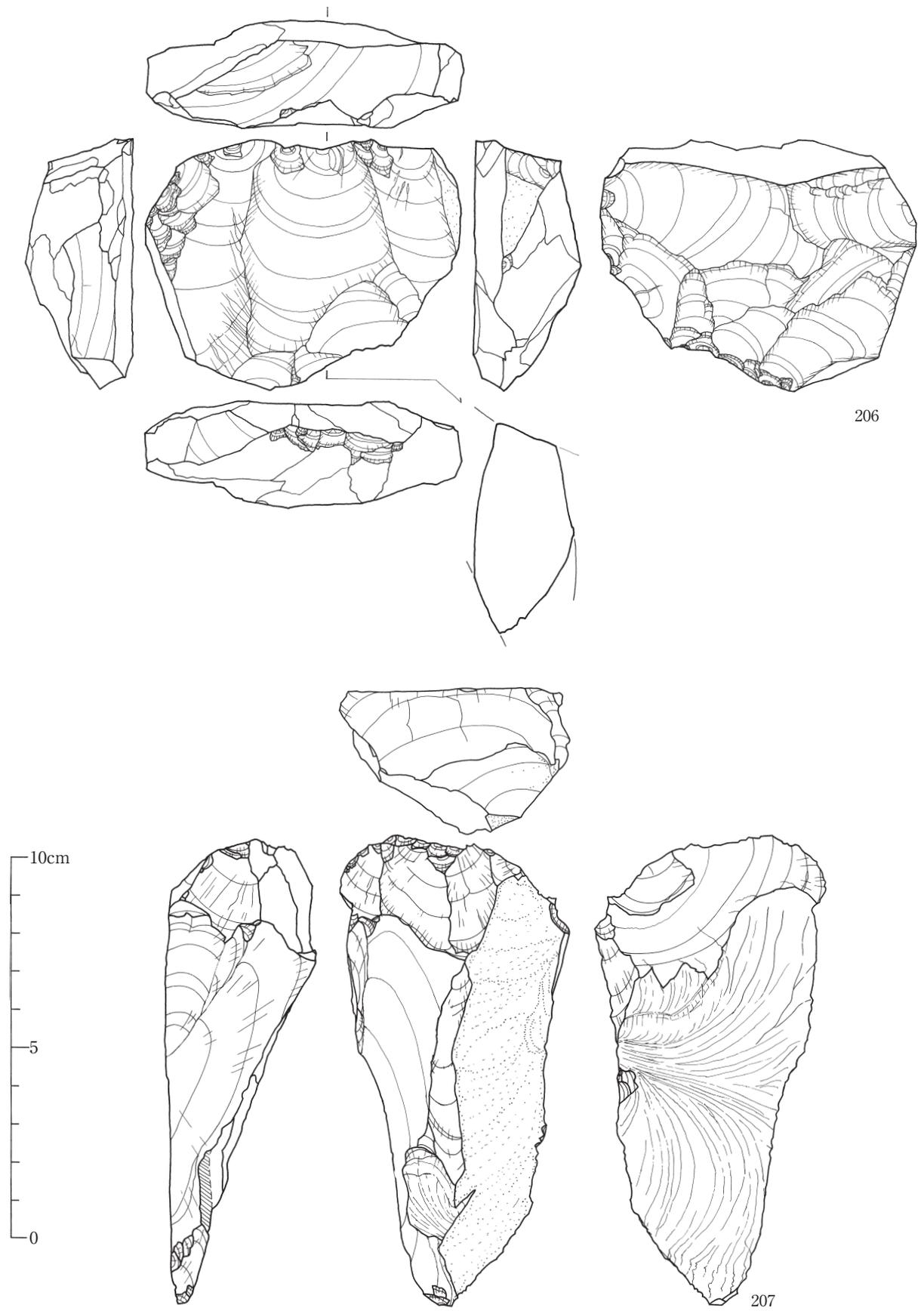


图110 上黒岩遺跡4次調査B区9層出土石器 (S = 2/3)

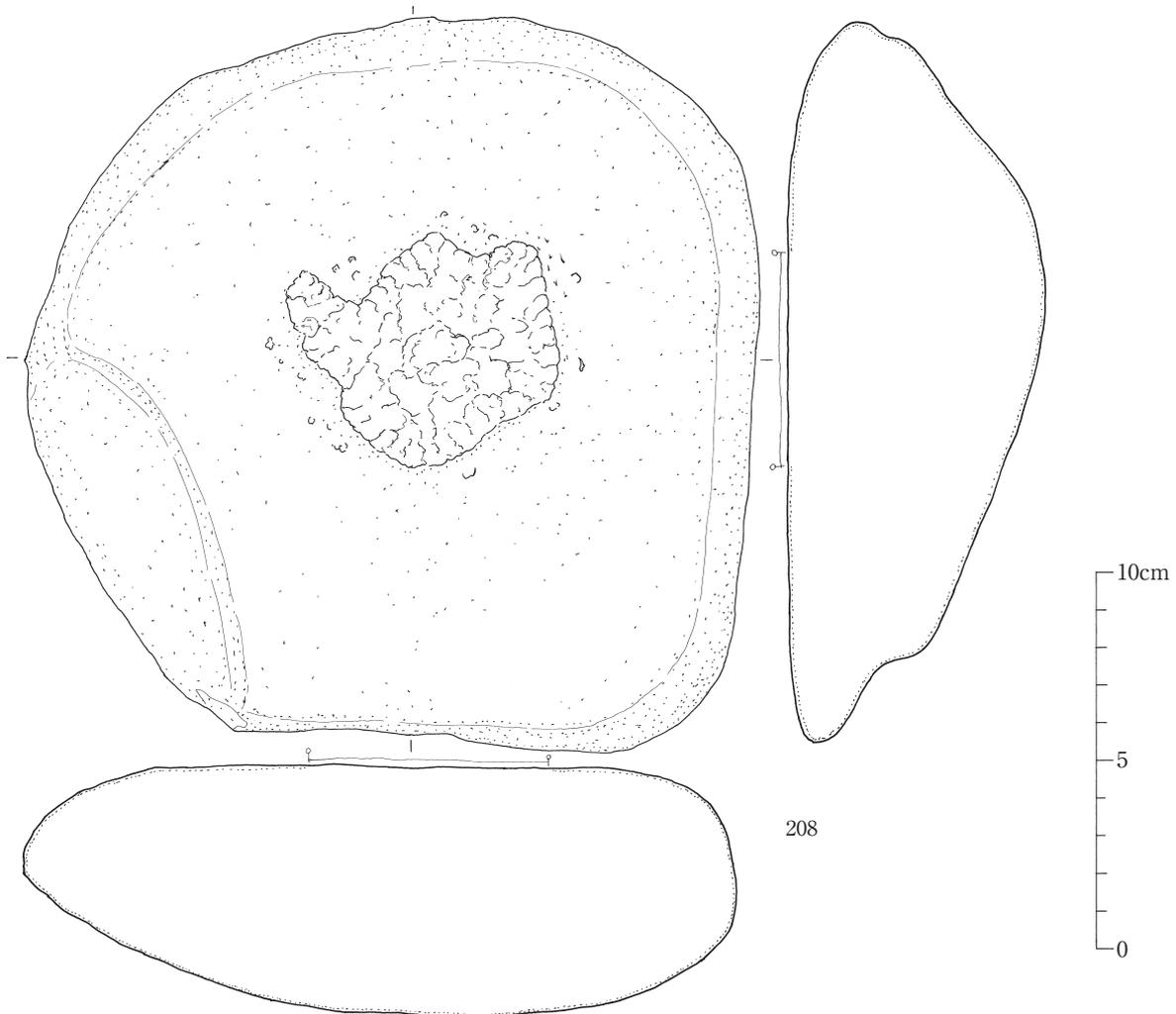


图 111 上黒岩遺跡4次調査B区10層出土石器 (S = 1/2)

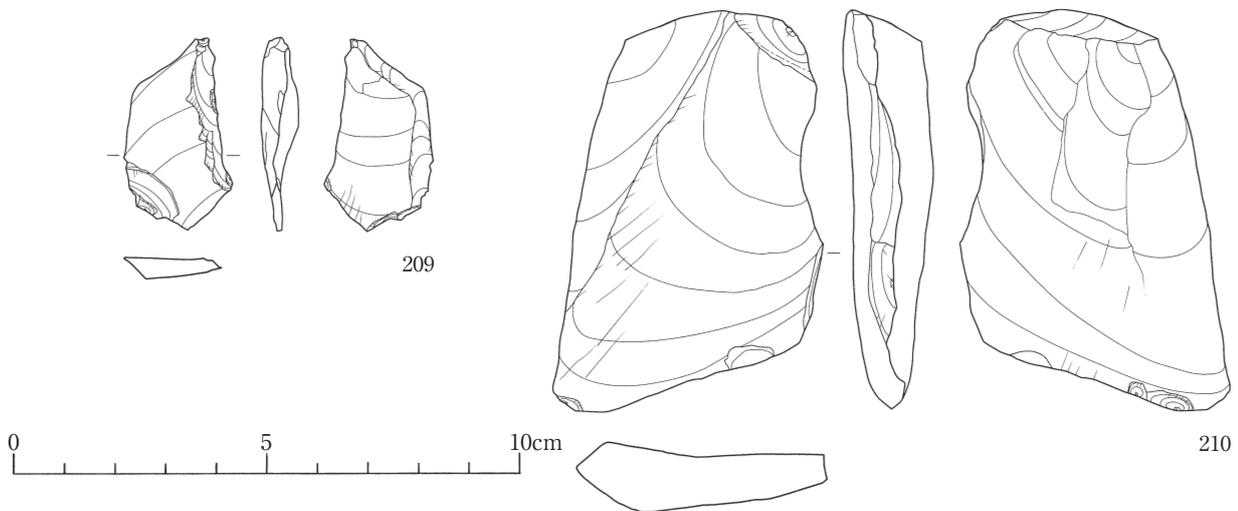


图 112 上黒岩遺跡4次調査B区11層出土石器 (S = 2/3)

の剥片を大きな川原石から剥離した剥片を素材としている。若干の打面作出を礫面側に行なうが、基本的には礫面側を打面とし、ポジ面側で剥片剥離を行なっている。206は礫面と先行する剥離痕を打面として求心的な剥離作業を裏面側で行なう。次に裏面側の先行する剥離痕を打面とし、表面側の上から下方へ最低3回程度の剥離作業を行なっている。207は節理部分で割り取った剥片素材の石核で、長軸の裏面節理方向に打面作出を行なう。打面部から表面方向へ剥片剥離作業を行なうが、良好な剥片ではない。

#### (7) 10層上面出土

台石(図111-208) 長さ19.6cm, 幅19.45cm, 厚さ6.85cm, 重さ4,000gの川原石をそのまま利用している。裏面側は平ではないので、表面側のみで敲打等を受けている。他に10層出土の遺物がないことと、「10層上面」という層位から推定すると本来は上位の9層に由来する遺物であろう。

#### (8) 11層出土

剥片(図112-209・210) 小さな剥片とやや厚い縦長剥片であるが、明瞭な加工はない。1969年8月9日付の調査日誌には「第9層よりの落込みと思われる。」とあるが、石材からみて9層例に比べ違和感がある。

### 3 C区・C拡張区

C区・C拡張区は岩陰の中央部分に位置する。C区・C拡張区の調査経過は、1961年の1次調査時にA区・B区・C区(第2次調査の1トレンチ)として調査されたうちのC区が最初である。翌年8月の第2次調査で1次調査のC区は1トレンチC区として調査が続行し終了している。また2次調査では西側D区との境界側に4トレンチC区が設定される。3次調査では4トレンチC区の東側を調査する。更に、3次調査ではこうしたC区の北側とD区の北側をC拡張区として調査している。4・5次調査ではC区・C拡張区の調査は行なわれていないが、断面整備ということで4次調査時に三日間の小規模調査が行なわれている。調査面積は1トレンチC区と4トレンチを含めたC区の面積が約9m<sup>2</sup>, C拡張区は約4.4m<sup>2</sup>である。

2次調査の遺物が異常に少ないが、1トレンチC区は1次調査時(実質的には試掘調査)に一括取り上げされた他、2次調査次の遺物に地点・層位不明遺物が存在することに関係がある。層位別に土器を見ると、2層:縄文時代後・晩期, 4層:縄文時代早期(押型文土器), 6層:縄文時代草創期, 7・9層:縄文時代草創期の土器が出土しており、石器類もそれぞれの時期に帰属すると考えられる。

#### (1) 層位不明

石鏃(図113-211~212) 挟りが深い例で、いずれも長幅の割合がほぼ同じ。C区付近の断面図を観察すると1層から3層がないことと、石鏃の形態から4層出土の石鏃と考えられる。

#### (2) 2層出土

石鏃(図113-213) 長さ1.32cm, 幅1.25cm, 厚さ0.25cm, 重さ0.34gと小型。挟りが浅く、脚の端部がやや尖る。1トレンチB区に近い部分での出土か。

(3) 4層出土

**石鏃** (図 113-214~219) 4点確認し、石材は赤色硅質岩が1例 (214)、凝灰岩が1例 (215)、硅質頁岩が2例 (216・217)、推定金山産サヌカイトが1例 (219) である。219は長さが3cm台の大型例で、脚部が外方に丸く突出する。また近位の抉りは僅かである。214~218は中型例であるが、やや大きい例もある (217・218)。中型例のうち、抉りが浅く幅に較べて長さが長い1群と (214~217)、長幅が同じ比率で抉りのない例に区分できる (218)。石鏃の形態からみると押型文土器に伴う典型的な石鏃組成とはやや違いはあるか。

**削器** (図 114-220) 幅広い剥片の下端側長辺の両面に押圧剥離による平坦で同一規模の調整加工を施すが、断面観は片刃。刃部の平面形がウルナイフ状に弧状を成すなど縄文時代後期・晩期の横刃形石器に酷似するが、縄文時代早期にも類例はある。石材は推定金山産サヌカイトである。

**石錘** (図 114-221) 長さ7.02 cm、幅4.88 cm、厚さ1.38 cmで緑色片岩の扁平礫を用いている。扁平礫の短軸に表裏両面からの打ち欠きを加えているが、小河川で使用する石錘としては大きい。

**楔形石器** (図 114-222) 大きさから別器種か。表面側は両極方向 (上・下端) から剥離痕が延び、裏面は主に短軸方向からの剥離痕。大きさは二上山山麓出土の「截断面のある石器」に近い [柳田 1974]。

(4) 6層出土

**石鏃** (図 115-223) 尖端部のやや下位に肩部を持ち、ここから撥状に裾広がりとなり脚部となる。抉りはやや浅いが、縄文時代に通常見られる石鏃。完形品で長さ2.61 cmである。石材は赤色硅質岩である。なお、出土層位によっては若干数の増加はありえる。

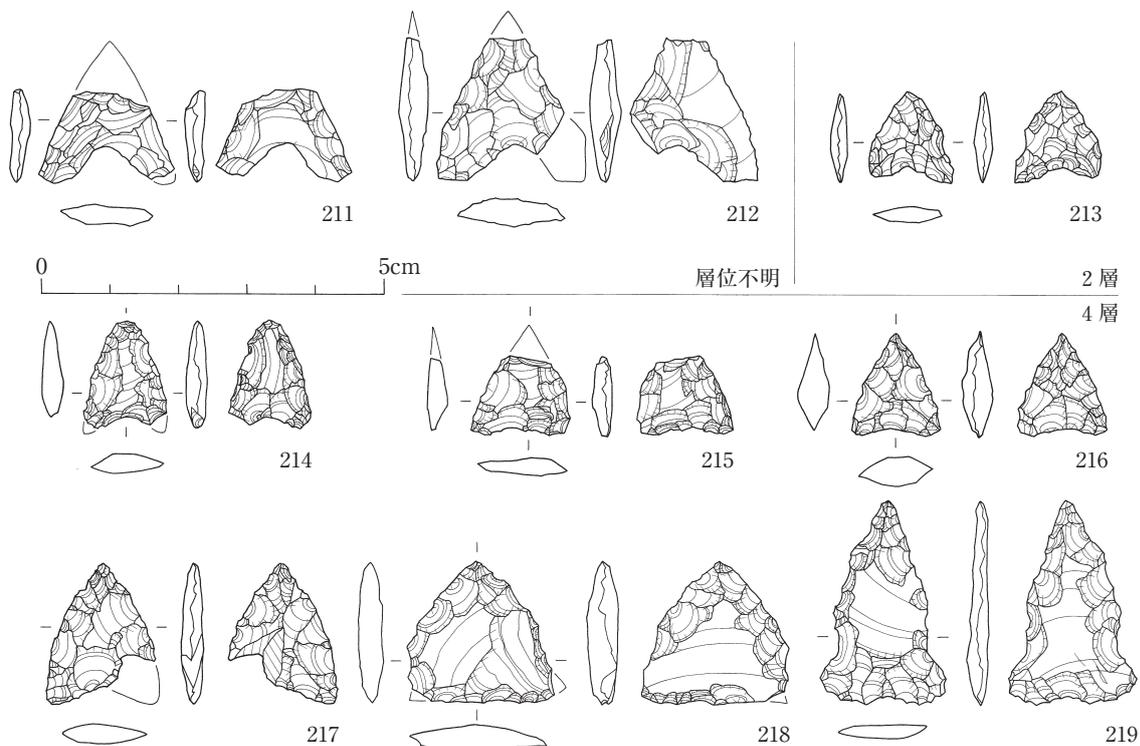


図 113 上黒岩遺跡2次調査C区層位不明・2層・4層出土石器 (S=1/1)

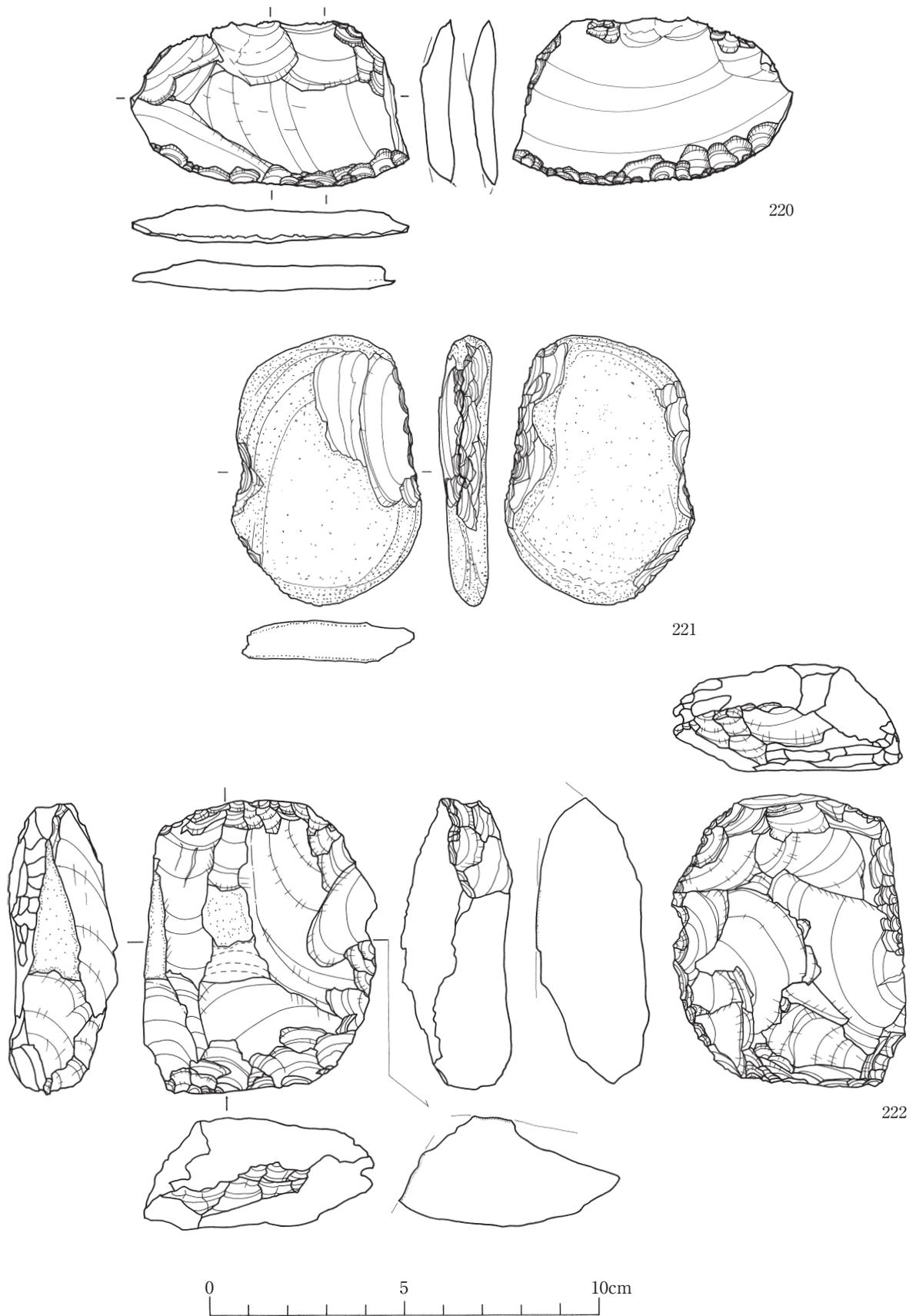


图 114 上黒岩遺跡 2・3 次調査 C 区 4 層出土石器 (S = 2/3)

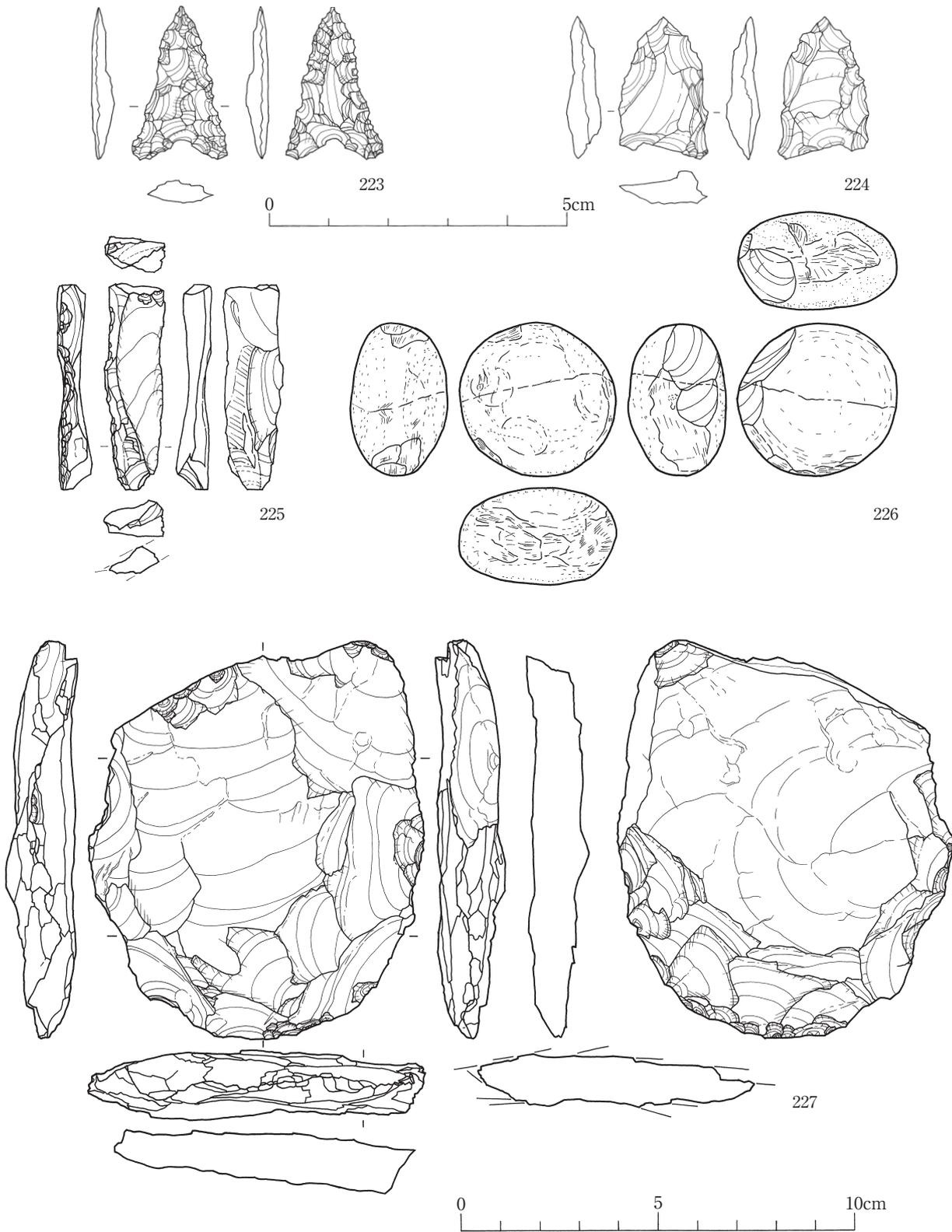


图 115 上黒岩遺跡 2・3 次調査 C 区・C 拡張区 6 層出土石器 (S = 2/3)

**石鏃の未成品** (図115-224) 平面形が弾丸形で細部調整は粗く、側縁の側面観は上下の変化が大きい。基部の抉りも二、三の剥離を施しただけで左脚方向に偏っている。石材はサヌカイトである。また、若干数の増加はありえる。

**楔形石器** (図115-225) 破損品、若しくは削片か？また、若干数の増加はありえる。

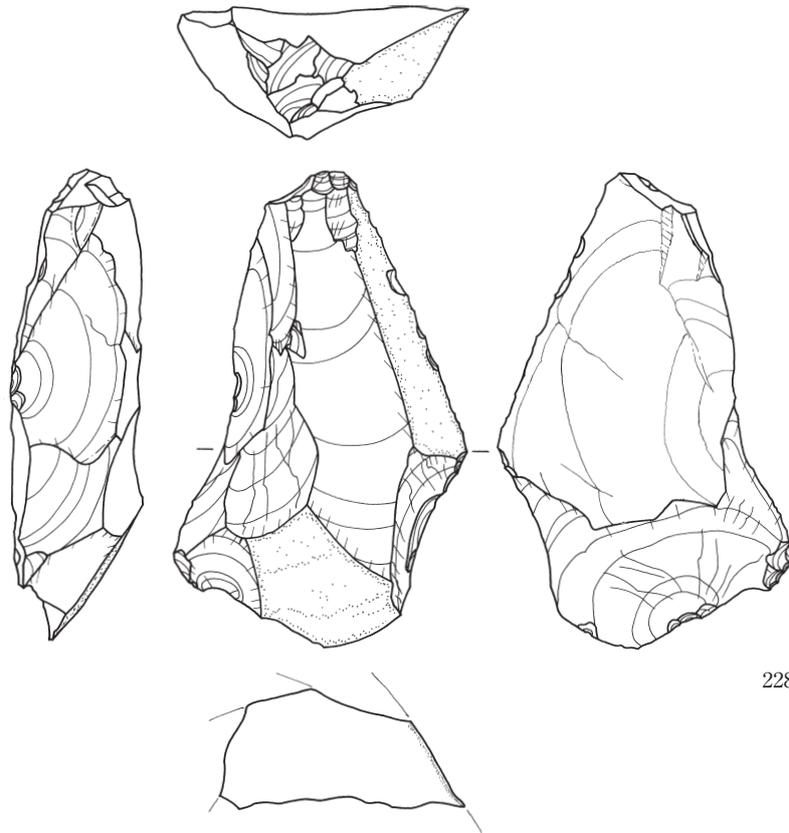
**小形敲石** (図115-226) 長さ3.815 cm・幅3.998 cm・厚さ2.476 cmと小型であり、石材は脈石英の小石をそのまま利用する。大きさと重量から大きな剥片剥離作業を想定する必要はないだろう。器体には潰れ痕跡がなく、周囲の側面部に0.2, 3 cmピッチの線条痕が観察される。

**石篋未成品** (図115-227, 図110-228・229) 石材は無斑晶質安山岩が2点と石材不明1点である。227は長幅10 cm近くの幅広い楕円形の例である。近位を半円形にソフトハンマーによる調整加工で刃部作出をおこない、ほかはほとんど調整加工のない石器である。228は幅広の剥片を素材としており、表面側上端・左側辺・右側辺下半と裏面の近位から遠位にかけてハード、もしくはソフトハンマーによる粗割りがなされている。229は撥形の平面形をしている。表面側上端には階段状の剥離が生じ、厚い。表面左側辺下半から近位にかけて調整加工が施される。しかし下端の刃部予定部分はほぼ水平であるが、右側はまだ切断面のままとっている。調整加工は裏面側の短軸方向(両側辺方向)から施され、刃部側がトランシェ状になっている。232は長幅に大きな違いのない多角形を呈しており、周縁の出入りが目立つ。表面側にはヒンジフラクチャーやステップフラクチャーが著しく、階段状の剥離痕が多い。したがって左側辺に若干の調整加工痕があるものの質的に粗悪で放棄されたのだろう。

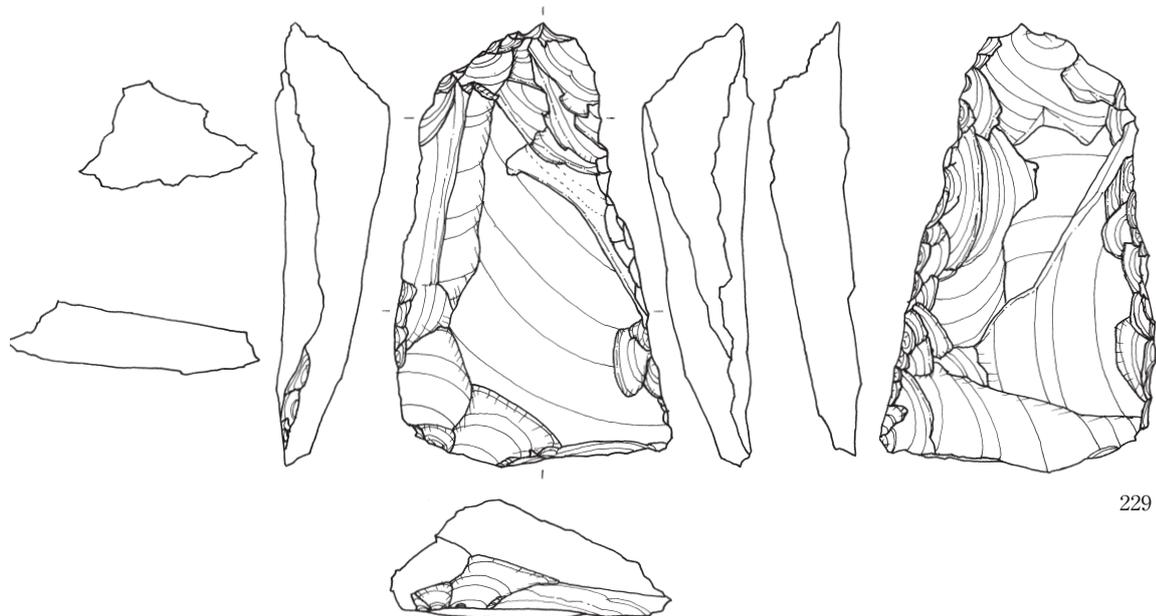
**削器** (図117-230・231) 230は長幅比がほぼ同様で多角形の剥片を素材とする。表面側を粗く整形剥離し、ポジ面である裏面側の右側縁部から下縁部付近に細部調整を施した例。石材は無斑晶質安山岩である。231は幅広い剥片の下辺の両面に平坦で同一規模の押圧剥離による調整加工を施す。刃部は弧状を成し、縄文時代後期・晩期の横刃形石器に酷似している。石材は推定金山産サヌカイトである。

**石核** (図187-458) 石材は不明で、板状の剥片に打面を入れ替え表裏両面で剥離作業を行っている。中央部で破損している。

**敲石・磨石・台石・砥石・礫器** (図118-233~235, 図119-236~239, 図120-240~242, 図121-243・244, 図122-245~247, 図123-248~251, 図124-252~255, 図125-256~260, 図126-261~263) 名称はそれぞれの機能を示すということで用いられた用語である。しかし一連の動作環境のなかにあり、実際は複合する場合が多い。資料は31点あり、硬質砂岩の敲石1点と石材不明の5点を除くすべてが緑色岩または、緑色片岩で占められている。233は扁平で細長の石で、表裏両面に2個ずつ凹部がある。端部が敲打の為に破損。234は扁平で細長の石を用い、表裏両面に2個ずつ凹部がある。235は扁平で楕円形の石を用い、3つの連続する凹部が表裏両面にある。凹部は楔状・円錐状・アバタ状である。裏面は周囲がやや摩滅する。236は扁平で楕円形の石を用い、アバタ状の打痕が帯状に表裏両面に広がる。端部は敲石としての敲打に由来する剥離痕がある。237は扁平で細長の石を用い、表裏両面に2, 3個の連結した円錐状凹部がある。238は断面山形で細長の石を用い、表面に2, 3個の連結した楔状・円錐状凹部がある。239は扁平で楕円形の石を用い、表面側にアバタ状の打痕が帯状に、その受けによるめり込みが裏面側に広がる。両端部は敲石としての敲打に由



228



229



图 116 上黒岩遺跡3次調査C区6層出土石器 (S = 2/3)

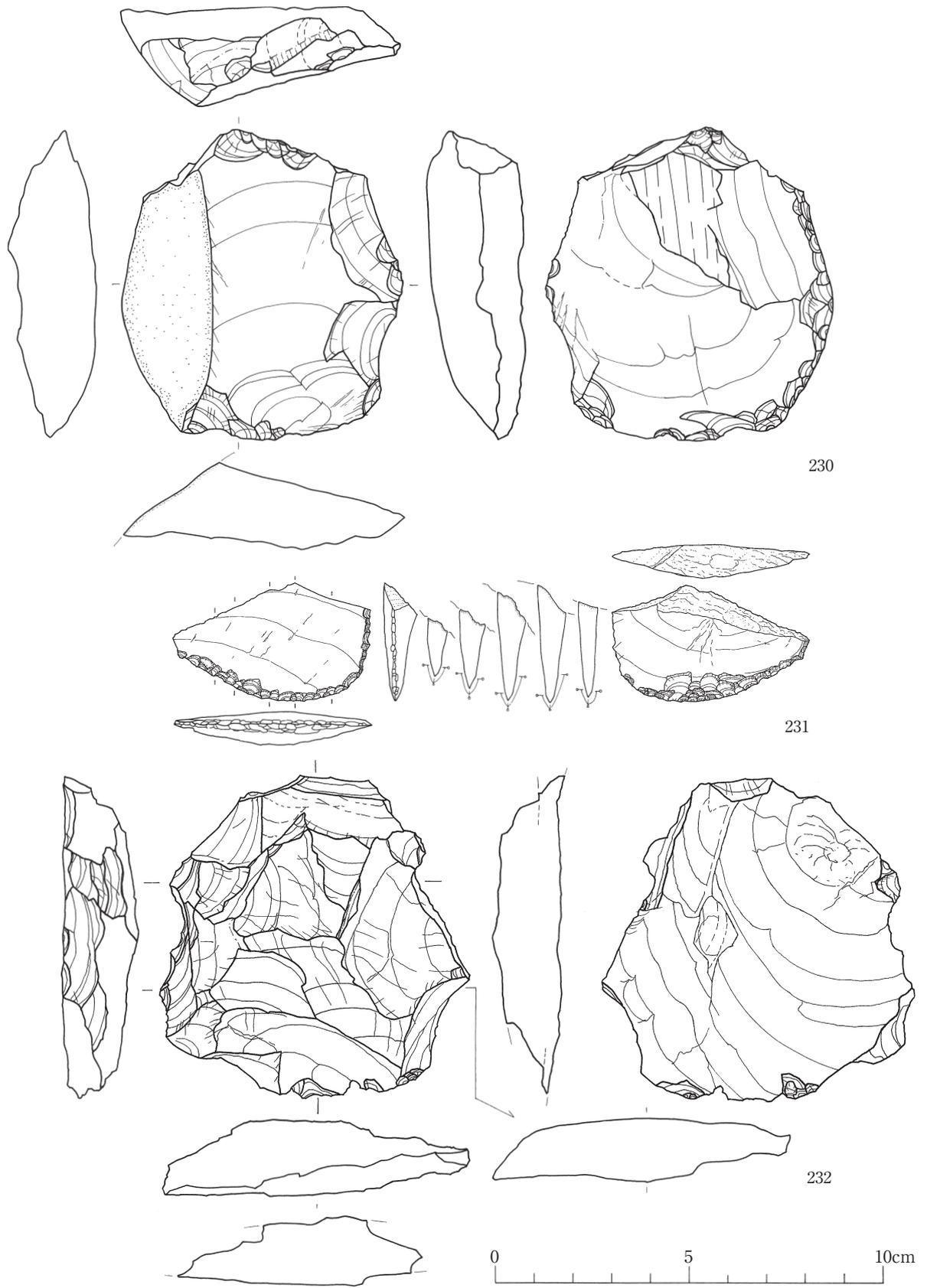


图 117 上黒岩遺跡 2・3 次調査 C 区 6 層出土石器 (S = 2/3)

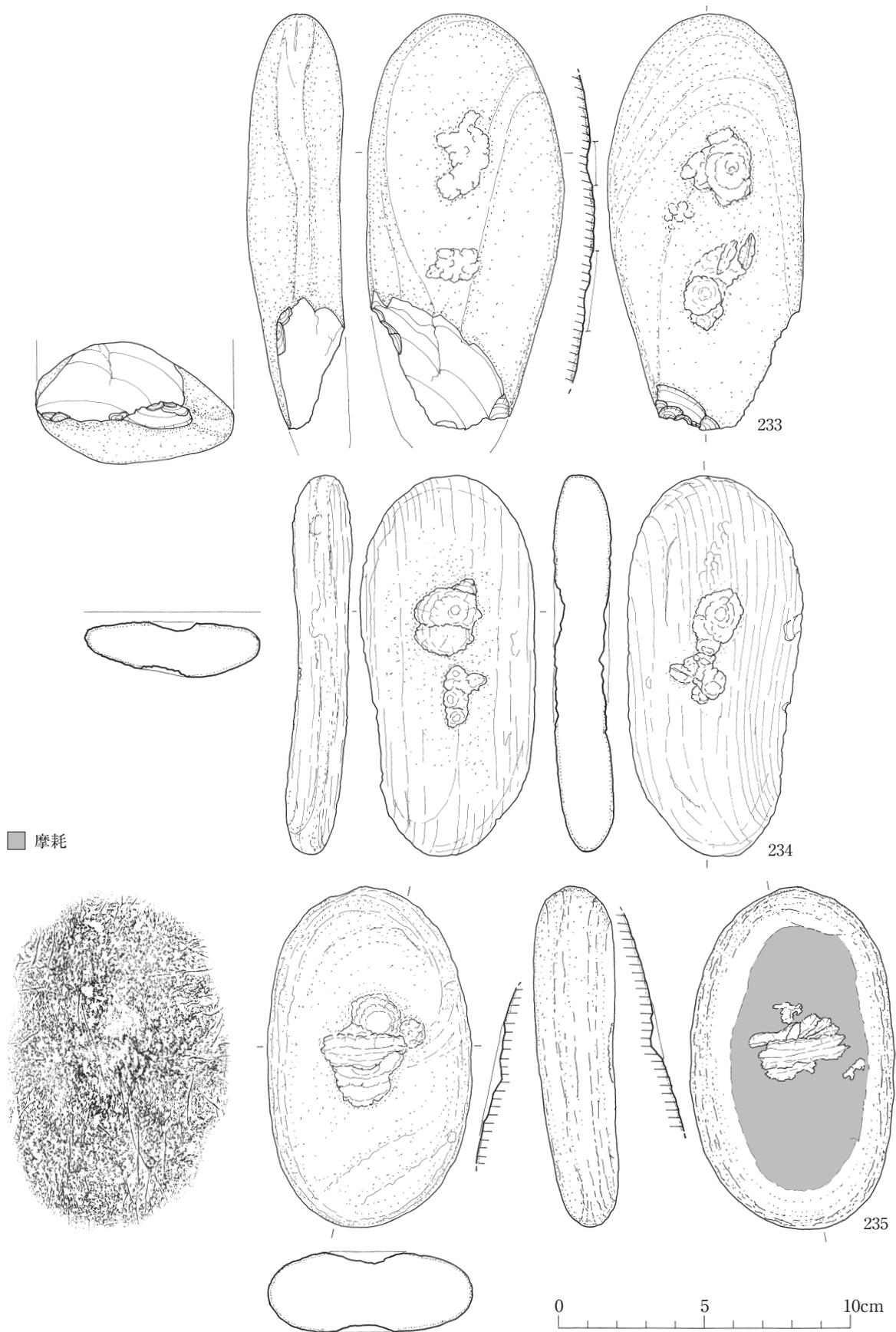


图 118 上黒岩遺跡 3 次調査 C 拡張区 6 層出土石器 (S = 1/2)

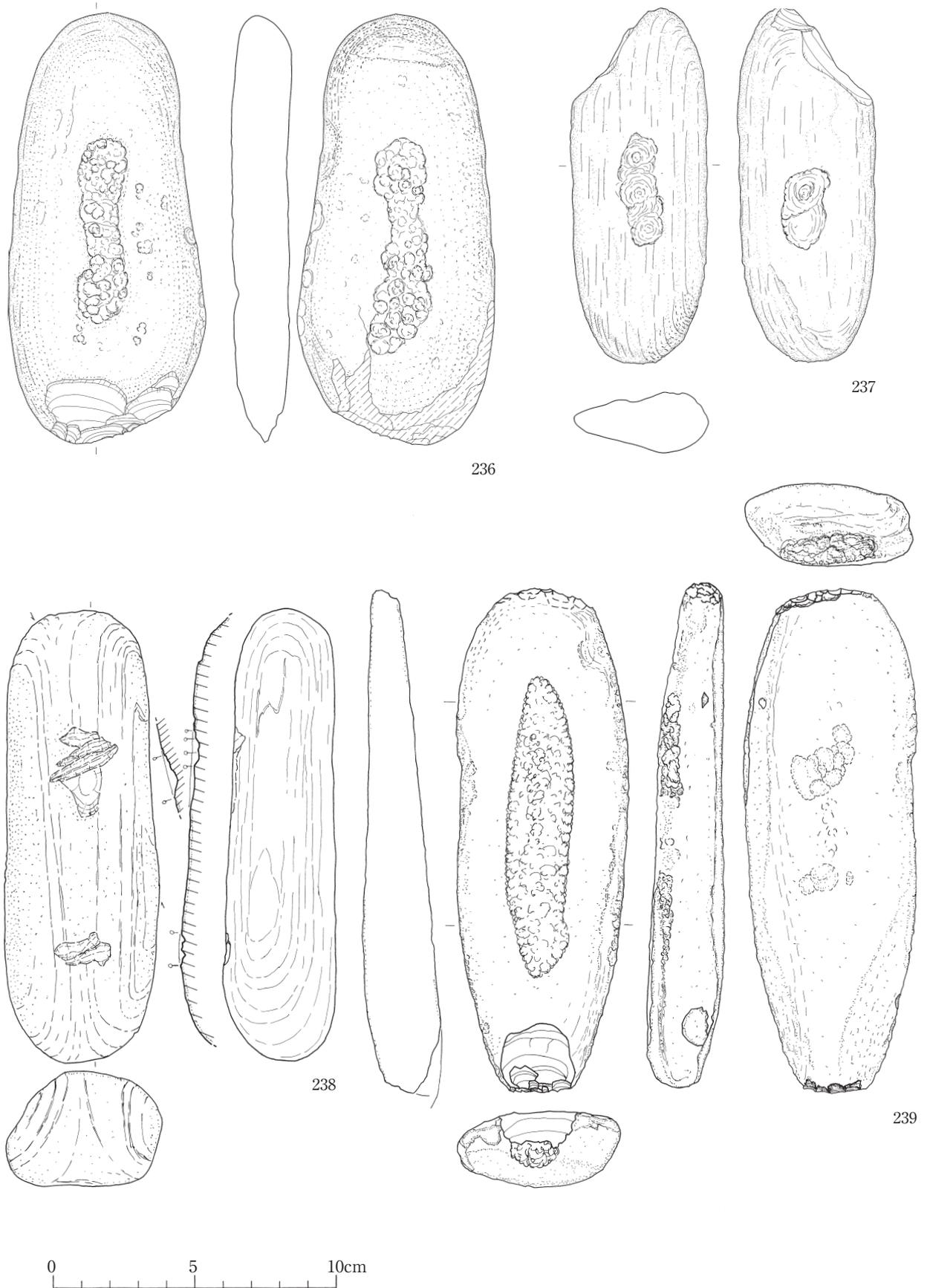


图 119 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 6 層出土石器 (S = 1/2)

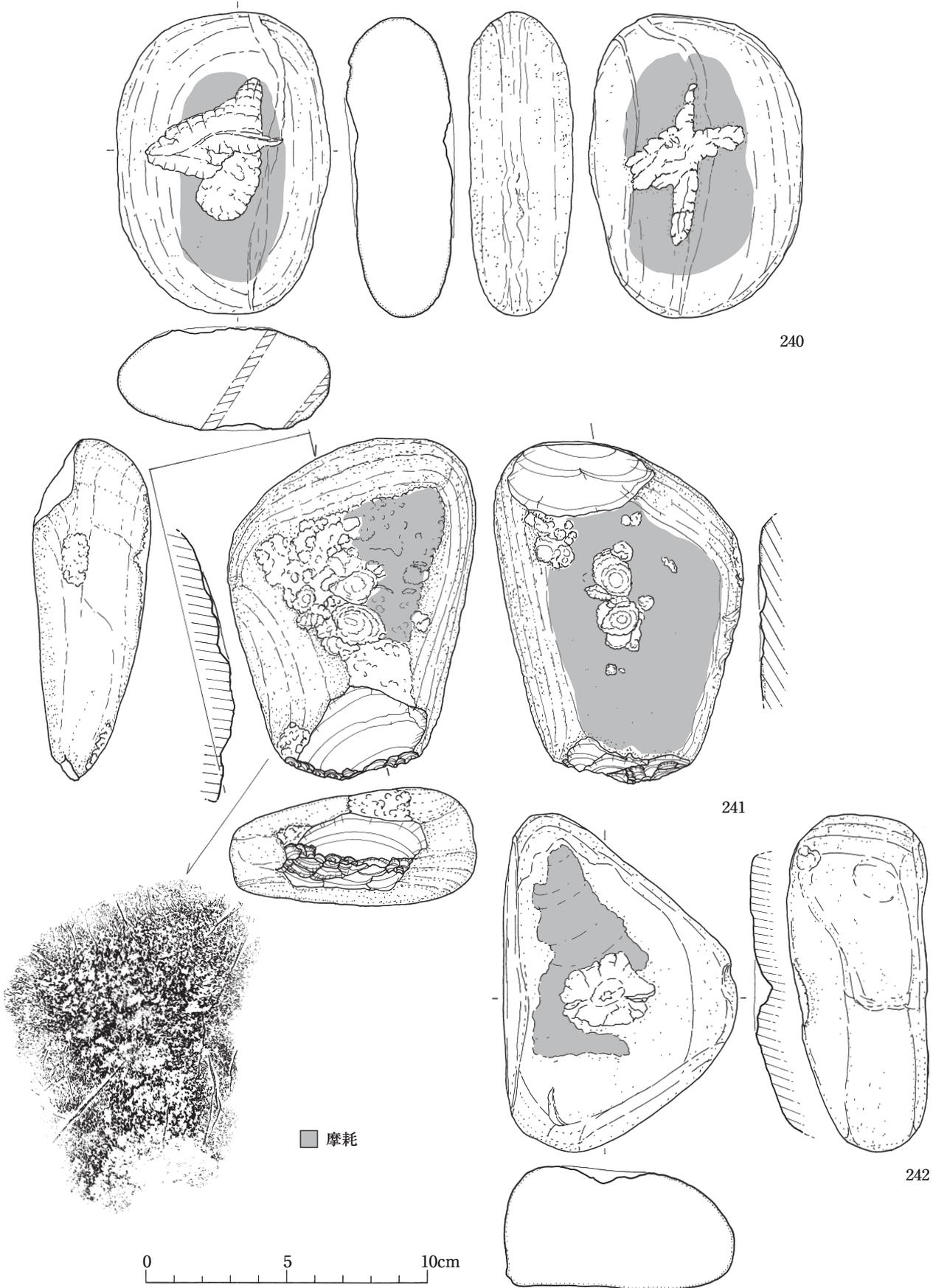
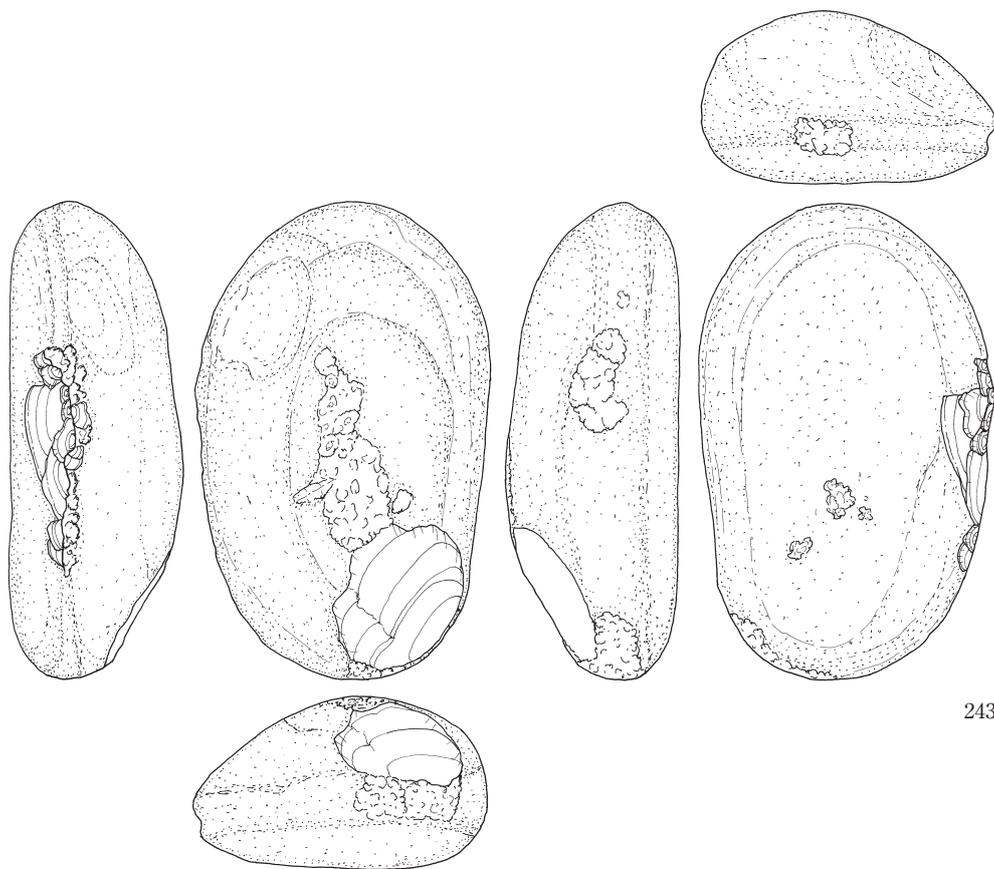
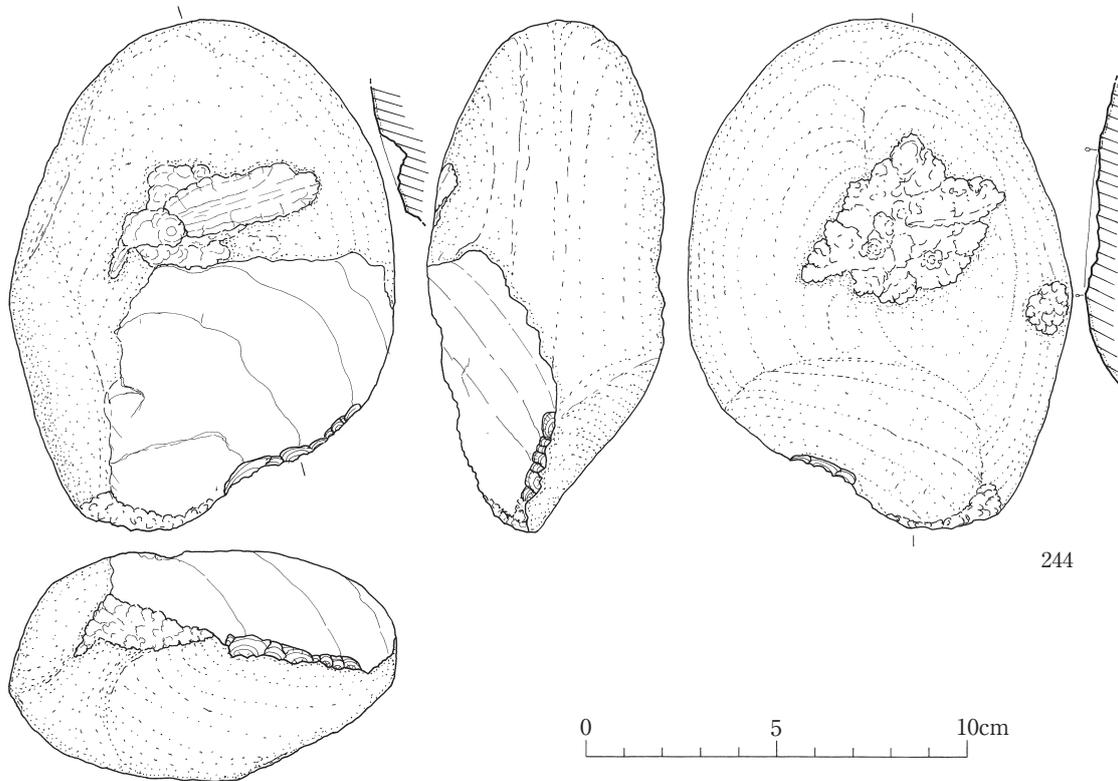


图 120 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区6層出土石器 (S = 1/2)

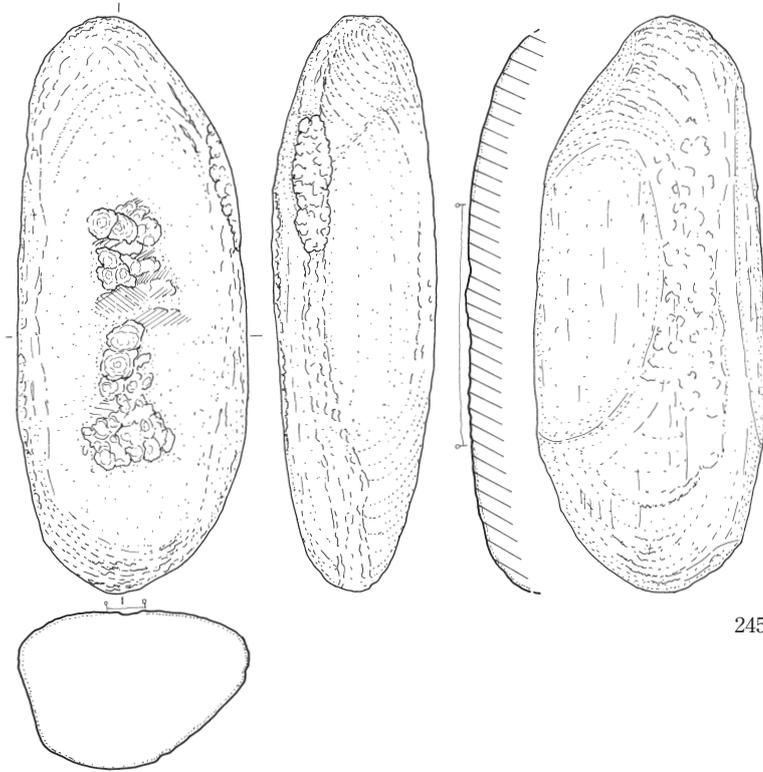


243



244

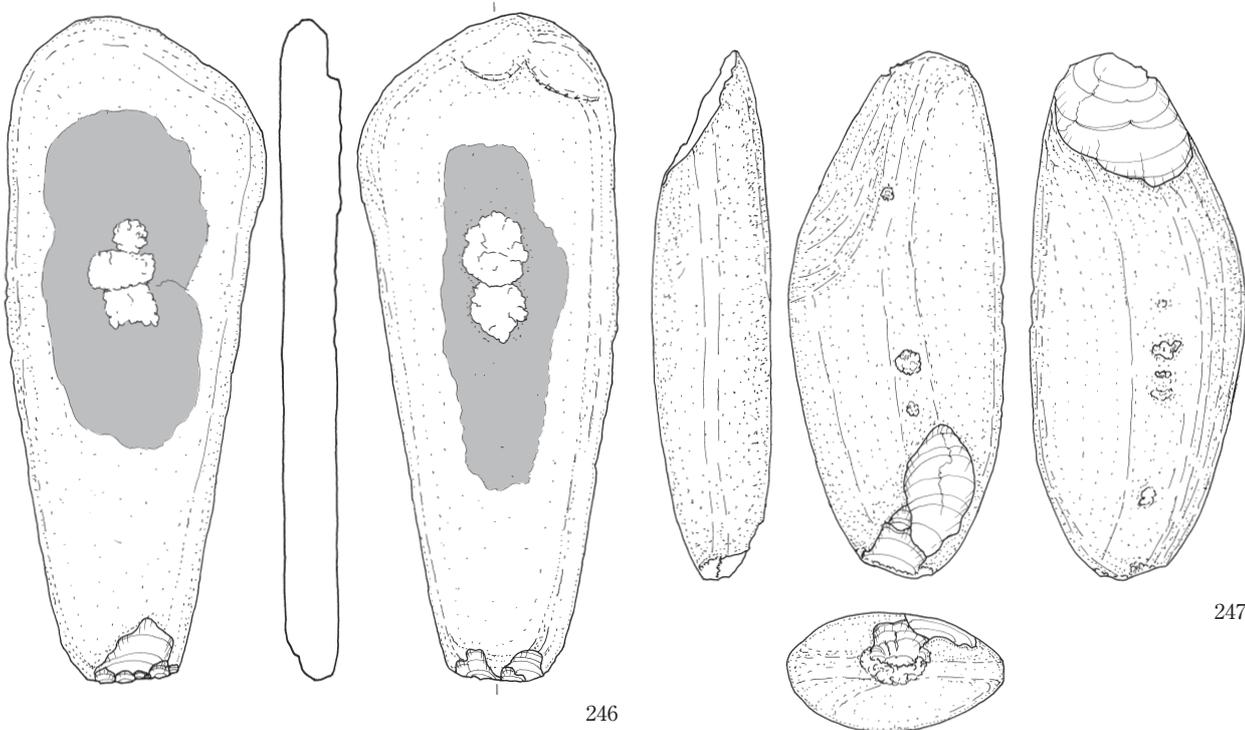
图 121 上黒岩遺跡 3 次調査 C 拡張区 6 層出土石器 (S = 1/2)



245

0 5 10cm

■ 摩耗



246

247

图 122 上黒岩遺跡 3 次調査 C 拡張区 6 層出土石器 (S = 1/2)

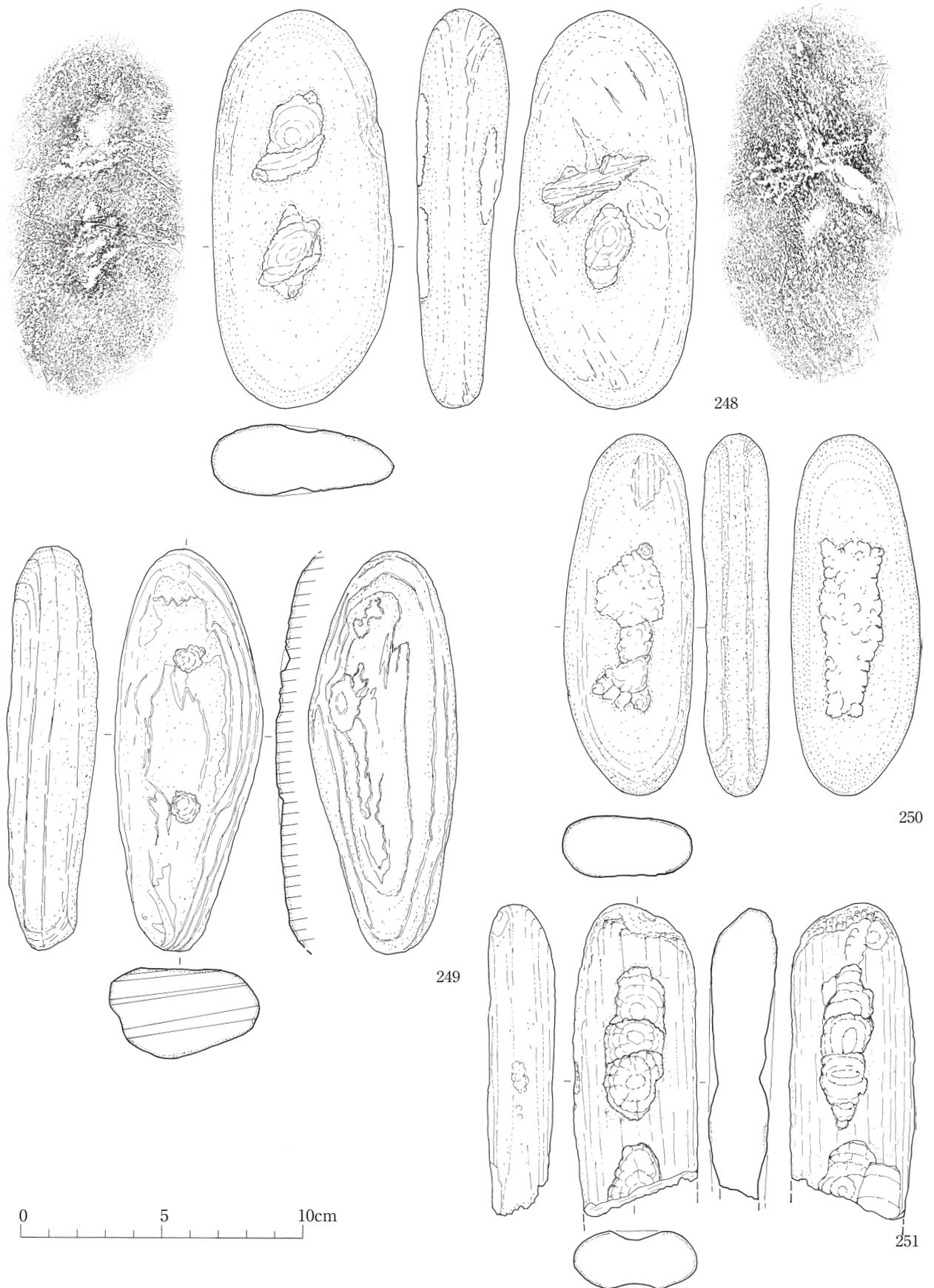


图 123 上黒岩遺跡 3 次調査 C 拡張区 6 層出土石器 (S = 1/2)

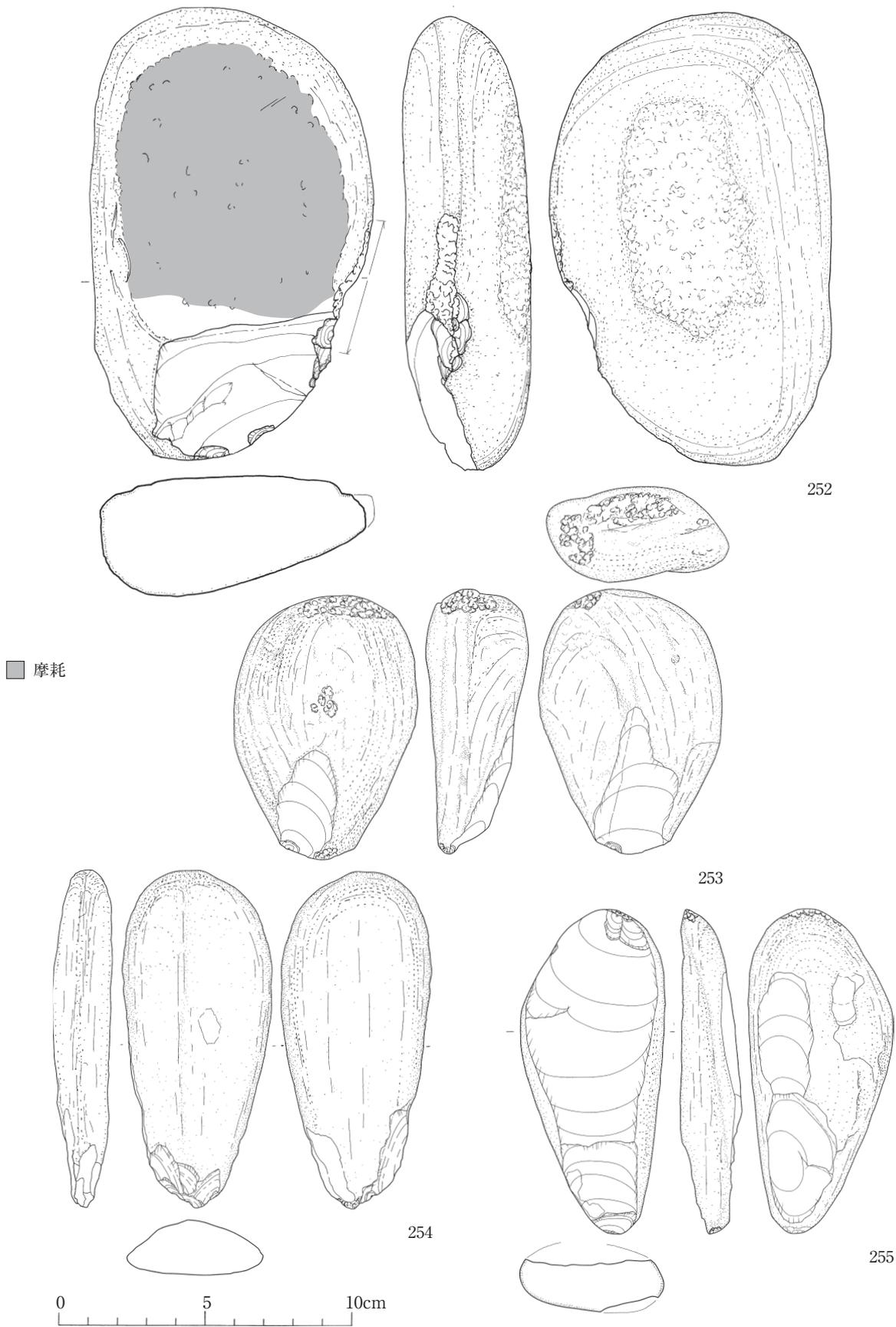


图 124 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区6層出土石器 (S=1/2)

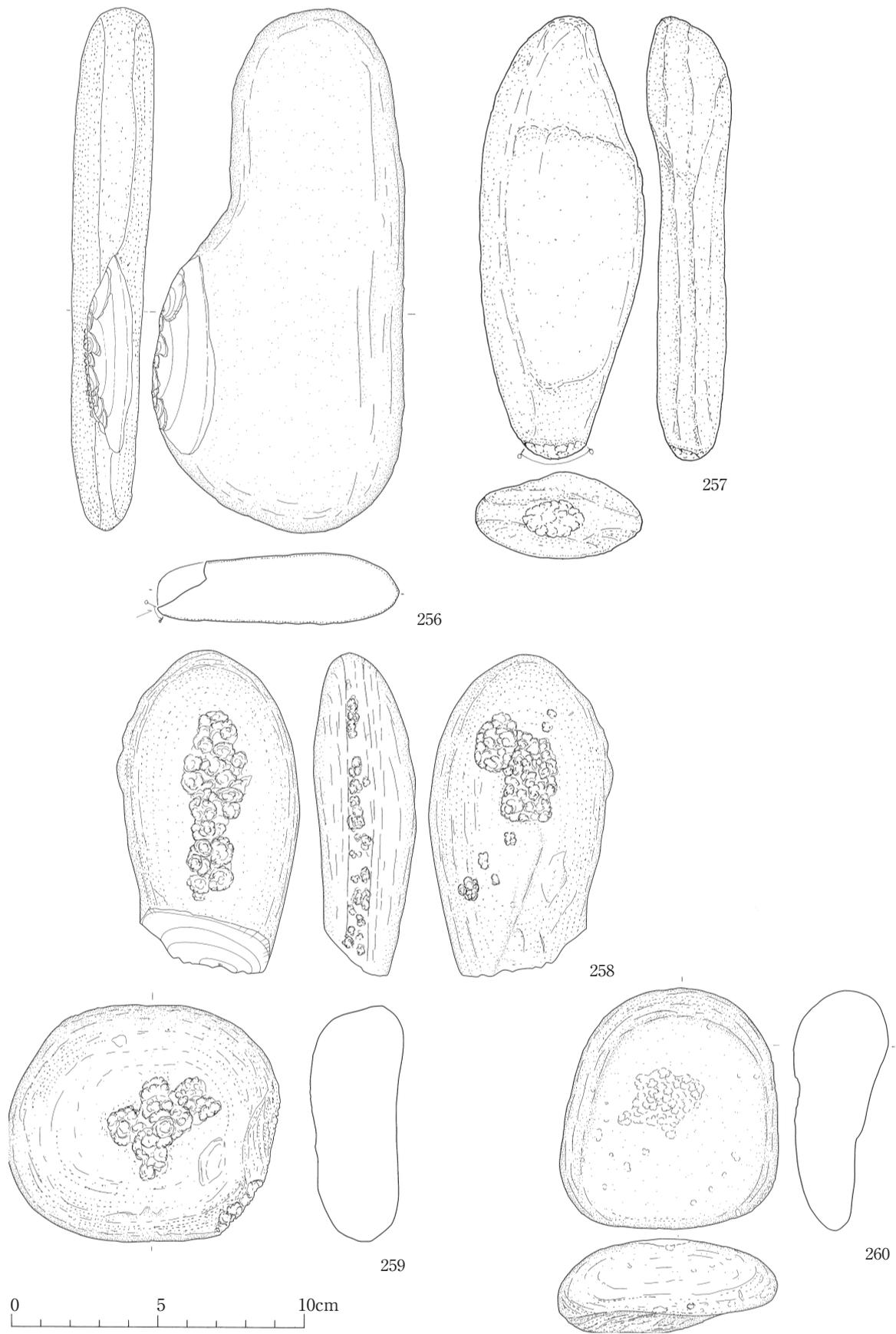
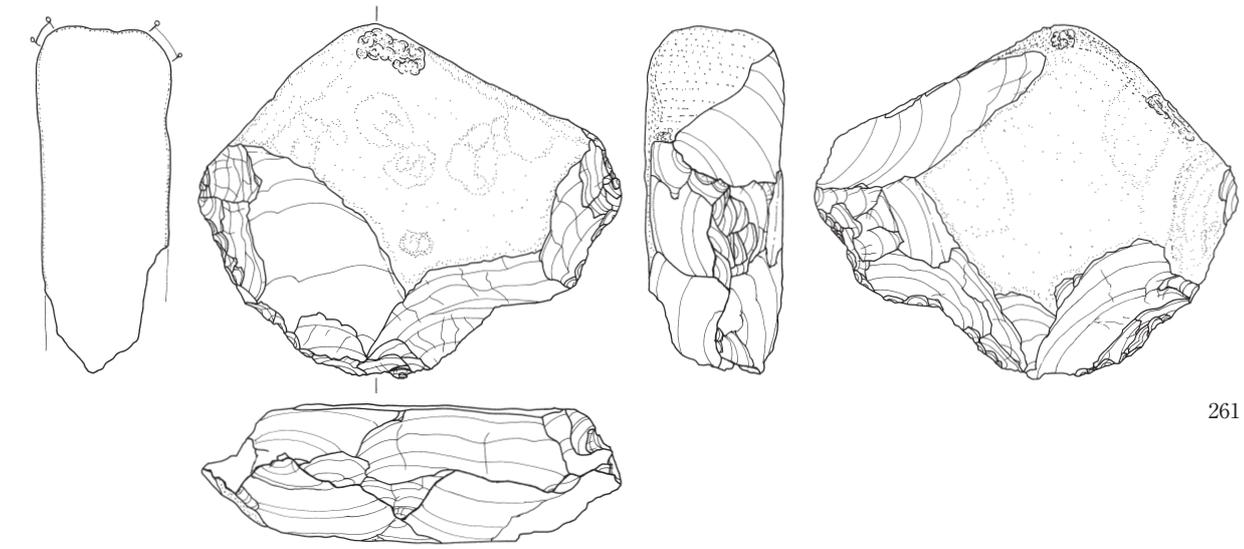
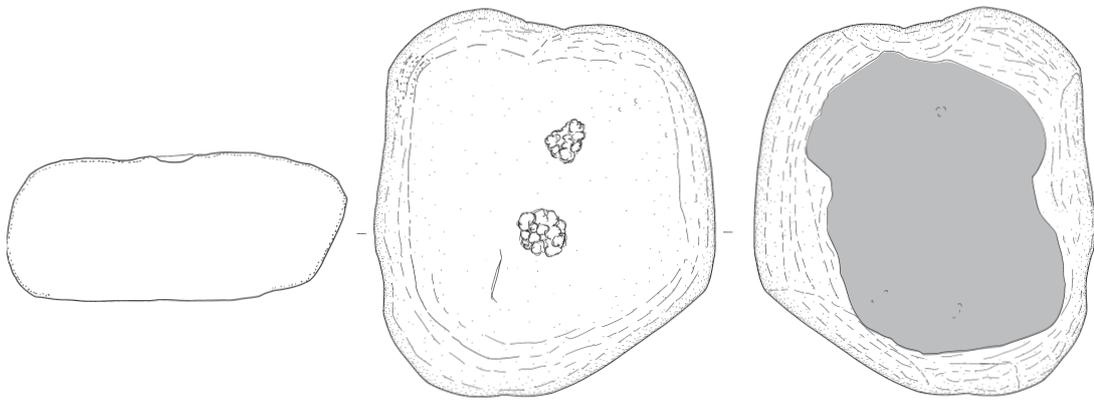


图 125 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区6層出土石器 (S = 1/2)

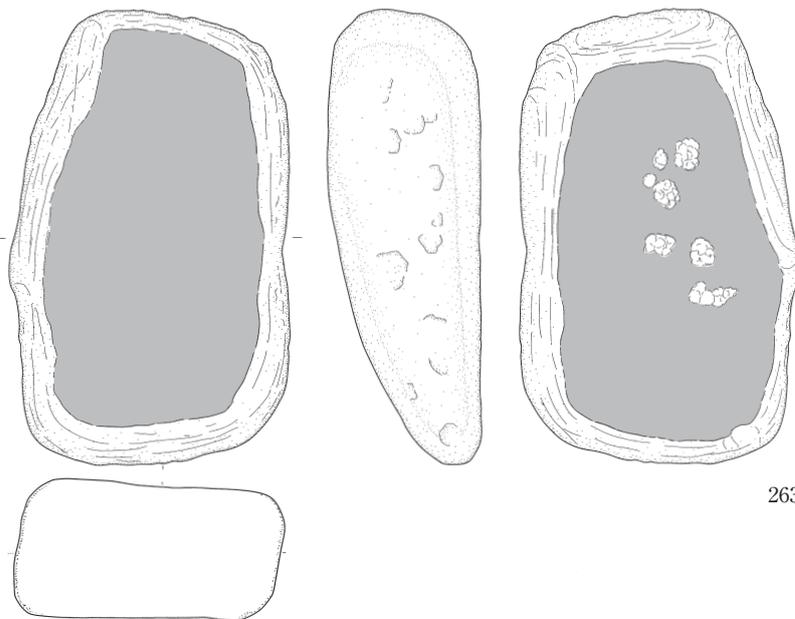


261



262

■ 摩耗



263

0 5 10cm

图 126 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区6層出土石器 (S = 1/2)

来する剥離痕や潰れ痕がある。240はやや厚い楕円形の石を用い、表面側に楔状・アバタ状の凹部と打痕、裏面側に楔状の凹部がある。241はやや厚い楕円形の石を用いる。表面側にはアバタ状の打痕・円錐形凹部が不規則に広がり、裏面側にも並列する円錐状の凹部がある。端部は敲石としての敲打に由来する剥離痕がある。特に下端は礫器状に加工か。裏面は摩滅。242はやや厚い隅丸三角の石を用い、表面に1個の円錐状凹部がある。243はやや厚い楕円形の石を用い、表面にアバタ状の打痕、両端・両側に敲打痕と剥離痕。244はやや厚い楕円形の石を用い、表面側に楔状凹部・アバタ状打痕と、裏面側に円錐状凹部・アバタ状打痕がある。敲石に由来する打痕が裏面の右側面と表面下端に剥離痕と敲打痕がある。245・246・247はやや厚く細長い石を用い、表面側(245)若しくは(246)にアバタ状の打痕・小円錐形凹部がある。それらは規則的(246)、あるいは不規則(245・246)に広がり、その受けによるめり込みが裏面側に生じる部位がある(245)。この他246には下端に敲打痕と小剥離痕がある。表面側が摩滅する。248は扁平で細長の石を用い、表裏両面に2個ずつ楔状・円錐状凹部がある。249は扁平で細長の石を用い、表面に2個の円錐状凹部がある。250はやや厚く細長い石で、表裏両面に敲打の受けによるアバタ状の打痕。251は扁平で細長の石を用い、表裏両面に3個・1個単位の円錐状凹部が並列する。252は扁平で楕円形の石を用い、表面に敲打の受けによるアバタ状の打痕と摩滅、その圧力で裏面にめりこみ痕が生じている。敲石として表面側下端に打痕と剥離痕、右側面に打痕がある。253・254・255は平面形は逆水滴形。下端に打痕や剥離痕、253・255は上端に打痕や剥離痕。256・257は包丁形で左側(256)や細長い石の端部(257)に打痕と剥離痕がある。258はやや厚く細長い石。表裏両面に敲打の受けによるアバタ状打痕と右側面に敲石としての打痕と、端部に敲打による折れがある。259・260はやや厚い楕円形の石で、表面に敲打の受けによるアバタ状の打痕がある。261は両刃の礫器である。上端の角部に敲打によるアバタ状の打痕がある。262は扁平な多角形の石で、表面にアバタ状打痕が2ヶ所、裏面はやや摩滅する。263は長方形の厚い石で両面に摩滅痕がある。裏面には数箇所アバタ状打痕がある。

**その他** その他、C区・C拡張区から出土した石器には石斧2点と敲石1点がある。いずれも当初は線刻を施した緑色岩系の棒状礫を転用したもので、別章で春成秀爾が詳細に報告している。

#### (5) 9層出土

ここで報告するのは2次調査における1、4トレンチC区やその他のC区である。2次調査においても9層を区分しており、褐色土層・黄褐色(粘)土・第3黄色土等を記載したラベルが遺物袋に添付されていた。調査の際に作成されたC区Bセクションの9層をみると、IX-1黄褐色土層・IX-2黒色バンド・(IX-3なし)・IX-4黄褐色粘土層・IX-5黒色バンド・IX-6褐色粘土とあるが、ラベルに記載された褐色土がIX-2・IX-5・IX-6のどれなのか、また黄褐色土と黄褐色粘土の区分が遺物取り上げ時に厳密に定義・区分されていたかどうかが明確でない。したがって2次調査におけるC区9層の遺物は一括して提示報告し、調査時のラベル記載の層位情報については一覧表に記した。

**有茎尖頭器**(図127-264~266, 図128-268~270, 図129-273・274) 上半の開きの角度や調整技法から基部が破損するが、有茎尖頭器に含めた例は8点ある。これらはほぼ押圧剥離によって製作されていると推定される。細身の例(266・269・274)と幅広い例(264・265・268・270・273)に区分

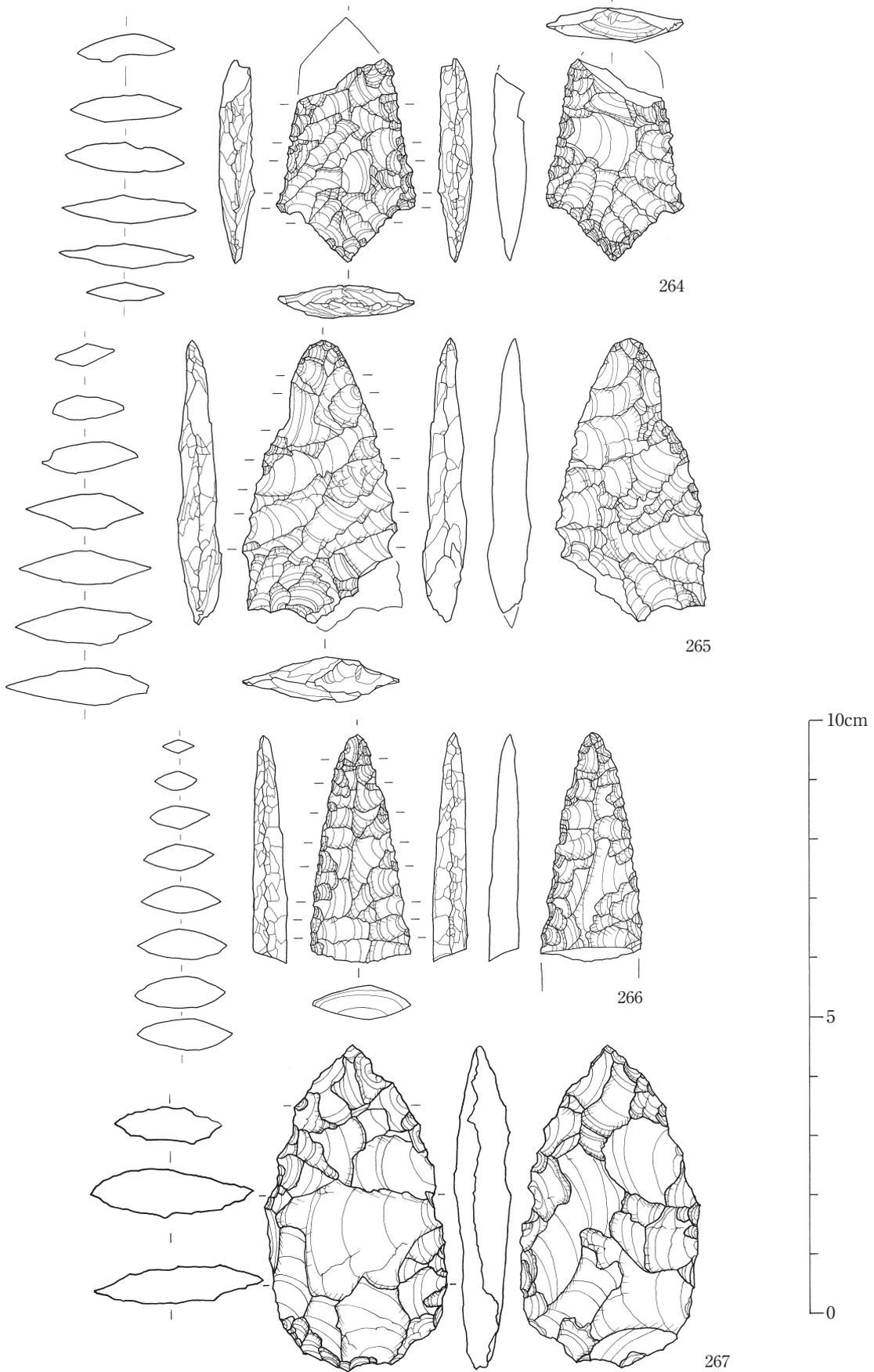


図 127 上黒岩遺跡2次調査C区4トレンチ9層出土石器 (S = 1/1)

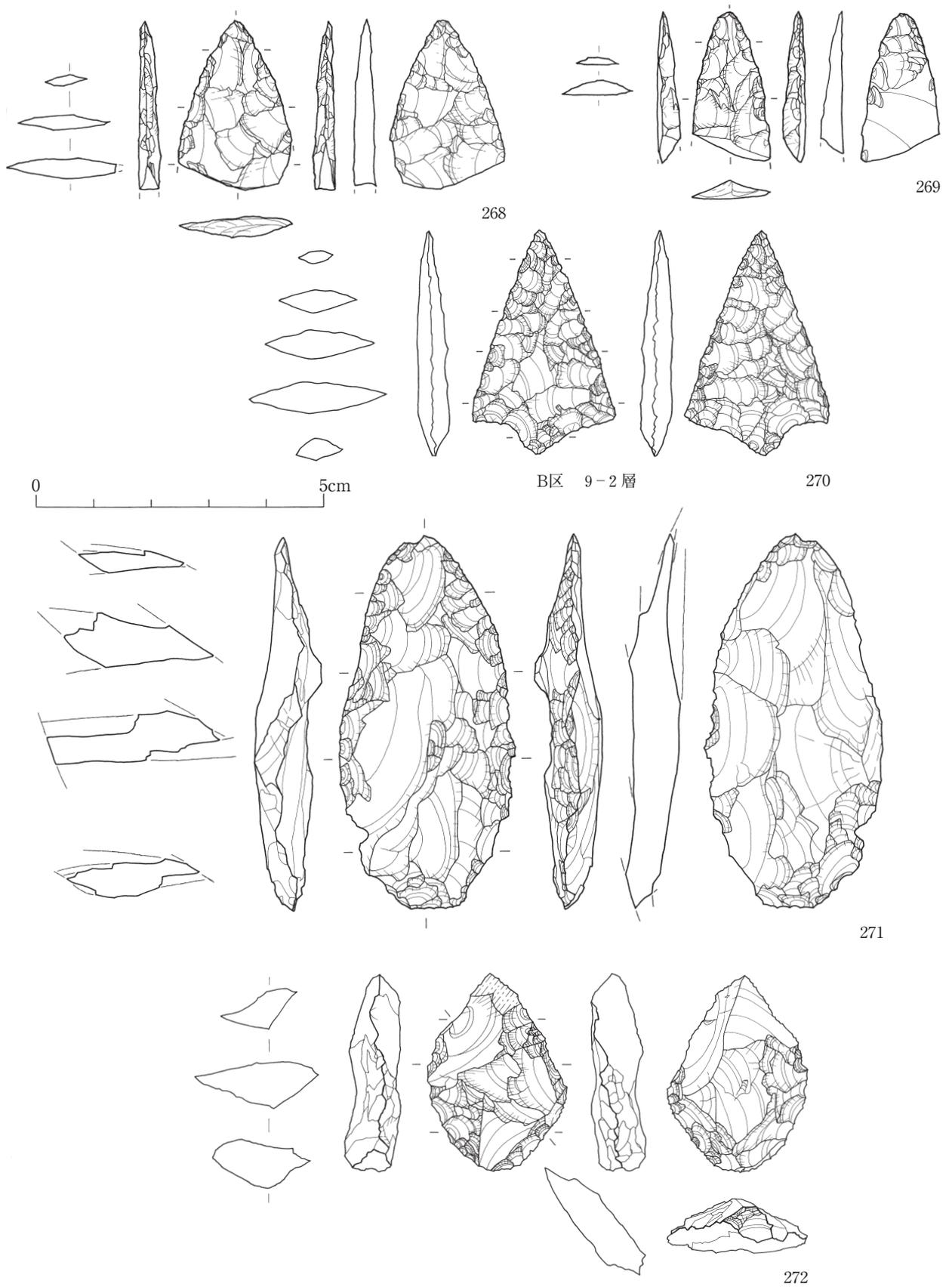


図128 上黒岩遺跡2次調査C区4トレンチ9層出土石器 (S=1/1)

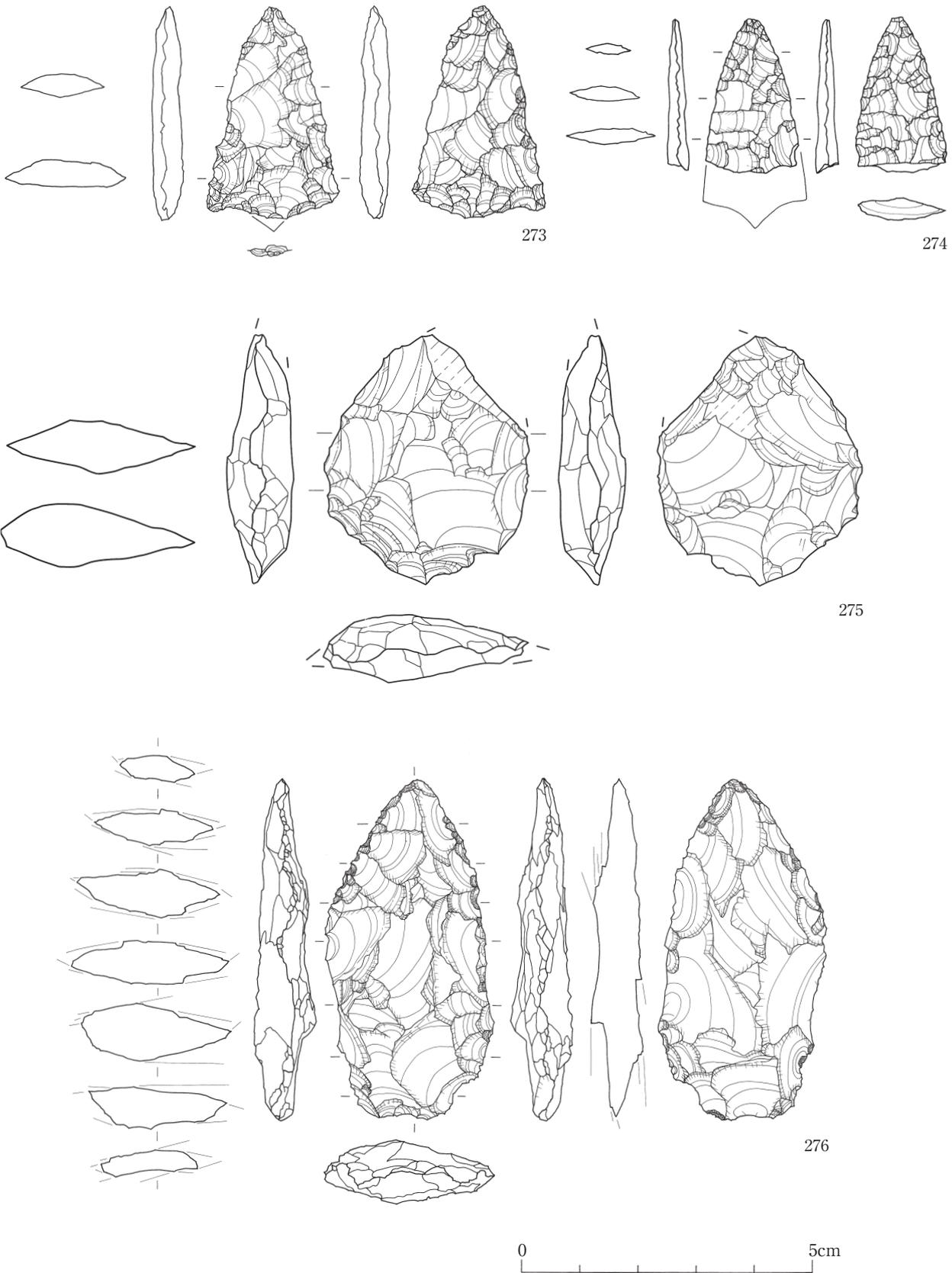


图 129 上黒岩遺跡2次調査C区1トレンチ9層出土石器 (S = 1/1)

できる。また幅広い例は先端部直下に肩部を有する例と(264・273)、それ以外の例(265・268・270)に区分できる。肩を持たない例には、縁が僅かに張る例と(265・268)、直線的な例がある(270)。細身の例は基部を欠いており(266・269)、あるいは槍先形尖頭器の可能性もある。茎部の残存した例は幅広で茎部長の短い逆二等辺三角形であり、茎部を欠いた例も同様と推定される。石材は硅質頁岩が2例(264・273)、チャートが4例(265・268・270・274)、赤色硅質岩が1例、サヌカイト(香川県か)が1例(266)、からなる。チャートと硅質頁岩は区分が難しいが、大半が硅酸分の多い同系統の石を利用していったことになる。264は両側縁からの押圧剥離で、肩部を有する。265は斜状平行剥離的な調整である。先端部は丸く、再加工か。266は相対する側縁からの平行押圧剥離が連続する。基部側が折れる。268は不定形の押圧剥離痕である。縁の側面観は直線的である。269は表面側に主として不定形の押圧剥離痕がある。細身の形態で。あるいは槍先形尖頭器の破損品の可能性もある。側面の縁は直線的である。270は平行押圧剥離痕が観察されるが、形状が乱れている。先端から刃部は直線的に縁が裾広がる。273は不定形の押圧剥離痕で、一部「ソフトハンマー」による剥離痕を残し、肩部が有る。274は相対する側縁からの平行押圧剥離。細身で整った剥離が連続。基部側が折れる。

**有茎尖頭器の未成品**(図127-267, 図128-271, 図129-275・276) 4点あり、形態構成は水滴形の例(267・276)、木葉形の例(271)、短い水滴形の例(275)と様々で、いずれもソフトハンマーの打撃による調整加工か。石材利用は頁岩?が1例(267)、赤色硅質岩が1例(271)、チャートが1例(275)、無斑晶質安山岩が1例である。267は先端部を意識して加工を集中か。271は先端部に押圧剥離。ステップが多い。275は茎部を意識した作り出しが窺える。遠位が斜行するように節理で破損している。276の先端部に一部押圧剥離。

**石鏃の未成品**(図128-272) 石材はチャートで形態は先端が鋭く、他は隅丸となる菱形である。加工は押圧剥離によるが、断面が歪で凸レンズ状ではない。

**石筥**(図130-277, 図131-278・279, 図132-280・281, 図133-282, 図187-459) 7点ある。石材は無斑晶質安山岩が4例(277・279・281・283)、赤色硅質岩が1例(278)、チャートが1例(280)、硅質頁岩1例(459)である。調整加工は概ねソフトハンマーによる直接打撃と推定され、完成例で上端があまり尖らないことと、下端を半円形に整形することに特徴がある。277・278は水滴形の形態であるが、下端に細部調整がなく、あるいは未成品か。細部調整は裏面の両側辺部や(277)、表面の上半部両側辺部に著しい(278)。硬い赤色硅質岩を用いているほか、節理等もあって綺麗な剥離面となっていない。278を横からみると周縁の上下が著しい。279は水滴形の形態であるが、下半側下半を欠く。表面に素材以前の剥離痕があり、右側辺に取り込むために裏面の細部調整は丁寧であり、周縁の上下も緩やか。280は上端付近の破片である。水滴形の形態であったと推定される。破損面はポジ面。281は上半の基部を欠く。ソフトハンマーで調整後、下端を半円形に細部調整する。282は近位端側を欠き、上端方向は丸い。459は平面形は撥状である。上端は円く、下端付近がやや斜行する半円形。縦長剥片が素材。

**石筥の未成品**(図134-283) 石材はサヌカイトか。表面に素材以前の面や裏面に素材剥片のポジ面を残し、これを取り込む形で表面側の左側縁・裏面側の左側縁を粗い調整加工を行なう。これによって概ね水滴形の平面形とするが、縁辺の出入りが多い。

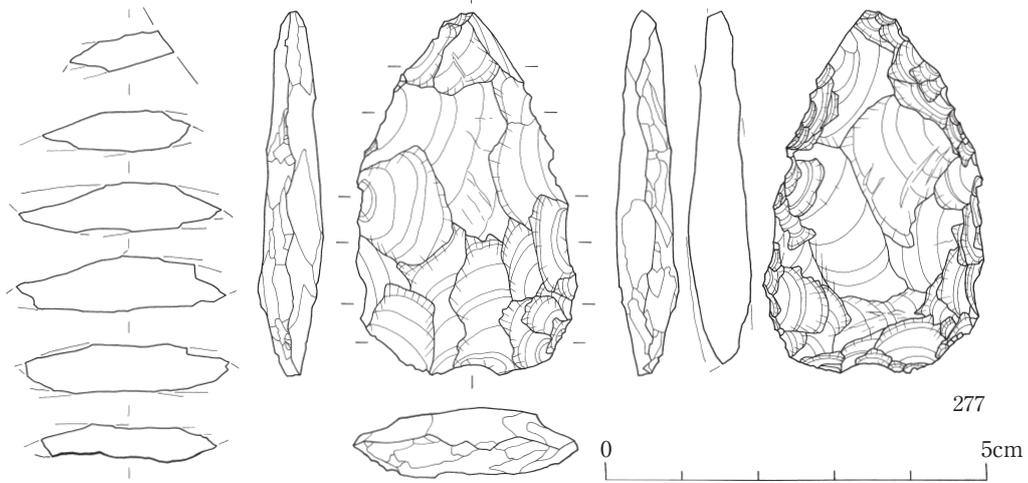


図 130 上黒岩遺跡2次調査C区1トレンチ9層出土石器 (S = 1/1)

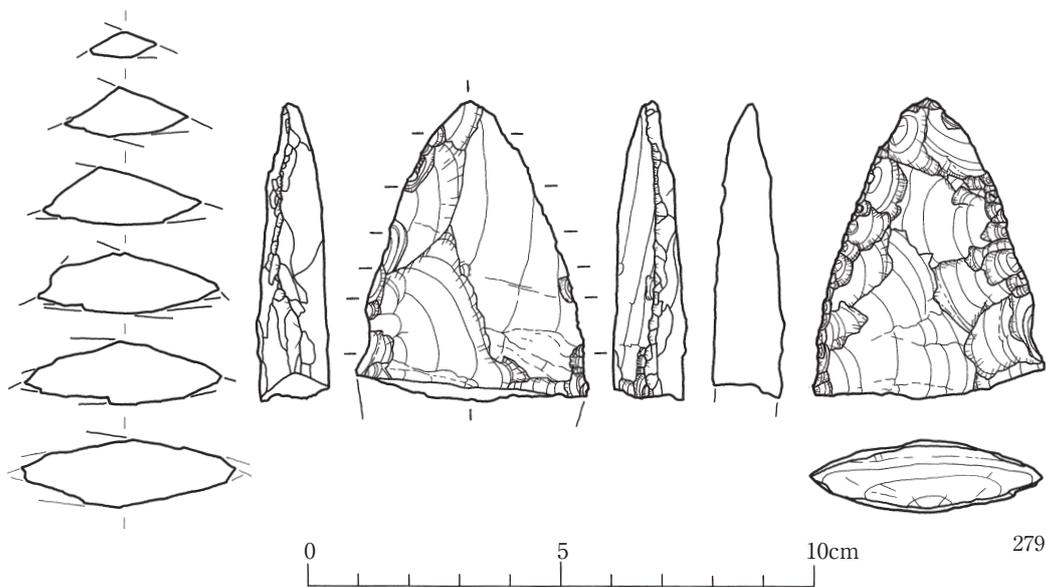
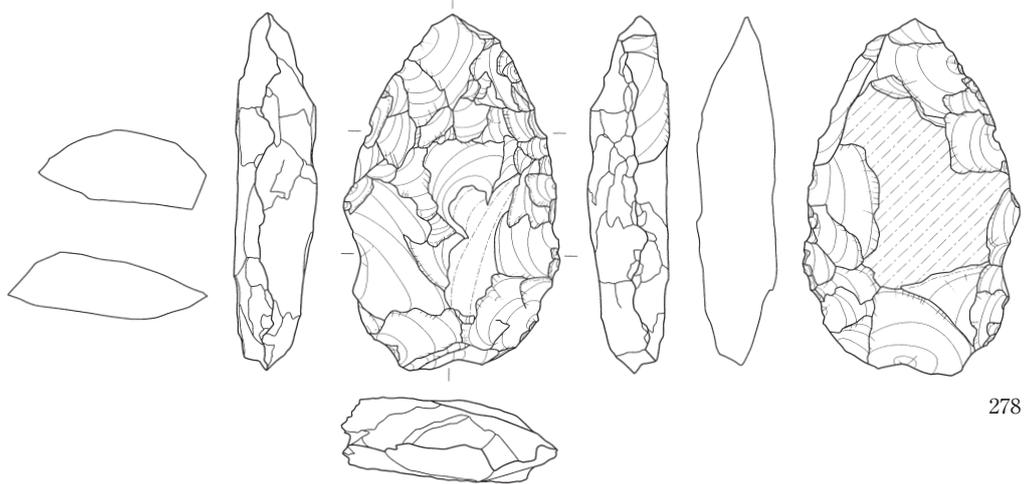


図 131 上黒岩遺跡2次調査C区1トレンチ9層出土石器 (S = 2/3)

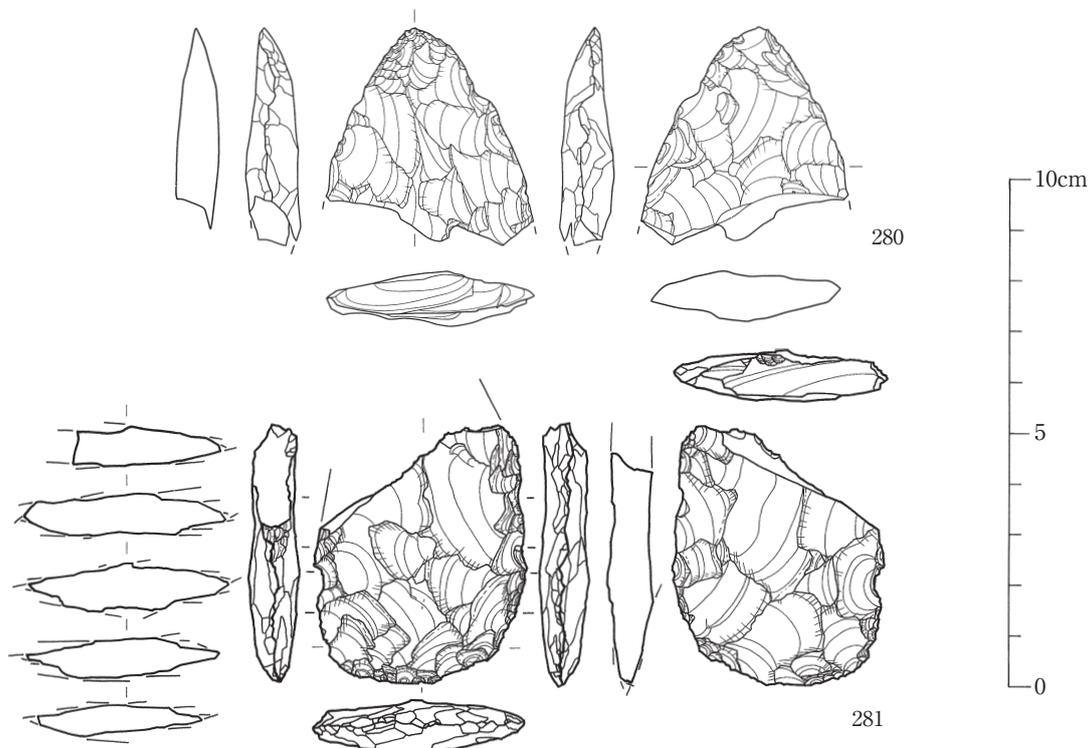


図132 上黒岩遺跡2次調査C区1トレンチ9層出土石器 (S = 2/3)

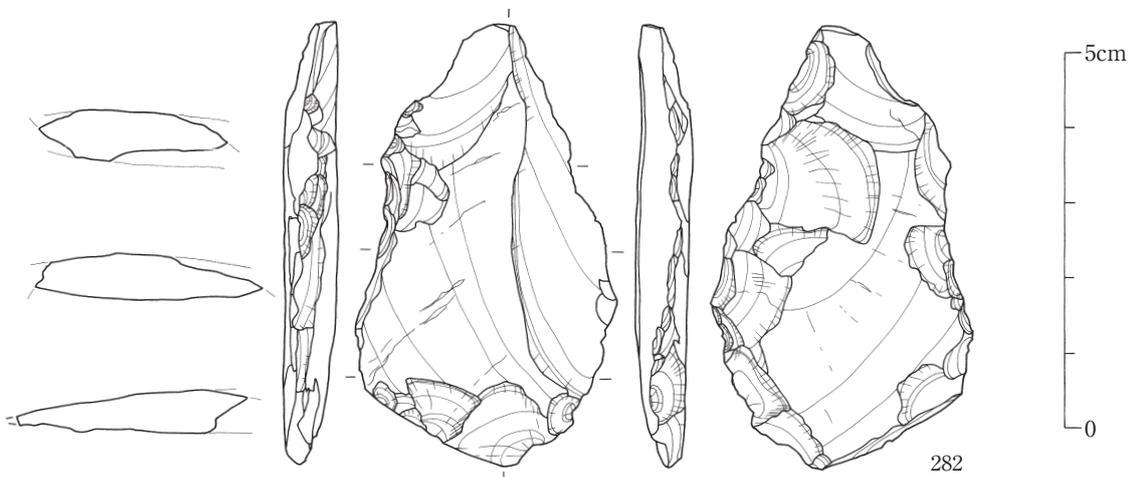


図133 上黒岩遺跡2次調査C区4トレンチ9層出土石器 (S = 1/1)

石斧 (図134-285, 図187-460) 石篋というより、厚みもあり本来の打製石斧に近い例が2点ある。285は小型で、通常大きさからかけ離れ、下端にやや細かい細部調整を施す。石材はサヌカイトである。460は下半が斜めに破損している。ハード、もしくはソフトハンマーの直接打撃による調整加工か。石材は不明である。

削器 (図134-284) 表裏に両面調整の剥離面があるが、破損したことで表面側の右側面に細部調整を施し削器の刃部としている。石材は赤色硅質岩である。

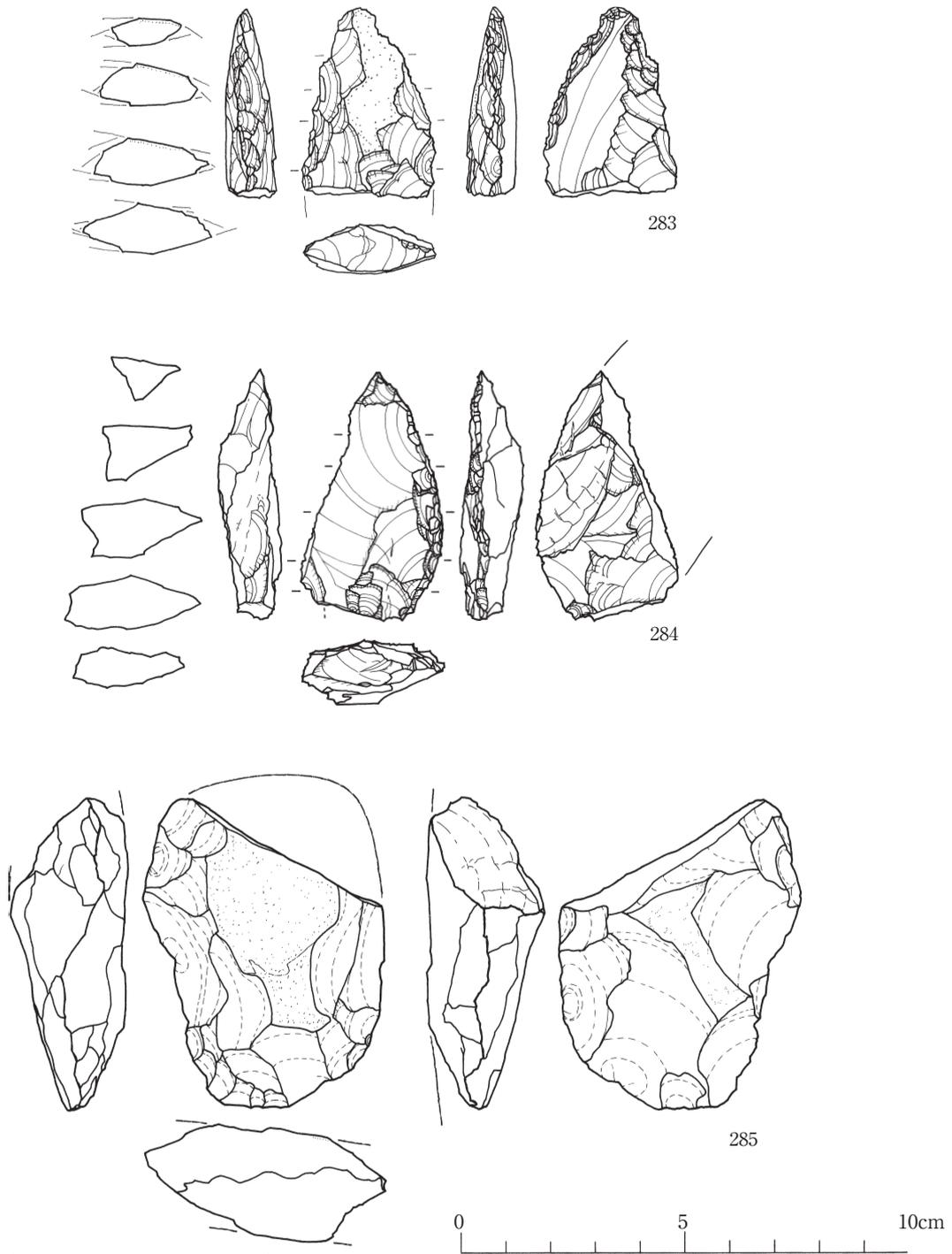


図 134 上黒岩遺跡 2 次調査 C 区 4 トレンチ 9 層出土石器 (S = 2 / 3)

#### (6) 7層出土（4次調査）

ここで報告するのは7層から出土した石器である。2次・3次調査C区・D区付近においては7層から遺物は出土していない。しかし第4次調査ではC区の「断面整備」ということでC区東南隅部の1.5m×1mが調査されている。ここは位置的にB区に近く、B区では遺物が出土する7層が認識されているが、2・3次調査における7層が礫層であることから両層は全く異なる層相である。そこでC区東南隅部がどこなのか正確には判らないが、C区の東側は保存地区なので1トレンチC区を除くC区東南隅部か、1トレC区東半部のどちらかであろう。おそらく1トレB区に接する1トレC区が4次調査時にC区として調査された可能性は高い。有茎尖頭器2点、同未成品1点の他に削器が出土している。

**有茎尖頭器**（図135-287・288） いずれも調整加工は押圧剥離である。287は先端部と逆刺と茎部端を欠くが、茎部を除くと先端から両逆刺の復元される比率がほぼ同じ正三角形を成す。これに茎部幅0.65cm・復元茎部長0.43cmの茎部がついていたようである。石材が粗悪なチャートということもあって整った押圧剥離ではなく、大小様々である。288は推定全長3.2cm、幅約2.2cmの小型例であり、平面観は肩部がなく直線的。押圧剥離によるが大小様々である。石材は赤色硅質岩である。

**有茎尖頭器の未成品**（図135-289） 表面側の広い範囲と裏面上半右側にソフトハンマーの直接打撃による調整剥離が観察されるが、その他は概ね不定型の押圧剥離である。近位が「ノ」字状に斜行しており、この部分は急角度である。おそらく茎部作出調整加工の失敗等で執拗に補正を加えようとしたのであろう。石材は赤色硅質岩である。

#### (7) 9層出土（3次調査）

**有茎尖頭器**（図136-291） 先端部から裾拡がりに側縁が直線的に延びるが、逆刺付近で破損している。現状で約5.3cm・幅2.15cmの大きさを有するが、上黒岩遺跡の有茎尖頭器の中では数少ない大型例である。石材がサヌカイト系の石ということもあって押圧剥離痕に同一規模の面が多い。また押圧剥離は表裏両面とも、主軸を境界に左辺・右辺から近位方向の主軸へ斜めに向けた「V」字形斜状並行剥離を思わせる剥離痕である。

#### (8) 9層出土（4次調査）

**有茎尖頭器**（図135-290） 先端部から両側縁がやや張りながら裾が広がるように逆刺部に至り、幅が狭く基部長が著しく短い逆二等辺三角形の茎部となる。石材が粘りのある石質ということもあって綺麗な剥離といえるものでなく、押圧剥離が大小様々である。側縁の側面観は最大で0.15cm程度の波状をなす。横断面は凸レンズ状である。黄緑灰色の美しいチャートを石材としている。

#### (9) 9'層出土（3次調査）

ここで報告する石器は3次C区9'層出土のラベルが添付されていたが、具体的どの層に当たるのか不明。通常「'」をつける場合は同一層位を細分するときに暫定的につけるものである。

**石核**（図140-298・299） 298は表面に残った礫面から高さ約7.0cm、長さ10.5cm、幅3.6cm程度の大きさが推定され、角のとれた赤色硅質岩の直方体状角礫を用いている。本遺跡出土の赤色硅質岩の石核としては最大の例である。礫を横位にし、上端面に打面作出剥離を行なう。打面部を打撃し、側面部において剥離を行なった石核である。しかし剥離はせいぜい2、3であり、良好な

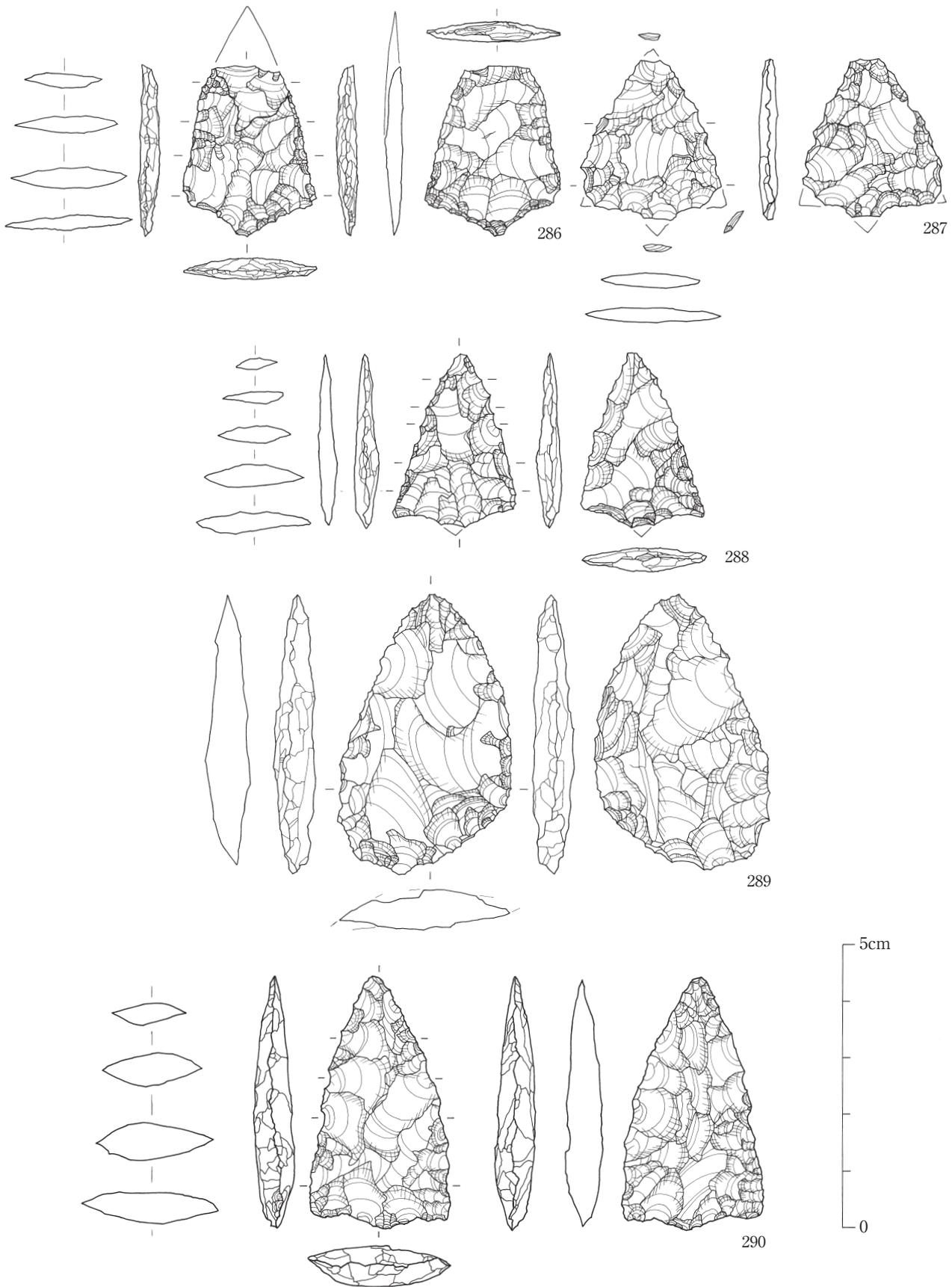


图 135 上黒岩遺跡 4 次調査 C 区 攪乱層・7 層・9 層出土石器 (S = 1/1)

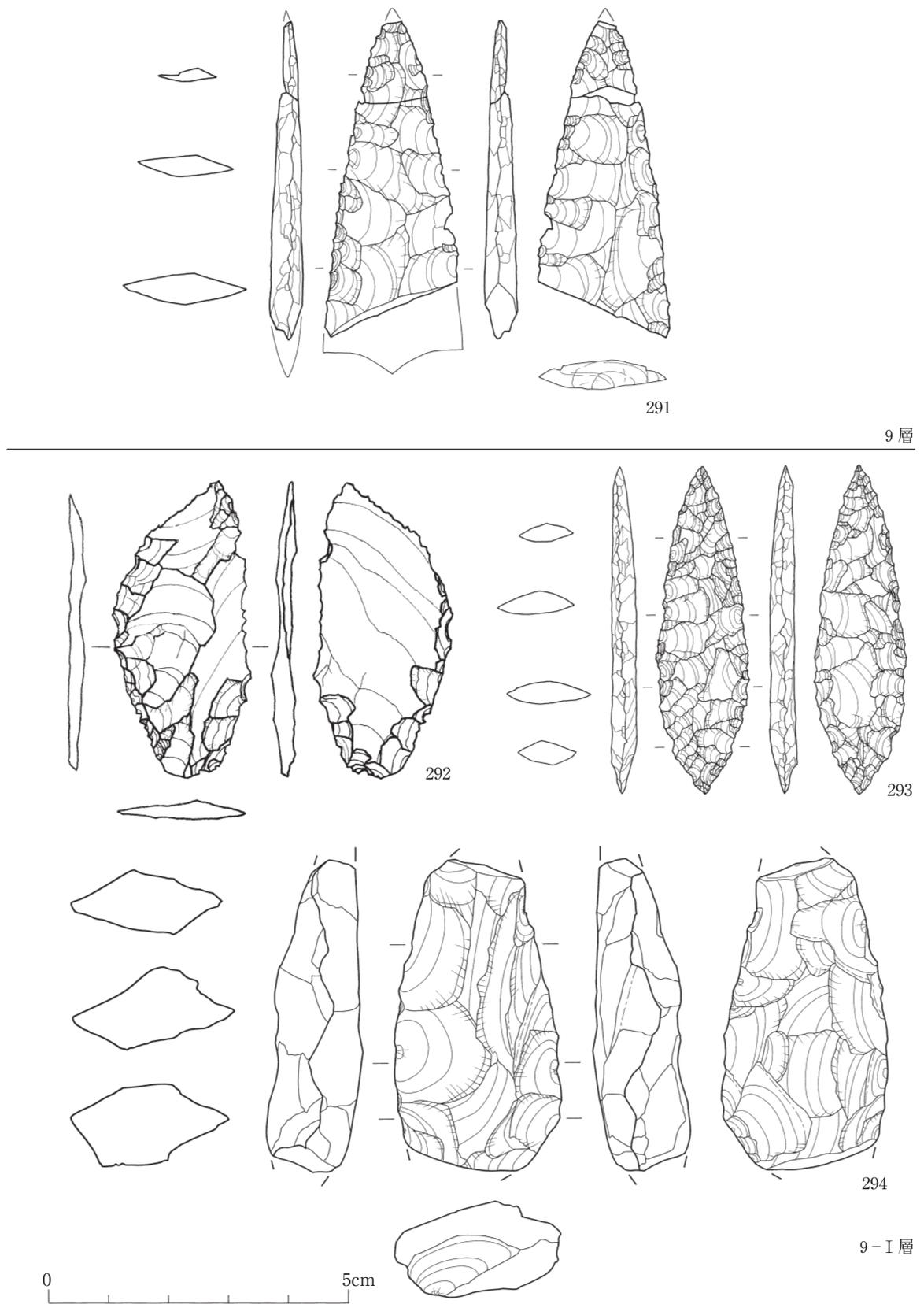


图 136 上黑岩遺跡3次調査C区9層・9-I層出土石器 (S=1/1)

剥片も取れていない。299は片側が幅広い直方体を呈する。現状で高さ約8.2cm前後、幅10.0cm前後、厚さ4.0cm前後あるが、上面・右面・下面に礫面を残すことから当初の礫段階からかけ離れた縮小を想定する必要はない。礫面を打面として表面側で最初の剥離作業を開始する。次に左側を剥離し、この面を打面として縦長剥片を裏面で剥離する。石材は無斑晶質安山岩である。

(10) 9-I層出土(3次調査)

**槍先形尖頭器**(図136-293) 柳葉形の槍先形尖頭器と呼ばれる典型例である。長さ5.53cm・幅1.55cm・厚さ0.43cmと小型で、中央よりやや下に最大幅がある。丁寧な押圧剥離で、やや斜状並行剥離気味かと思われるが、裏面は斜状並行がやや崩れた形。丁寧な剥離のためか縁の上下はほとんどない。石材はガラス質安山岩である。

**槍先形尖頭器未成品**(図136-292・294) 292は素材に縦長の不定形剥片を用いた特徴よく残す。細部調整は表面側で右辺先端付近・左側辺・右側辺の近位側、裏面は先端を除き表面側と同じ位置に施されている。それらの細部調整は器体平面の奥に達する面は少なく、縁部周辺に留まる。加工の中には斜状平行剥離を志向したと思われる剥離痕もある。細部調整の特徴のうち器体の両側辺中ほどから下端周辺への加工は下端に向けて結果的に幅を減ずるような加工であり、有茎尖頭器の逆刺部から茎部の形を作出する製作者の意図は無かったと窺われる。下端に向けて幅を減ずるような加工からすれば小型の槍先形尖頭器の製作が予定されていたと推定するが、実際には縦断面形が極めて薄く、未成品のままとなった理由である。石材は赤色硅質岩。294は石材はサヌカイトかと推定され、上端・下端を欠いているが、柳葉形の器形を作出する製作者の意図が窺える。その加工は粗く、そのため両側縁の側面観は大きく波状となっている。打面の厚さも厚かったと推定され、おそらくハードもしくはソフトハンマーによる直接打撃と推定される。

**石筥**(図137-295) 形態は強いて言えば隅丸長方形に近いが、右側を一部欠く。ソフトハンマーによる直接打撃と推定される。石筥としては最も小さい部類の一つであるが、上端付近の処理は先端部を意図させる加工ではない。むしろ下端付近に細部調整が観察されたので、ここが刃部と推定される。

**砥石・礫器**(図139-297) 平面は楕円形で断面が凸レンズ状である。表裏両面の平らな面の広範囲に強く深い線条痕が観察される。表面側では遠位から近位方向へ向けた条痕が延びるほか、これに斜行する条痕もある。不思議なのは、途中からカーブする条痕である。おそらく礫の周辺近くの傾斜と皺条の石理や節理の露出著しい部分ということもあるのだろうか。線条痕の運動方向からすれば、作業者は砥石の上端側で砥石に向き(作業者からみると下端側)、作業おこなったということになる。線条痕は強く深いので、石斧などを琢磨する砥石とはかなり趣が異なり、硬い石で擦ったと思われる。あるいは先を尖らせる骨角器製作に際し、このような線条痕が形成されるのだろうか。実験等を経ておらず、今後の課題である。なお上半側の表裏両面に線条痕を一部切るように連続する剥離痕がある。レイアウトの都合上縦断面を入れていないが、断面観は両刃である。礫器としての加工痕と推定され、刃部付近が敲打によって若干潰れている。この石器の重量は1,902gもあり、礫器・敲石として用いるに際してはこの重い重量に作業効果を期待したのだろう。石材は緑色片岩である。

**石核**(図138-296) 礫面残存部より長さ14cm前後、幅11cm前後、厚さ5.7cmの楕円形礫と想

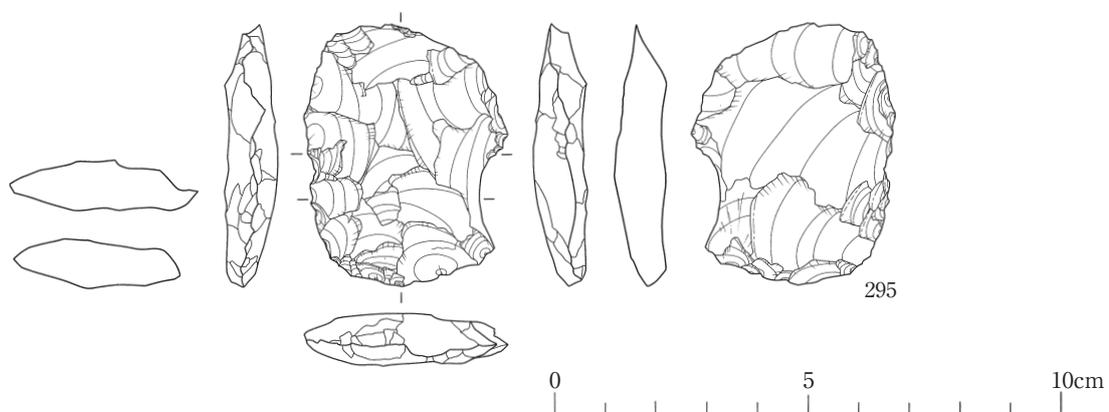


图 137 上黒岩遺跡3次調査C区9-I層出土石器 (S = 2/3)

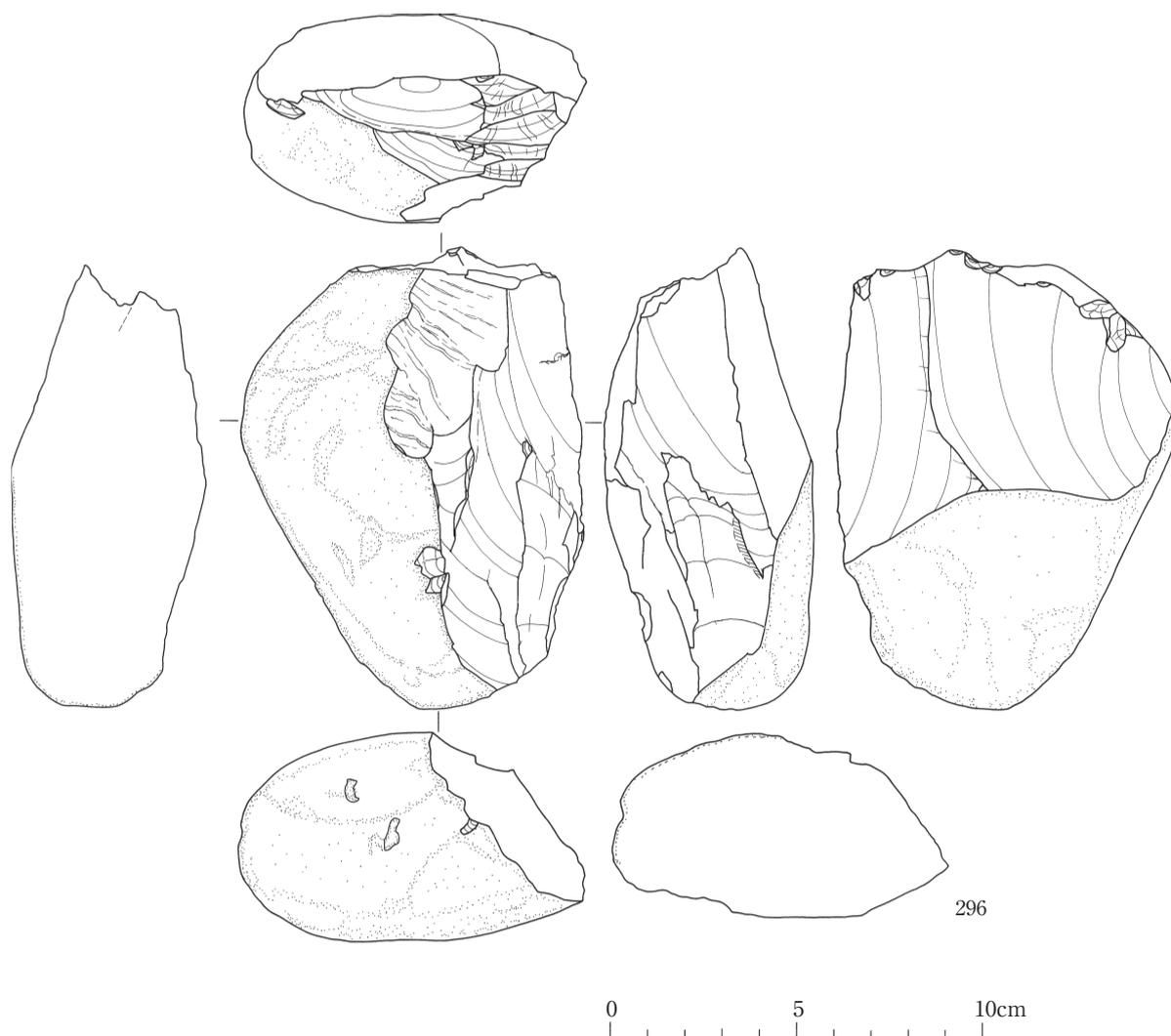
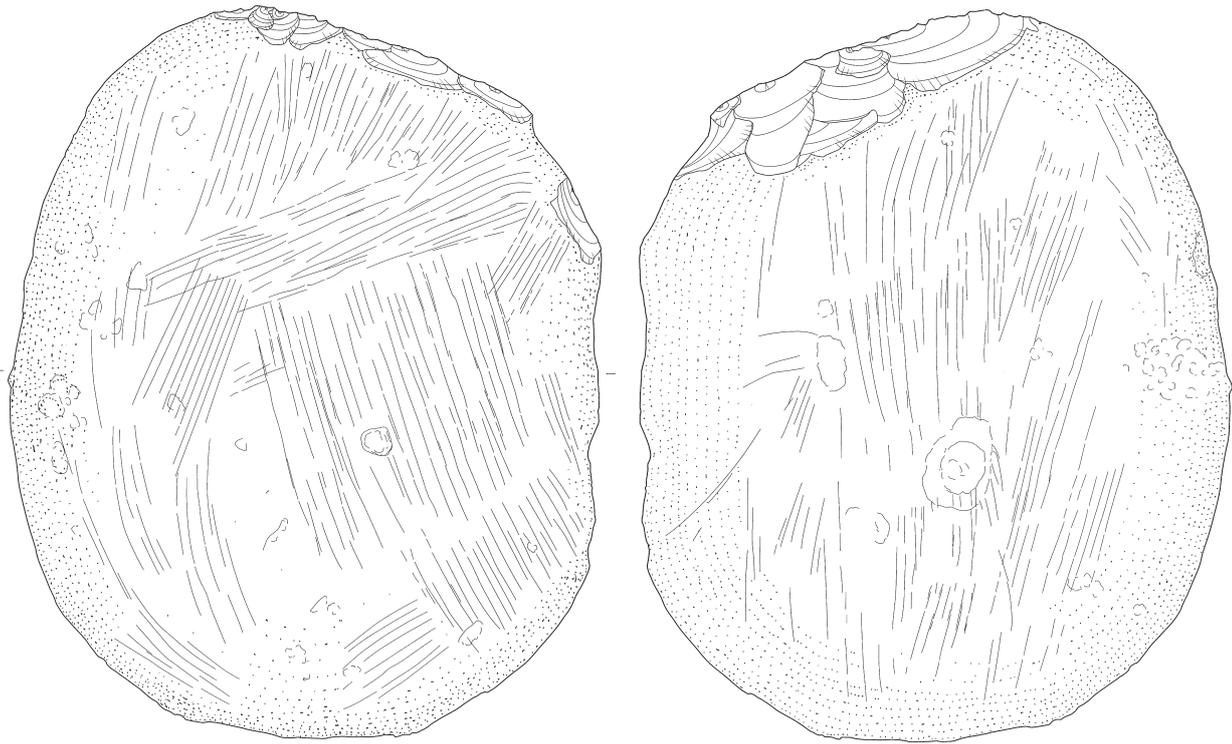


图 138 上黒岩遺跡3次調査C区9-I層出土石器 (S = 1/2)



297

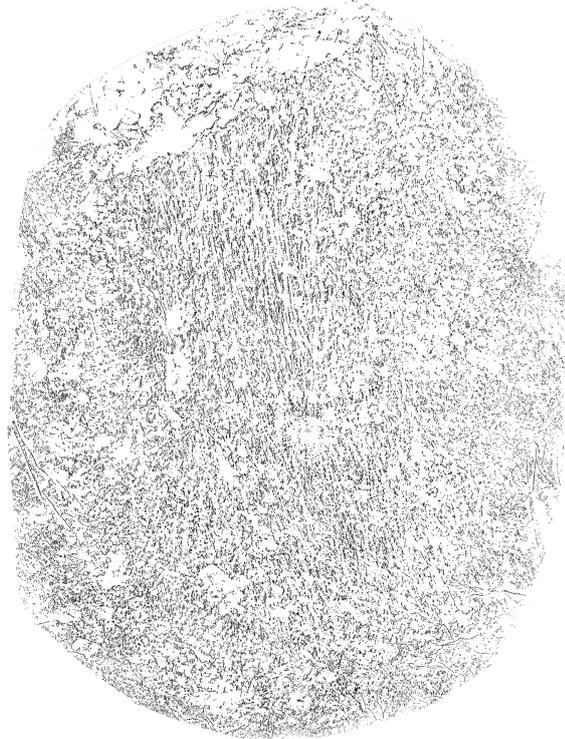
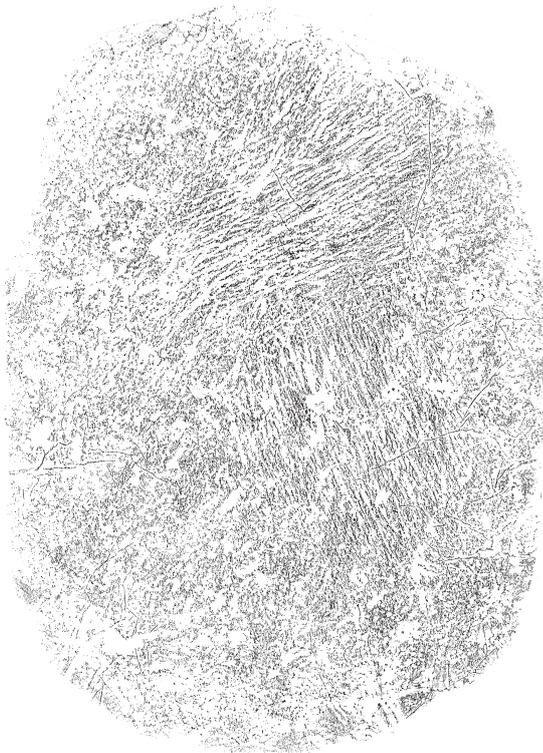
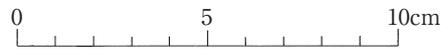
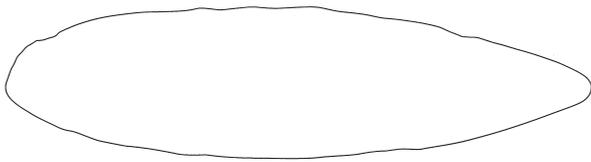


图 139 上黒岩遺跡3次調査C区9-I層出土石器 (S = 1/2)

定できる。表面側で右半部の上方から縦長剥離痕，裏面側で上半の両側方向からの幅広剥離痕が観察されるが，剥された剥片の多くは礫面の付いた例であろう。石材は無斑晶質安山岩である。

(11) 9Ⅱ層出土（3次調査）

**有茎尖頭器**（図141-300～304，図142-305～308） 9点確認している。石材は赤色硅質岩が7例（300～303・305・308・520），緻密質安山岩は1例（304），硬質砂岩1例（306），サヌカイト1例（307）である。いずれも押圧剥離による調整加工である。300は先端部から裾拡がりに側縁が直線的に延び，逆二等辺三角形の茎部が付く。押圧剥離は大小様々。先端と茎部を僅かに欠くが復元長3.6cm，幅2.3cmと小型である。301は先端部から側縁がやや張り，裾拡がりに延び，逆二等辺三角

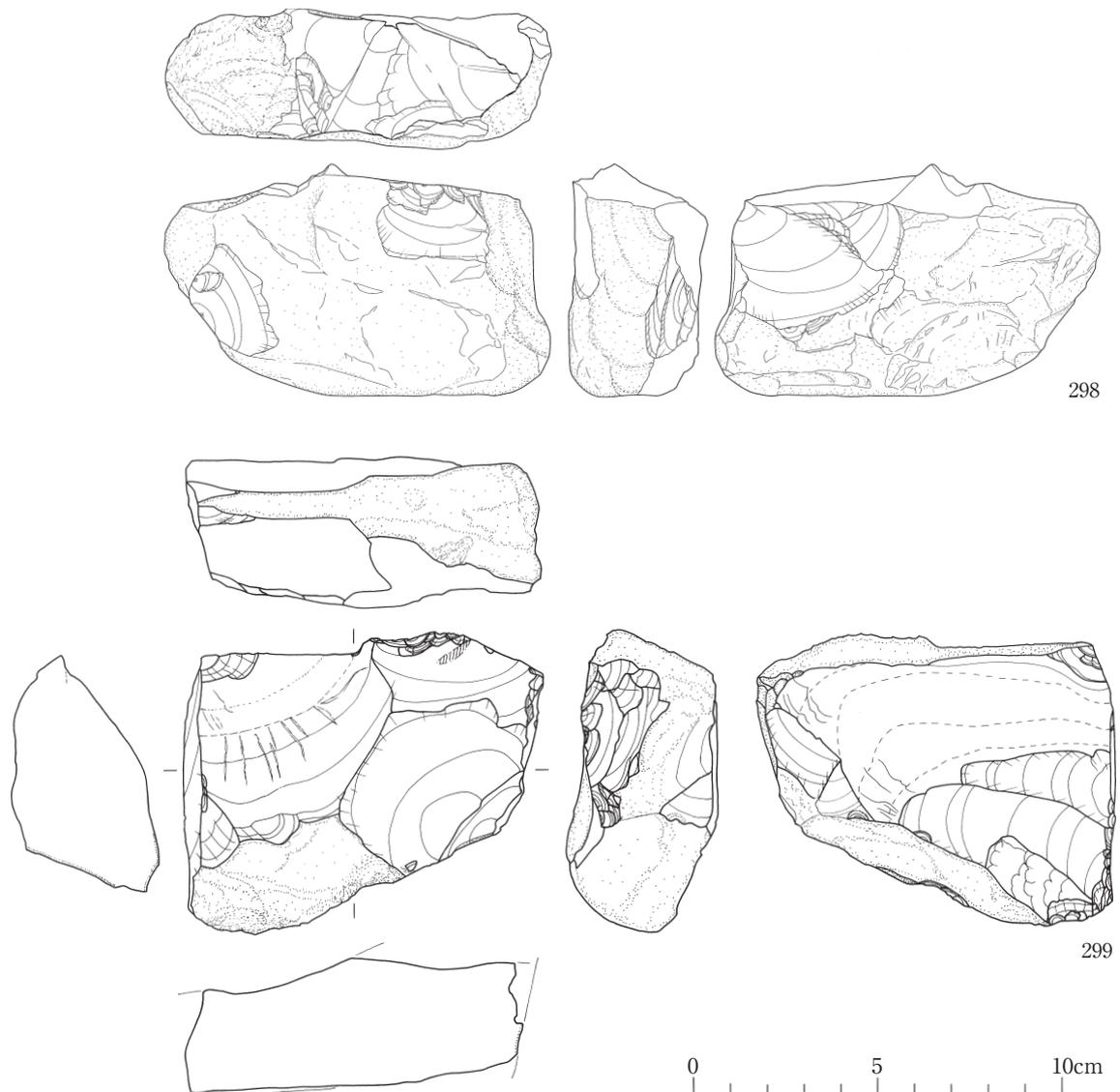


図140 上黒岩遺跡3次調査C区9-I層出土石器（S=1/2）

形の茎部が付く。押圧剥離は大小様々。先端と茎部を僅かに欠くが、復元長 3.6 cm、幅 2.3 cm と小型である。302 は先端部直下に肩部をもつ。押圧剥離は大小様々。逆刺を僅かに欠く。303 は上半部を破損。茎部を僅かに欠く。押圧剥離は大小様々。304 は復元長 4.35 cm・復元幅 2.25 cm とやや細長。やや斜状平行剥離風か。305 は上半部を破損。押圧剥離は大小様々。茎部長が著しく短い。306 は復元長 6.45 cm・復元幅 3.45 cm と大型である。先端部と右逆刺を僅かに欠く。押圧剥離は表面側で「V」字形の斜状平行剥離、裏面側で平行剥離となる。307 は下半を破損。押圧剥離は表面側で平行剥離であるが、裏面側で乱れる。308 は先端と近位側の下半を破損。押圧剥離は表面側で「V」字形の斜状並行剥離、裏面側は斜状平行剥離であるが、対向する剥離がみられない。520 は上半部を破損するが、肩部がある。押圧剥離は大小様々。茎部と身部底辺が弧状を成す。

**有茎尖頭器の未成品** (図 143-309~312, 図 144-313・314) 6 点確認している。石材は赤色硅質岩が 1 例 (314), 硅質頁岩 1 点 (310), チャート~硅質頁岩は 2 例 (311・312), 無斑晶質安山岩 1 例 (313), サヌカイト (外来系) 1 例 (309) である。いずれも押圧剥離による調整加工である。茎部を作り始めた段階の例が 3 例 (309~311), 水滴形の例が 2 例 (312・314), 水滴形から茎部を作り始めた段階の例が 1 例など (313), 各段階の未成品がある。309 は裏面側に「V」字形の斜状平行剥離がみられるが、表面側の押圧剥離には大小がある。茎部の作出が左右対称となっていない。310 は押圧剥離が粗く、平面形が鋸歯縁のままである。茎部も丸いままである。311 は素材段階の当初から右側縁部が切断面のある素材を用いており、表面側の左辺からの斜状平行剥離が切断面を切っている。切断面の処理をどのようにする予定であったのか興味ある部分である。表面側左辺から右斜め上方へ斜状平行剥離、その剥離面を打面として裏面の左辺部に細かい鱗状の押圧剥離を施す。茎部付近が破損したことによって放棄されたか。312 は水滴形の原型で、調整加工はソフトハンマーによる直接打撃か。313 は表裏両面とも大きな剥離はソフトハンマーによる直接打撃か。表面側の左側辺に細部調整が施される。逆刺・茎部はまだ不明瞭である。上半を破損している。314 は水滴形の原型で、調整加工はソフトハンマーによる直接打撃と上半を中心に押圧剥離を施す。近位端付近は調整が著しい。

**槍先形尖頭器** (図 144-315) 平面形は柳葉形で表裏両面とも薄い平坦な剥離である。両面の中央部付近に観察される大きな剥離痕はソフトハンマーによる直接打撃と考えられるが、周辺部は押圧剥離による貝殻状の剥離痕である。石材は推定金山産サヌカイトである。

**石篋** (図 145-316~319, 図 146-320~323, 図 147-324・325) 10 点確認している。石材はチャートが 1 例 (316), 推定金山産サヌカイトが 1 例 (317), 無斑晶質安山岩が 7 例 (318・319・321・322・323・324・325), 赤色硅質岩が 1 例 (320) である。基本的な調整加工はソフトハンマーによる直接打撃と考えられるが、細部調整に一部押圧剥離の可能性のある例が存在する。316 は平面形が方形に近いが、下端は半円形に整形した刃部である。本例は上端が礫面であることから「柳葉形尖頭器・木葉形尖頭器」である可能性がない事例の一つである。317 は緩やかな瓢箪形である。調整加工も後、特に上半部を細部調整によって幅を狭めるように舌状に形を整え、上端を円く収めている。表面側は縁に沿って細部調整がみられる。318 は水滴形である。本例も表面側の中央稜 (鑄にあたる部分) 付近を大きく除去するような大きな剥離が上下両端方向から観察される。下端は半円形に整形した刃部である。319 は上半部が斜めに破損しているが、本来は水滴形であろう。表裏とも周

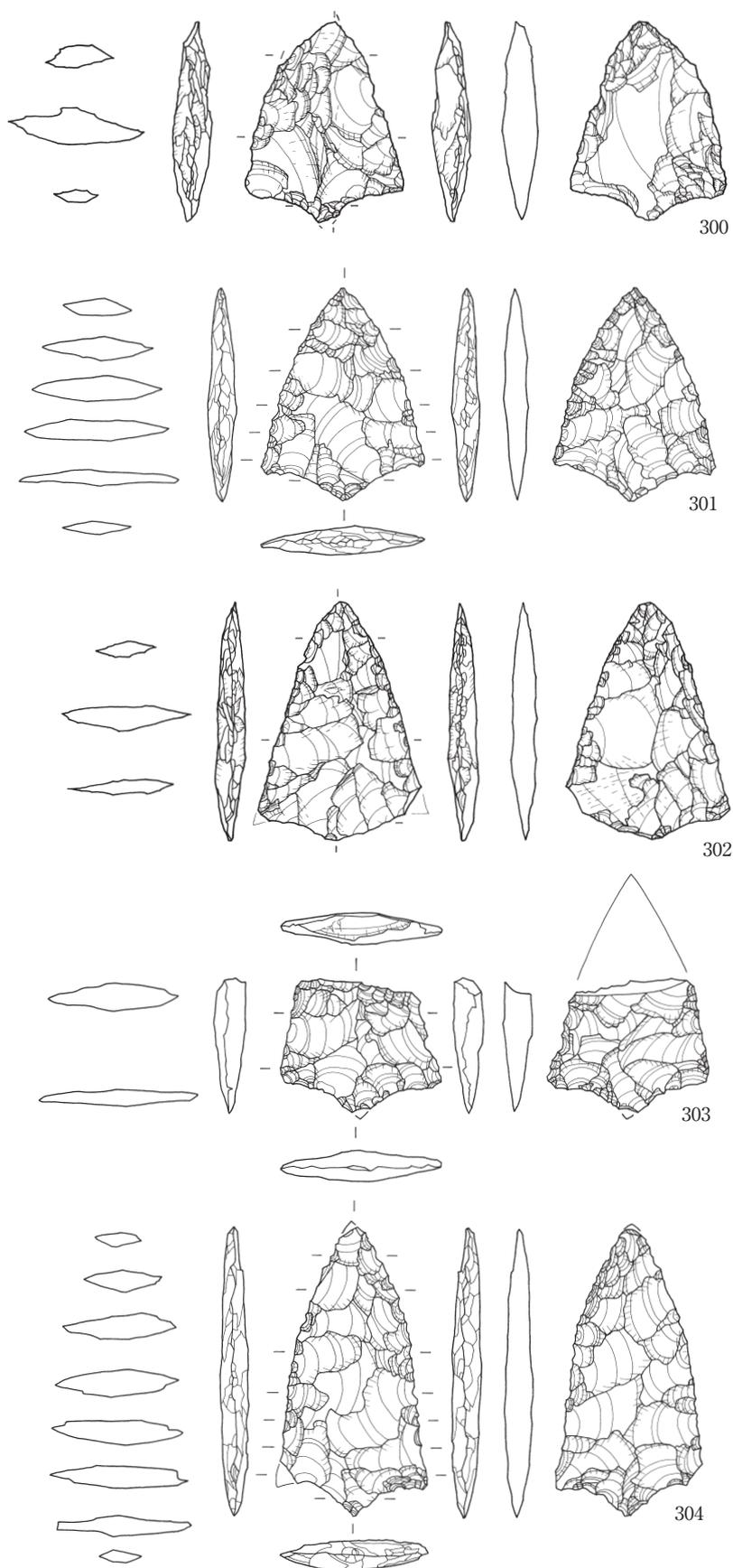


图 141 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-II 層出土石器 (S = 1/1)

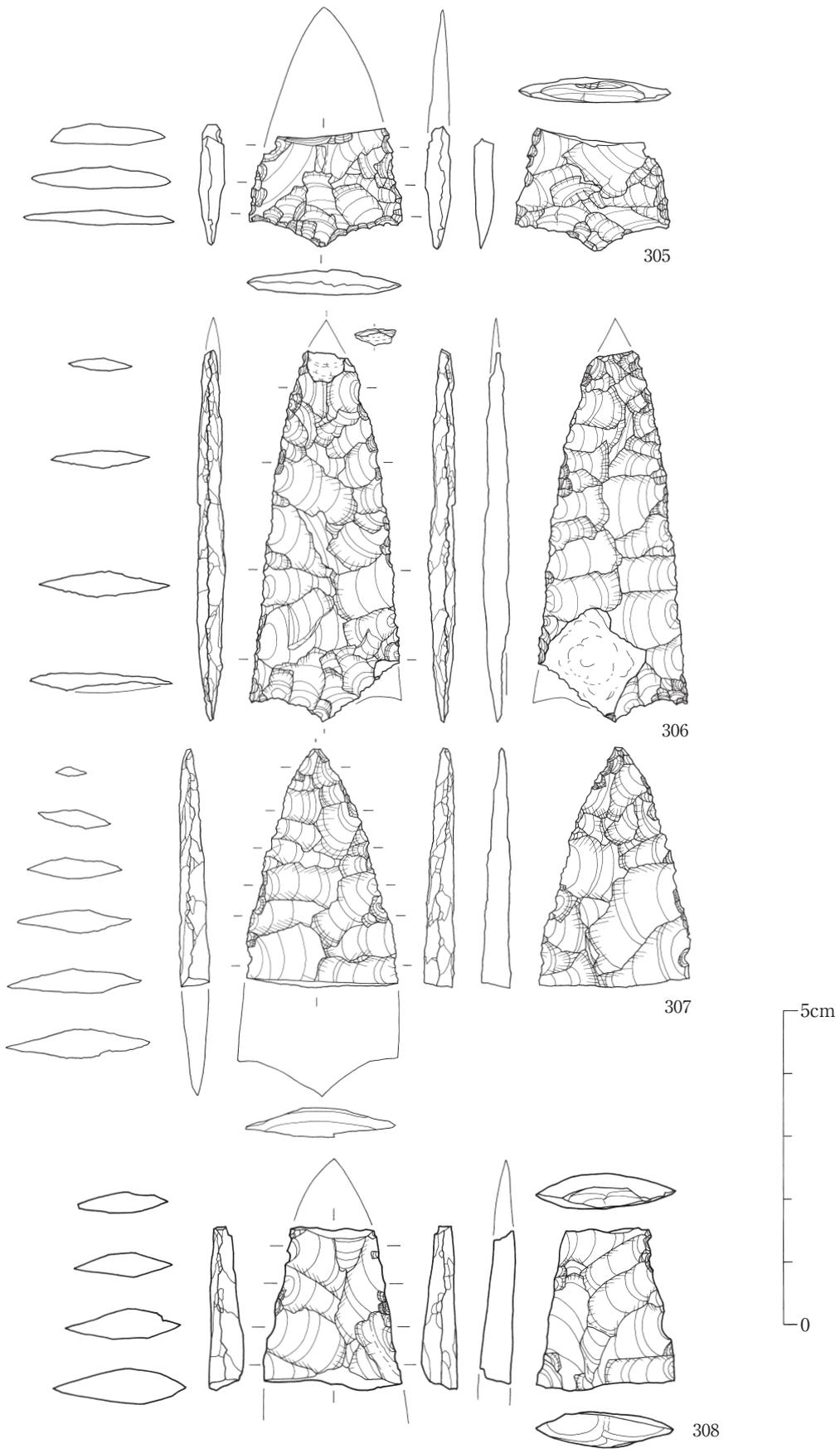


图 142 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-II 層出土石器 (S = 1/1)

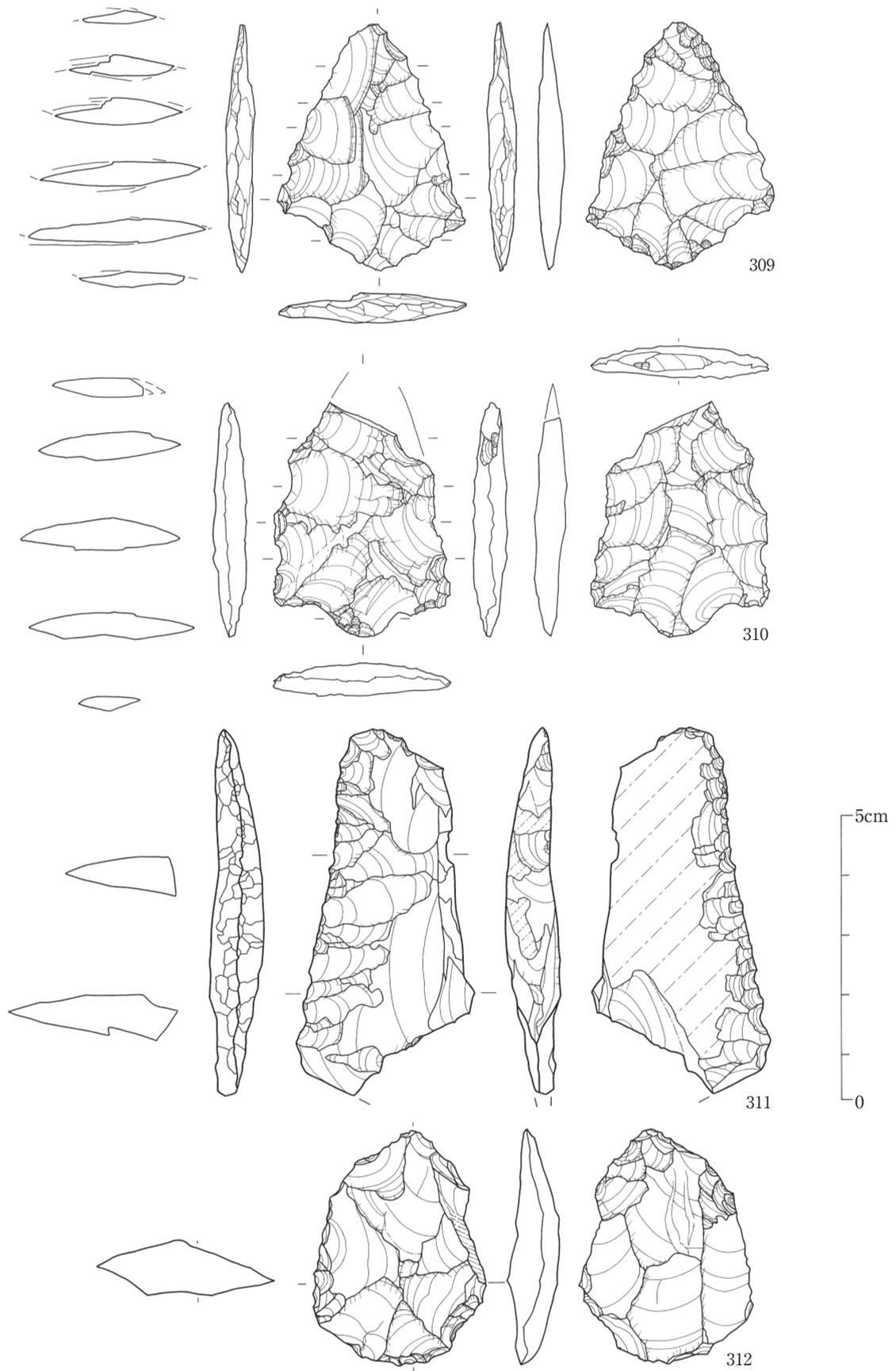


图 143 上黒岩遺跡3次調査C区9-II層出土石器 (S = 1/1)

辺と下端付近の細部調整は入念である。縁の側面観にも大きな上下はない。320は下端を半円形に加工した例の破片である。表裏とも下端付近の細部調整は入念である。321・322・323は3例とも上半を欠く。下端を半円形に整形。側縁の上下は緩い。324は下端で半円形部分が破損している。大きな平坦剥離調整の後、周辺部を細かい加工で整形している。平面形は水滴状というより撥状と言ふべきか。323は平面形は長楕円形である。横断面をみると左半分が厚く、これの除去・処理で

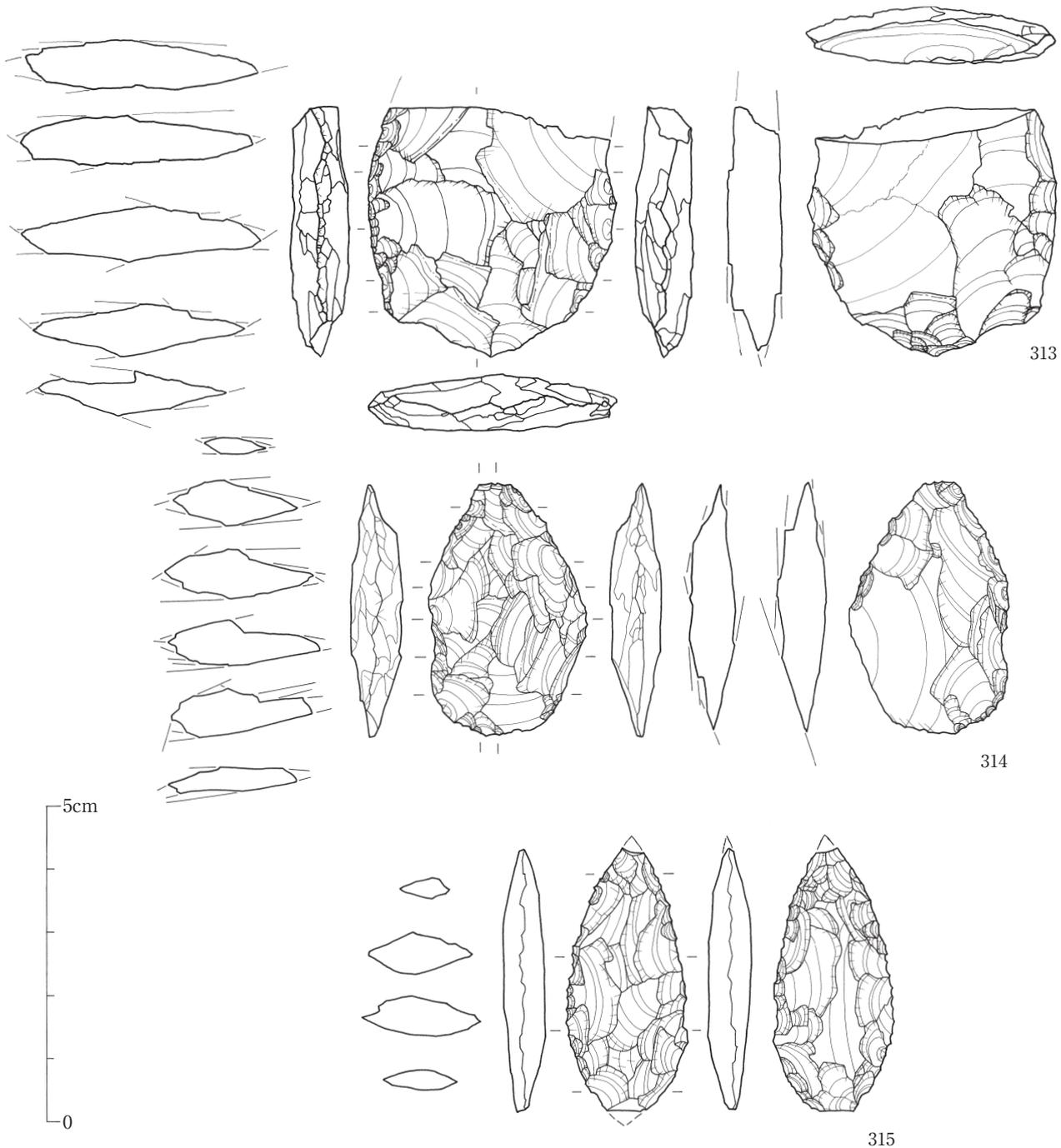


図144 上黒岩遺跡3次調査C区9-II層出土石器 (S=1/1)

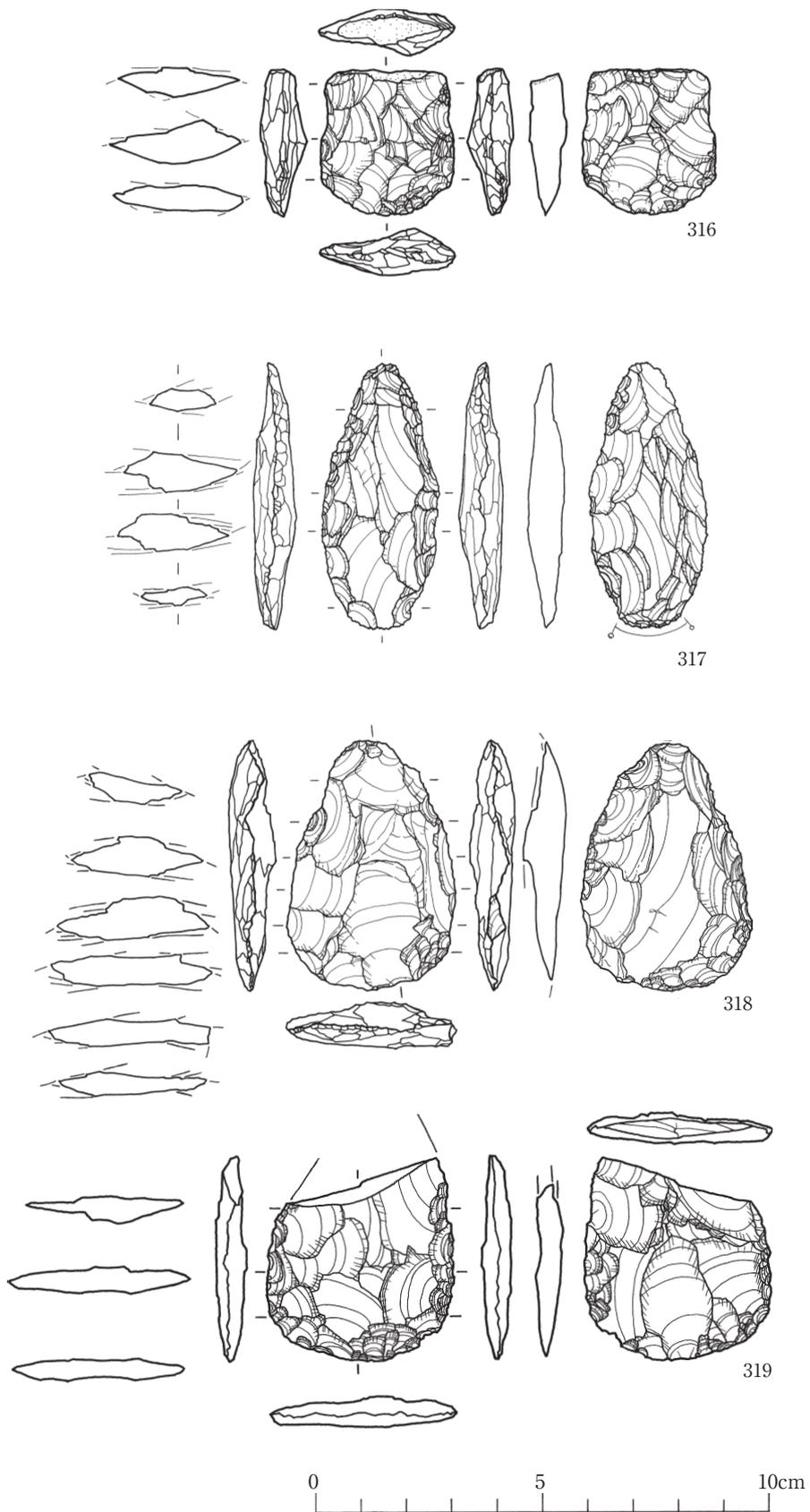


图 145 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-II 層出土石器 (S = 2/3)

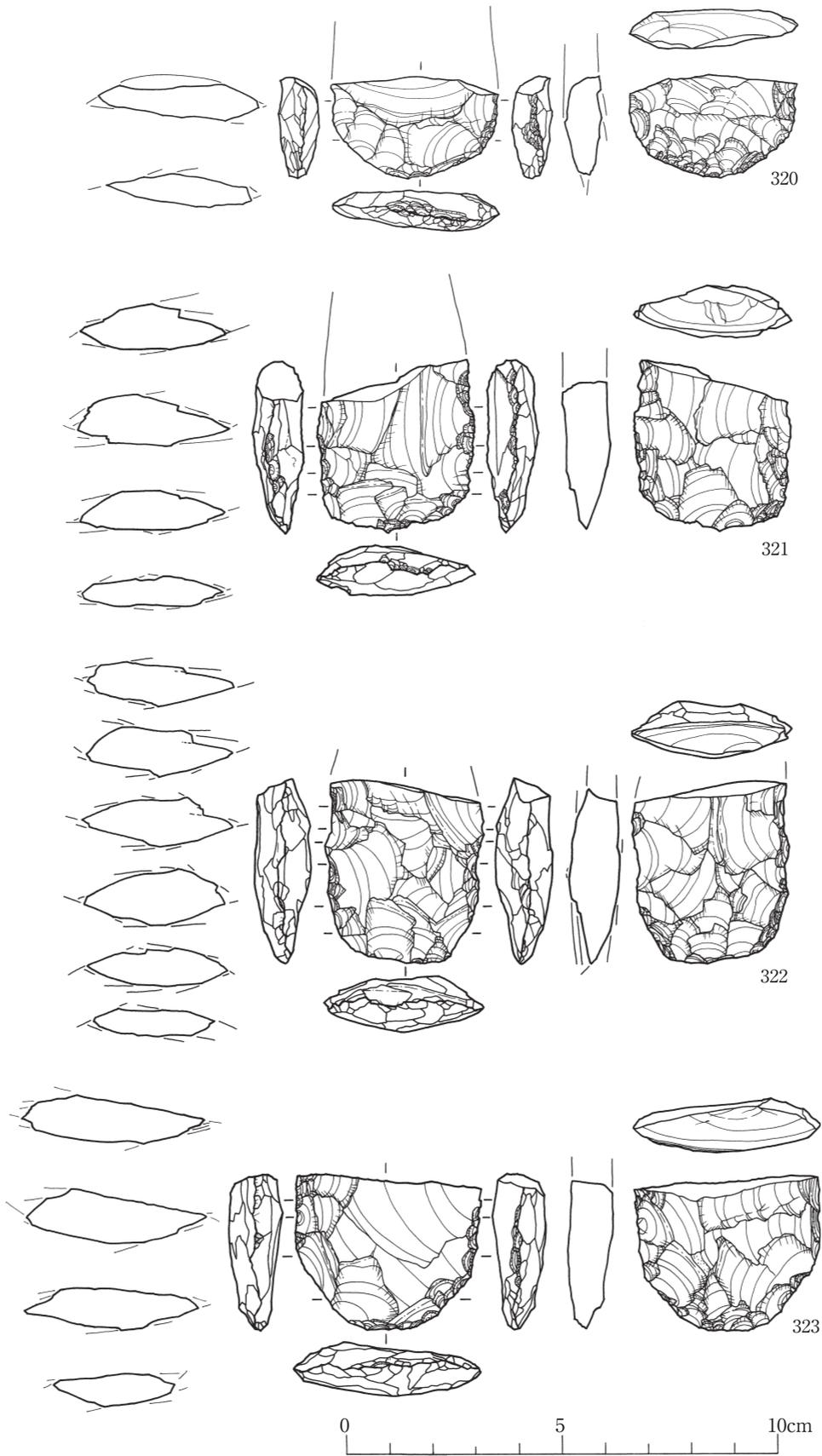


图 146 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-II 層出土石器 (S = 2/3)

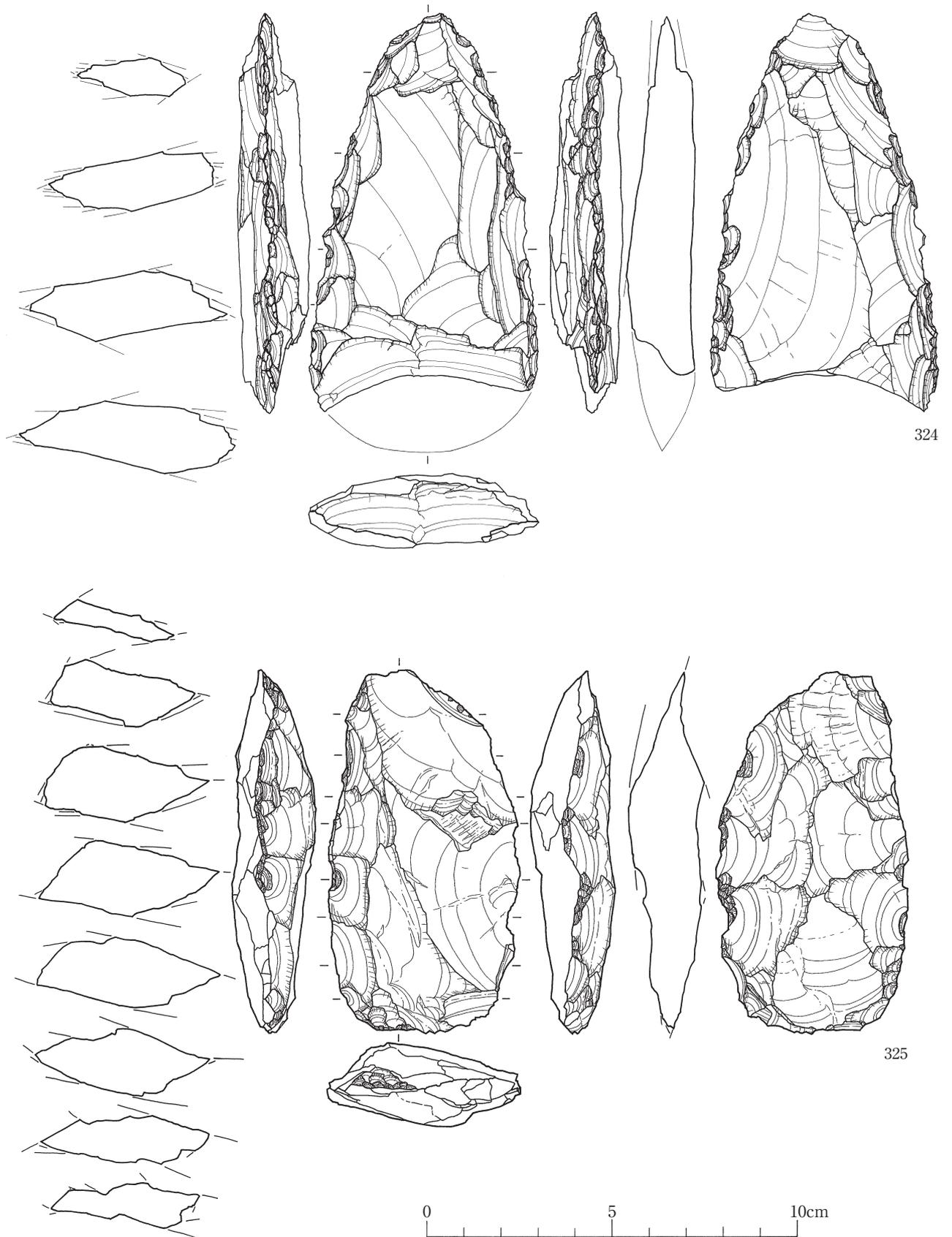


图 147 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-II 層出土石器 (S = 2/3)

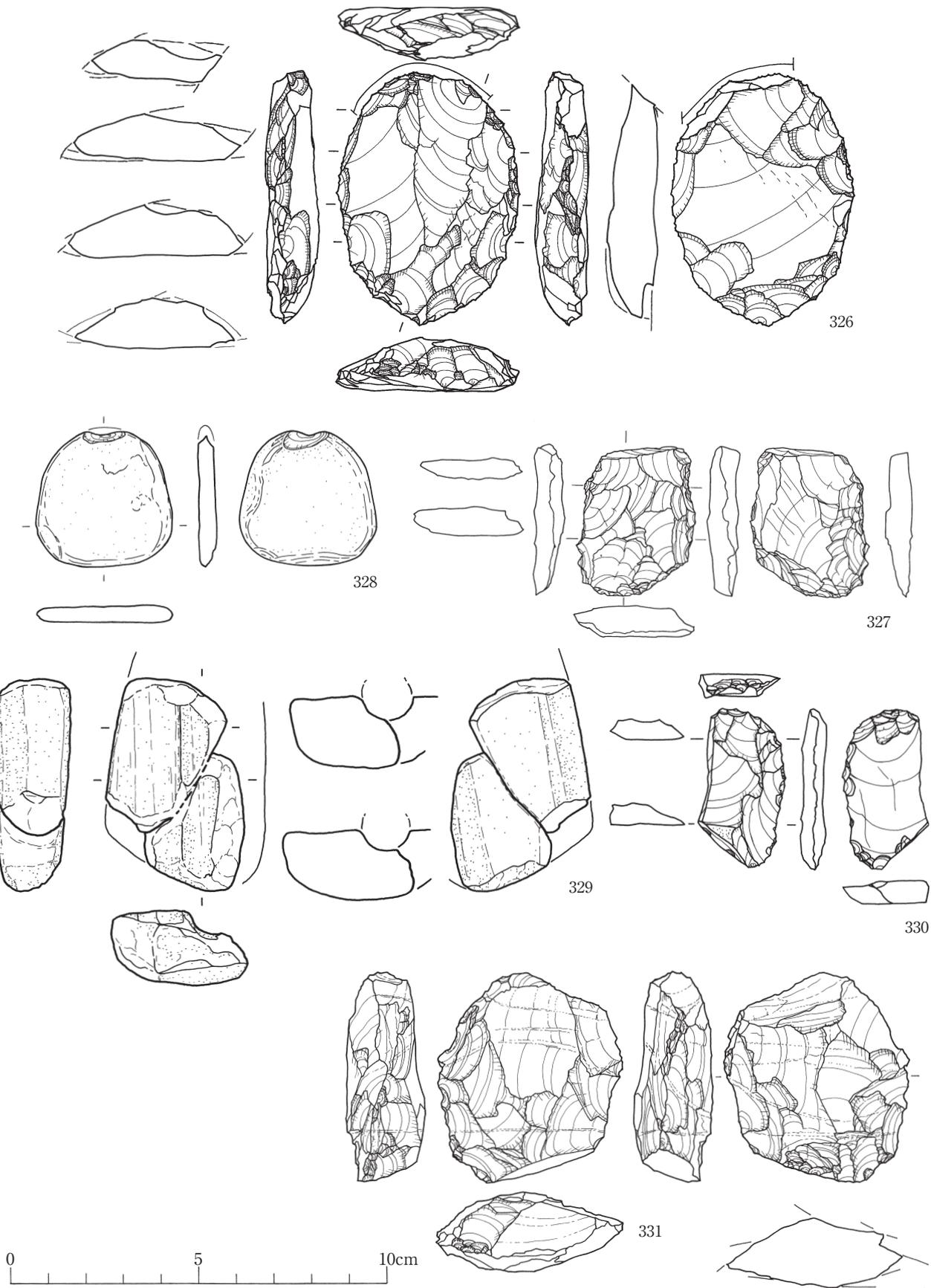


图 148 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-II 層出土石器 (S = 2 / 3)

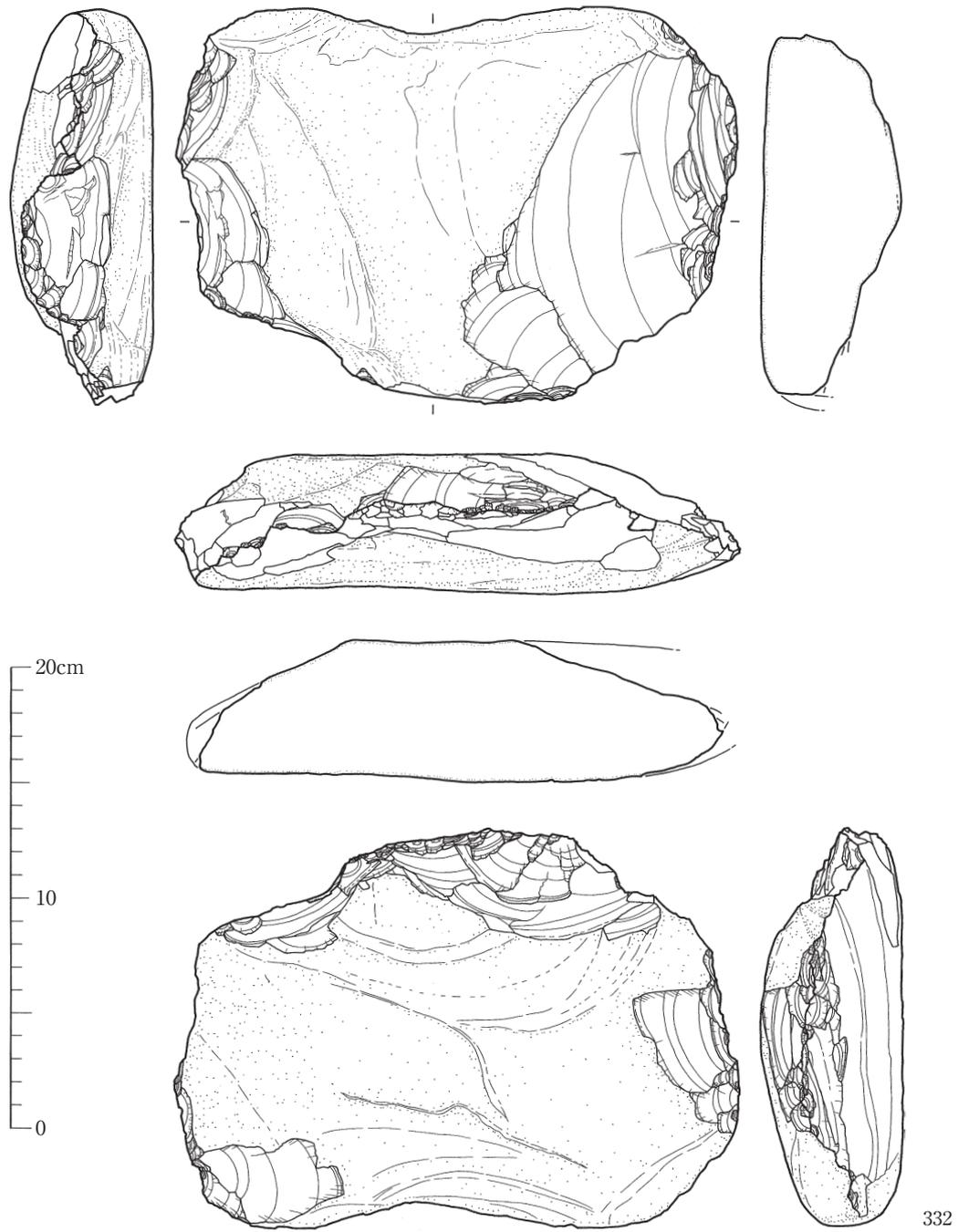


图 149 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-II 層出土石器 (S = 1/3)

332

表面側の左辺に等質的な剥離が連続している。細部調整は下端に観察され、刃部と考えられる。

**搔器** (図 148-326) 調整加工は最初に裏面で平坦剥離を行い、次に表面側に素材時の打面を一部残しつつ周囲にやや急角度の加工が施される。表面側に素材以前の剥離痕を残す。平面形は楕円形で、石材は頁岩である。

**削器** (図 148-327) 表面側に押圧剥離とみられる平坦剥離痕があり、あるいは有茎尖頭器の未成品とするべきか。上端は破損面。表面側の周囲に細部調整を施す。石材は推定金山産サヌカイト。

**石錘の未成品** (図 148-328) 平面形が隅円台形で、長幅約 5 cm、厚さ 0.5 cm という小型の緑色片岩の小礫を素材に用いている。石錘としての細部加工は一端の表裏に 1 剥離面ずつみられる。

**矢柄研磨器** (図 148-329) 石材は砂岩である。大きく破損しているが、横断面は半円形で、表面は平坦である。表面の長軸に 1 条の溝がある。溝の直径は復元で約 1.7 cm である。上半と右半分は破損している。

**楔形石器** (図 148-330) 石材はチャート～硅質頁岩である。搔器とも考えたが、縦軸の両端に位置する表裏 4 面中 3 面に両極方向からの剥離痕が観察されることから楔形石器と分類した。

**石核** 石核は 2 点確認した (図 148-331, 図 149-332) 331 は平面形は円盤形に近い。求心的な不定形の剥片剥離が表裏両面で行なわれることで円盤形となった残核。石材は赤色硅質岩である。332 は平面形は長方形に近く、断面厚が薄く扁平であるが、長さ約 24 cm、幅約 17.5 cm、厚さ約 12.5 cm 近くもある巨大な石核である。剥離は両端部両面付近と右側辺に礫器状の剥離痕が観察される。剥離面の観察では、剥ぎ取られた剥片には礫面が付いていたと推定される。また奥深くに及ぶ剥離痕は少ない。石材は無斑晶質安山岩である。

#### (12) 9Ⅲ層出土 (3 次調査)

**有茎尖頭器** (図 150-333・336・337) 333 は上半を破損している。大きさにばらつきのある押圧剥離である。押圧剥離後、側縁部で細かい細部調整を施すが、縁の側面に観察される上下の変動は著しくない。茎部は逆二等辺三角形で、茎部幅が広く、茎部長が短い。石材は赤色硅質岩である。336・337 は下半を欠くが、尖端部から両縁にかけての開きの角度から有茎尖頭器と推定する。両例とも表裏両面の調整加工が器軸に対し直交する平行押圧剥離である。石材はチャートである。

**有茎尖頭器の未成品** (図 150-334・335, 図 151-338～340) 5 点確認した。石材はサヌカイトが 1 例 (334)、無斑晶質安山岩が 2 例 (335・340)、チャートが 1 例 (338)、赤色硅質岩が 1 例 (339)。334 は平面形と側面系が歪な形となっているが、これは右側面の上部に素材以前の剥離痕が裏面に直交する角度で残存したことから、上半部主軸付近に礫面が瘤状に残存したためであろう。未成品となった理由か。基本的な調整加工はソフトハンマーによる直接打撃と考えられるが、器面調整に一部斜状平行剥離を思わせる部分が裏面に存在する。近位側が破損する。335 は基本的な調整加工はソフトハンマーによる直接打撃と考えられるが、細部調整に一部押圧剥離の可能性のある部分がある。上端には礫面を残し、下半側は破損する。338 は水滴形の平面形と推定するが、上端と左側辺側を一部破損。押圧剥離が両面でみられるが、特に左逆刺予定部分と裏面周辺に著しい。339 は上半を欠き、その破損面は後の左側縁側の加工痕によって切られる。両側縁は平行する。ソフトハンマーによる直接打撃のあと押圧剥離を施す。下端は半円形の器体から、茎部の作り出しにかかったところか。そうした加工は切合関係から既に破損面が大きく存在するなかで行なわれ、何を作ろうとし

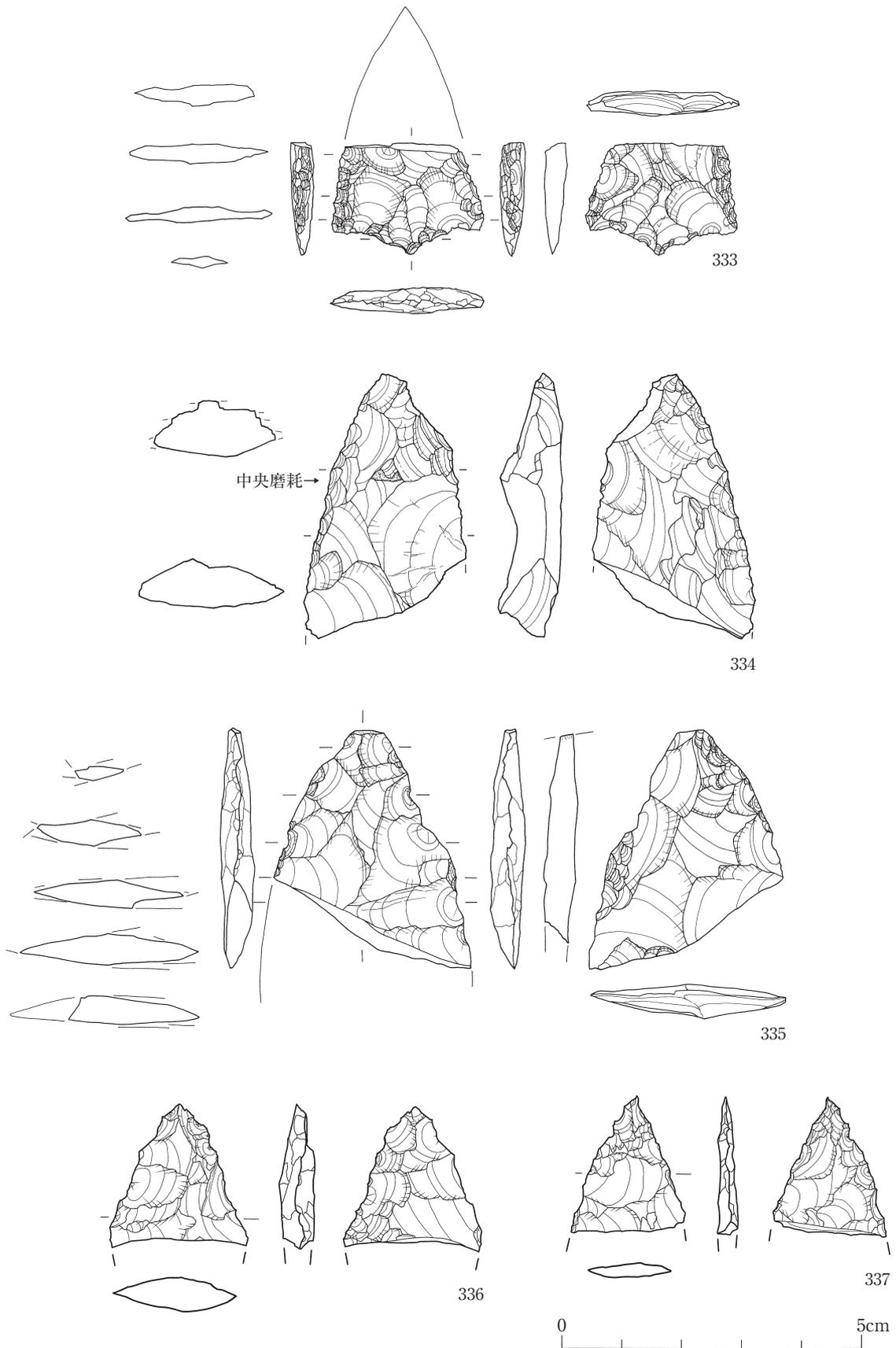


图 150 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S=1/1)

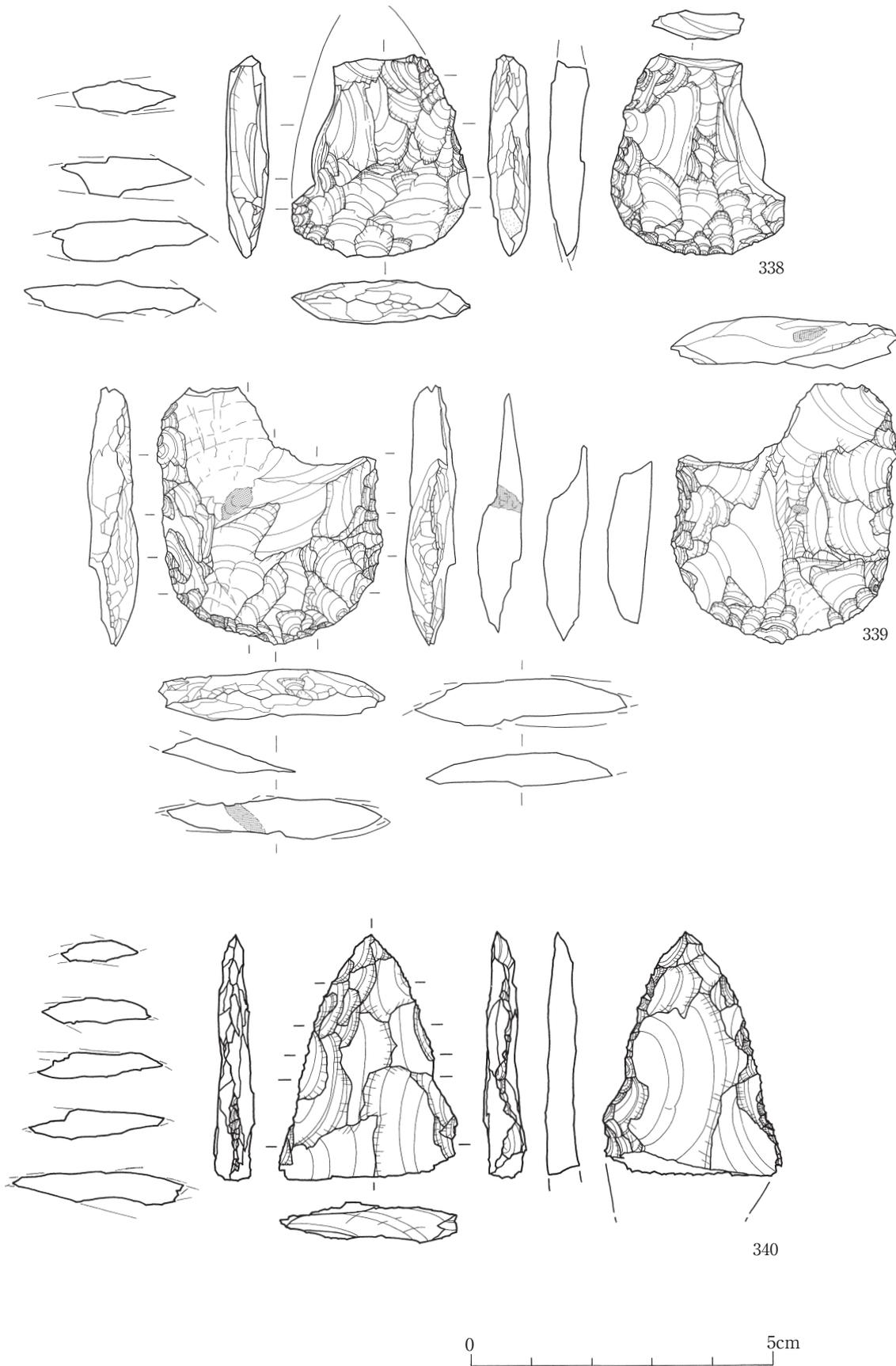


图 151 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 1/1)

たのか考えさせられる資料である。なお破損の原因は石材である赤色硅質岩の中に介在した黒色の介在物に要因があると推定する。340は先端部直下の両側縁部が僅かに肩状を呈する。ソフトハンマーによる直接打撃による調整加工である。下半部を破損するが、先端は鋭く尖る平面形である。下端付近の両側縁に屈曲部分があり、逆刺・茎部の作出を考慮したのだろう。細部調整が裏面の先端部から両側縁にかけて著しい。なお器体の厚さが0.6cm前後であり、石篋と考える必要はないだろう。

**石篋** (図152-341~343, 図153-345~347, 図154-348・349・351, 図155-351・354・355, 図157-361・363) 13点確認している。赤色硅質岩が2例(341・354), 無斑晶質安山岩が9例(342・343・345~349・351), 硅質頁岩が2例(355・361), 不明1例(363)であり, 無斑晶質安山岩が圧倒的に多い。調整加工は基本的にソフトハンマーによる直接打撃であり, 押圧剥離を加えた例が若干ある。341は平面形は水滴形に近い。大きさについては有茎尖頭器の未成品として遜色ない。当初の段階では有茎尖頭器を想い描いていたらしく, 上半部の両面に押圧剥離が観察される。しかし表面側に大きくポジティブな破損面があり, 縦断面や横断面を観察すると著しく薄く, 逆刺・茎部の作出は不可能であることから, 下端に細部調整を加えて刃部にしたと推定する。342は平面形は石斧形で, 最も完成度の高い例であるが, 表面の中位のやや上の左辺で大きく弧状に破損している部分がある。破損場所の裏面側にも同じ剥離があり, 同時に破損したと推定する。重要なのは, 抉れた後にも調整加工が続行されていることである。一見して気が付くのは, 表面側で右側辺と裏面側の右側辺にやや急斜度の調整加工が施されている。したがって断面形が平行四辺形の状況にあり, レンズ状の断面を作出する工程を物語っている。そのようななかで, 上端を尖らせないことと, 下端を半円形に整えている。343は裏面側下半の右側縁での打撃によるダメージで亀裂が生じていたようで, 中央部分で同時に破損している。裏面側の右側縁下端で内側へ回り込む兆しがあるので平面形は水滴状であったと推定される。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃であるが, 断面が厚い素材であった為か, 器体を薄く整える為に表面側右側辺付近での苦勞が窺える。345・346は水滴形の器体であったと推測されるが, 刃部近くで破損している。345は表面と裏面に素材以前と素材時の面を残しており, 厚さ0.6cm前後の不定形剥片を素材としている。素材の打面部方向が上端である。表面側左辺の剥離は器軸に達するが, 他は縁に近い部分で止まっている。両例とも上端は尖らず丸い形状である。347は上半側の破片で, 本来は水滴形か。上端はやや尖り気味であるが鈍角であり, 鋭くするという意図はないようである。裏面に素材時のポジ面が残存しており, 器軸に対し素材を横位にしたことがわかる。348・349は器体の上位ないし中位で水平に破損している。下端を入念に細部調整し, 刃部としている。裏面にポジ面が観察されることから, 348は打面を上端方向に, 349は打面を横位に位置させている。351は上端と下端が破損している。両面で大きな調整加工を行い, その後にやや急斜度の調整加工を対角線のある両面の側辺部に加えている。354・355は半円形の刃部破片である。354は節理で破損し, 355は斜めに破損している。361は上端部の基部破片である。

**石篋の未成品** (図153-344, 図154-350, 図155-352・353, 図156-356, 図159-371) 6点確認している。石材は, 無斑晶質安山岩が4例(350・352・353・371), 不明2例(344・356)であり, 無斑晶質安山岩が圧倒的に多い。344は平面形は水滴形である。裏面にポジ面を残しており, 幅広剥片

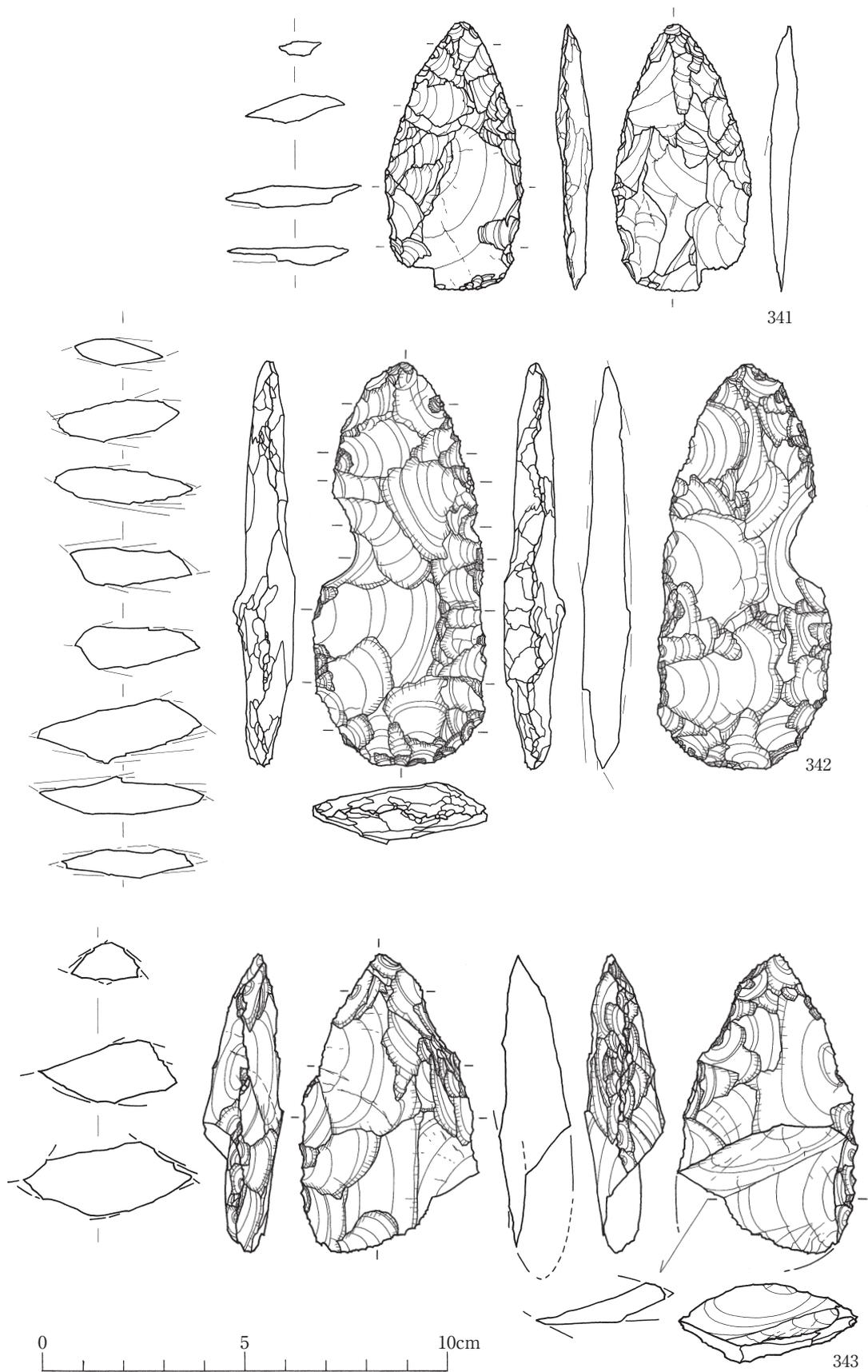


图 152 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

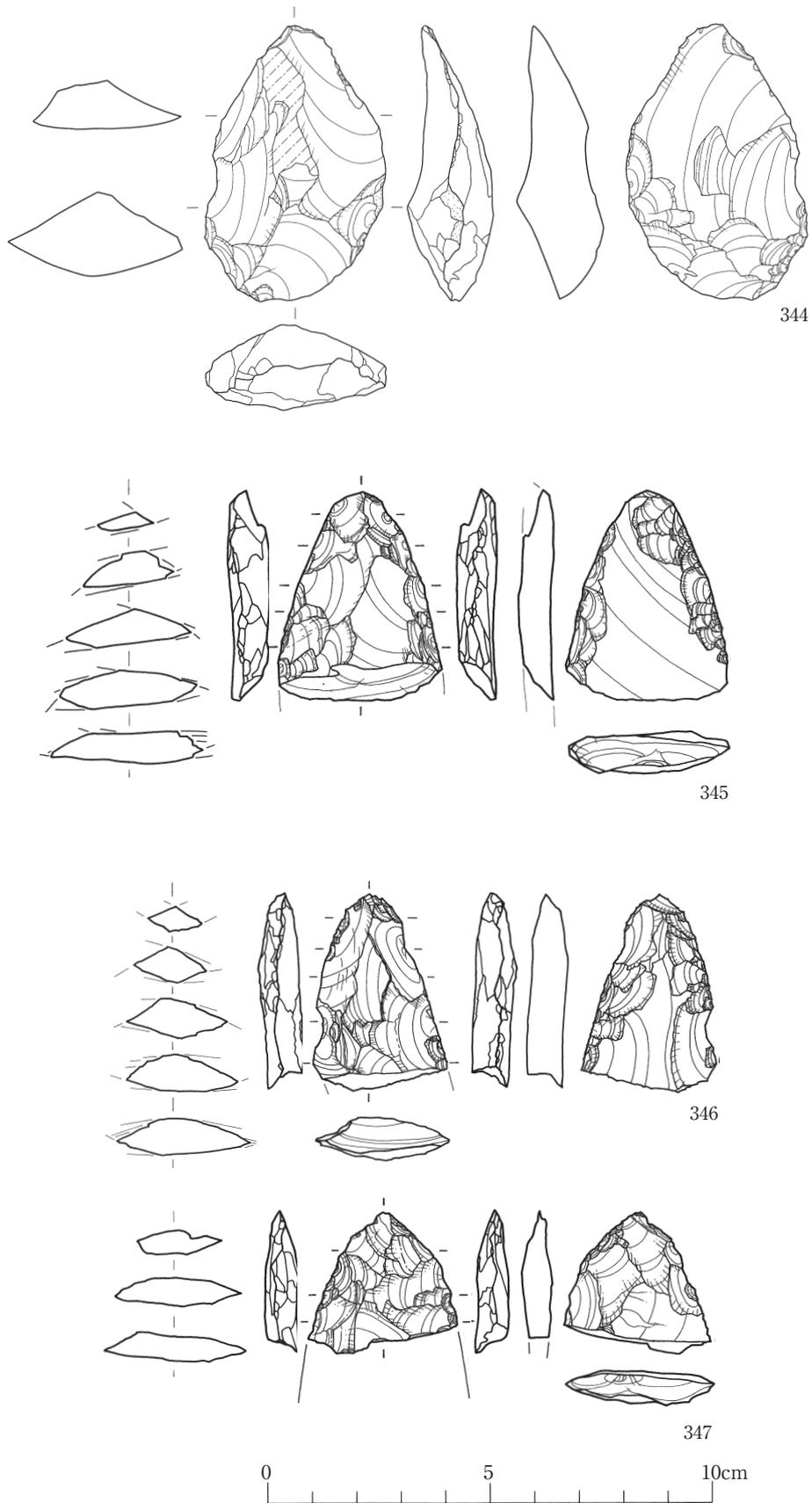


图 153 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

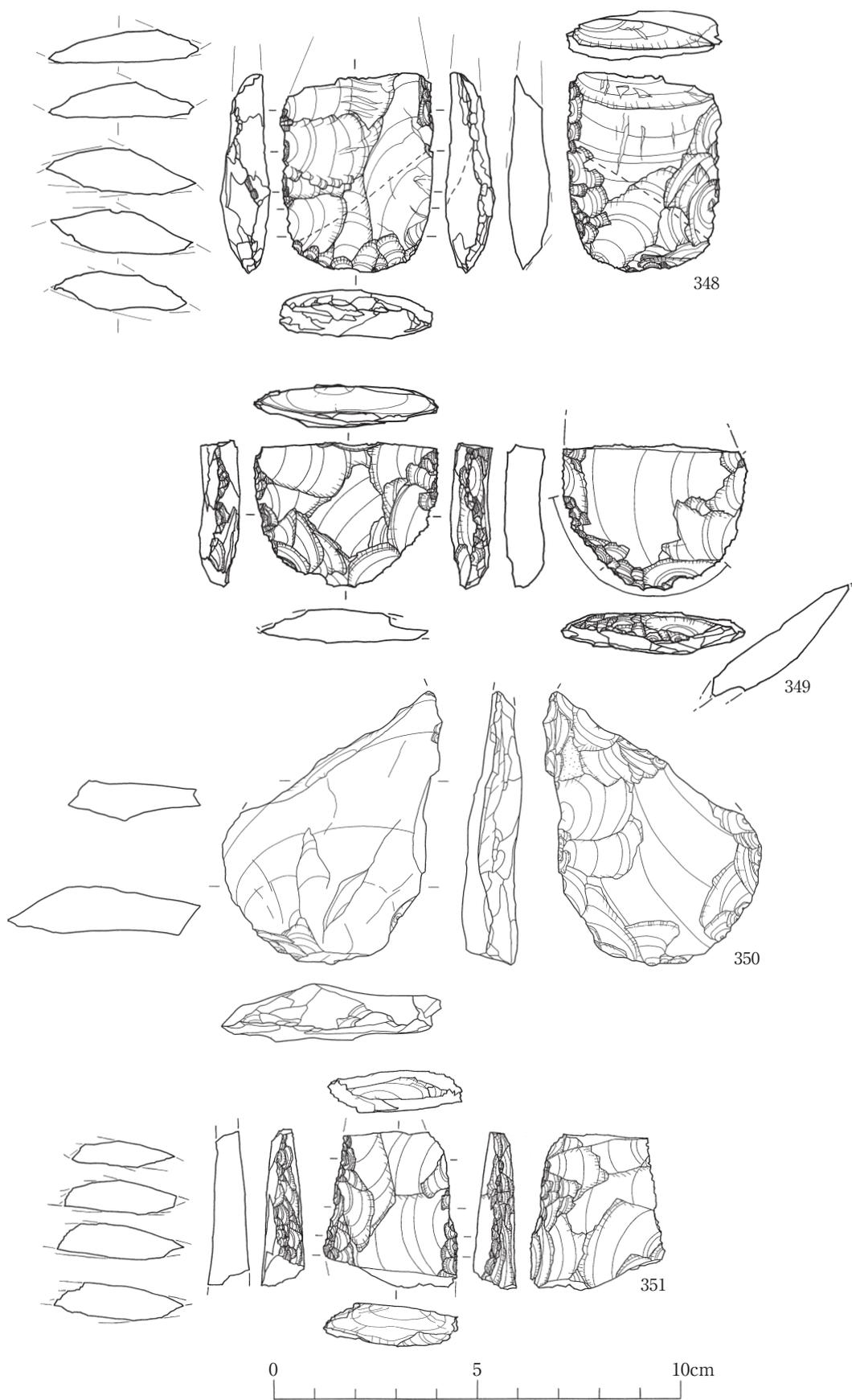


图 154 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

の両サイドを下端・上端となるように素材を用いている。表面側左辺の調整加工は素材の打面除去の意味も含んでいる。裏面側もソフトハンマーによる調整加工を行なっているが、打瘤の除去を兼ねたのだろう。350は水滴形に調整加工する意図が窺えるが、表面側の中位で斜めに破損している。その形から素材のポジ面を表面側とし、素材の打面部を下端側に位置させている。下端を半円形に加工する意図が窺えるので、この部分を刃部とする予定だったのだろう。352は幅広の剥片の形状をとどめた例である。表面の右側辺・裏面の左側辺の加工は打面部除去を意図し、表面の左側辺における若干の加工を含めて考えると平面形を水滴形に調整加工する意図が窺える。また裏面の近位端で左半部に刃部作出を意図した剥離があるが、その右側が破損したことが未成品のままとなった理由か。353・356は平面形はずんぐりした楕円形で、まだ粗割り段階。礫面を残す剥片を素材とする(353)。裏面の近位端に規則的な剥離があり、半円形の刃部を予定していたことが窺える。371は粗い整形段階。裏面下端にやや丁寧な加工があり、刃部を意図した剥離か。

**削器** (図156-357) 無斑晶質安山岩の台石から幅広剥片を割りとり、側縁に細かい細部調整を施す。

**搔器** (図157-358・359) 358・359とも石材は不明である。いずれも平面形は水滴形で、素材に幅広剥片を用いる。下端に簡単な加工を施す。

**石核** (図158-364~369, 図159-370・372・373) 9点ある。石材は在地系のサヌカイト1例(364)、外来系サヌカイト1例(370)、硅化流紋岩1例(365)、赤色硅質岩1例(366)、硅質頁岩3例(367~369)、無斑晶質安山岩1例(372)、輝石安山岩1例(373)である。364は礫を分割し、分割面を打面として剥片剥離を周辺の作業面で行なう。365は角礫の平坦面を打面として剥片剥離を行なう。366は打面転移を繰り返しながら剥片剥離を行なう。プリズム状の体形である。367は円盤状に表裏両面で求心的な剥片剥離を行い、最終的に打面作出後に上端から剥片剥離。368は上下両端から剥片剥離。打面が小さく、あるいは楔形石器か。369は状の角礫を素材に両端に打面を作出し、両端から縦長剥片を剥離する。370は柱状角礫を横位に、端部から短い剥片剥離。短い剥片が推定され、実用性に疑問がある。372は状角礫から両刃礫器状に剥片剥離。縁に潰れがないことから礫器ではないと考える。373は厚い剥片が素材で、ポジ面を打面に端部から縦長剥片を剥離する。

**加工痕ある剥片** (図157-362) 素材の打面部と、隣接する表面の頭部調整部分に若干の加工と下端の表裏両面で簡単な剥片剥離を行なう。あるいは石籠の未成品か。石材は不明である。

**敲石** (図160-374~375) 大きさから考え、剥片剥離・石器製作に係わる敲石と推定する。374は細長の板状礫の下半角部と、上端に小さいアバタ状の打痕がある。上端使用時に表面側が大きく剥離・破損している。石材は緑色岩である。375は分厚い隅円長方形の両端部周辺に打痕があり、一部破損している。石材は砂岩である。376はほぼ円形の餅形であり、下端部と上端脇部に著しい打痕。石材はデイスイトである。

### (13) 9Ⅳ層出土(3次調査)

**有茎尖頭器** (図161-377・378) 377は裏面側に観察される大きい剥離はソフトハンマーの直接打撃か。茎部は幅広で著しく長さが短い。逆刺は鋭く、下方を向く。石材は無斑晶質安山岩である。378は上端部を欠く。ソフトハンマーによる調整加工と推定される剥離が表面側の遠位にある。その他は押圧剥離で、特に裏面は器軸に対し直交する平行剥離状の器面調整である。茎部は幅広で、

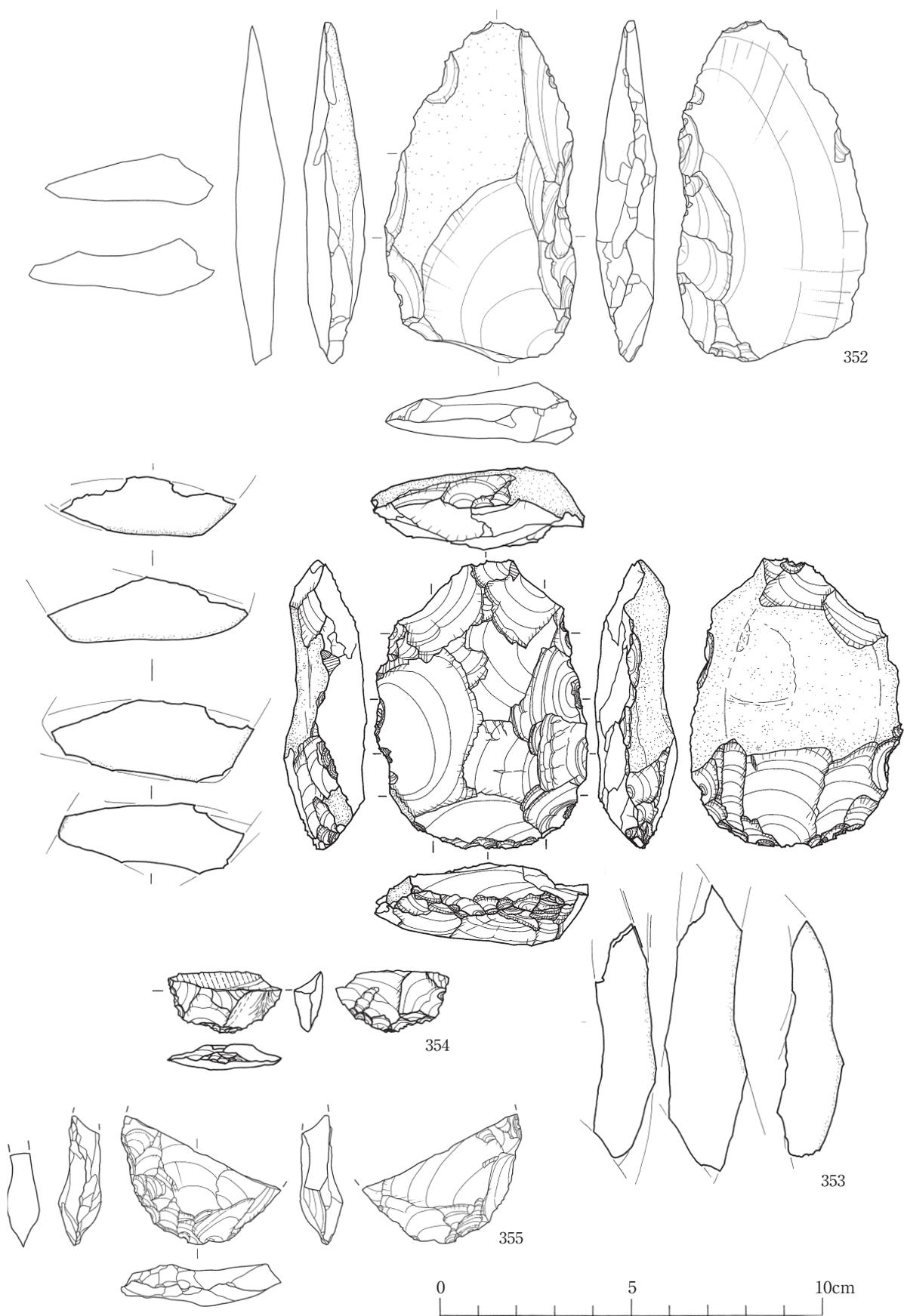


图 155 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

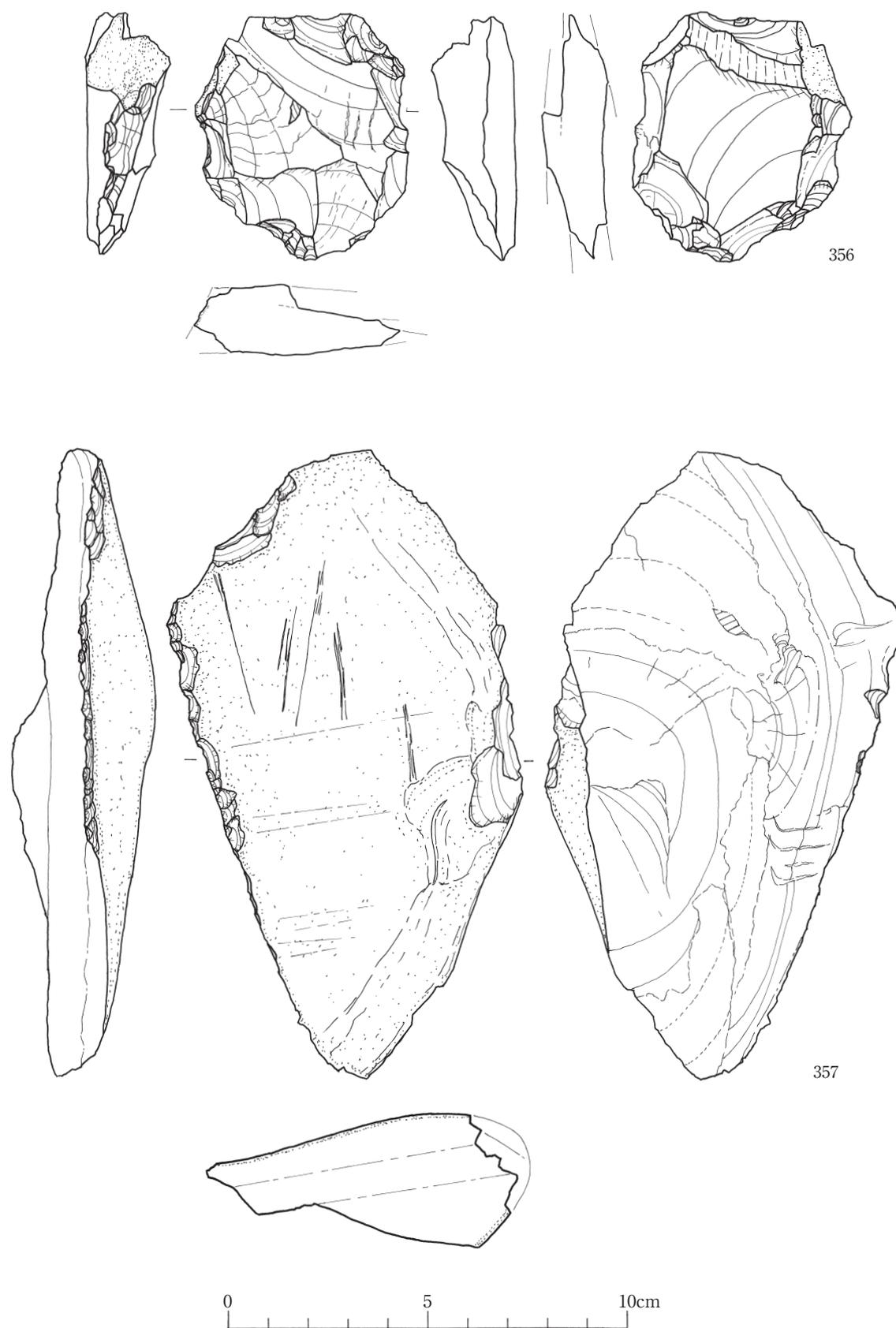


图 156 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

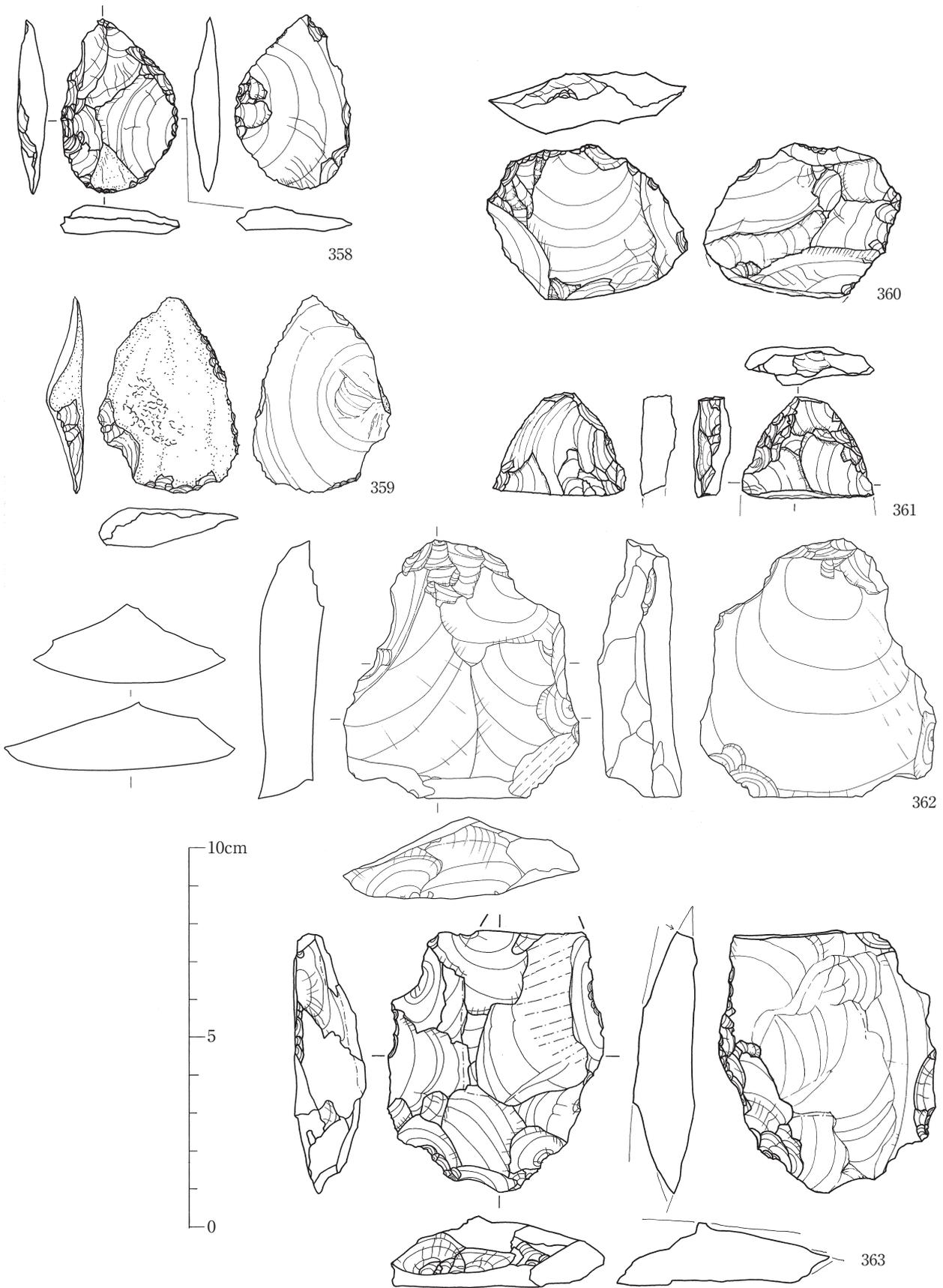


图 157 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 2/3)

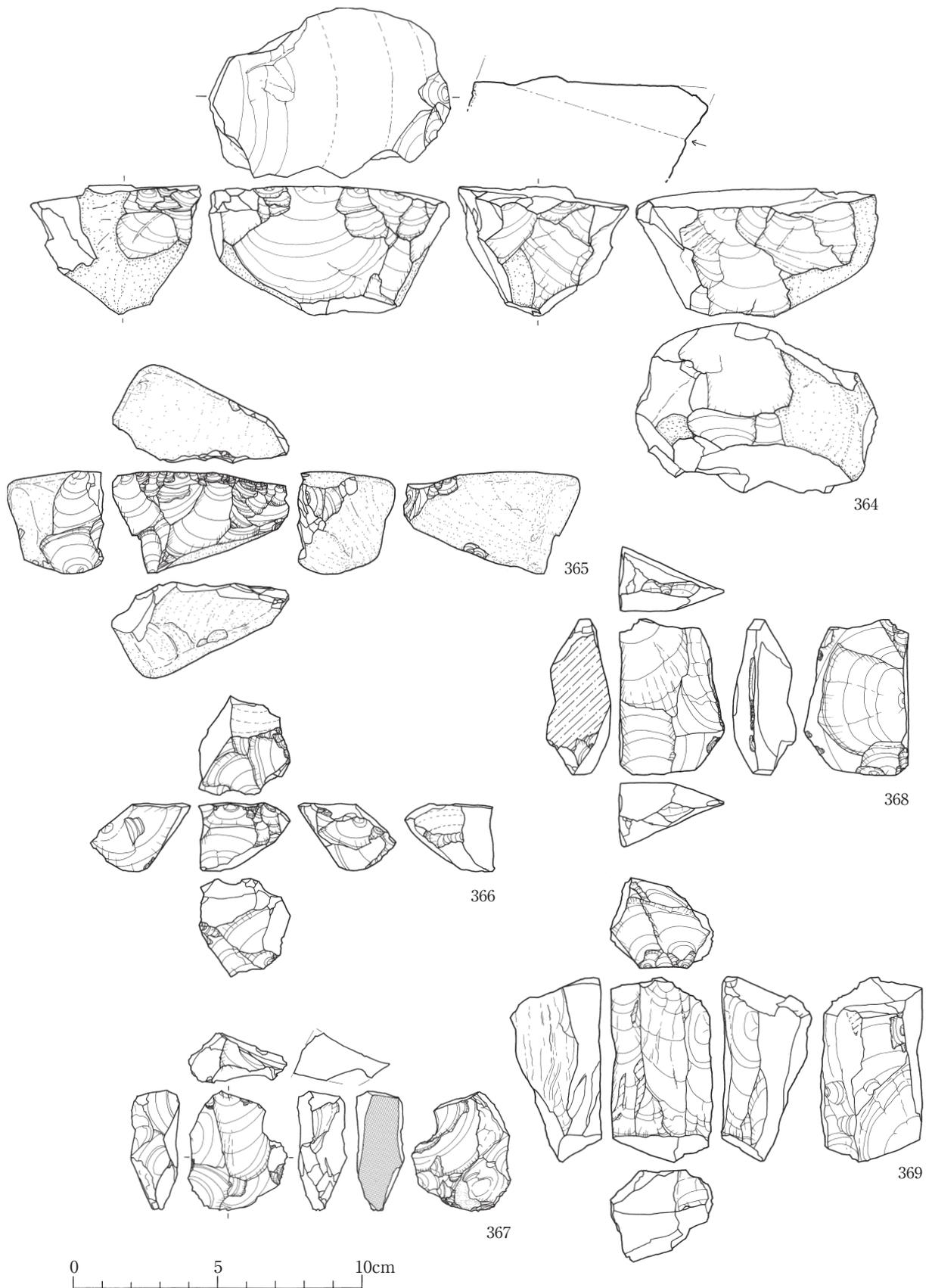


图 158 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 1/2)

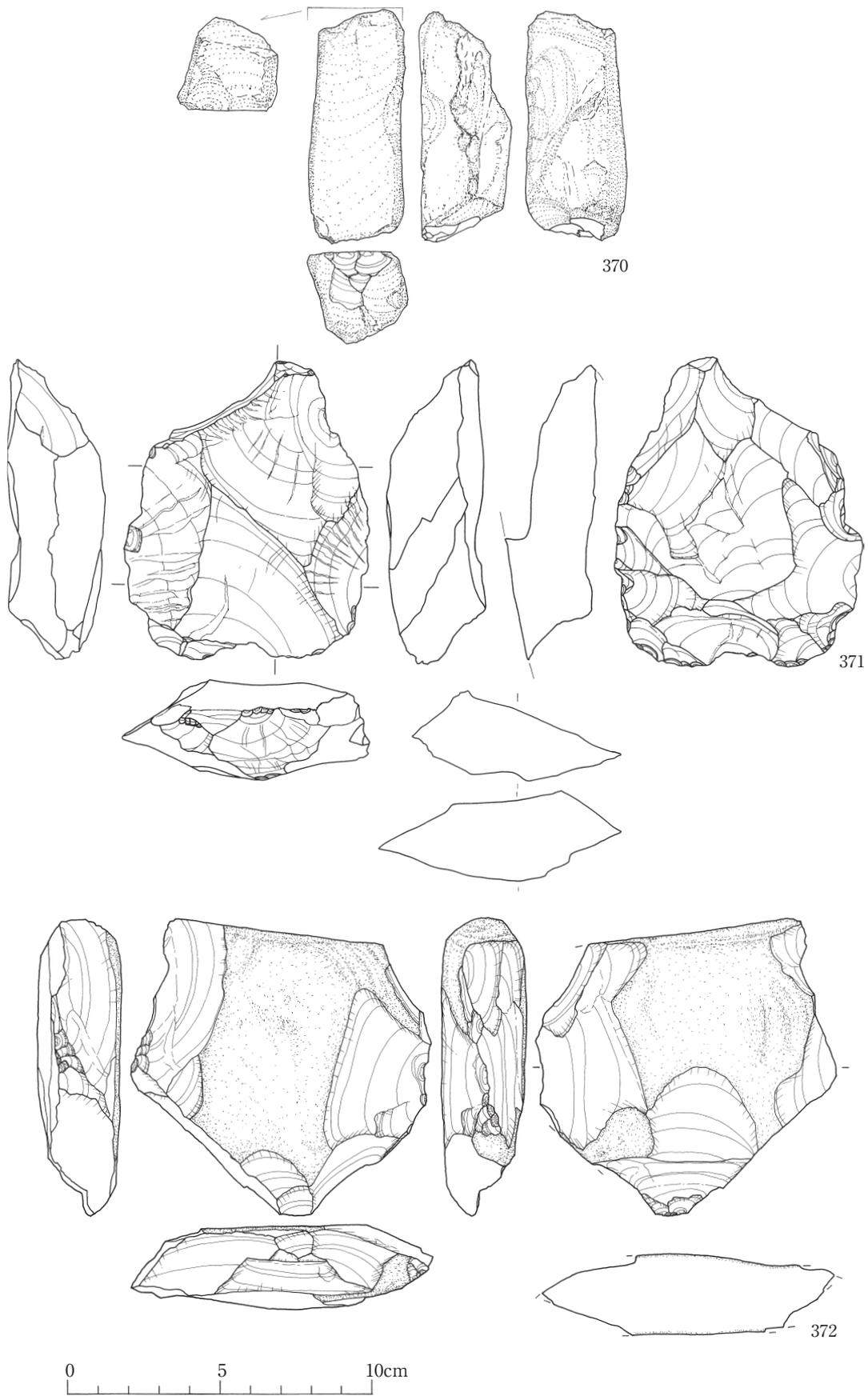


图 159 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-Ⅲ層出土石器 (S = 1/2)

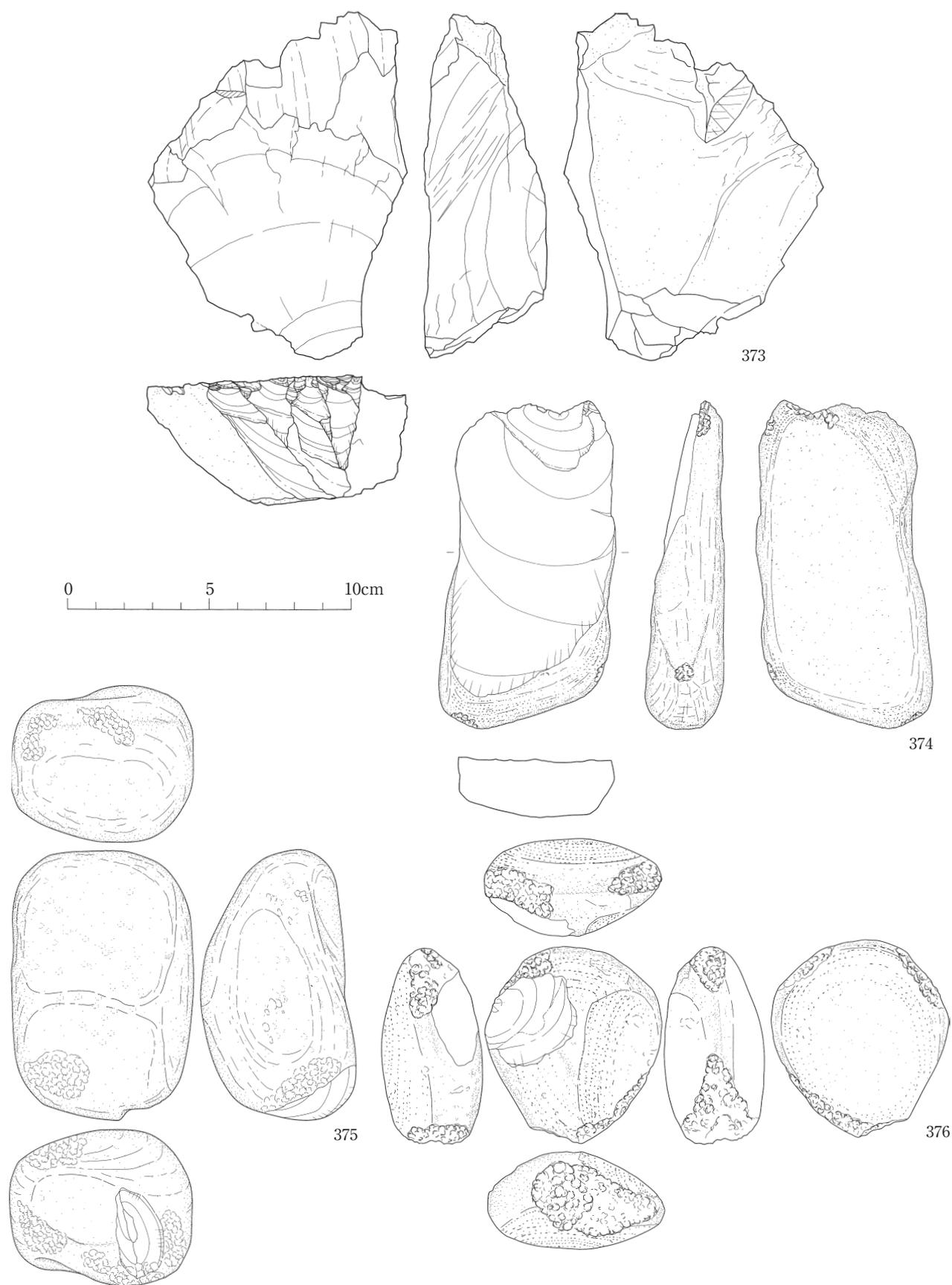


图 160 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-III 層出土石器 (S = 1/2)

茎部長が著しく短い。逆刺は下方を向くなど鋭い。最終的に縁沿いに細かい細部調整を施す。石材は赤色硅質岩である。

**有茎尖頭器の未成品** (図 161-379・380) 379 は上半部を欠くが、水滴形の平面形が推定される。石材は無斑晶質安山岩である。380 は上端は尖らないが幅狭く、下端は幅広いが斜行する平面形。石質的に良質石材ではなく、剥離がステップになる。石材は推定金山産サヌカイトで、節理が多い。両例ともまだ押圧剥離の工程に入っていないと推定され、調整はソフトハンマーの直接打撃か。

**槍先形尖頭器** (図 161-381) 長さ約 4.0 cm・幅約 1.5 cm 前後・厚さ 0.35 cm と小型である。最大幅が中央部より下にあり、形態は柳葉形。裏面側にポジ面があり、小型幅広剥片が素材か。調整加工は押圧剥離で、斜行する剥離もある。石材はサヌカイトである。

**石筥** (図 162-385) 上半部が破損しているが、平面形は水滴形である。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃と推定される剥離である。下端は半円形に整形され、刃部としている。石材は頁岩である。

**搔器** (図 162-384・386) 刃部に急斜度の細部調整を施す。384 は石材は輝石安山岩である。386 は急斜度整形後、下端から裏面長軸方向に剥離を施し、<sup>まるのみ</sup>円盤状の刃部を作り出す。石材は無斑晶質安山岩である。

**削器** (図 163-387) 平坦な分割面を打面として剥離作業を行なった細長い残核を転用している。加工は表面側の左側縁中央部と裏面の中位から近位端にかけてである。加工痕は細かい剥離で鋸刃状となっている。

**凹石・敲石** (図 163-388・389, 図 165-391・392) 4 点確認している。石材は砂岩 1 例 (388), 緑色岩 3 例である (389・390・391)。388 は両面に凹部があり、平面観は円錐形。周辺の角部に細かい打痕と右側面に幅広の打痕がある。389 は細長で断面三角の器体で、上下両端に打痕と剥離痕が観察され、左側縁にも打痕がある。391 は扁平で長楕円形の石を使う。表面に未発達な凹部と近位に衝撃による剥離痕がある。衝撃に係わる打痕は裏面の近位端に観察され、敲石としての用途と関わるものだろう。391 は棒状礫の端部に打痕が観察される。

**砥石・礫器** (図 164-390) 長さ 7.5 cm, 幅 2.5 cm 程度の作業面に反復運動する研磨作業の結果、同一方向の著しい線條痕が刻まれている。硬い石や骨角類を手にもち、角度をつけて砥石で研磨を行い線條痕が生じたと推定される。研磨というより、整形というべきか。石材は無斑晶質安山岩で剥片石器の主要石材であることから、石質的には硬く、見た目が緻密である特徴からザラザラした質感の緑色岩系の砥石とは使い分けた可能性もある。剥離が線條痕を切っていることから、線條痕が刻まれた後、剥片剥離を行ない敲打作業による衝撃で細かい潰れ状の剥離痕が生じている。

#### (14) 9V 層出土 (3 次調査)

石器類は減少する。なお、有茎尖頭器の有無は不明である。

**槍先形尖頭器** (図 166-393) 石材はサヌカイトで、著しく風化している。ソフトハンマーによる直接打撃で、加工は粗く、あるいは未成品か。下半は折れている。

**石筥** (図 166-394, 図 168-399) 概ね調整加工はソフトハンマーによる直接打撃である。394 は細長い器体で、やや幅広の中位から近位は端部で斜行するが、下端は円く幅狭い。概ね表裏両面で調整加工を行い、裏面側の周辺部に細部調整を加えている。表面左辺部から裏面へ斜行する脈石英の

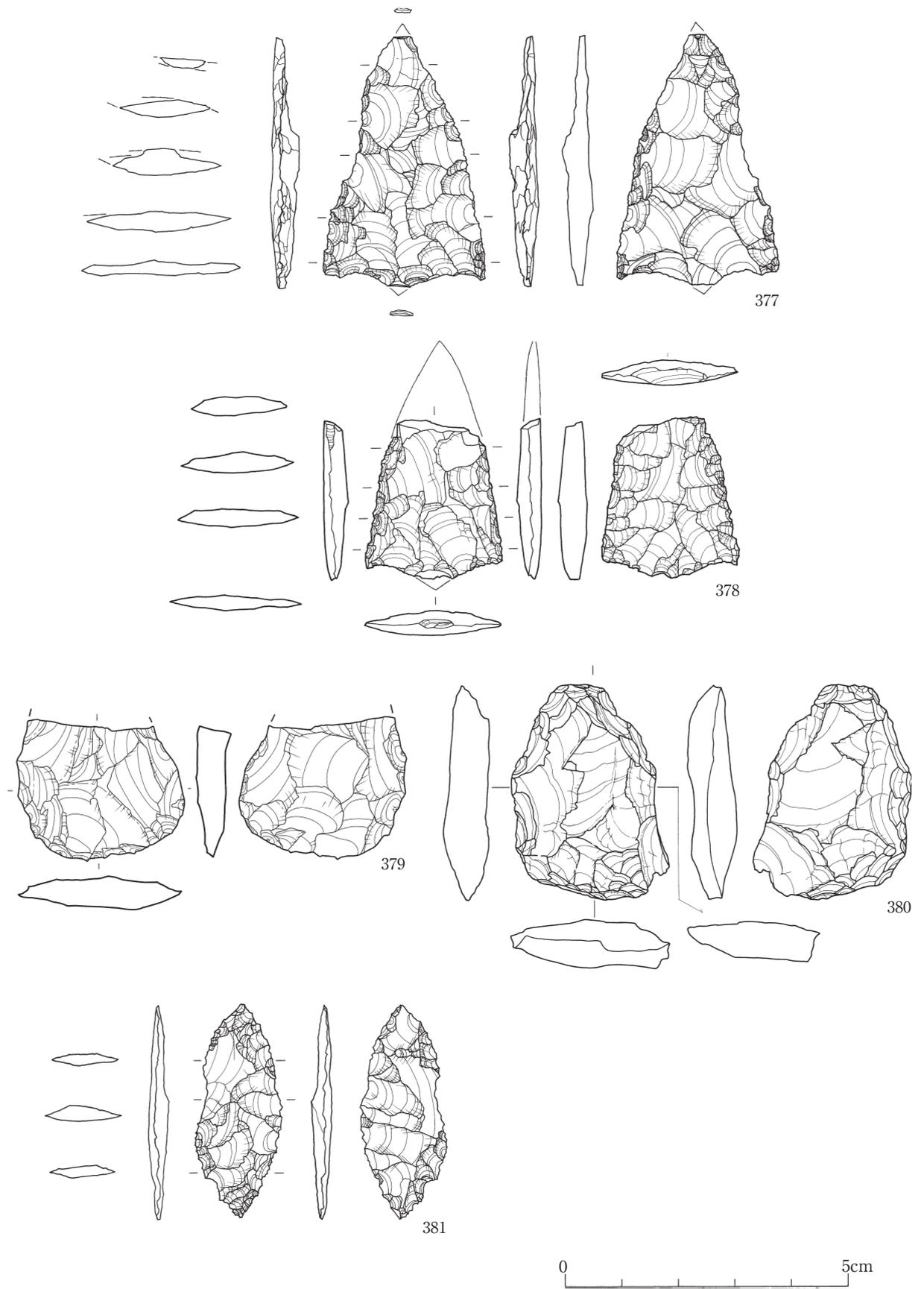


图 161 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-IV 層出土石器 (S = 1/1)

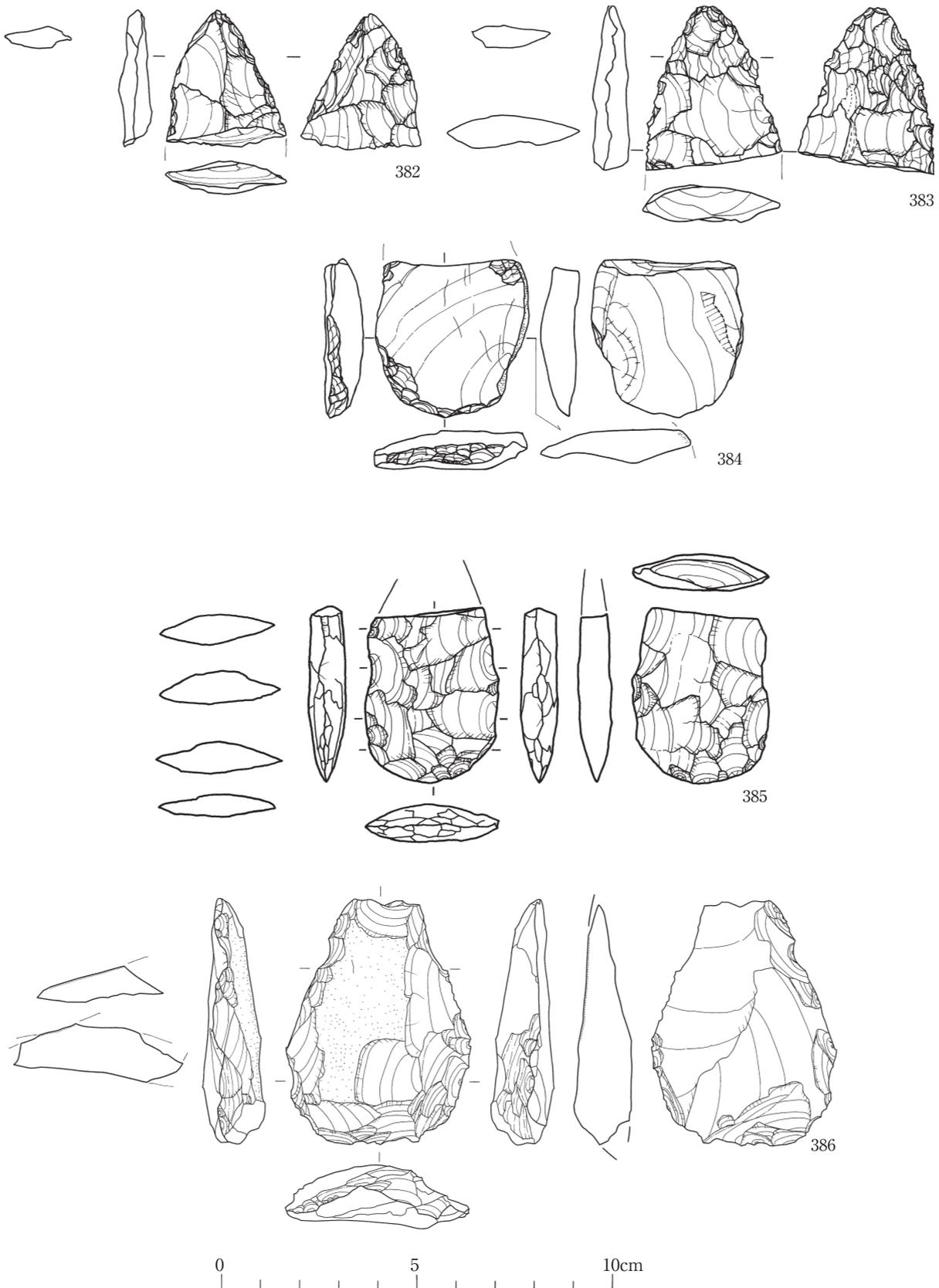


图 162 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-IV 層出土石器 (S = 2/3)



图 163 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-IV層出土石器 (S = 1/2)



图 164 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区 9-IV 層出土石器 (S = 2/3)

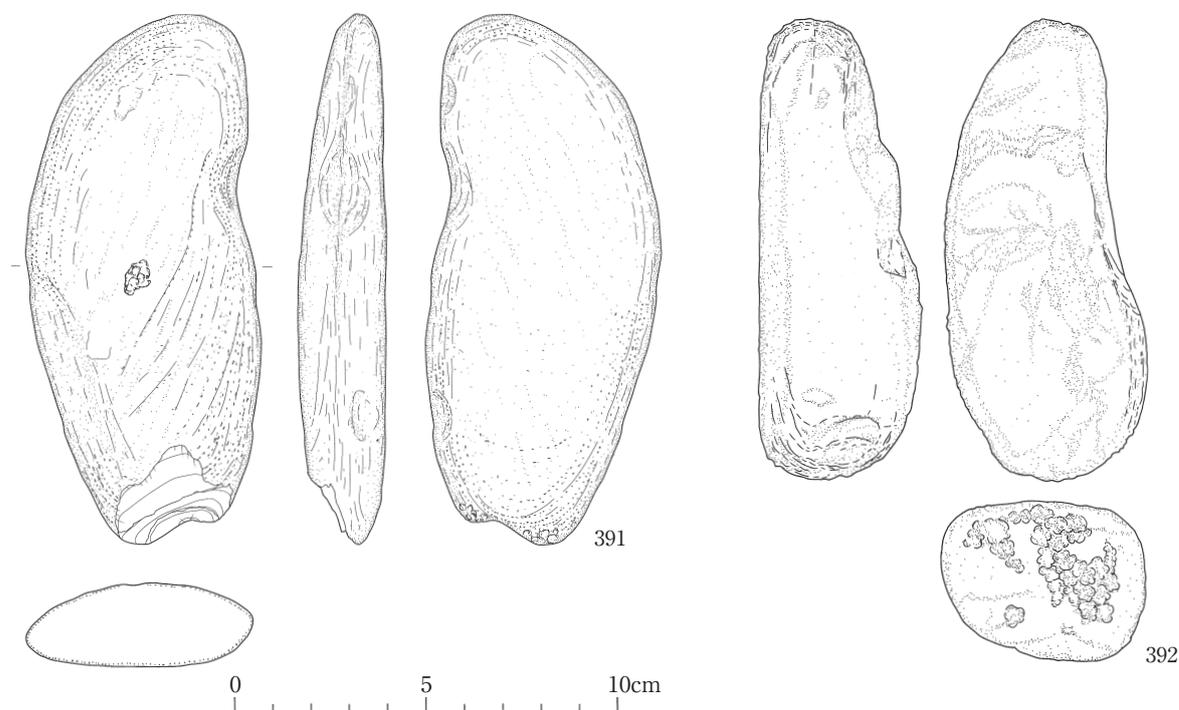


図165 上黒岩遺跡3次調査C区・C拡張区9-IV層出土石器 (S = 1/2)

帯が貫入しており、製作者は凸レンズ状断面・左右対象の尖頭器が製作不可能であることは理解していたと推定する。石材は赤色硅質岩である。399は上半部破片で、石材は流紋岩である。

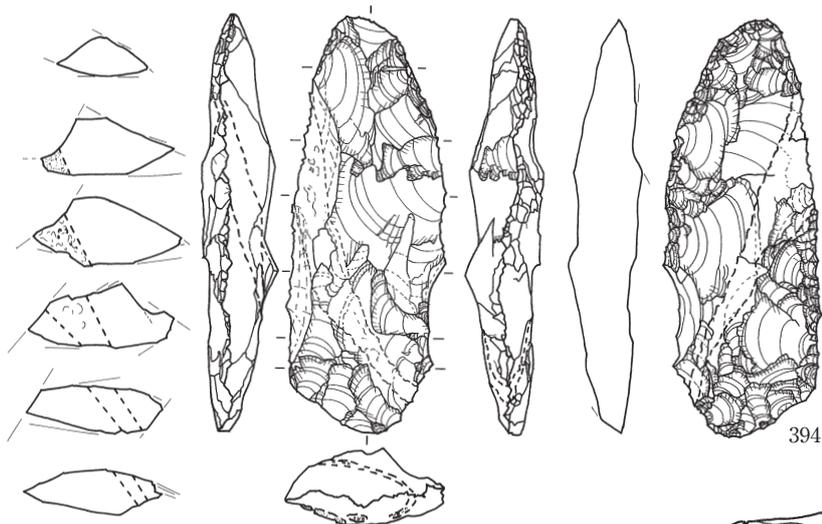
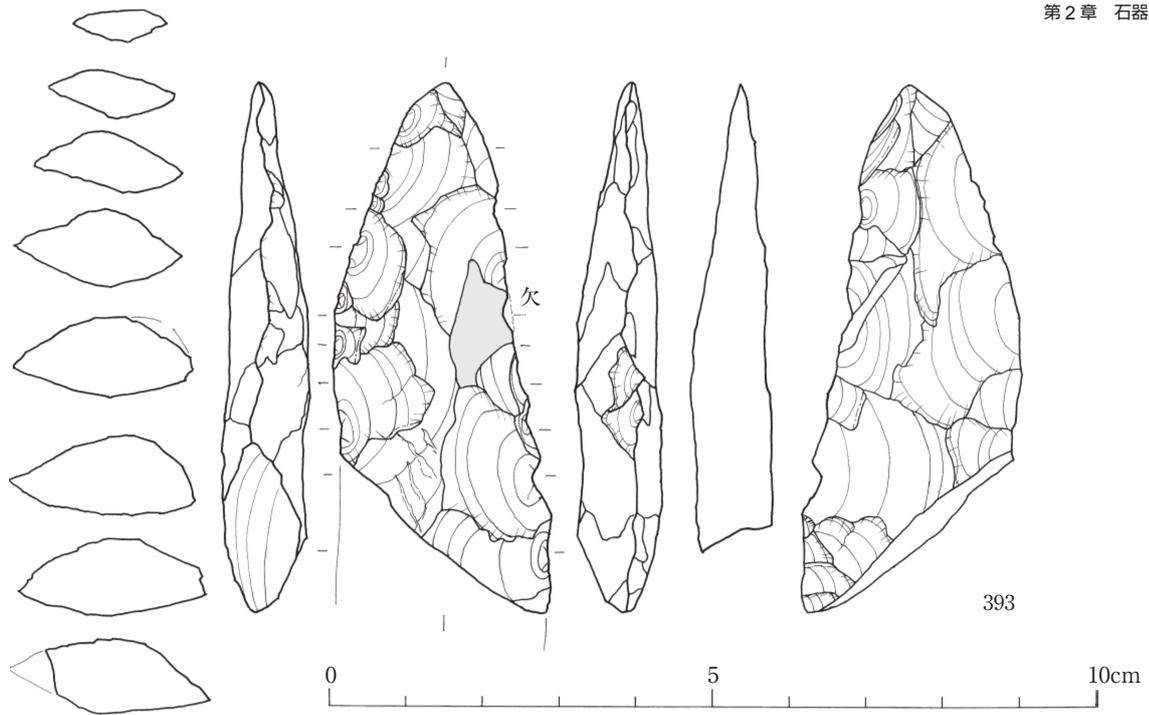
**石筥未成品** (図168-400) 石材は無斑晶質安山岩で、器面や内部に節理等が貫入する質的に悪い石であり、裏面に大きく礫面を残す。概ね調整加工はハード及びソフトハンマーによる直接打撃である。下半を欠き、裏面も礫面のままとまっている。

**楔形石器** (図167-398) 石材は赤色硅質岩で、質的に粘板岩に似ており、表裏両面にヒゲ状フィッシャーの節理面が生じている。断面は表面右側縁下半を除き両側面は鈍角である。遠位・近位に平坦な剥離があることから楔形石器と考える。

**搔器** (図166-395, 図167-396) 395は幅広の剥片が素材で、両端部に細部調整を加え半円形とし、器体の平面形が楕円形をなす。全体的に石器加工前に受熱したようで、淡く赤化した部分がある。特に裏面側の大きい剥離痕は細かい亀裂が縦横にあり、面がザラザラした質感となっている。石材は硅質頁岩である。396は平面形が円形に近い楕円形。表裏両面に調整をおこなった後、右側縁下半から下端周辺に細部調整を加え刃部としている。あるいは円盤状石核の転用とみなすべきか。石材は赤色硅質岩である。

**削器** (図167-397) 縦長の不定形剥片を用いている。調整加工は裏面右側辺に施し、上端がやや尖る。器体の下半を欠く。石材は頁岩である。

**礫器・石核** (図168-401) 剥離はハードハンマーによる直接打撃か。右側辺の表裏両面に剥離を加えるが、横断面をみると鈍角。下端の加工は表面側だけであり、縦断面をみると片刃で鋭い。ステップが多い。石材は扁平で楕円形の頁岩を用いている。



※破線内脈石英貫入部分

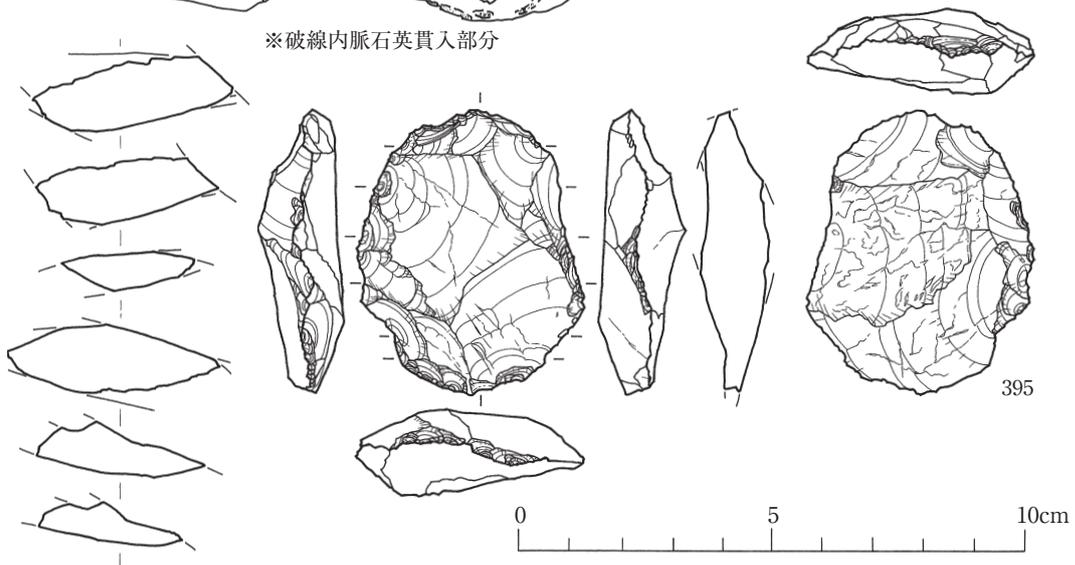


图 166 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-V 層出土石器 (S = 1/1・2/3)

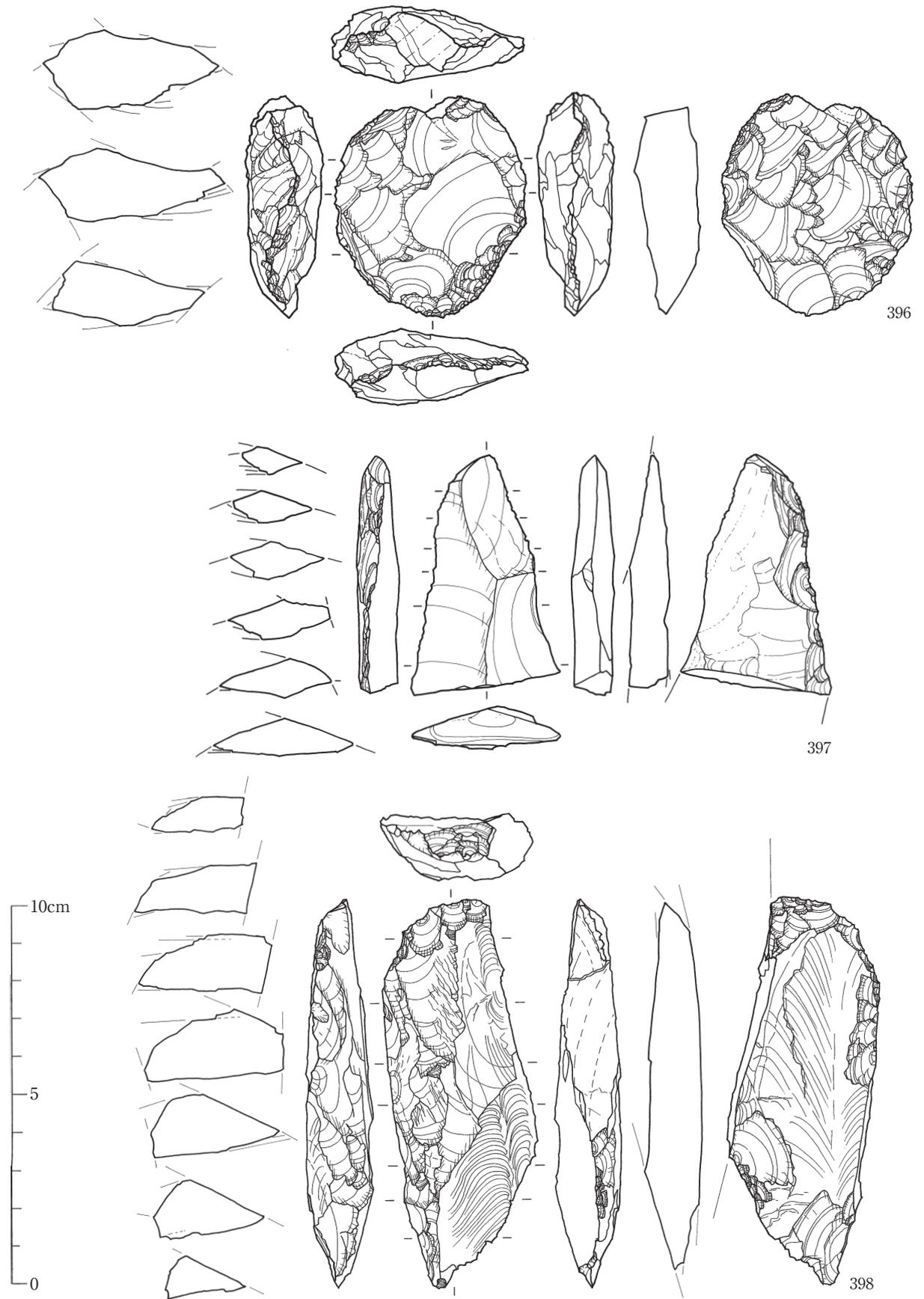


图 167 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-V 層出土石器 (S = 2/3)

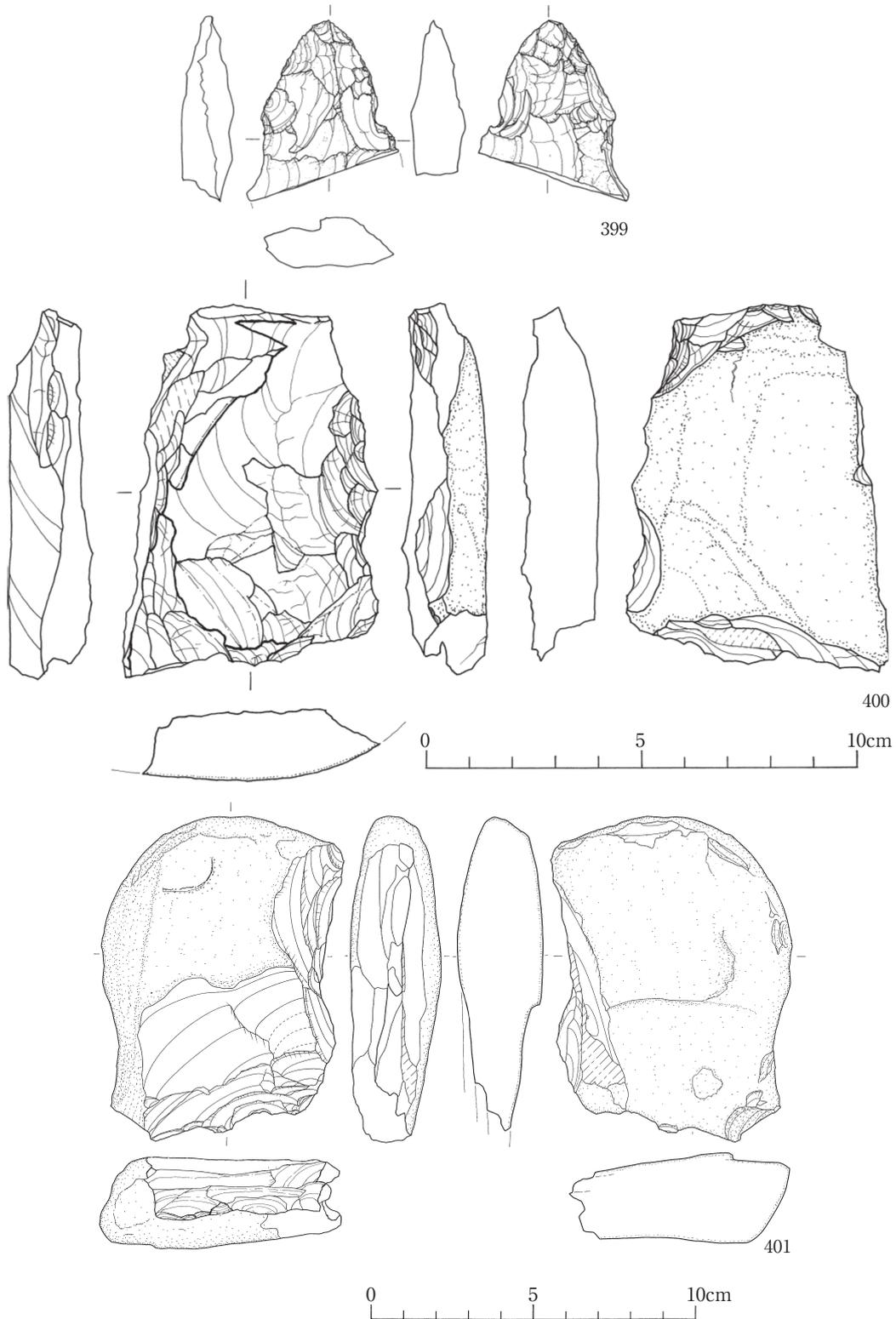


图 168 上黒岩遺跡 3 次調査 C 区・C 拡張区 9-V 層出土石器 (S = 2/3 · 1/2)

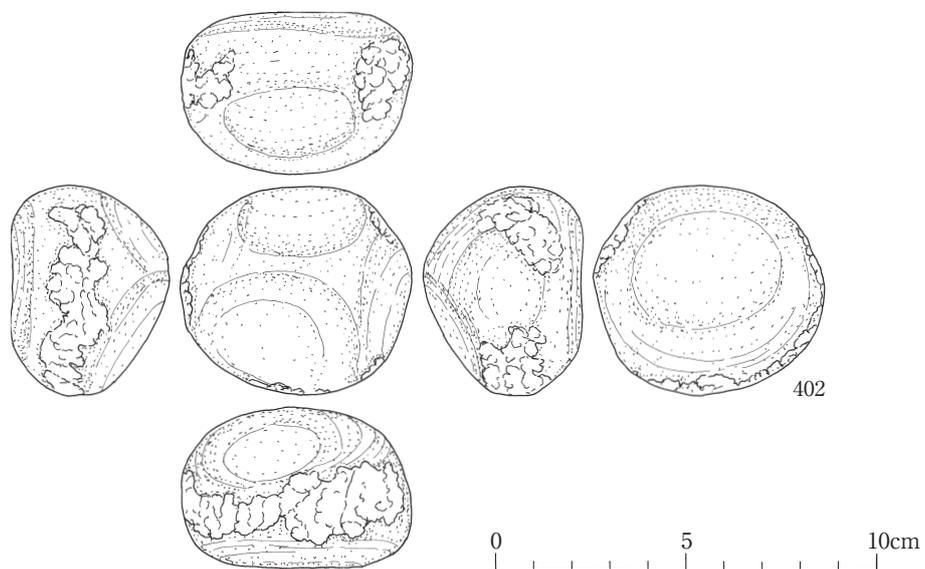


图 169 上黒岩遺跡3次調査C区9-V層出土石器 (S = 1/2)

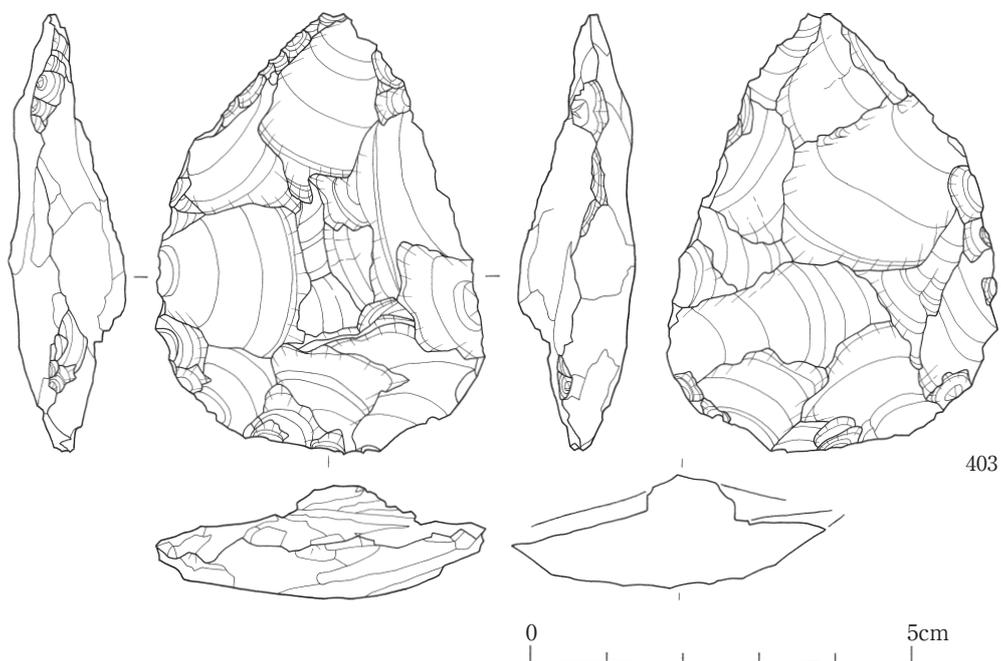


图 170 上黒岩遺跡3次調査C区9-VI層出土石器 (S = 1/1)

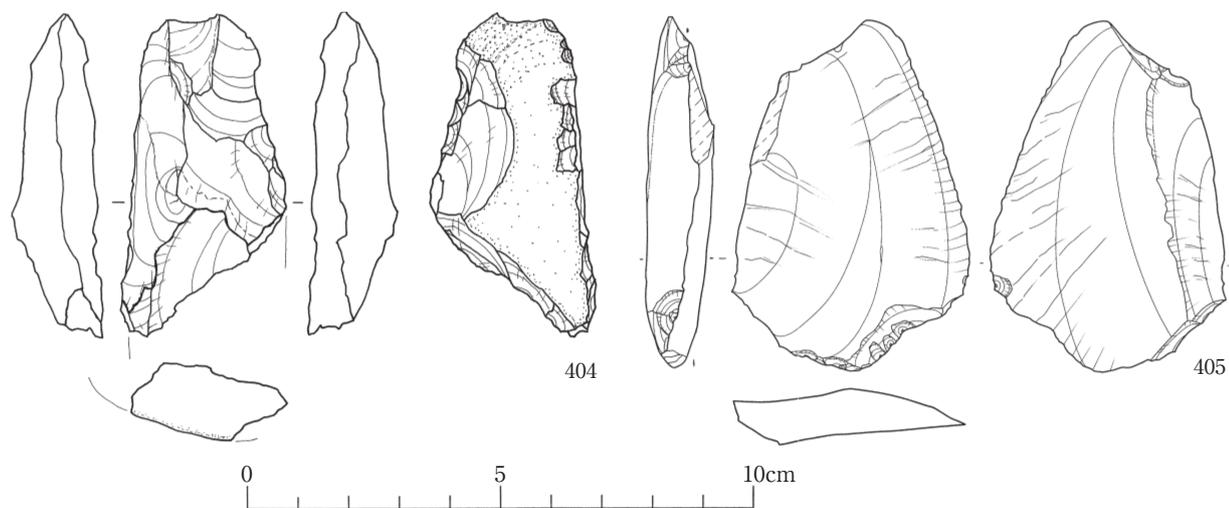


图 171 上黒岩遺跡3次調査C区9-VI層出土石器 (S = 2/3)

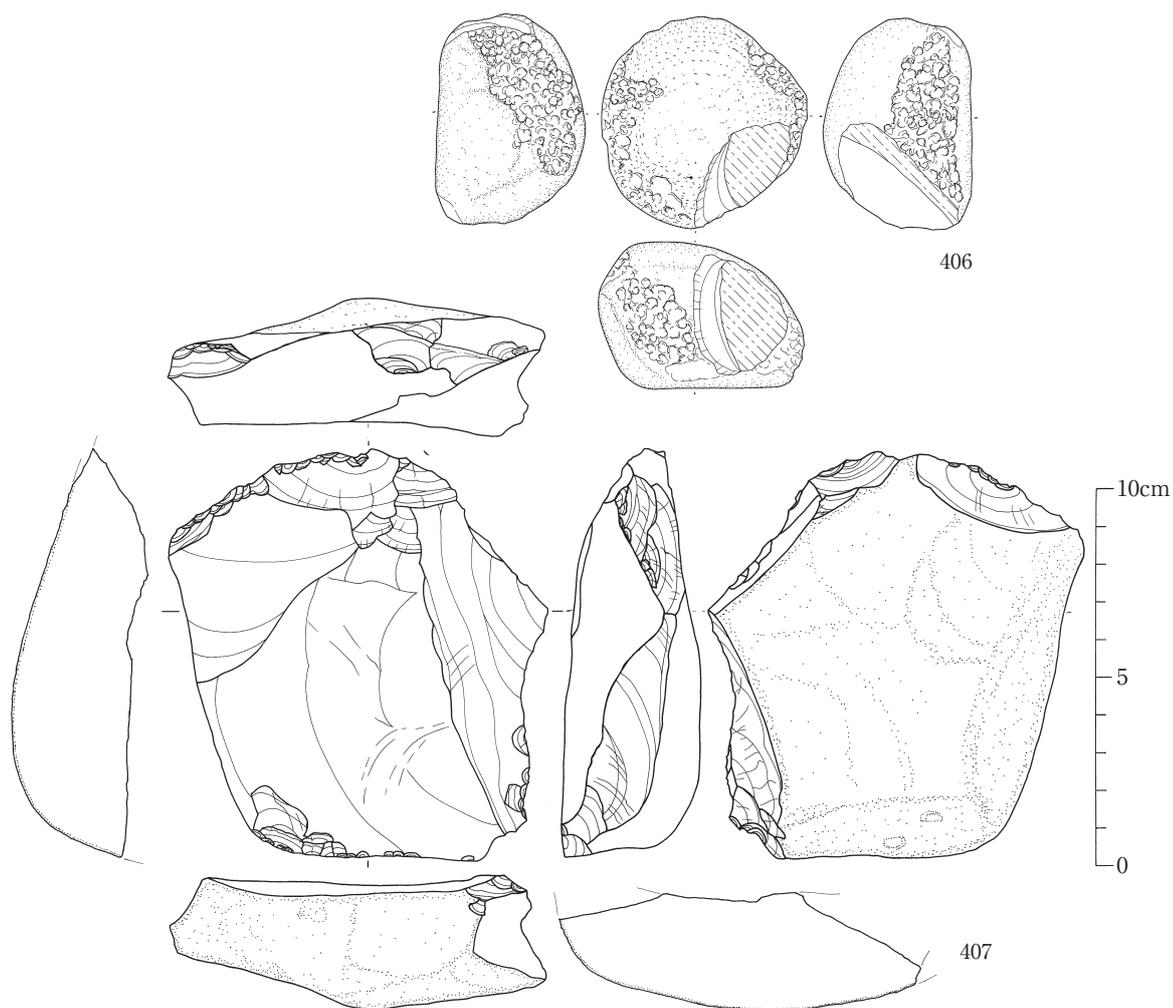


图 172 上黒岩遺跡3次調査C区9-VI層出土石器 (S = 1/2)

敲石(図169-402) 周辺の幅狭い部分に打痕が観察される。石材は砂岩か。

(15) 9Ⅵ層出土(3次調査)

石器類は減少し、確認したのは5点にすぎない。

**有茎尖頭器の未成品**(図170-403) 調整加工はソフトハンマーによる直接打撃である。平面形は水滴形であり、有茎尖頭器の未成品と考える。有茎尖頭器の標準的な大きさからすればやや大きく、あるいは石籠の可能性もある。表面側周辺からの調整加工によって、ステップが生じ、中央部分が瘤状に取り残されている。石材は無斑晶質安山岩である。

**石籠未成品**(図171-405) 表面側に素材のボジ面を残し、裏面側には素材剥離以前の面を大きく残している。幅広剥片を素材にしていることが明瞭である。加工自体は、裏面上端と表面下端付近に若干観察される。石材は無斑晶質安山岩である。

**敲石**(図172-406) 平面形は円形で、側面形・前側面形は楕円形である。周辺の幅狭い部分に打痕が観察される。石材は不明。

**敲石の破損品?**(図171-404) 下半を破損するものの、平面形は撥形である。当初、その平面形から石籠の未成品と推定したが、緑色岩を石材とした例が皆無であることと、裏面側の剥離痕が大きく面的な剥離を施したものとは思えず、最終的に敲石の破損剥片とした。石材は緑色岩である。

**石核**(図172-407) 角のとれた角礫から割りとられた大型の剥片を用いる。側面部に打面を作出し、表面側中央部に向けた剥離を行なう。石材は不明。

## 4 D区

D区は第2次調査の1トレンチD区として調査された部分とこれに接し2トレンチD区として調査された部分、それに単にD区として調査された部分からなっている。出土遺物の日付からD区は第2次調査で終了している。1層～6層までの上層遺物が著しく少なく、地区・層位不明遺物となっている可能性が考えられる。

(1) 1層出土

**敲石**(図173-408) 平面形・側面形は隅円三角形である。周辺の幅狭い部分や緩やかな角部に著しい打痕がある。石材は不明である。

(2) 6層出土

6層の遺物について確認したのは石鏃14点にすぎない。整理経緯を述べると、409～416は「上黒岩遺跡2次、その他、K2-G-03003」と記されたラベルと袋に収納されていた。「その他」や「-G-」は出土区と出土層が分からないことを意味している。また417～422は「上黒岩岩陰2次、第1トレンチC区、K2-C-01005」と記されたラベルと袋に収納されていた。このラベルは古田幹・河原林薫・津村宏臣らのプロジェクトの整理作業時のもので発掘時のラベルではない。しかしこれらの石器は、『日本の洞穴遺跡』写真71に掲載されておりキャプションには「愛媛県上黒岩岩陰 D区第Ⅵ層出土の石鏃」とある〔江坂・岡本・西田1967〕。ここでは『日本の洞穴遺跡』に記載された情報に準拠する。

**石鏃**(図174-409～422) 石材は無斑晶質安山岩6例(410・412・415・416・421・422)、チャート

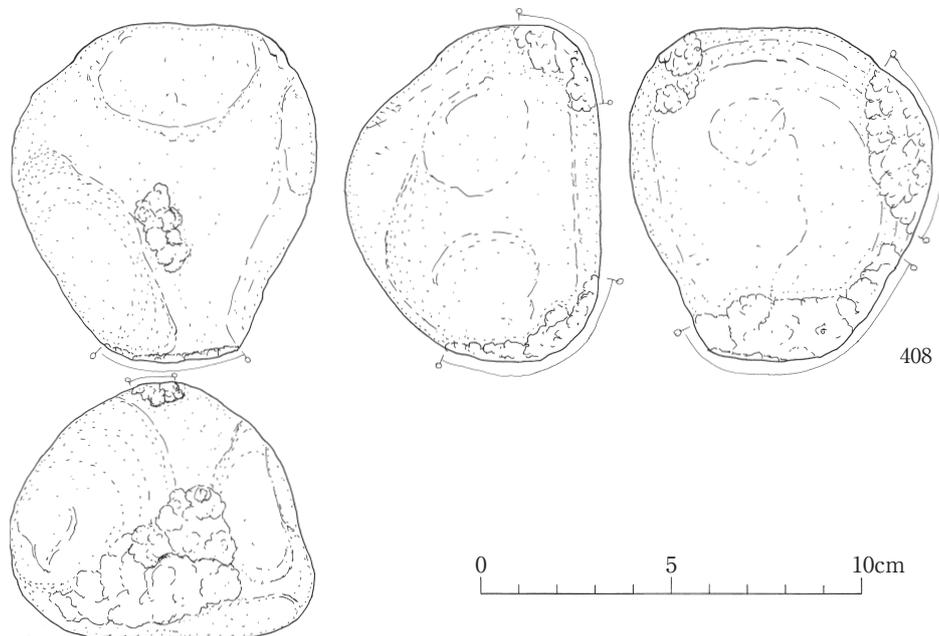


図 173 上黒岩遺跡2次調査D区1層出土石器 (S = 1/2)

1例(409), サヌカイト2点(411・413), 推定金山産サヌカイト4例(414・417・419・420), 赤色硅質岩1例(418)。石鏃は、浅い弧状の抉りを有する石鏃(410~413・415・417・418・421・422), 三角形の石鏃(409・414・416), 肩部が張り基部に抉りのある石鏃(419・420)に形態区分できよう。肩部が張り基部に抉りのある石鏃は異質で「アメリカ式石鏃」と呼ぶ例に近く, うち1例は表裏を研磨した「局部磨製石鏃」である(420)。

### (3) 9層出土

**有茎尖頭器**(図175-423~426, 図176-427~430, 図177-431~434, 図178-435) 13点出土している。石材の内訳は無斑晶質安山岩1例(423), 推定金山産サヌカイト1例(424), 硅質頁岩2例(425・428), 頁岩2例(426・434), 安山岩質凝灰岩1例(427), チャート3例(429・430・433), 赤色硅質岩3例(431・432・435)である。調整加工は押圧剥離を基本とする。423は両側縁は直線的に広がり, 先端部付近に肩部を有する。逆刺と茎部間が抉れる。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。424は両側縁は先端部付近から緩やかに直線的となる。逆刺と茎部間が抉れる。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。表面側に「V」字形の斜状平行剥離がみられる。裏面にも部分的に斜状平行剥離がある。425は上半部が斜めに破損。逆刺が下方に突出する。裏面に素材時のポジ面が残る。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。426は上半部が水平に破損。逆刺が下方に突出する。裾がやや開き気味か。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。427は上半部が水平に破損。破損部付近に肩部が存在か。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。428は上半両側縁が弧状に張り, 逆刺に至る。逆刺はほぼ直角。先端は裏面からの圧力で表面側へ捲れるように破損する。茎部幅1.3cmに比べ推定茎部長が0.4cmと著しく短い。429は上部は水平に破損。先端部から緩く弧状にカーブし, 中位から直線的に開きながら逆刺に至る。逆刺はあまり尖らない。茎部幅より茎部長が僅かに短い逆二等辺三角形。430は両側縁は直線的に広

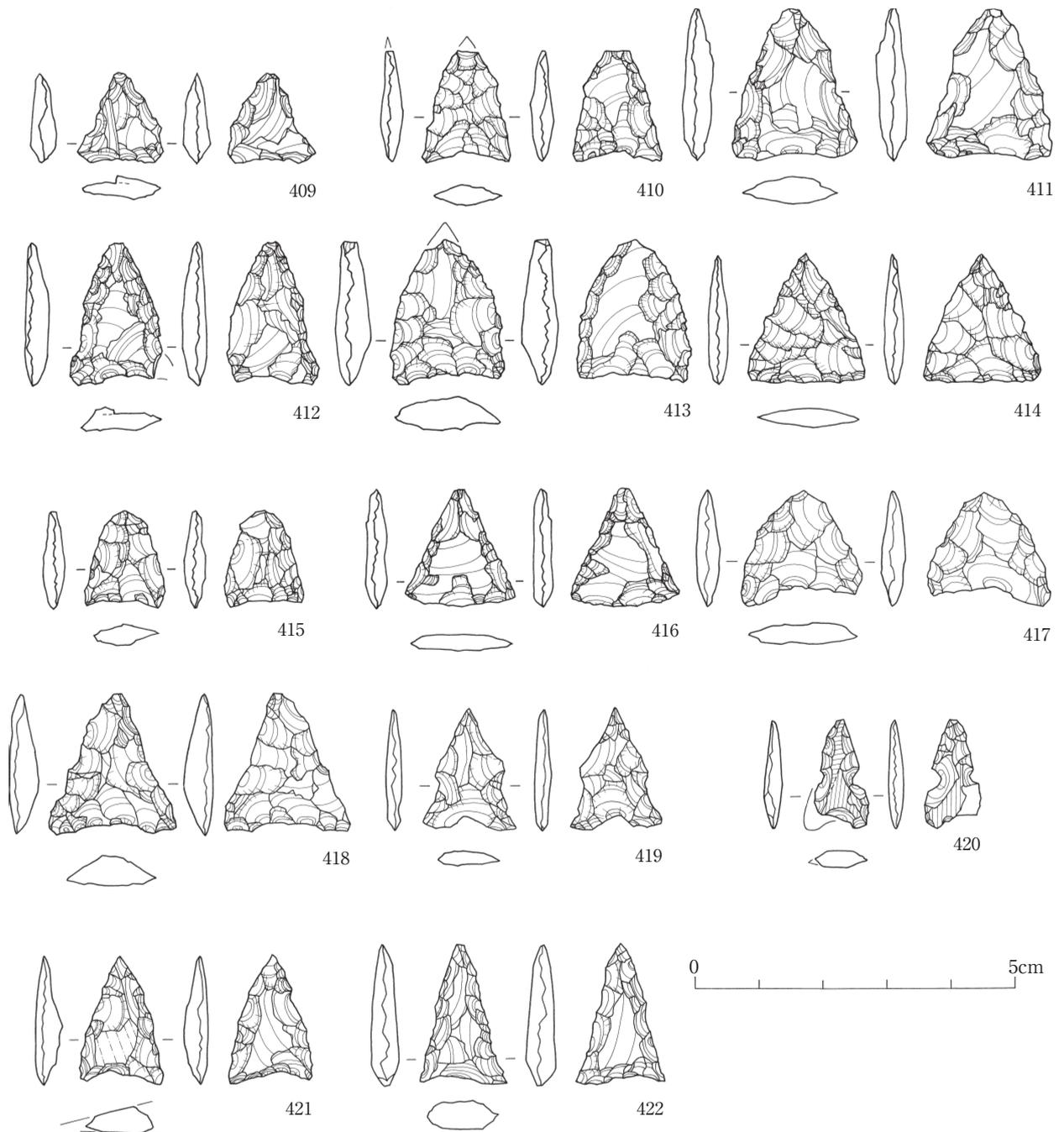


図174 上黒岩遺跡2次調査D区6層出土石器 (S = 1/1)

がり、先端部直下と推定される付近に肩部を有する。逆刺と茎部間が挟れる。茎部は茎部幅0.8 cmで、茎部長0.3 cmと茎部長の極端に短い逆二等辺三角形を呈する。431は先端部直下に肩部(やや張る部分)があり、逆刺部へと直線的に広がる。逆刺の平面角は鈍角で、そのまま茎部へと移行。茎部は幅2.4 cm・長さ0.7 cmである。押圧剥離は平行剥離風である。432は先端部は破損するが、緩やかにカーブしながら直線的に逆刺へ至る。逆刺は鋭くない。茎部は幅1.9 cm・茎部長は0.45

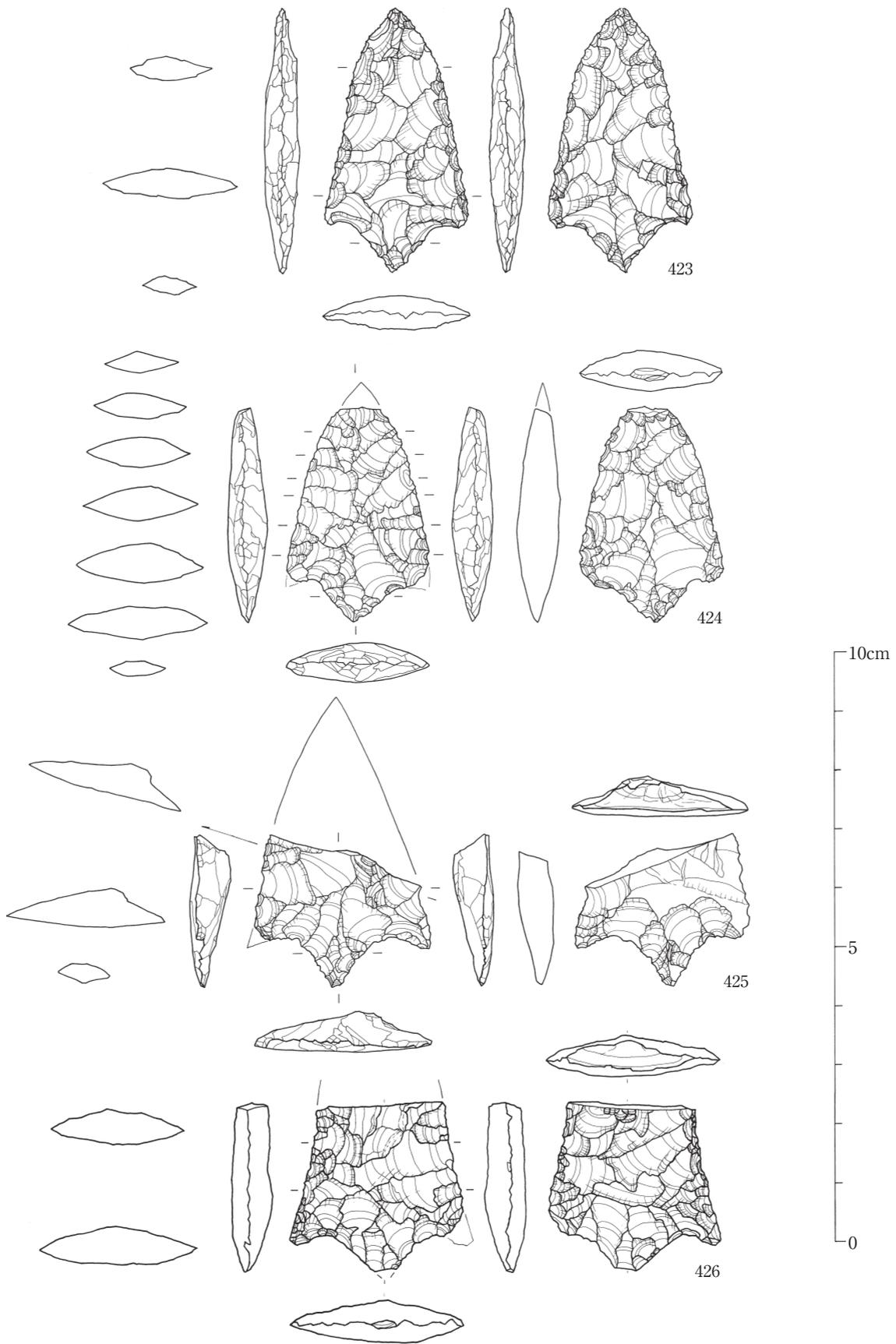


图 175 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

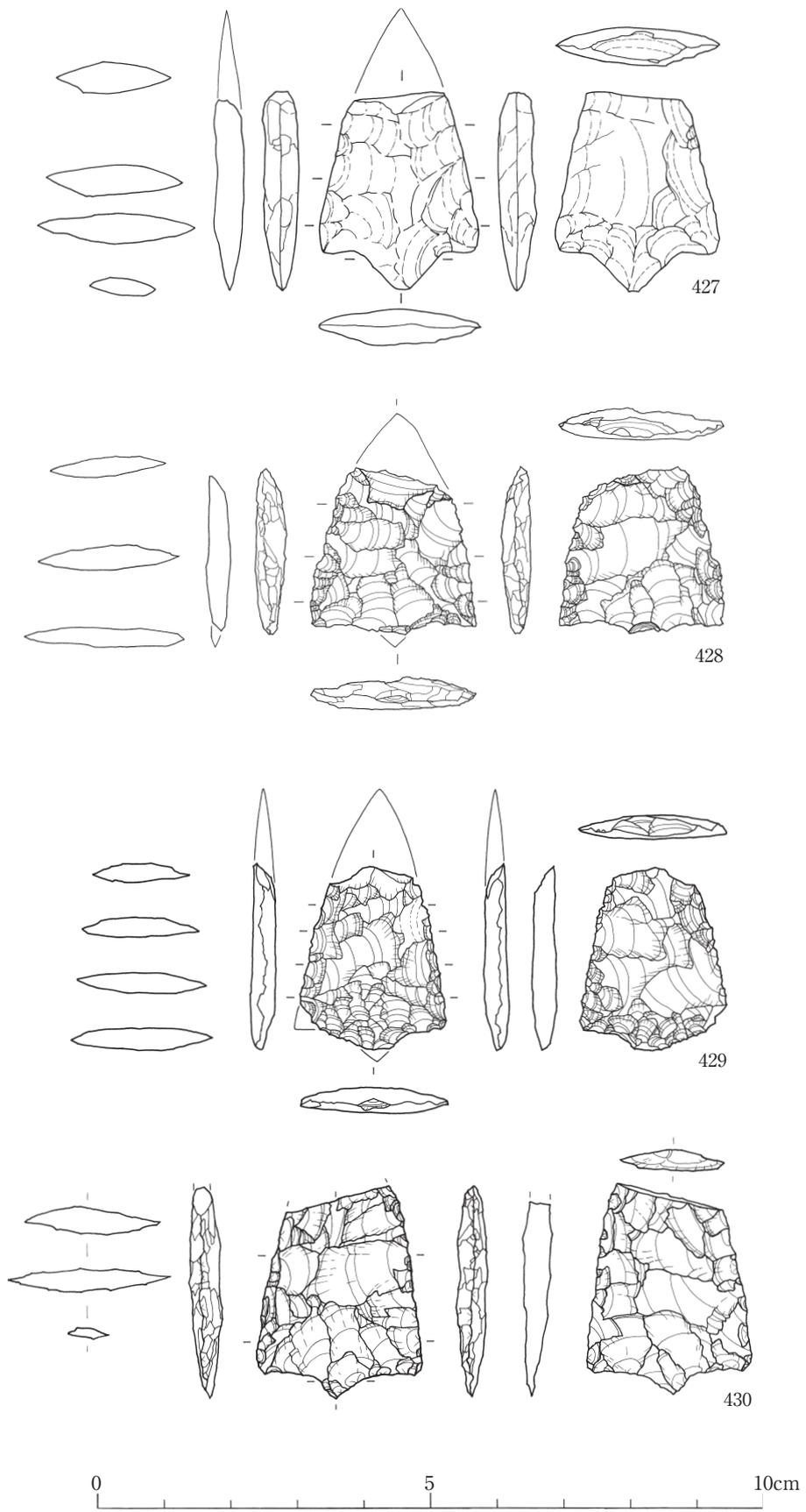


图 176 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 1/1)

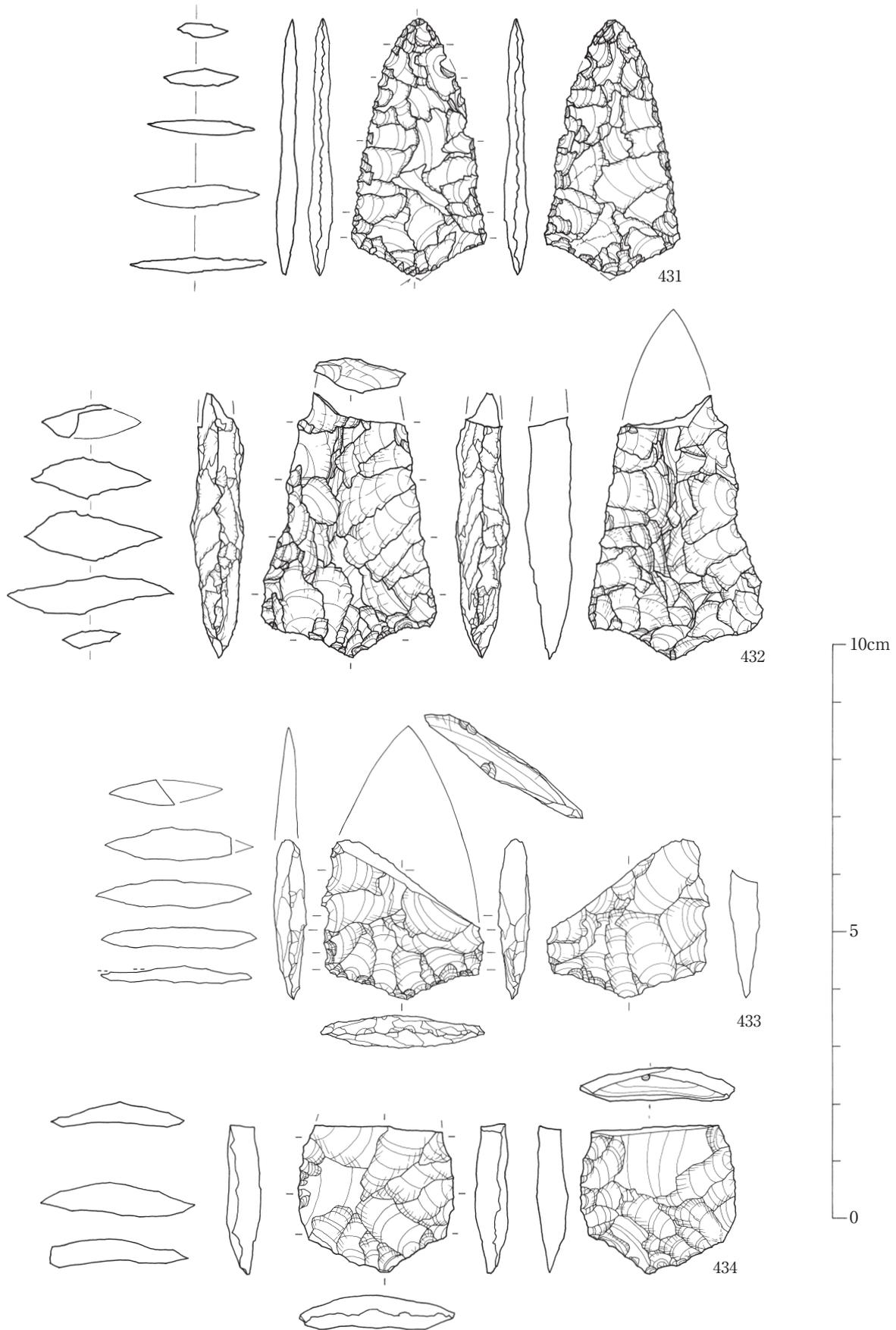


图 177 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

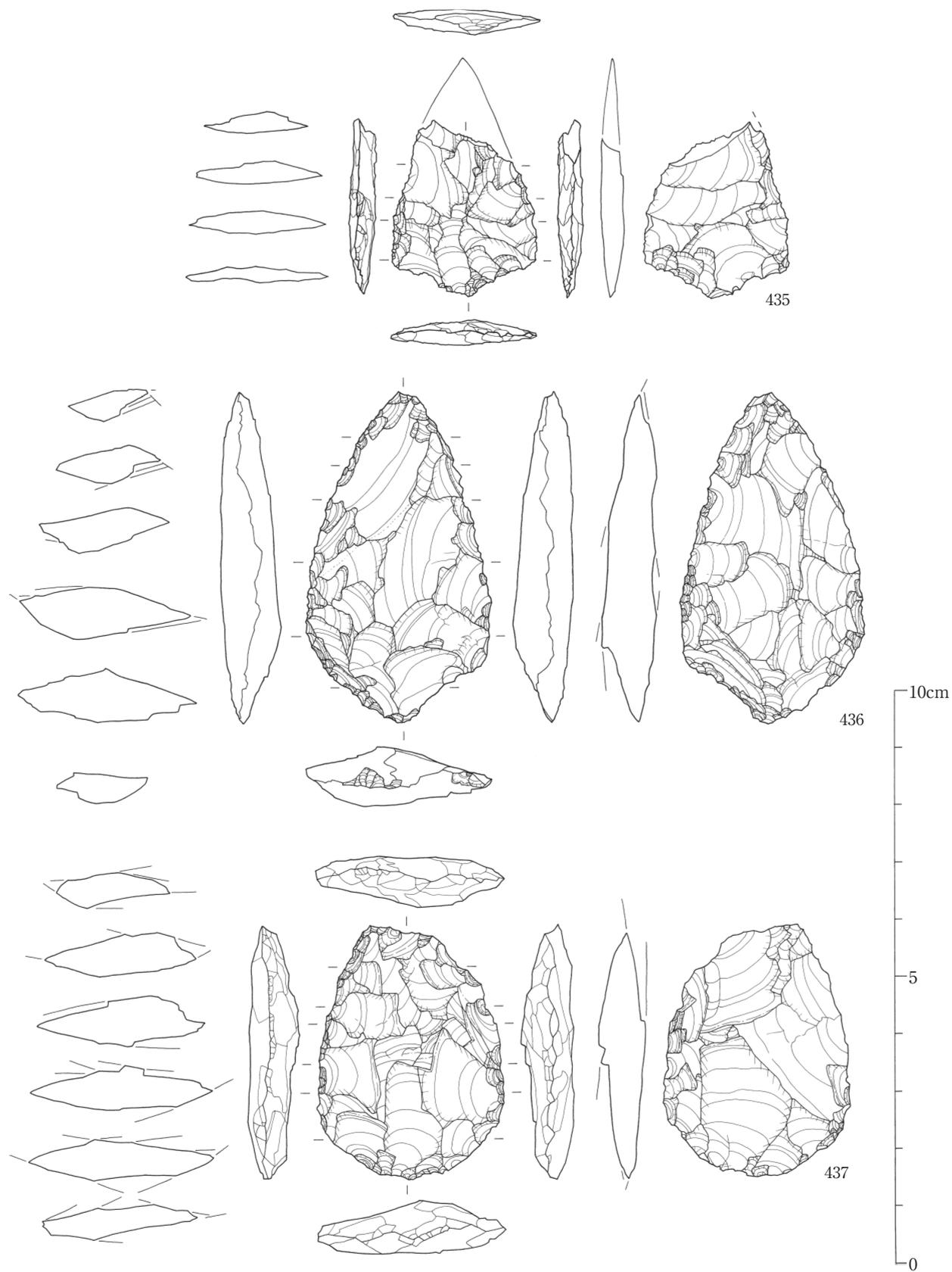


图 178 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 1/1)

cm。押圧剥離は表面側右辺で斜状平行剥離風。裏面は平行剥離。433は中位から茎部よりに斜めに破損する。おそらく先端部から側縁が弧状に張り、逆刺へ至る。茎部付近から器軸方向への押圧剥離が著しい。茎部は幅広で、茎部長の短い逆二等辺三角形。434は中位で水平に破損。おそらく先端部から側縁が外方に張り、内側へ巻くような逆刺。茎部は左側では逆刺から移行するが、右も大差なく、幅広で、茎部長の短い逆二等辺三角形である。435は先端部は破損するが、緩やかにカーブしながら逆刺へ至る。逆刺は鋭くない。茎部は幅広で、茎部長の短い逆二等辺三角形である。茎部端が破損。押圧剥離がやや粗い。

**有茎尖頭器の未成品** (図 178-436・437) 436は水滴形の原形から茎部作出へ移行した段階である。押圧剥離も施すが、その多くの剥離はソフトハンマーによる直接打撃である。石材は赤色硅質岩である。437は水滴形の原型であったと推定するが、表裏両面の先端に上方からの衝撃による破損が生じている。表面側左辺部には押圧剥離がみられ、下端には茎部作出を開始した痕跡が窺える。石材は硅質頁岩である。

**槍先形尖頭器** (図 179-438~440) 438は全長が約3cm前後あり、石鏃とするにはやや大きすぎ、加工も押圧剥離であるが石鏃とは違い、有茎尖頭器にしても細すぎる。裏面は平行剥離状の調整である。石材は外来系のサヌカイトである。439は本例は右側辺の一部を欠くが、ほぼ完形である。全長約7.1cm、復元最大幅約2.9cmの大型で、木葉形というべきか。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃による。石材は安山岩質凝灰岩である。440も大型で、調整加工はソフトハンマーによる直接打撃による。石材は輝石安山岩である。

**槍先形尖頭器未成品** (図 180-441~442) 441は表裏に素材以前・素材剥離時の面が残る。幅広剥片を用いる。表面側左側に素材剥離時の打面部があったのか、横断面の右半がやや厚い。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃か。その後表面側下半の周辺部で細部調整を加え、下端を尖らせる。石材は無斑晶質安山岩である。442は裏面に素材剥離時の面が残る。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃か。その後、表面側下半の周辺部で細部調整を加え尖らせる。平面に対し垂直に脈石英が貫入し、ステップが生じている。これが未成品となった理由か。石材は赤色硅質岩である。あるいは両例とも有茎尖頭器大型品の未成品か。

**局部磨製石斧** (図 181-443) 『日本の洞穴遺跡』写真 67 右側「愛媛県上黒岩岩陰 D区IX層出土の尖頭器」と記載された資料である。調整加工はソフトハンマーによる直接打撃で、最初に表面側、次いで裏面側に加工を加える。下半部は両面とも下端方向からの打撃による剥離で、裏面の剥離が凹面状のネガ面となる。下端周辺の表裏両面に斜め方向の研磨を加え刃部とする。刃部は半円形、刃部幅推定約2cm、刃部の断面は裏面に凹面状ネガ面の存在から僅かに円鑿状を呈する。平面形は撥形で石材は硅質頁岩である。

**石篋** (図 182-444, 図 183-445~447, 図 184-448~450, 図 185-451) 7点確認している。石材は無斑晶質安山岩6例(444~449)、サヌカイト1例(450)、不明1例(451)である。調整加工は基本的にはソフトハンマーによる直接打撃によると推定する。444は上半を破損するが、平面形は水滴形か。下端に細部調整を加え半円形に整形している。445は下半を破損するが、平面形は撥形か。上端は尖らずやや円い。446は『日本の洞穴遺跡』写真 67 左側「愛媛県上黒岩岩陰 D区IX層出土の尖頭器」と記載された資料である。やや細長の撥形。上端には細部調整をあまり加えず、下端

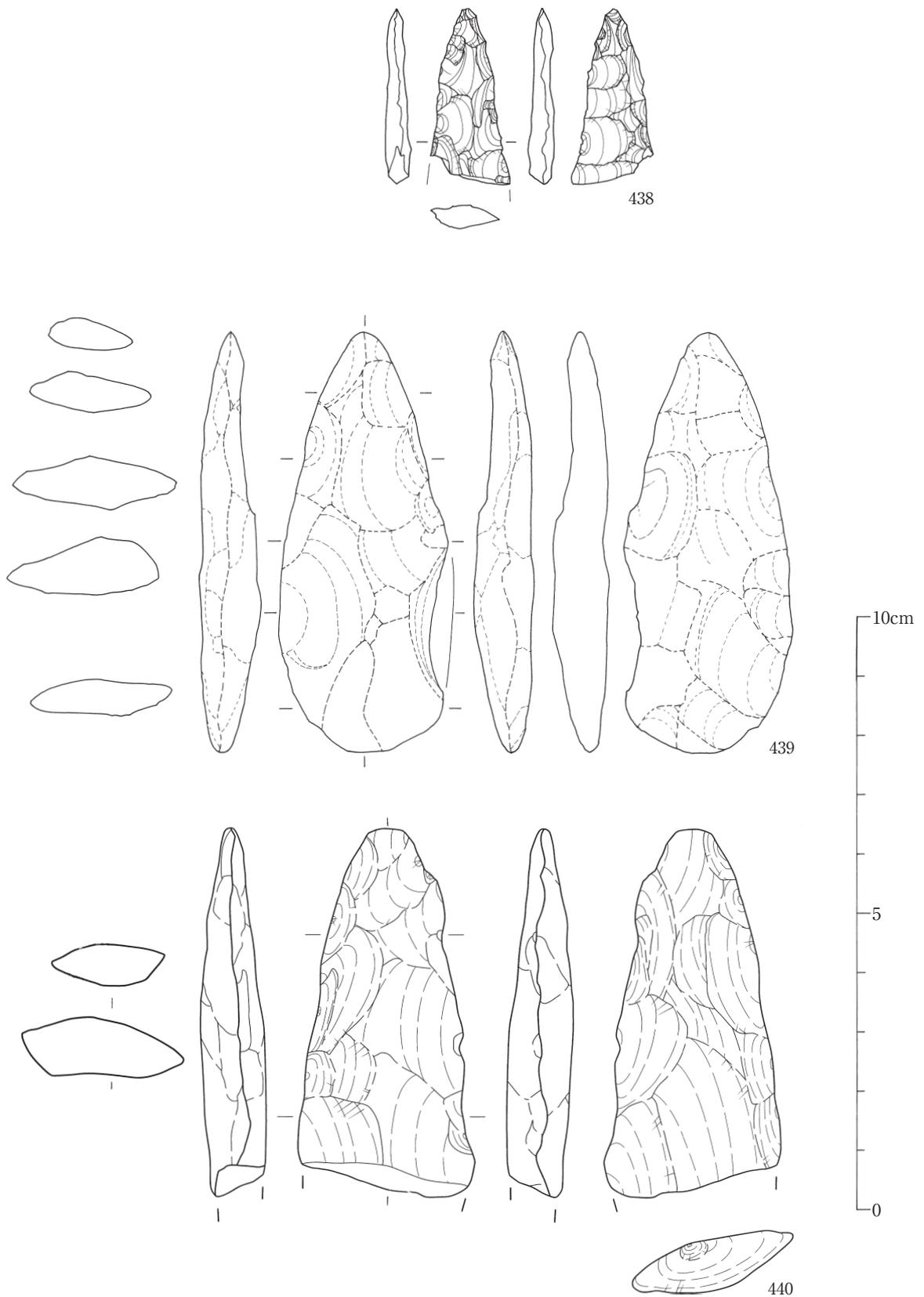


图 179 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 1/1)

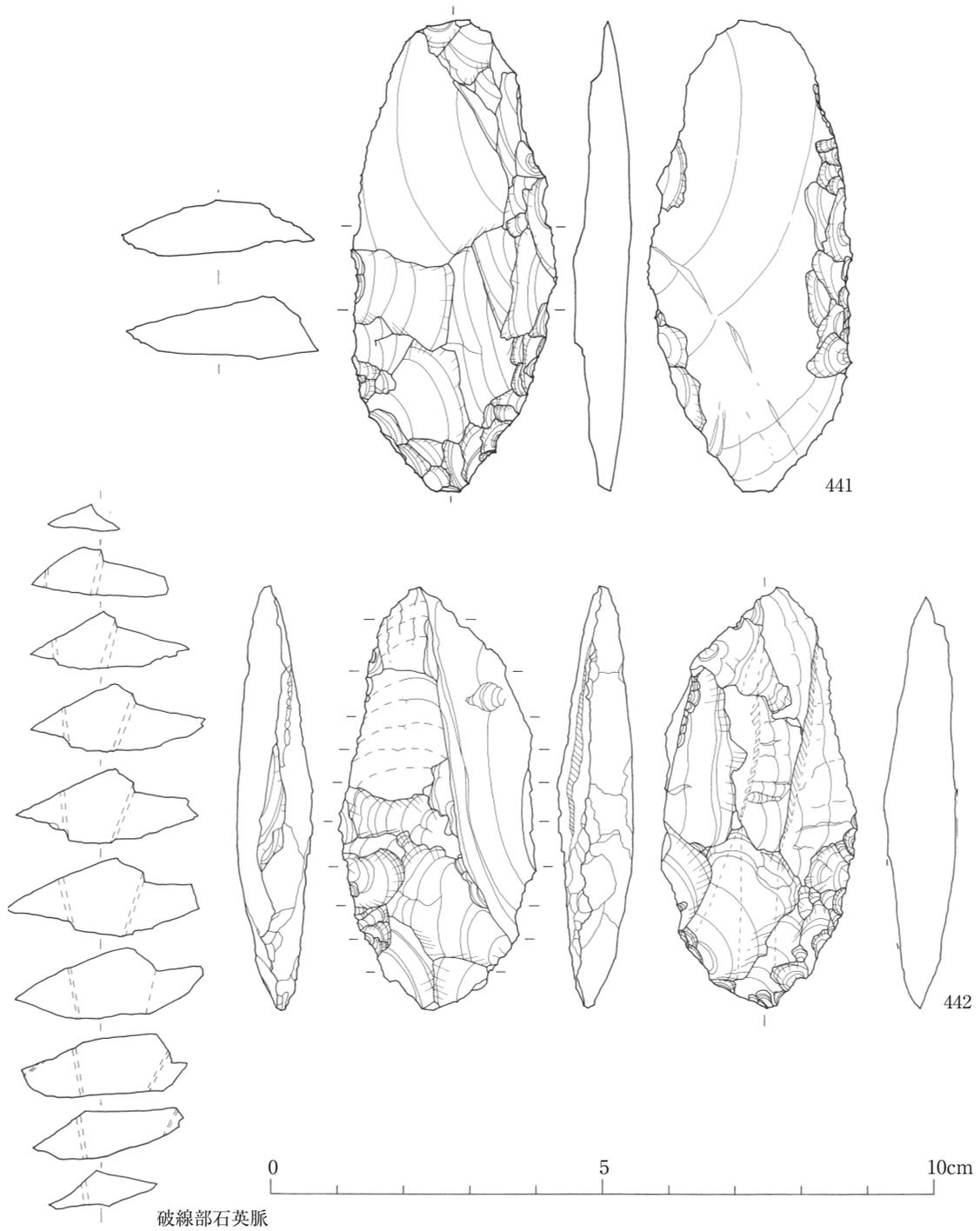


图 180 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

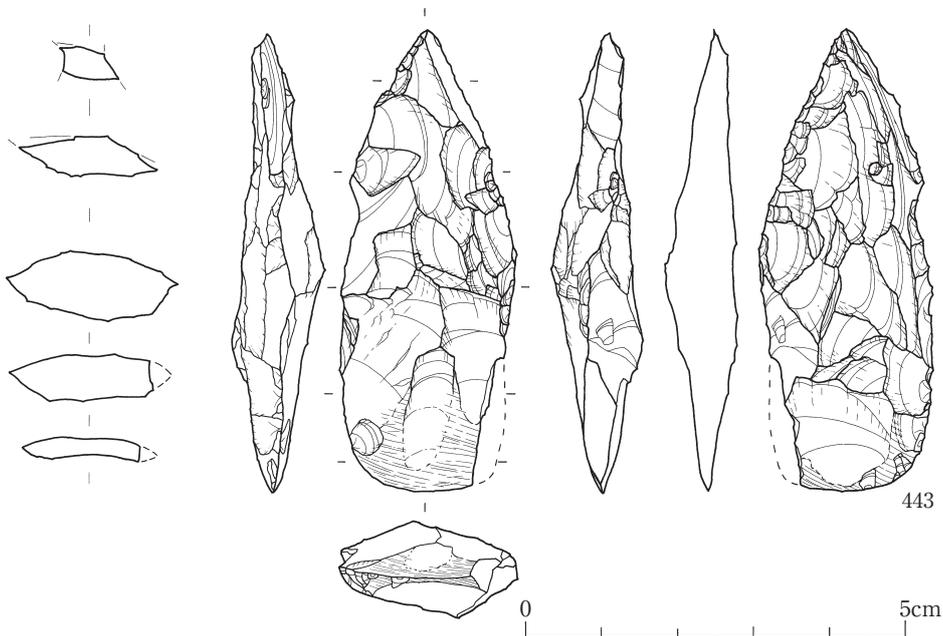


図 181 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 1/1)

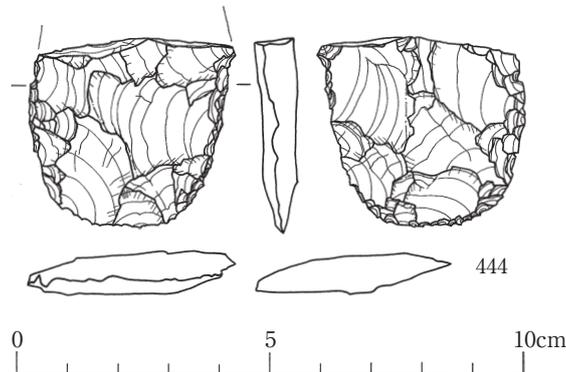


図 182 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 2/3)

の裏面に細部調整を丁寧に加え、半円形の刃部とする。447 は平面形は撥形。上端は尖らない。下端はやや斜刃で、刃部を幅広にとる意図が窺える。448 は平面形はやや細長の撥形。両側縁から入念な剥離を行なうが、表面側右側からの打撃で破損したと推定する。器体の加工からみると完成度は高いが、上端を尖らせる意図は窺えない。下端は執拗に調整加工を加えて半円形に調整・整形した刃部である。刃部の前方観は円盤状である。本資料は上黒岩遺跡考古館に 9 層出土の「打製石斧」として展示されていた資料であるが、『日本の洞穴遺跡』写真 61 に「尖頭器」と記載された資料であることが判明した。この写真を見ると至近距離での出土状況から、破損と同時に放棄されたことがわかる。449・450 は上端及び上半を欠く例であるが、下端を入念に調整加工し、平面形は半円形の刃部を作り出す。長さが短い作例であるが完成度は高い。451 は平面形は水滴形と推定するが、上半部が斜めに破損している。近位端に半円形の刃部を作出。

石筥未成品 (図 185-452) 平面形は木葉形である。調整加工はハード及びソフトハンマーによる

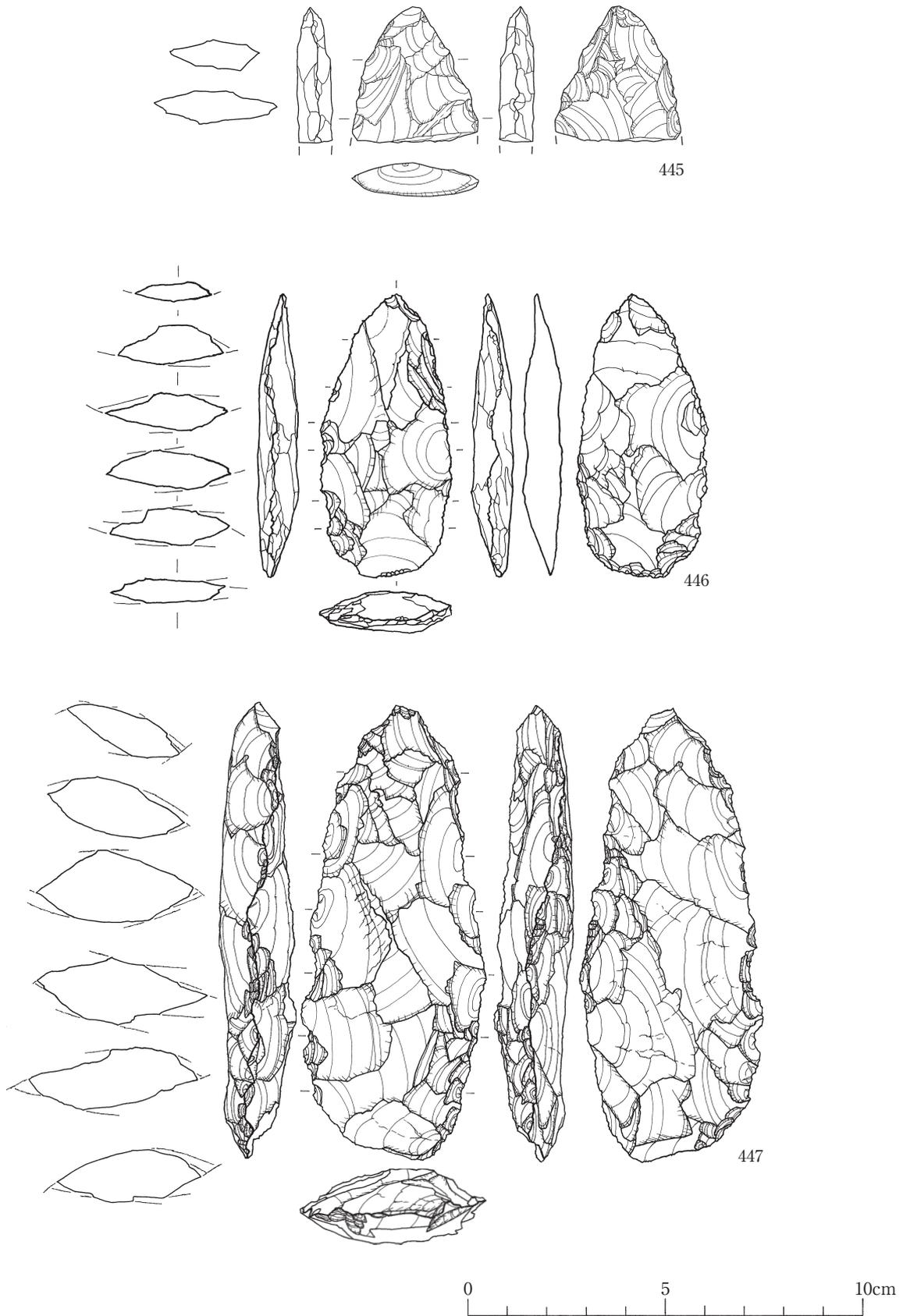


图 183 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 2/3)

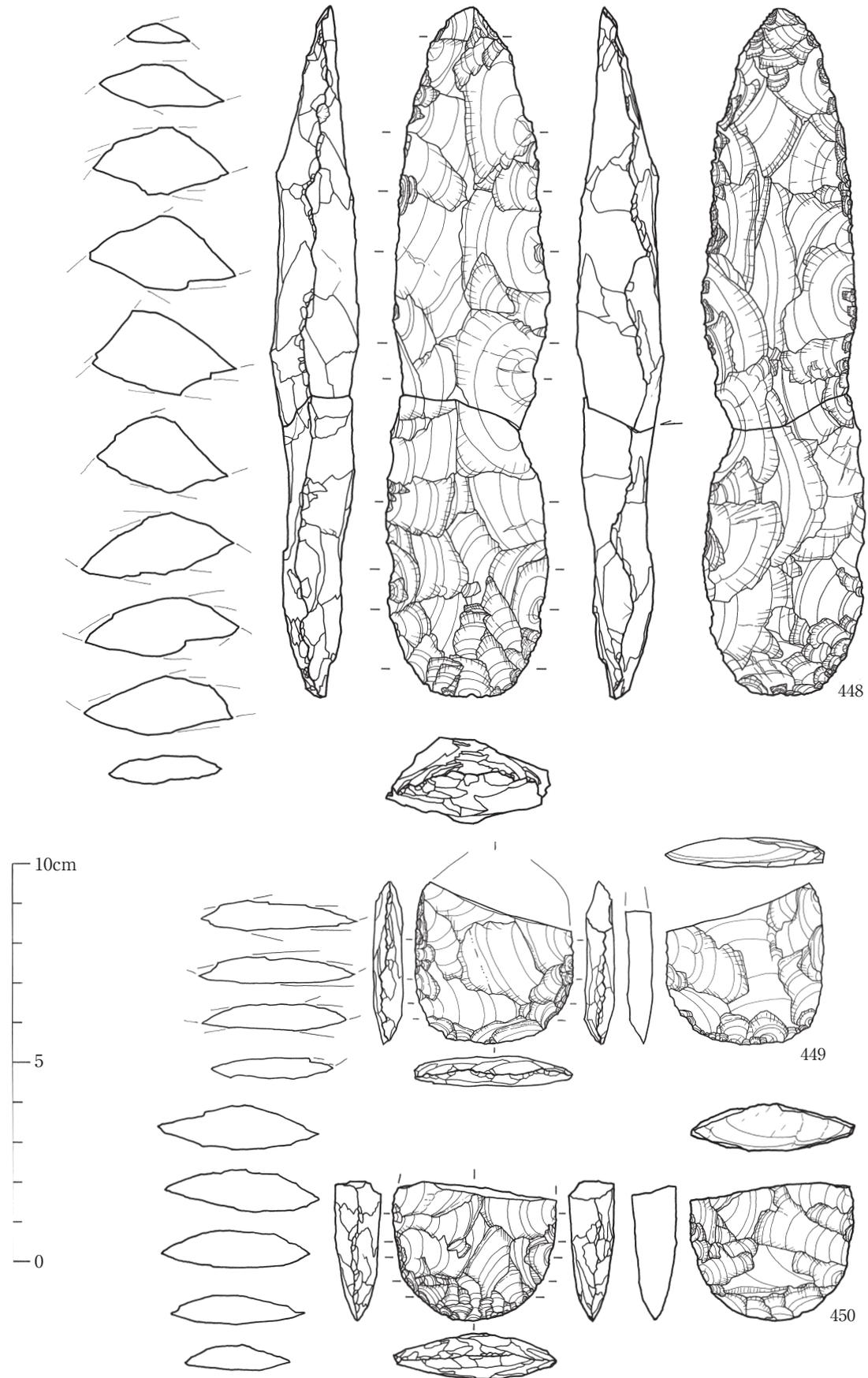


图 184 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 2/3)

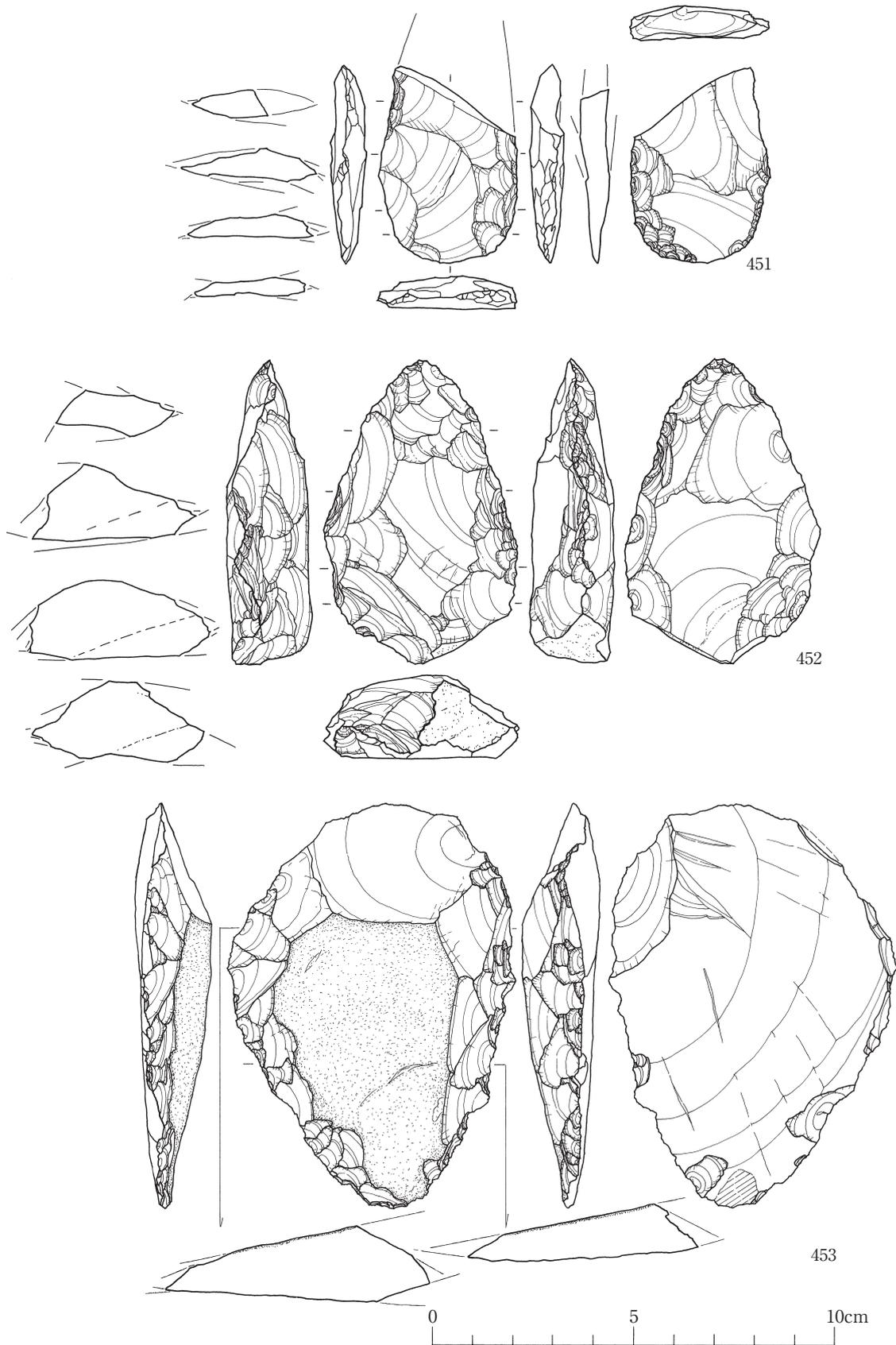


图 185 上黒岩遺跡2次調査D区9層出土石器 (S = 2/3)

直接打撃によると推定する。側縁が大きな波状となっているなど、直線的でない。下半部が厚く、  
礫面を除去できなかったことが成品に至らなかった理由か。石材は無斑晶質安山岩である。

**削器** (図 185-453) 幅広剥片を素材に、直接打撃による調整加工を加える。両側縁への加工は下  
端で収束するが円い。石材は無斑晶質安山岩である。

**剥片** (図 186-455) チャートの角礫から節理で剥がされた剥片で、裏面の左右両端部に小剥離痕

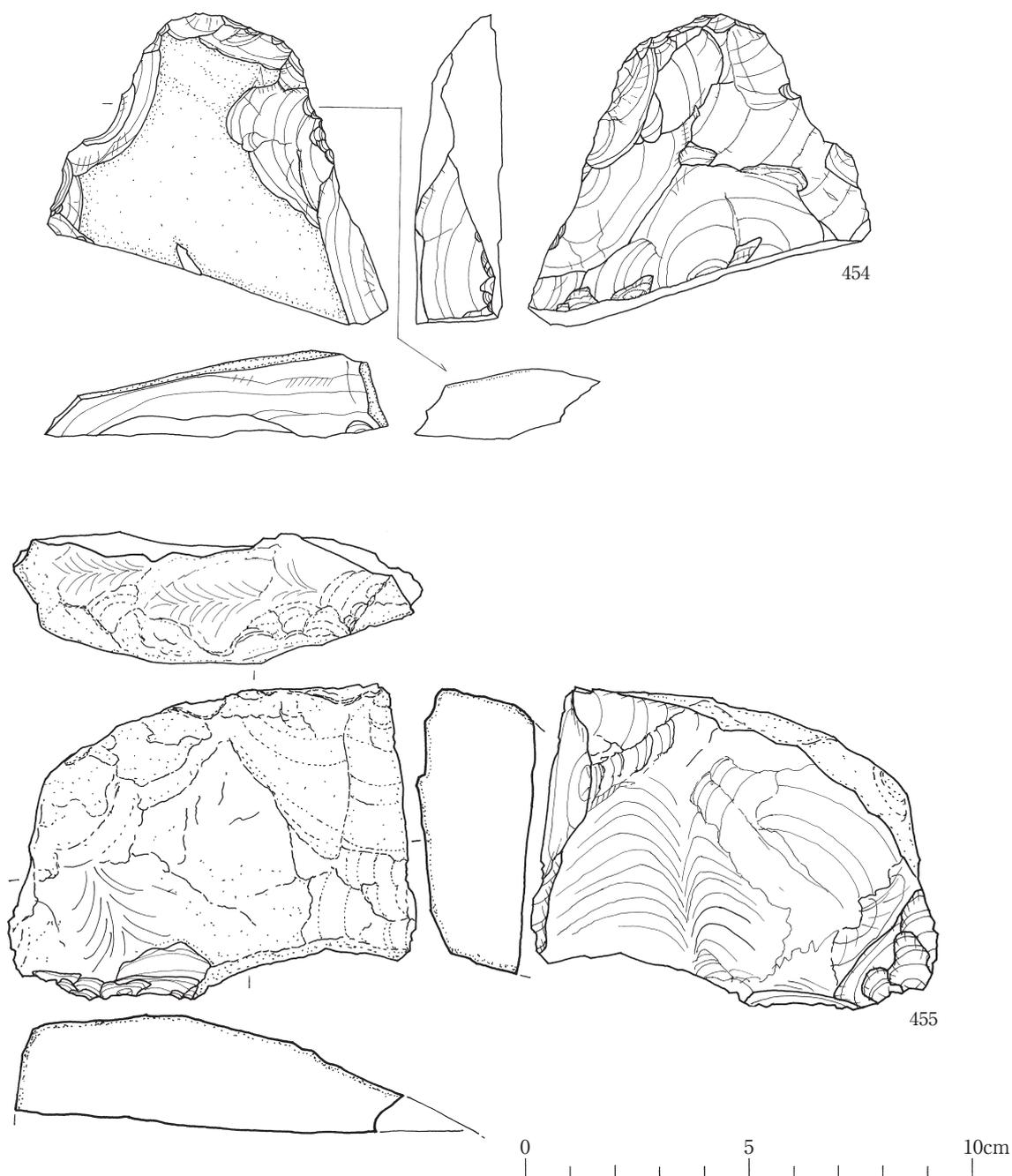


図 186 上黒岩遺跡 2 次調査 D 区 9 層出土石器 (S = 2 / 3)

がある。剥片は多量に出土しているが、石器の素材となりえる例を提示した。

**石核** (図 186-454) 撥形の形状が下半で斜めに破損した形。形態から石籠とも考えたが、器体がねじれ、破損面と推定される部分を打面とし、裏面側方向へ剥離作業を行っており、最終的に石核と考えた。求心的な剥離を行なった石核と考える。石材は不明である。

## 5 E区・F区

E区は2次調査の際、1トレンチE区として設定されている。しかし既発表概報のうち西田栄が『伊豫史談』に掲載した「上黒岩遺跡発掘層位と土器・石器関係概要表」には何も記されていないし〔西田1962〕、『日本の洞穴遺跡』にも発掘に関する具体的な情報は一切ない〔江坂・岡本・西田1967〕。また石器等についてもこれまで筆者の目に触れたものはない。したがってE区については発掘調査を行なっていないと判断される。

4次調査において、岩陰保存部分の排水を図る必要が生じ、その排水用パイプ埋設工事に伴う調査としてF区が設定されている。F区はE区にかかる場所から西側斜めに1区～4区まで設定されている。このうち1区は実際には調査されていない。当時の日誌に記載された石器類の概要は以下のとおりである。

8月2日：石鏃2点・剥片17点・削器1点・石錘1点，8月3日：剥片7点・石錘1点・礫器1点，8月4日：チャート原石1点・石鏃2点・石斧1点，8月5日：有茎尖頭器1点・剥片9点・礫器1点・搔器1点，8月6日：ポイント1点・剥片8点，8月7日：剥片6点・砥石1点，8月8日：剥片1点，F2区・F3区の石器は以上のとおりである。F4区は8月6日に調査するが遺物はなかったようだ。F2区・F3区は長井数秋と大山正風が調査員となるなど、愛媛県内の在住者を主体とした調査区である。こうした経緯もあってFトレンチの遺物の整理を松山で行なうことになり、西田栄が保管することになる（8月12日付江坂日誌）。現在、愛媛県歴史文化博物館保管の遺物はFトレンチ出土遺物が多い。筆者も可能な限りFトレンチの遺物の図化を図ったが、時間的制約もあり、数点の図化に留まった。しかし上記の日誌記載から多量の遺物群ではない。

**有茎尖頭器** (図 189-464・465) 石材はいずれもチャートである。464は上半と逆刺を欠く。両側縁は直線的に開き、逆刺へ至る。調整加工は押圧剥離であるが、大小様々。茎部は逆刺のすぐ内側から茎部となり、茎部長が短く、逆二等辺三角形を呈す。465は上半部破片である。尖端部直下に肩部を有し、側縁が外方に張る。

調整加工は押圧剥離で、表面側は「V」字状斜状平行剥離に近い。

**有茎尖頭器の未成品** (図 189-466) 調整加工はソフトハンマーによる直接打撃で、側縁が波状となっている。水滴形の原型から裏面の下半部の右側縁部を茎部作出の為、直線的に押圧剥離で加工し始めたばかりの例である。石材は無斑晶質安山岩である。

## 6 出土区・出土層位不明

1961年の1次調査で出土した資料を一部含んでいる（写真図版参照）。1次調査は2次調査にお

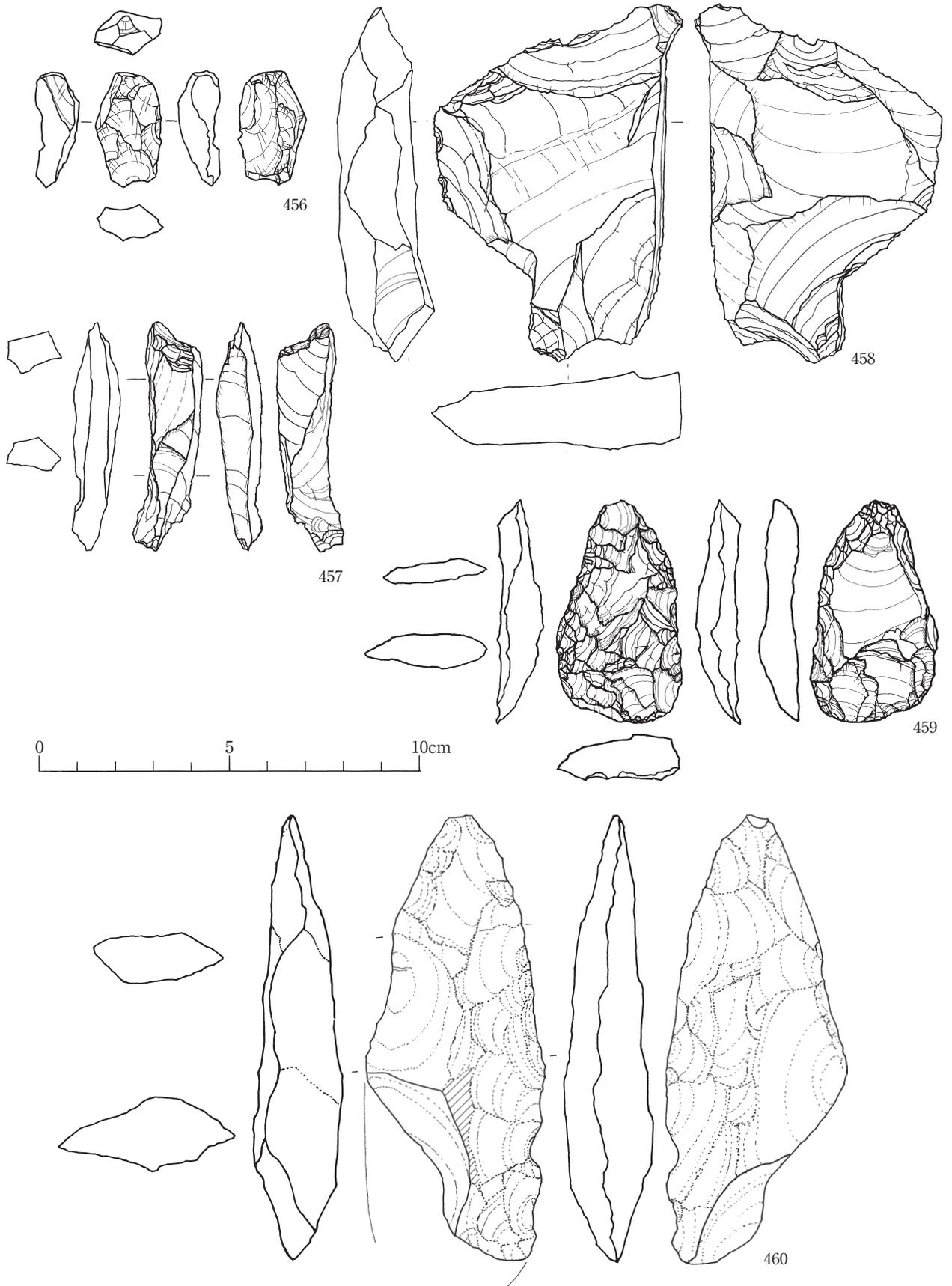


图 187 上黒岩遺跡4次A区3層・4次A拡張区4層・3次C区6層・2次1, 4トレC区9層出土石器 (追加) (S = 2/3)

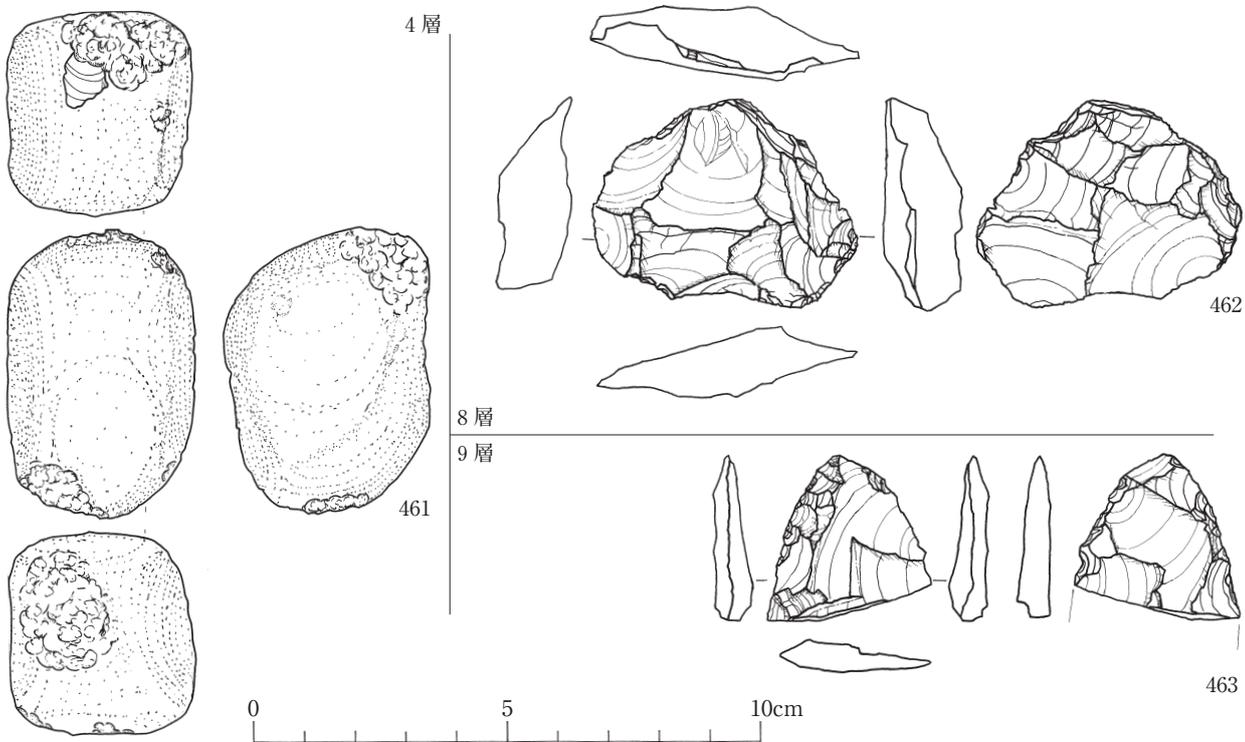


図 188 上黒岩遺跡4次調査B区4・8層, 2次調査C区9層出土石器 (S = 2/3)

ける1トレンチのA区・B区・C区で行なわれている。1次調査は僅か三日間だけの調査で、実質的に試掘といえるものである。このため1次調査を回数に含めず、2次調査を「1次調査」としたうえで3次調査を「2次調査」とした文献もある〔江坂1962〕。西田栄が撮影した写真には石鏃をはじめ石匙やトロトロ石器などが含まれているが、6層以下の草創期に遡る資料は見受けられないことと、僅か三日間の調査であったことから考えて1層から4層までの深度であったと思われる。

**有茎尖頭器** (図 189-467, 図 201-519) 467は石材は推定金山産サヌカイトである。先端部は破損するが、緩やかにカーブしつつ逆刺へ至る。逆刺は鋭い。茎部は幅1.75cm・長さ約0.3cmと幅広い茎部幅と短い茎部長である。逆刺と茎部間が弧状に決れる。押圧剥離は不規則である。519は刃縁が外方に張る。器面調整は大小の不定形押圧剥離で、特に裏面は斜状平行剥離状である。左縁中央から茎部方向に破損。茎部幅より茎部長が短い。写真記録の少ない4・5次調査出土の可能性はある。

**石匙** (図 190-468・469) 468は縦型で摘み部と右側辺を調整加工する。石材は赤色硅質岩である。1次調査出土資料で、「B区No.82 上黒岩4次9層69・8・7」と記されたラベルが資料に添付されていたが、4次調査以前の出版物に掲載されているのでラベルは誤りであろう。469は横型で素材の打面部を取り込むように摘みを両面からの加工で作出し、近位の裏面縁部に刃こぼれ状の加工がある。石材は硅質頁岩である。1次調査出土資料である。

**石鏃** (図 190-470~476, 図 191-477~482) 13点を図化した。石材は無斑晶質安山岩1例(480), 硅質頁岩2例(473・475), 硅質岩1例(476), 頁岩1例(479), サヌカイト1点(474), 推定金山

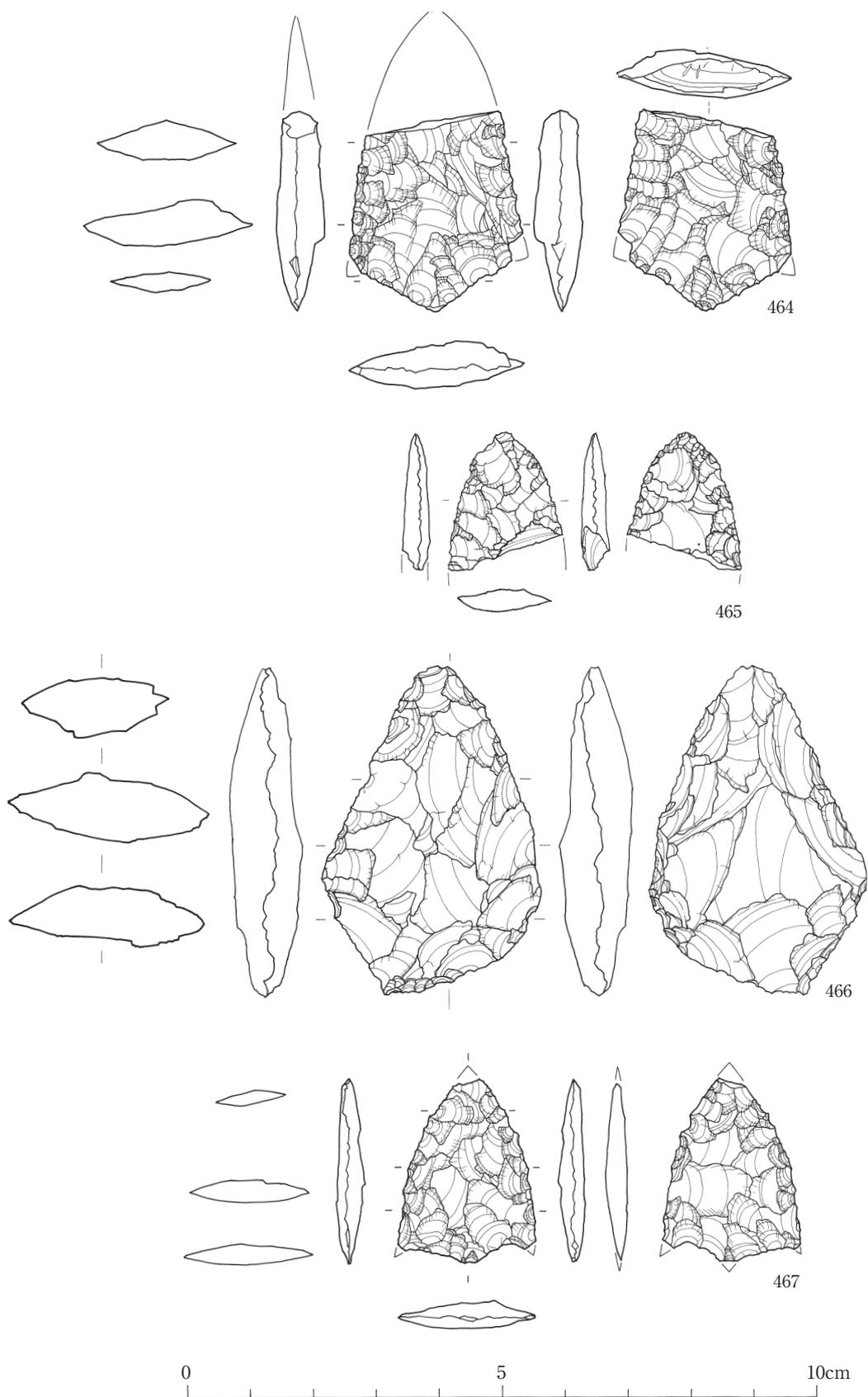


图 189 上黑岩遺跡 F 区出土層位不明石器 (S = 1/1)

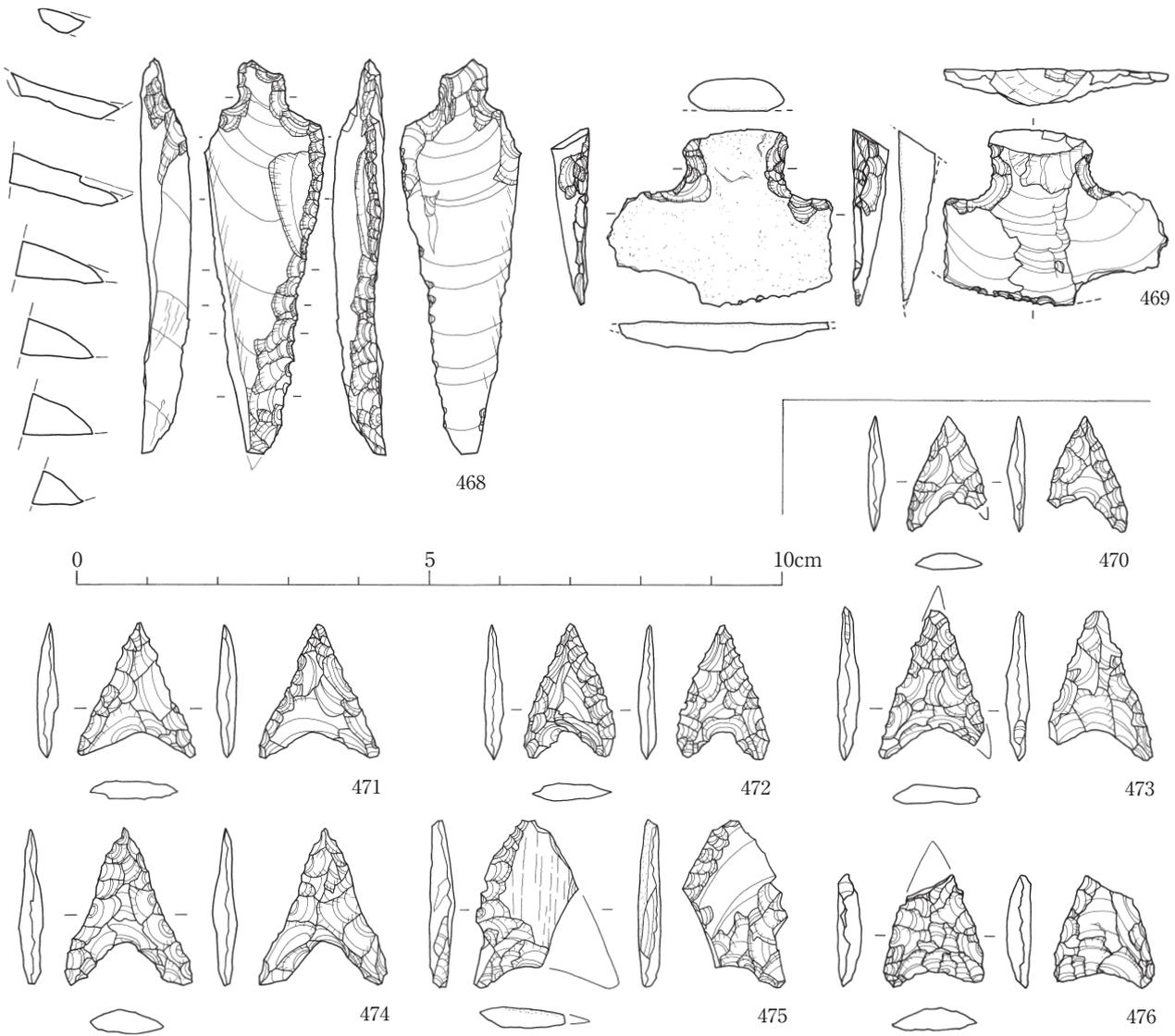


図 190 上黒岩遺跡層位不明石器 (S = 1/1)

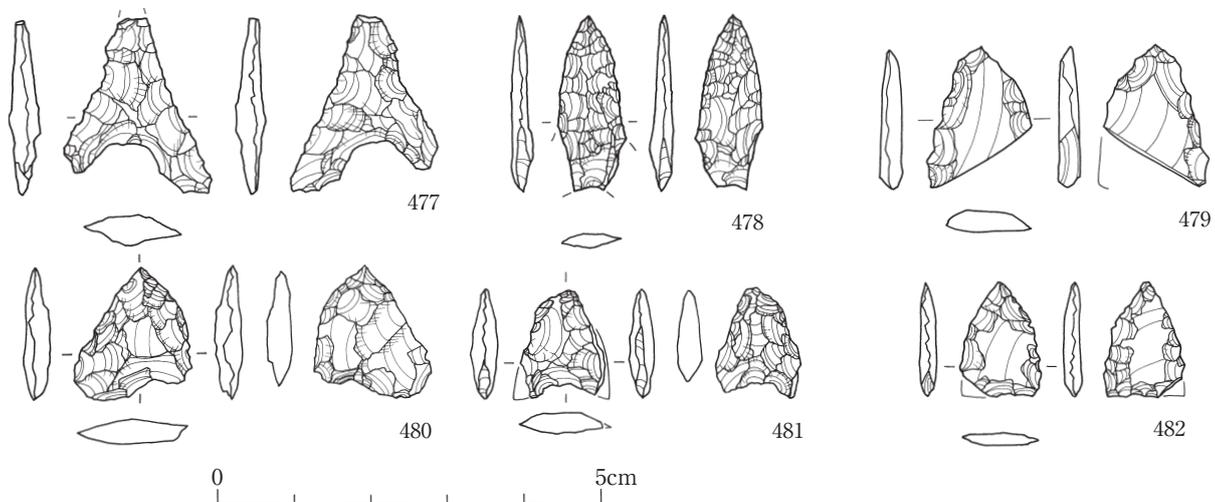


図 191 上黒岩遺跡2次調査・その他出土層位不明石器 (S = 1/1)

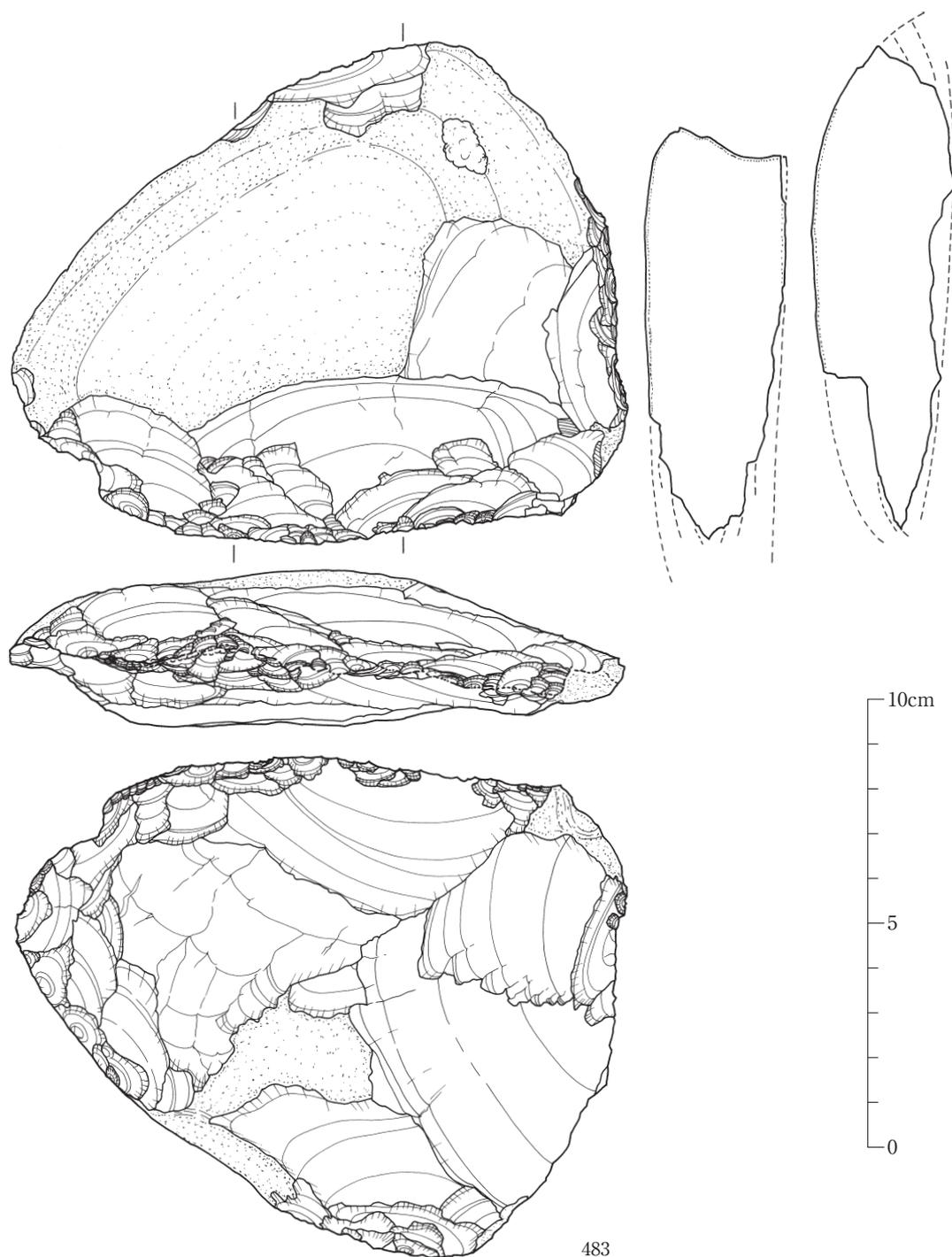


图 192 上黒岩遺跡出土区不明 9 層出土石器 (S = 2/3)

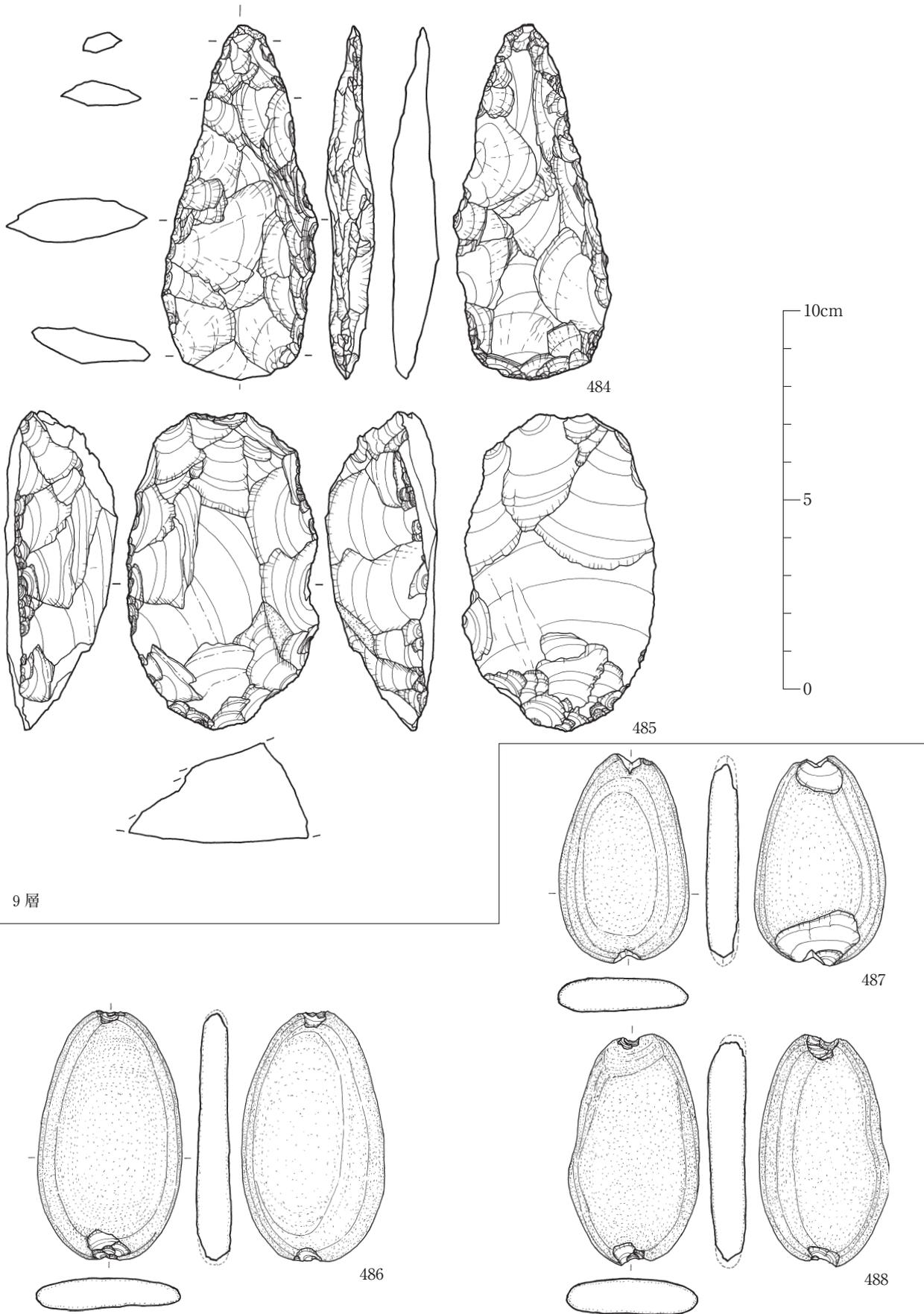


图 193 上黑岩遺跡 9層出土，出土層位不明石器 (S = 2/3)

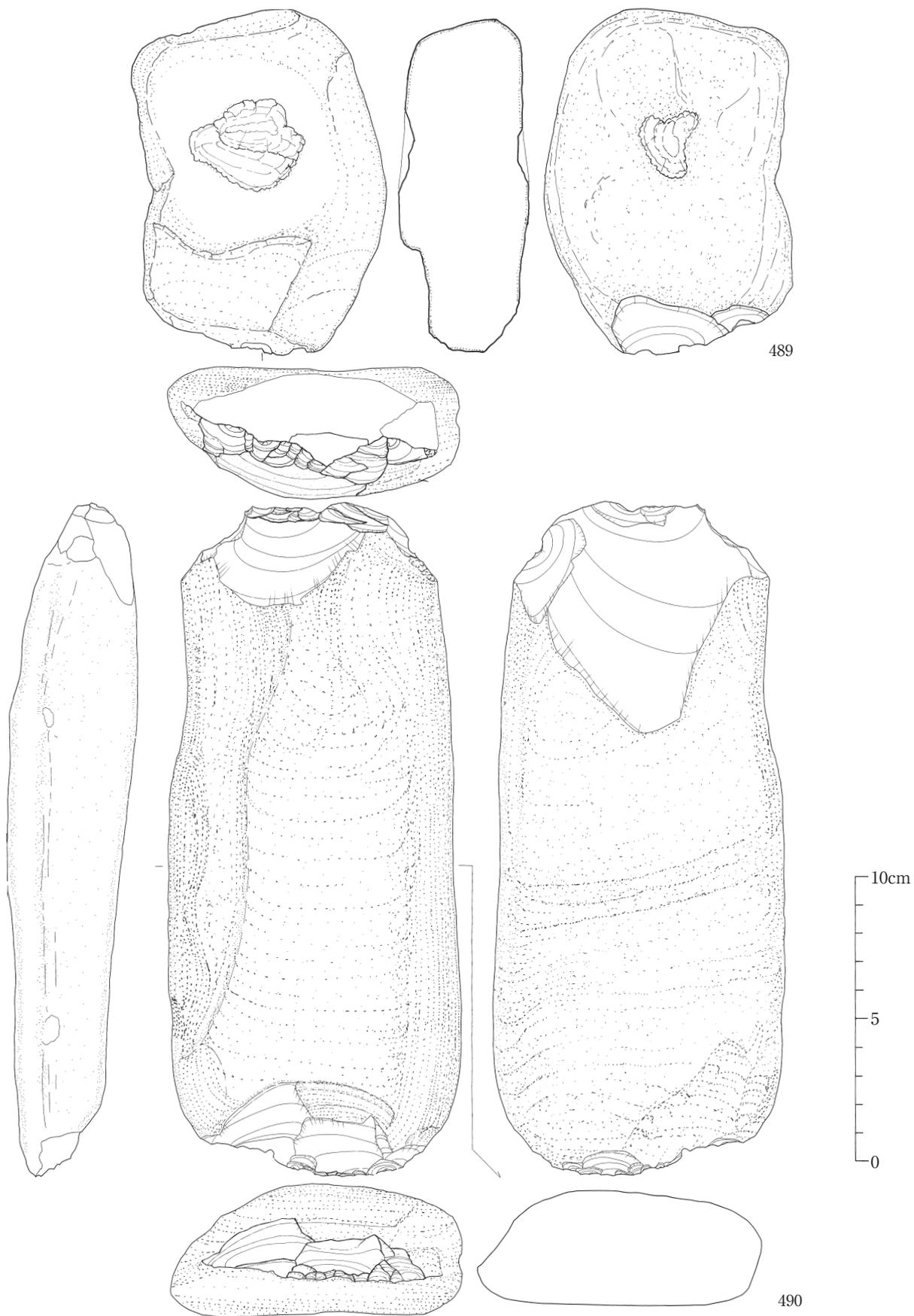


図 194 上黒岩遺跡 2次調査 2 トレンチD区層位不明石器 (S = 1/2)

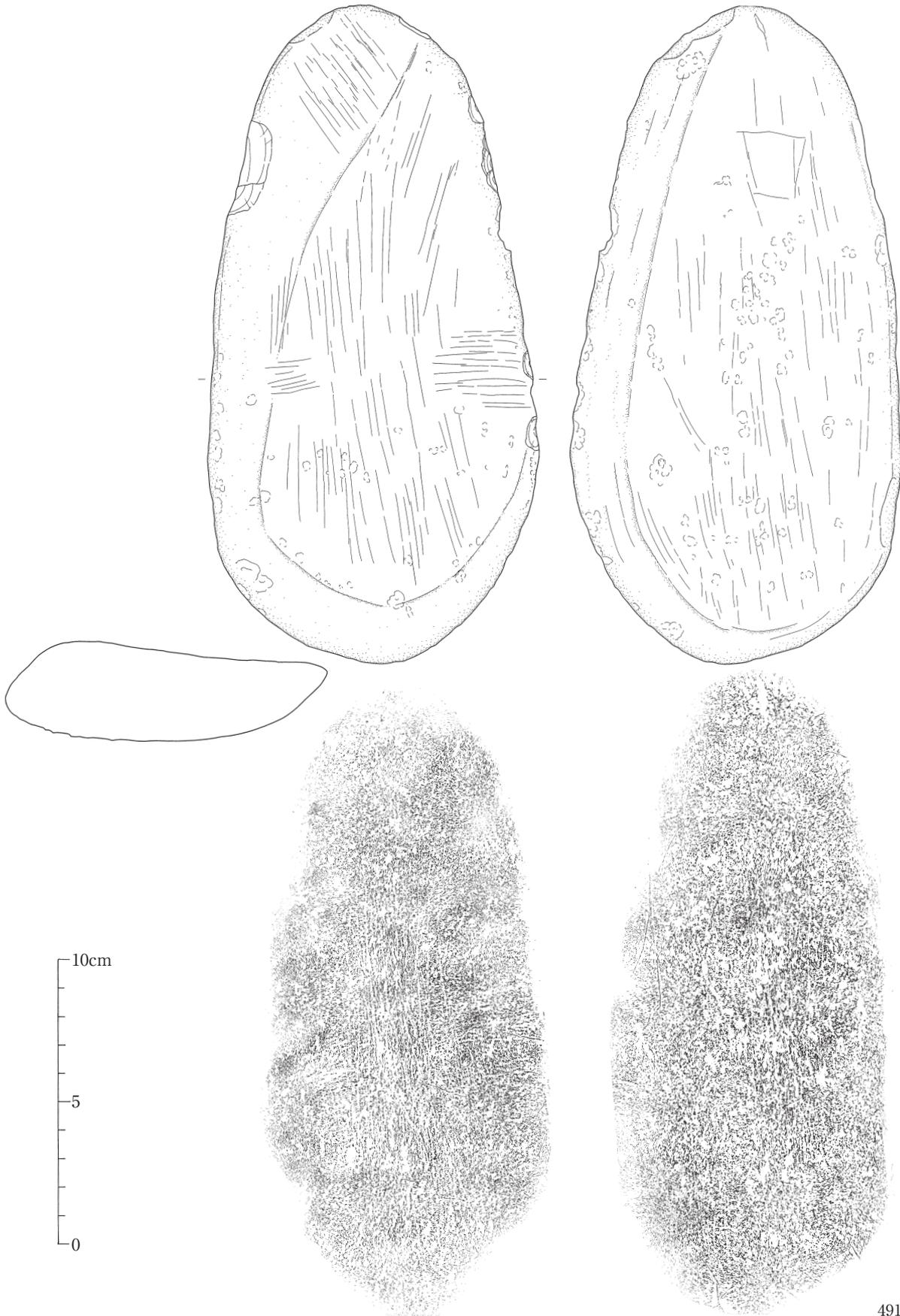
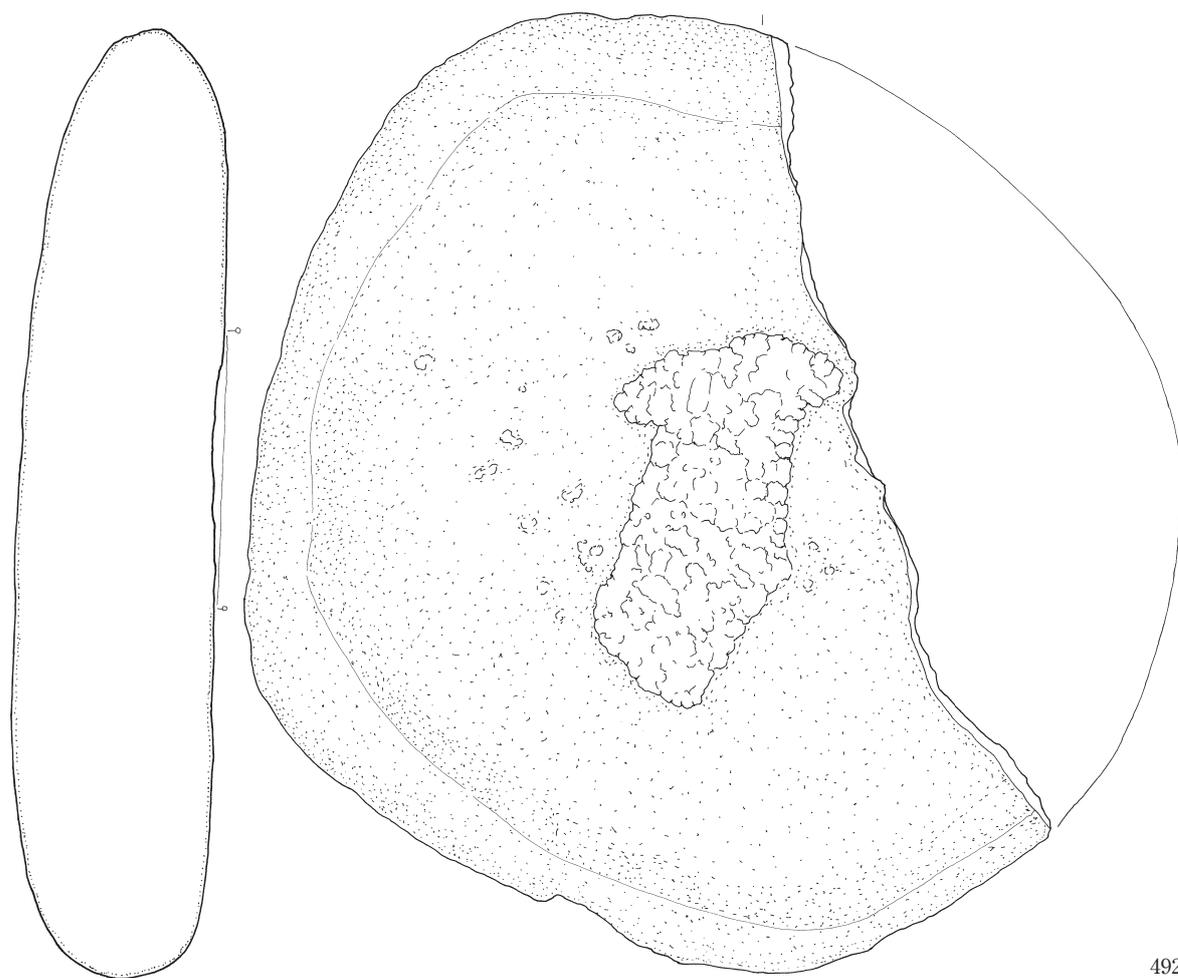
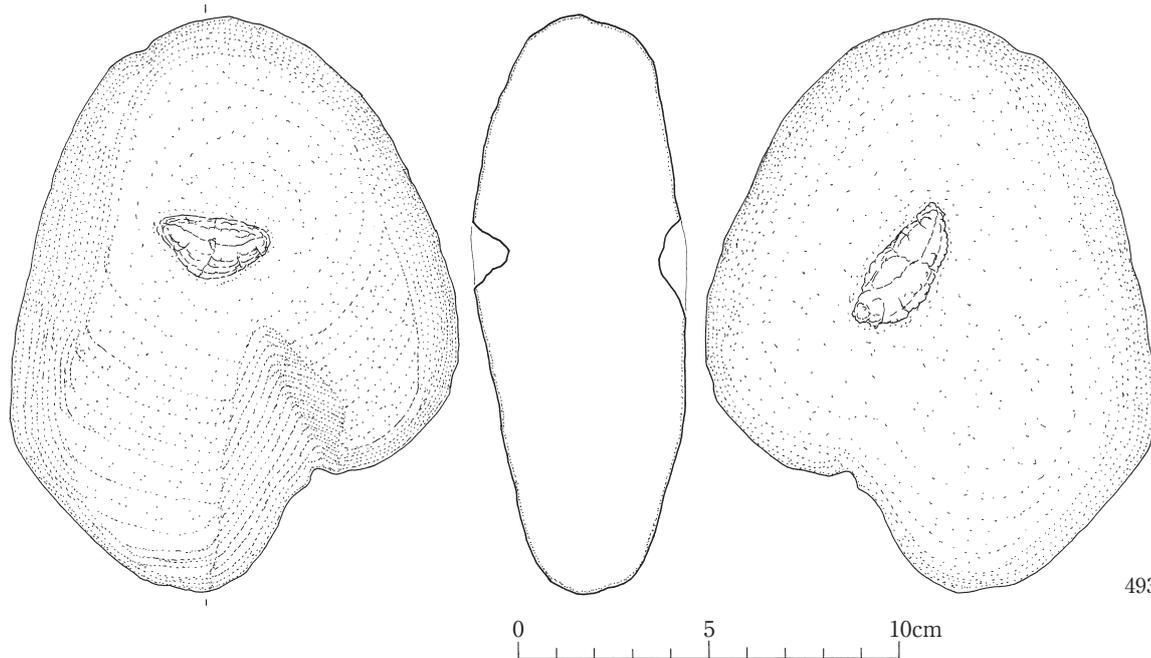


图 195 上黒岩遺跡層位不明石器 (S = 1/2)



492



493

0 5 10cm

图 196 上黒岩遺跡層位不明石器 (S = 1/2)

産サヌカイト 2 例 (470・471), 赤色硅質岩 4 例 (472・477・478・481)。浅い弧状の抉りを有する石鏃 (473・476・480・481), 抉りの深い石鏃 (470~474・477・478), 三角形の石鏃 (482), 形態不明の石鏃 (479) に形態区分できよう。482・479 を除く 11 点は縄文時代早期から後期・晩期の石鏃と比較しても違和感がなく, この間の一般的な形態といえるだろう。一方, 三角形の石鏃 (482) は 6 層の例に類似する。

**礫器** (図 192-483) 石材は無斑晶質安山岩で, 側辺の表裏に打面を入れ替えつつ剥離している。表面側を広く剥離するが, 推定復元線からみると厚い剥片の剥離は多くない。剥離はハードハンマーによる直接打撃と推定する。縁部の細かい剥離は敲打による潰れか。

**石篋** (図 193-484) 平面形は撥形である。丁寧なソフトハンマーによる直接打撃で調整加工が行なわれる。この加工によって上端を円く整形した基部とし, 下端は裏面を整形して半円形の刃部とする。石材は無斑晶質安山岩である。

**削器** (図 193-485) 平面形は楕円形で, 断面形が三角形である。右側辺がナイフ形石器のような背部加工に類似し, 左辺が細かい剥離の連続によって形成した刃部であろう。石材は無斑晶質安山岩である。裏面に「1次9層」のシールが貼られていたが, 第1次調査では9層は認定されていないので2次調査のことであろう。2次調査で9層を調査した第1トレンチD区, C区の出土か。

**石錘** (図 193-486~488) 3点とも小型扁平楕円形の緑色片岩を用い, 端部に若干のはつりを加える。端部剥離部分の縁が垂直方向に使用痕とも推定される条痕があるが, 「切目」ではない。

**凹石** (図 129-489, 図 131-493) 石材は不明。表裏に溝状の凹部がある。489 は敲石としても使用されたのか, 端部に剥離痕がある。C区6層に類例が多い。

**敲石** (図 194-490) 石材は長い断面楕円形の緑色片岩を用いる。両端で敲打作業を行い, 衝撃による剥離痕が礫器状に形成されている。

**砥石** (図 195-491) 石材は長く扁平な長楕円形の緑色片岩を用いる。硬い研磨対象物を角度つけて研磨の反復運動をした痕跡が両面に観察される。石の短軸方向に線條痕が生じた部分もあるが, 概ね長軸方向に線條痕が生じている。図 139-297 と似る。

**台石** (図 196-492) 石材は不明。約 30 cm近い円形礫の中央に打痕がある。

## 7 表採資料 (竹口コレクション)

竹口渉氏が採集・所蔵された遺物である。

**有茎尖頭器の未成品** (図 197-506, 図 198-507・508) 507 は茎部を作り始めた段階, 506 は茎部の作出と斜状平行剥離を開始した段階である。

**小型石篋** (図 198-509・510) 亀甲形に調整後, 素材の近位端へ細部調整を施した例。

**石鏃** (図 197-494~505) 12 点を図化した。498 は早期押型文土器に伴う鋏形鏃。503~504 は 6 層の例に類似する。

**石篋** (図 199-511・513・515) 511・513 は刃部を半円形に加工。515 は天地逆の可能性もある。

**石錘** (図 199-512) 端部ハツリ後に使用によるものか, 条痕が観察される。

**削器** (図 200-516・517) 516 は幅広剥片が素材。517 は搔器とすべきか。

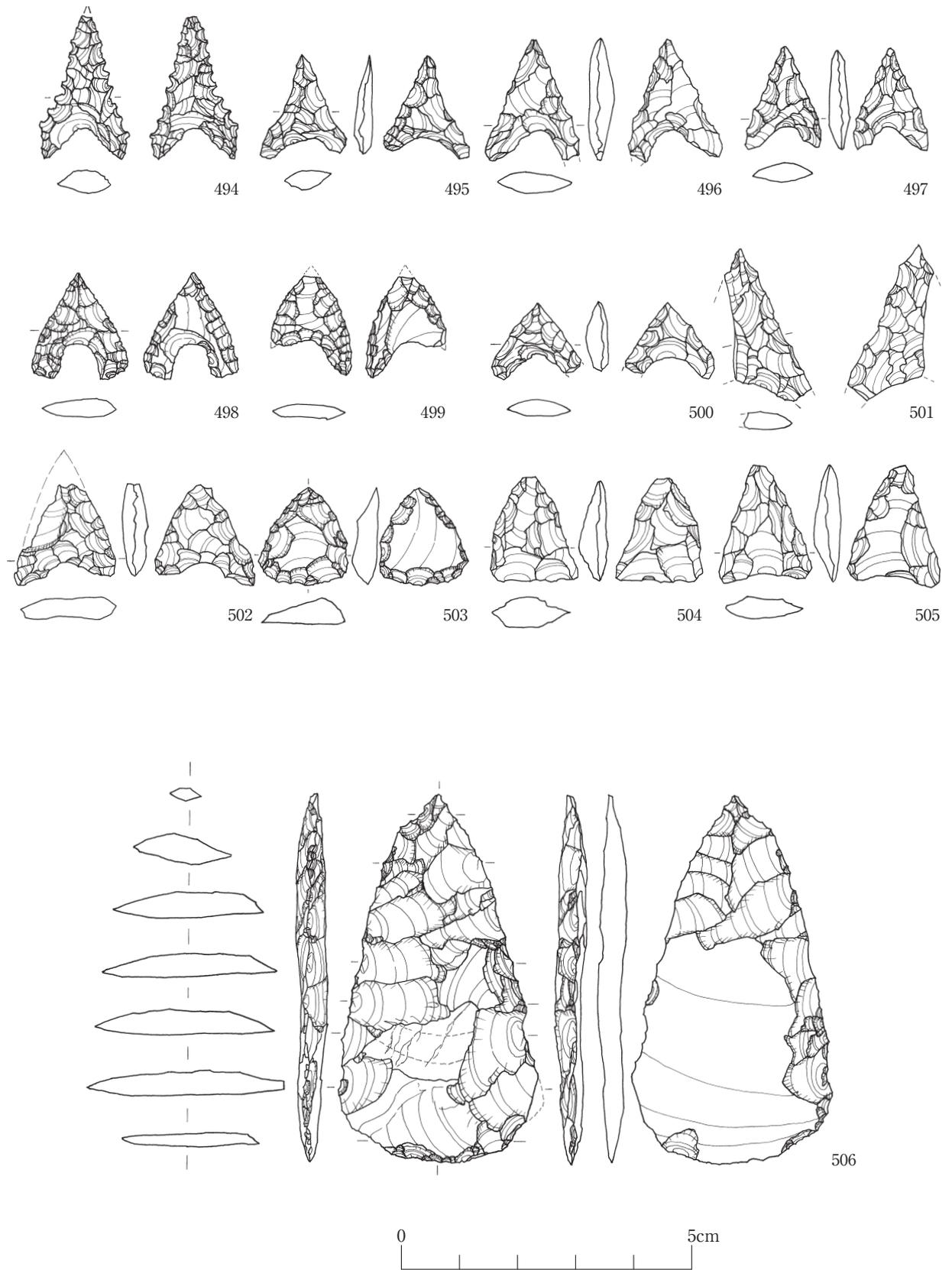


图 197 上黑岩遺跡採集石器 (S = 1/1)

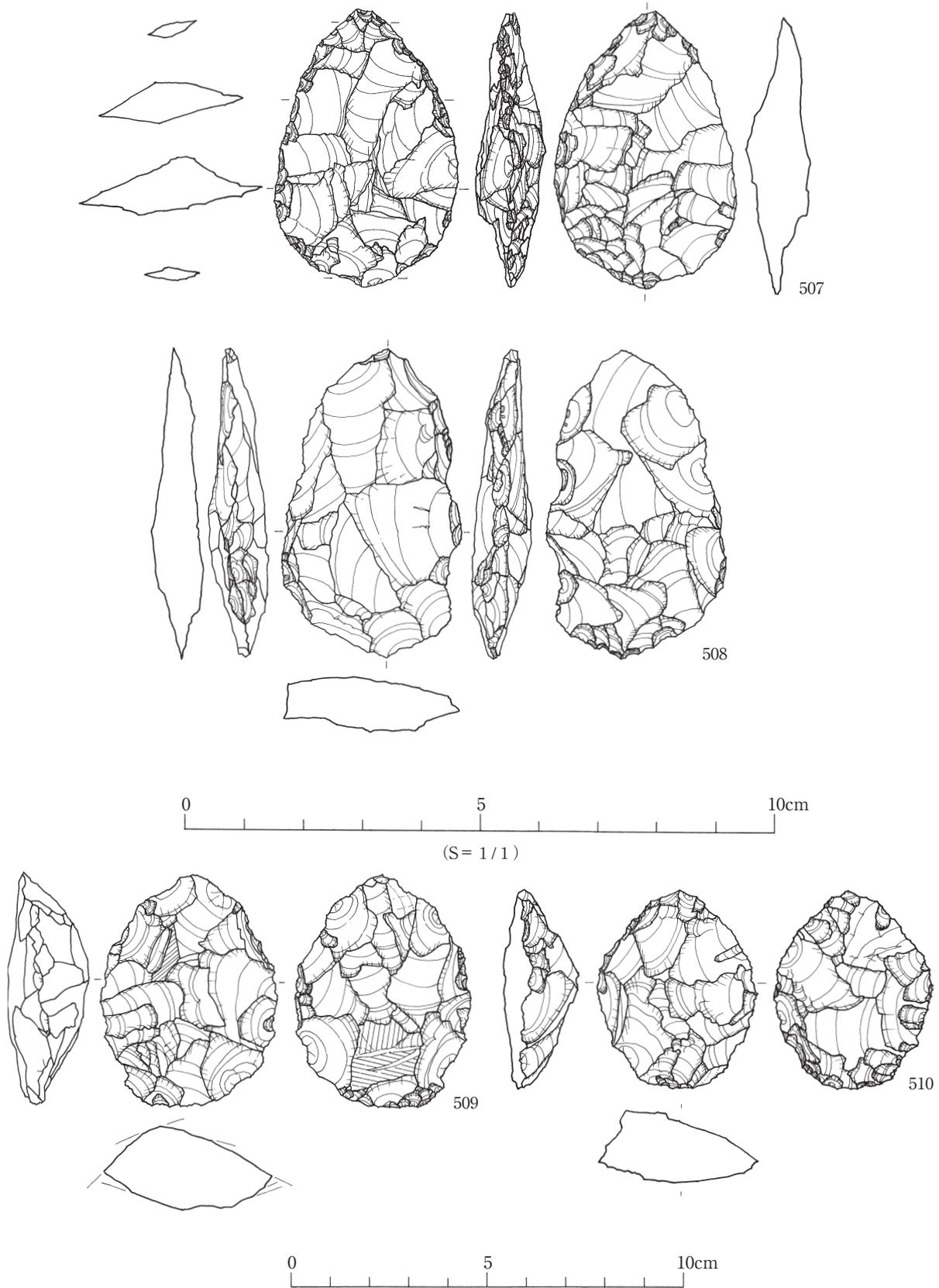


图 198 上黒岩遺跡採集石器 (S = 2/3)

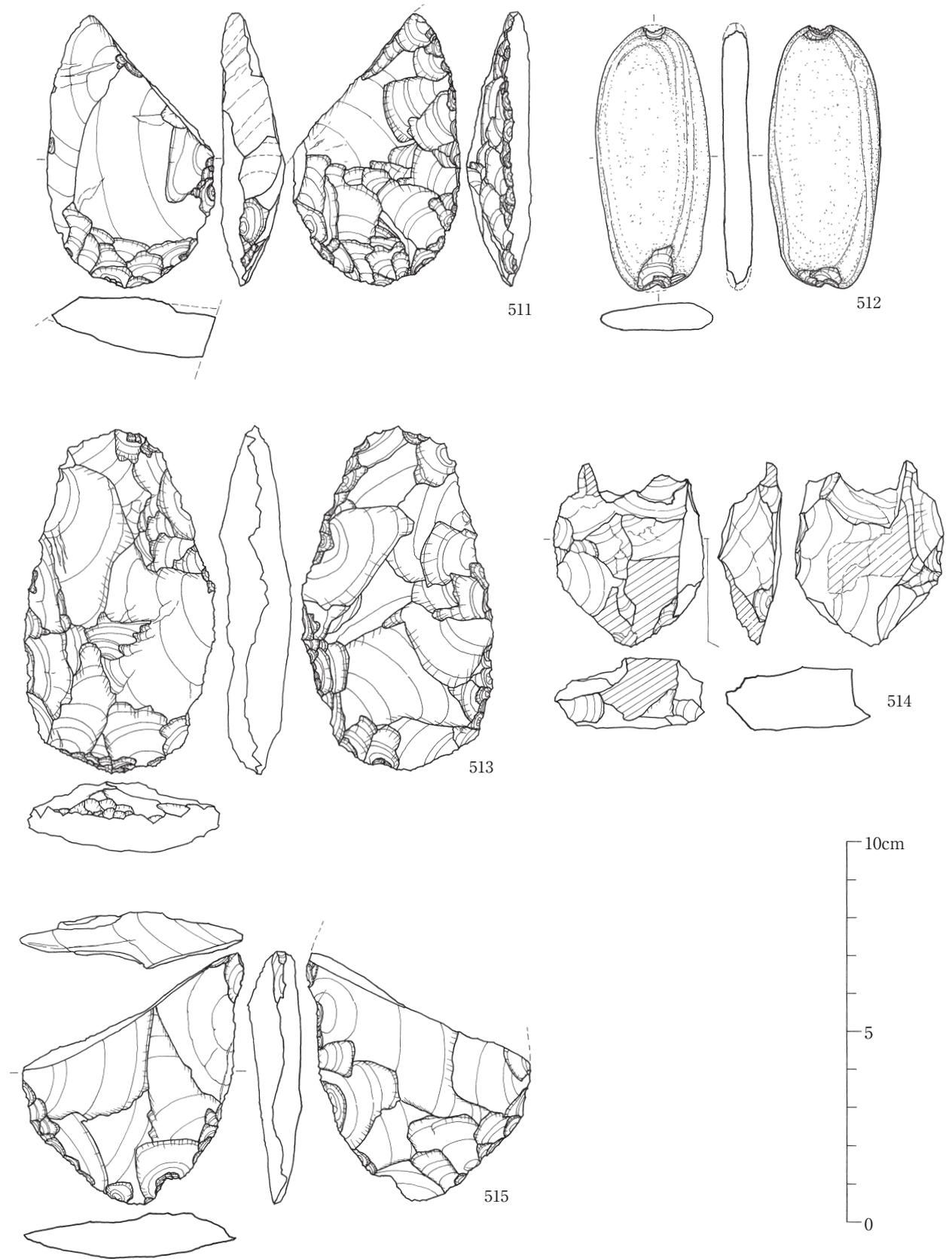


图 199 上黒岩遺跡採集石器 (S = 2/3)

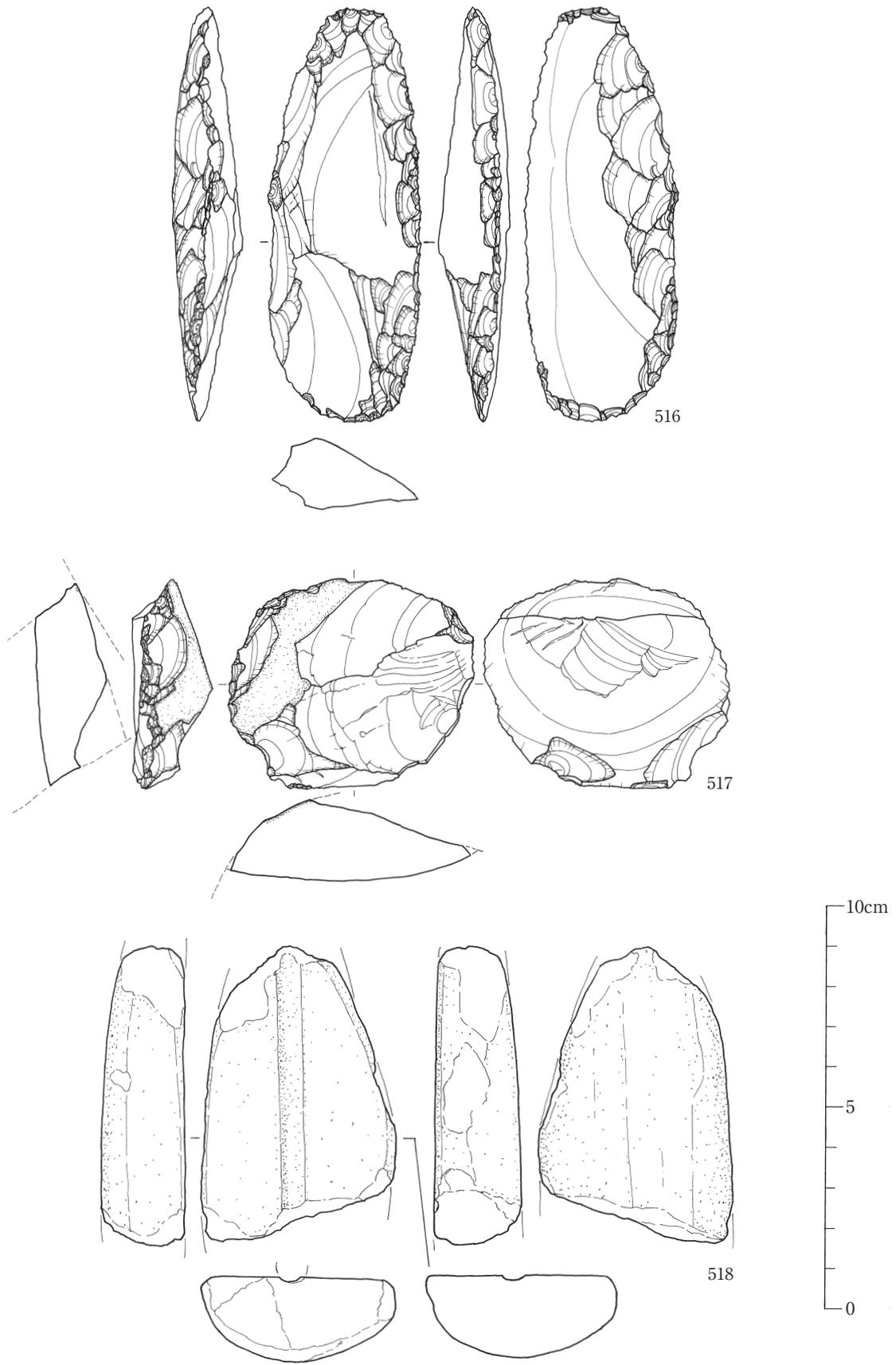


图 200 上黒岩遺跡採集石器 (S = 2 / 3)

矢柄研磨器 (図200-518) 上下両端を欠くが、外形ラインが長楕円形の傾向を窺わせている。表面側は平坦で、長軸に1条の細い溝が通る。裏面は断面を半円形に整形している。石材は砂岩である。

破損石器 (図199-514) 器種不明の破損石器。

## 8 上黒岩第2岩陰遺跡の石器

第3次調査において土地所有者である竹口渉氏からの情報により、上黒岩遺跡と尾根続きの南方500mに位置する上黒岩二番耕地、通称「岩屋」に岩陰の所在が判明した。「岩屋」は西日本では岩陰のことを意味し、神社仏閣等で利用されている。上黒岩遺跡に近い、四国八十八箇所の一つ「岩屋寺」もそのひとつである。1962年10月16日に小林達雄の担当で「岩屋」の試掘が行なわれ、黒土層から押型文土器、剥片石器、礫器、カワニナ、獣骨片が少量出土している。慶應義塾大学民族学考古学研究室に収蔵されている第2岩陰出土石器資料は15点で、大型石器のみ図化し、剥片類は見送った。また、愛媛県歴史文化博物館所蔵(旧西田コレクション)の剥片石器を1点図化した。

削器 (図202-1・2) 1は二方向に切断する。2は礫の破片を用い、下端に粗く急傾斜な剥離を施す。

敲石 (図203-4・5, 図204-7) 7は平面形が楕円形で、側面形は長楕円形である。下端部付近に若干の打痕がある。器面が滑らかなので磨石としても使われた可能性もある。4・5も同様な形態であったと思われるが、左辺が破損し、見た目が「D」字形となっている。破損に伴い、割れた際の角部を打ち欠いて滑らかにしている。打痕は表裏両面に観察されるほか、線条痕、磨滅痕も観

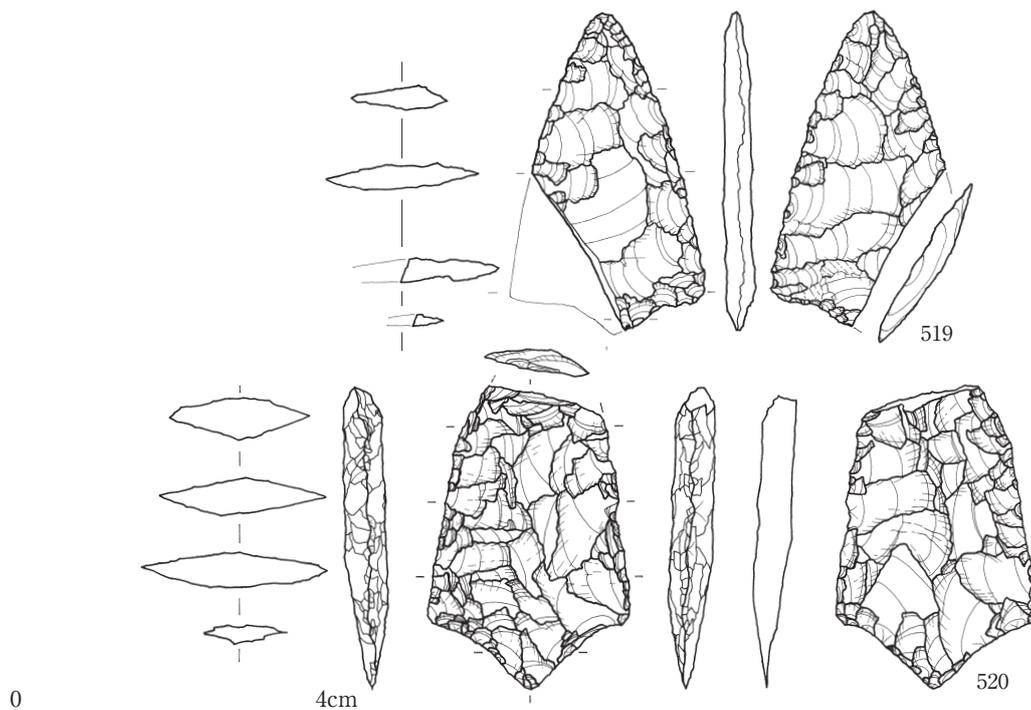


図201 上黒岩遺跡出土区不明, C区拡張区9-II層出土石器 (S=1/1)

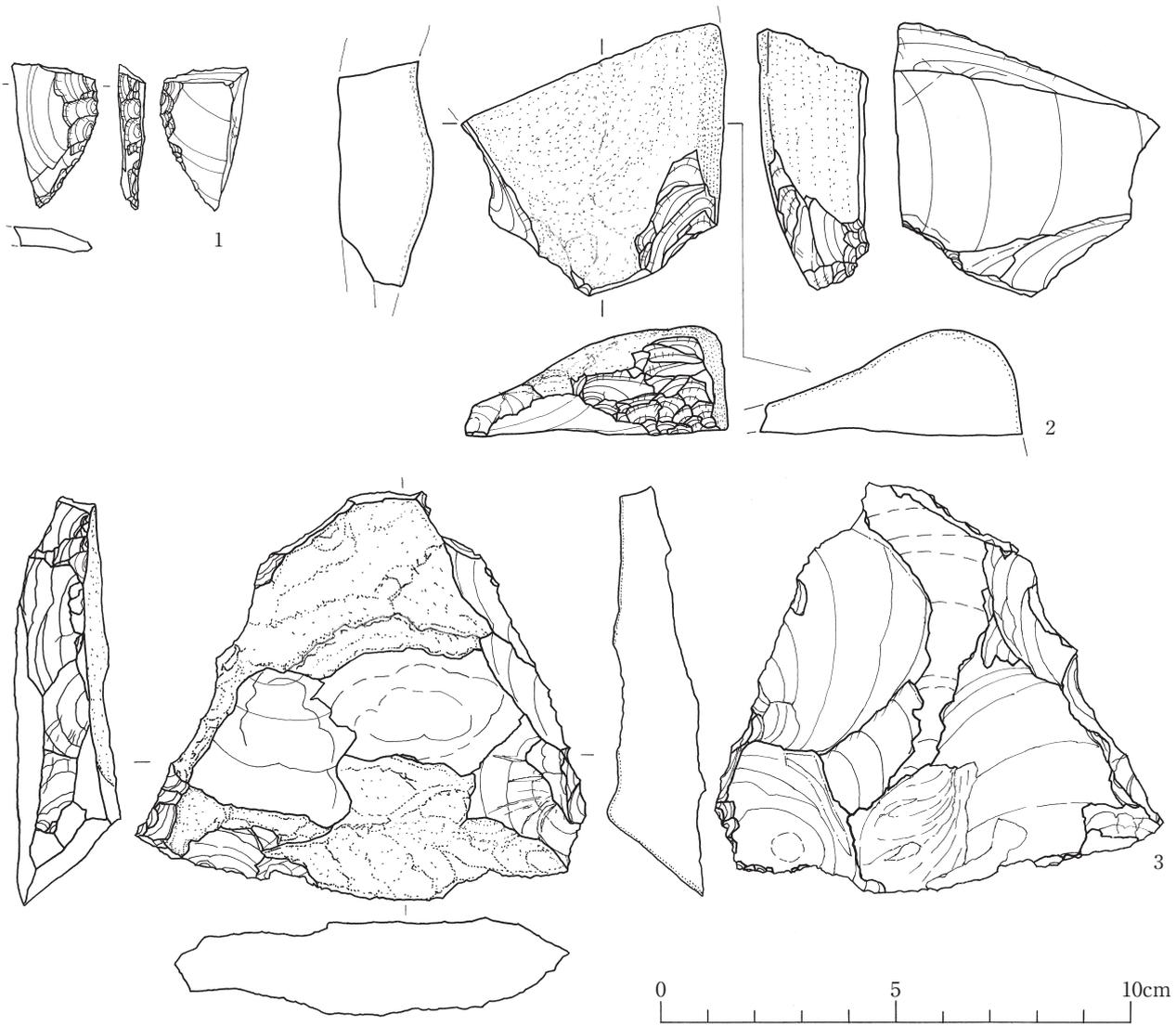


图 202 上黒岩第 2 岩陰遺跡出土石器 1 (S = 2/3)

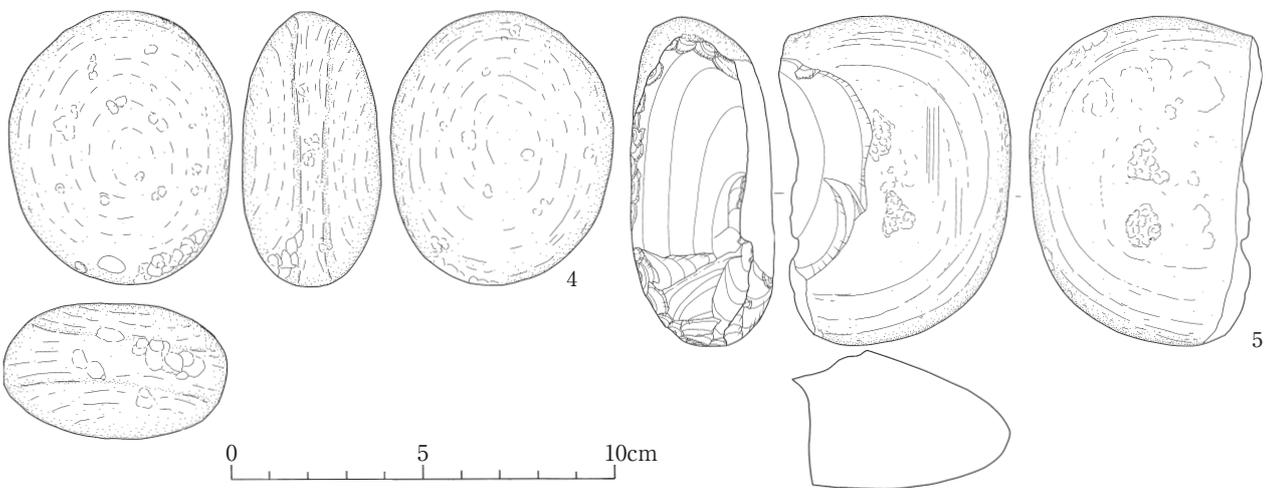
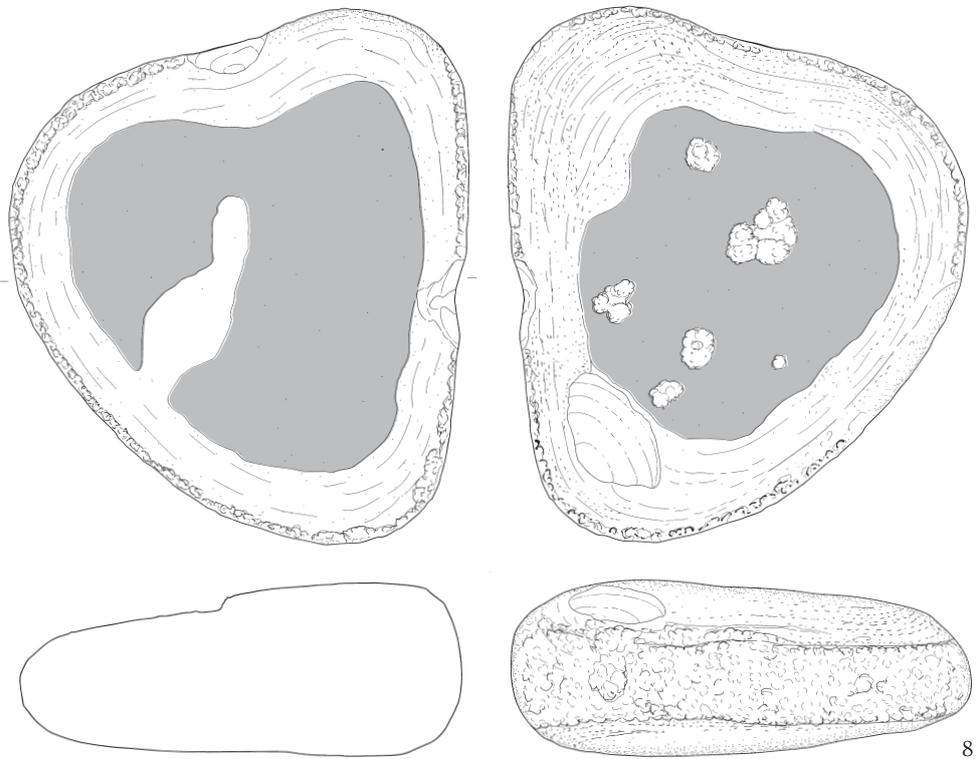


图 203 上黒岩第 2 岩陰遺跡出土石器 2 (S = 1/2)



■ 磨耗



0 5 10cm

圖 204 上黑岩第 2 岩陰遺跡出土石器 3 (S = 1/2)

察されるので磨石としても用いられたのだろう。7は滑らかなカーブをもつ棒状の敲石である。上端と下端の角部に打痕が観察される。上端での作業による衝撃で半截状に破損する。

**凹石・敲石** (図 204-6) 表面側に約 1 cm の間隔を空けて円錐状の凹部がある。また裏面側の 2 箇所表面側での作業に伴う反作用としてめり込んだような打痕がある。その後、先細りの下端で敲打作業を行い、打痕が端部、破損剥離面が表面側に生じている。このような凹石・敲石は上黒岩遺跡 C 区 6 層に特徴的な遺物である。

**台石・敲石** (図 204-8) 平面形は隅円三角形で、側面形は隅円長方形に近い形である。表面側には磨滅痕、裏面側には磨滅痕と若干の打痕が観察される。全周囲にも敲打痕が夥しく形成されて、面ができています。敲打面が広く、破損もないことから、対象物をコツコツと敲潰したかのようなものである。

**石核** (図 202-3) 面形は隅円三角形で、剥片を素材としている。主要剥離面側に周囲から剥片剥離を行う。受熱して、弾けた部分がある。

第 2 岩陰遺跡からは、押型文土器が出土しているため、石器類の帰属時期を縄文時代早期と押さえることができる。また、凹石の特徴から上黒岩遺跡 C 区 6 層に近いものであることから、その段階まで溯らせて考えることは可能であろう。ただし上黒岩遺跡 4 層にも類例が僅かながら存在するので、第 2 岩陰遺跡については縄文時代早期押型文段階の単純遺跡の可能性もある。遺物量からすれば長期間この岩陰に滞在して石器製作等を行なったことはないであろう。しかし敲石・凹石・磨石は長期間使い込まれた形跡がある。通常、これらの重量石器はその重さから持ち運びが不利であり、滞在地の川原石等で間に合わせるのが一般的である。上黒岩第 2 岩陰 (岩屋岩陰) は上黒岩遺跡から南西 500 m・標高約 500 m・上黒岩遺跡からの比高差は約 90 m の位置にある。上黒岩遺跡の屹立した岩壁は久万川沿いに移動するとき目立つ景観である。縄文時代においても河川沿いを移動中に一つのランドマークとして縄文人が認識していたことは疑いない。したがって上黒岩第 2 岩陰を利用した縄文人が上黒岩遺跡を知らなかったはずはなく、彼等の脳裏に上黒岩遺跡が意識されていたことは確かであろう。逆に上黒岩遺跡の多数の埋葬人骨からすると数世代に亘って生活圏内に石材資源の位置とともに上黒岩第 2 岩陰 (岩屋岩陰) を天然の住居地として縄文人は認識したであろう。このように地理関係に係る人々の認識を推定し、かつ重量石器の非可動性を考えると、第 2 岩陰遺跡の使い込まれた敲石・凹石・磨石は、上黒岩遺跡から持ち込まれた蓋然性が高く、同一の集団がのこした遺跡であったと考えられる。

(綿貫俊一)

#### 引用文献

- 稲田陽介 2007 「山陰地方における縄文時代後期の石器製作技術構造」『島根考古学会誌』第 24 集, 島根考古学会, 23-55
- 江坂輝弥 1962 「愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡調査速報」『洞穴遺跡調査会会報』2, 洞穴遺跡調査会, 2-4
- 1962 「愛媛県上浮穴郡美川村上黒岩岩陰遺跡第二次調査速報」『洞穴遺跡調査会会報』4 洞穴遺跡調査会, 5-6
- 江坂輝弥・岡本健児・西田 栄 1967 「愛媛県上黒岩岩陰遺跡」『日本の洞穴遺跡』平凡社, 224-236, 写真 57-78
- 江坂輝弥・森本岩太郎・小片丘彦 1969 「愛媛県上黒岩岩陰遺跡第四次調査速報」『考古学ジャーナル』第 37 号, ニュー・サイエンス社, 17-19
- 沖野新一 1998 『赤石をもつ狩人』愛媛県松山, 自費出版

- 遠部 慎・矢作健二 2007「上黒岩岩陰遺跡の遺物包含層の形成と年代的考察」『縄文時代の始まり—愛媛県上黒岩遺跡の研究—』第58回歴史博フォーラム, 国立歴史民俗博物館, 41-43
- 賀川光夫 1970「縄文式文化の起源と押捺文土器の発達」『史学論叢』第5号, 別府大学史学会, 1-28
- 鎌木義昌・芹沢長介 1963「長崎県福井洞穴の第2次調査略報」『洞穴遺跡調査会会報』6, 洞穴遺跡調査会, 1-3
- 栗島義明 1984「有茎尖頭器の型式変遷とその伝播」『駿台史学』62号, 駿台史学会, 50-82
- 下川達彌 1973「局部磨製石鏃について—長崎県佐世保市岩下洞穴出土資料をとりあげて—」『長崎県立美術博物館紀要』第1号, 長崎県立美術博物館, 21-35
- 鈴木道之助 1972「縄文時代草創期初頭の狩猟活動」『考古学ジャーナル』No.76, 10-20
- 鈴木 雅・佐川正敏編 2006『山形県東置賜郡高畑町日向洞窟遺跡西地区出土石器群の研究』I 東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール
- 芹沢長介 1968『長野県の旧石器』考古資料刊行会, 長野
- 宋文薫 1958「石の用途」『季刊民俗学』第22巻第1・2号, 澁澤敬三先生還暦記念, 誠文堂新光社, 120-122
- 十亀幸雄 1985「上黒岩岩陰遺跡採集の遺物」『遺跡』第28号, 遺跡発行会, 73-91
- 高橋 敦 1983「斜状平行剥離をもつ有舌尖頭器」『人間・遺跡・遺物—わが考古学論集—』文献出版, 147-162
- 竹広文明 2003『サヌカイトと先史社会』溪水社
- 田島富慈美 1993「有舌尖頭器における剥離面の検討」『旧石器考古学』47, 旧石器文化談話会, 61-72
- 多田 仁 1997「愛媛の有舌尖頭器」『愛媛考古学』第14号, 愛媛考古学会, 62-75
- 2000「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」『紀要愛媛』創刊号, 愛媛県埋蔵文化財センター, 1~30
- 谷若倫郎 1997「瀬戸内の物流の原形—金山産サヌカイトの移動をめぐって—」『古文化論叢—伊達先生古希記念論集—』伊達先生古希記念論集編集委員会, 40-50
- 長井謙治 2006「斜状平行剥離の復元製作」『考古学ジャーナル』No.547, ニュー・サイエンス社, 10-15
- 春成秀爾 1963「藤森栄一「縄文中期文化の構成」をよんで」『考古学研究』第10巻第1号, 考古学研究会, 52-54
- 早川正一 1982「縄文時代初頭における切削具の衰退について」『アカデミア』人文・自然科学編, 第35号(151集), 南山大学, 165-195
- 藤森栄一 1963「縄文中期文化の構成—日本石器時代研究の諸問題—」『考古学研究』第9巻第4号, 考古学研究会, 18-29
- 藤山龍造 2003「石鏃出現期における狩猟具の様相—有舌尖頭器を中心として—」『考古学研究』第50巻第2号, 考古学研究会, 65-84
- 古田 幹 1989「遺跡における尖頭器の製作活動—上黒岩岩陰出土資料を中心として—」『考古学の世界』新人物往来社, 227-245
- 古田 幹・津村宏臣・河原林薫 2005「愛媛県上黒岩岩陰より出土した縄文時代初頭の石器資料の再検討」『高梨学術奨励基金年報—平成16年度—』財団法人高梨学術奨励基金, 53-55
- 光石鳴巳 2005「本州西半部における縄文時代草創期の様相—縄文的狩猟具構成の成立過程に関する研究—」平成14~16年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書
- 光石鳴巳編 2001『縄文文化の起源を探る—はじめて土器を手にしたひとびと—』檀原考古学研究所
- 光石鳴巳・岡田憲一・田部剛士 2005「上黒岩岩陰遺跡とその出土遺物についての覚書」『古代文化』Vol. 57, 35-44
- 西田 栄 1962「愛媛県上黒岩岩陰遺跡調査概報(第一)—上浮穴郡美川村所在」『上黒岩遺跡学術調査報告書』「愛媛県文化財調査」第1集, 愛媛県教育委員会, 1-13
- 1969「愛媛県上黒岩遺跡第四次調査略報」『伊予史談』第195号, 伊予史談会, 1-6
- 柳田俊雄 1974「断面のある石器」『ふたがみ』学生社, 163-173
- 米沢容一 1986「台湾・蘭嶼出土の石皿・凹石・敲石」『えとす』31号, 新日本教育図書, 146-149
- 1996「台湾・ヤミ族の伝承と蘭嶼の遺跡—イモルル村を中心として—」『考古学の諸相』坂詰秀一先生還暦記念会, 25-50
- 渡邊康行 2005「石鏃研磨考—西北九州縄文早期における毒矢の可能性—」『西海考古』第6号, 正林護先生喜寿記念号, 西海考古同人会, 47-84

表14 石器観察表

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
1	石鎌	△14.2	16.0	19.0		3.0	0.71	金山?サスカイト	尖	4	A4	3			SS 236		K
2	石鎌	2.1		17.0		3.8	0.93	無斑晶質安山岩		4	A	3			S 54	64	K
3	石鎌	△17.7	19.0	11.8		2.5	0.41	赤色硅質岩	尖	4	A	3		1	S 46		K
4	石鎌	14.0		13.2		3.1	0.33	赤色硅質岩		3	A	3					K
5	石鎌	19.0		△15.0	17.0	4.0	0.73	硅化岩 (チャート質)	左	4	A4	3			SS 237		K
6	石鎌	△13.0	23.0	17.0		3.0	0.45	頁岩	尖	4	A4	3			SS 238	50	K
7	石鎌	△15.0	20.0	18.0		3.0	0.49	赤色硅質岩	尖	4	A	3			S 53	57	K
8	石鎌	△16.0	21.0	17.0		4.0	0.69	赤色硅質岩	尖	4	A	3			S 56	55	K
9	石鎌	△14.0	24.0	16.8		3.5	0.42	赤色硅質岩	尖	4	A	3		3	S 48	61	K
10	石鎌	26.1		16.5		4.0	0.97	姫・黒曜石		4	A	3			S 51	47	K
11	石鎌	27.4		19.0		3.9	1.12	金山?サスカイト		4	A	3			S 52	59	K
12	石鎌	24.0		△16.2	17.9	4.0	0.64	赤色硅質岩 玉髓質	左	4	A	3			S 55	67	K
13	石鎌	△17.1		△18.9		3.7	0.50	無斑晶質安山岩	両	4	A	3			S 49	46	K
14	石鎌	△18.0		18.5		4.5	1.14	金山?サスカイト	尖	4	A	3		4	S 47	54	K
15	石鎌	19.0		15.0		3.5	0.72	金山?サスカイト	右	4	A4	3		18	SS 240		K
16	石鎌	20.0		△22.0	24.5	4.0	1.30	サスカイト (外)	右	4	A4	3		17	SS 239		K
17	石鎌未成品	34.5		19.5		6.3	3.89	赤色硅質岩		4	A	3			SS 186		K
18	石鎌未成品	35.0		29.5		10.0	8.26	硅質頁岩		3	A	3			453		K
19	楔形石器	37.0		10.0		7.5	2.40	姫・黒曜石		4	A	3			SS 185	38	K
20	石錐	34.0		16.0		5.0	1.45	金山?サスカイト		4	A	3			S 50		K
21	凹石・蔽石	118.0		68.0		22.0	296.29	緑色片岩		5	A 抔	3			375		K
22	スクレイパー	54.0		51.0		10.5	27.79	サスカイト		4	A	3		2	SS 66		K
23	エンドスクレイパー	49.3		44.7		8.4	24.88	頁岩		4	A 抔	3			SS 244		K
24	石錘	40.5		36.0		7.5	23.00	緑色片岩		3	A	3			SS 37	324	K
25	石鎌	11.5		10.4		3.5	0.28	無斑晶質安山岩		3	A	4	細石鎌		SS 148		K
26	石鎌	17.0		△12.0	14.0	3.0	0.34	頁岩		3	A	4			SS 151	63	K
27	石鎌	20.0		△16.0	18.0	2.5	0.49	サスカイト	左	3	A	4			SS 150	80	K
28	石鎌	16.0		15.5		3.5	0.53	サスカイト		3	A	4	人骨		SS 233		K
29	石鎌	21.0		19.0		3.0	0.81	無斑晶ガラス質安山岩		3	A	4			SS 149		K
30	石鎌未成品	22.0		14.0		3.0	0.84	サスカイト		3	A	4	表ポジ		SS 147		K
31	石鎌	26.2		19.0		3.0	0.83	サスカイト		4	A	4			SS 146		K
32	石鎌	18.5		13.0		2.5	0.33	赤色硅質岩		4	A	4 落込み	裏面ポジ		SS 144		K
33	石鎌	15.5		△12.5	13.5	3.0	0.35	赤色硅質岩		4	A4	4		47	SS 241		K
34	石鎌	14.6		18.5		3.0	0.54	赤色硅質岩		4	A	4			SS 142	45	K
35	石鎌	25.0		20.0		3.5	0.89	無斑晶ガラス質安山岩		4	A	4	サスカイト?		SS 152		K
36	石鎌	20.7		13.0		3.6	0.59	赤色硅質岩		4	A1	4下			SS 261	48	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
37	石鎌	17.0		△12.5	20.0	4.0	0.95	サヌカイト?	左辺	4	A	4			SS 143	68	K
38	石鎌	26.0		△16.0	18.0	3.5	0.62	赤色硅質岩	右	4	A	4			SS 145		K
39	石鎌未成品	18.5		13.5		3.5	0.56	無斑晶ガラス質安山岩		4	A 2	4	サヌカイト?	1024	SS 243		K
40	石鎌	32.2		22.8		5.3	2.62	硅質頁岩		4	A	4	裏面ボジ面	1030	SS 140		K
41	石鎌	19.5		△17.0		2.0	0.57	赤色硅質岩		4	A 拡	4	人骨		406		K
42	石鎌	17.0		12.5		2.5	0.31	無斑晶ガラス質安山岩		4	A	4	サヌカイト?		SS 141		K
43	石鎌	32.3		23.1		4.7	2.29	サヌカイト(外)		4	A	4 下部	黒色		SS 45	82	K
44	石鎌	39.5		21.5		5.2	3.16	硅質頁岩		4	A 3	4 下部	日本海側産?		SS 44	81	K
45	石錘	61.5		31.5		9.5	29.47	緑色片岩		3	A	4	端部縦状擦痕		SS 39	322	K
46	石錘	60.0		31.0		8.0	23.76	緑色片岩		3	A	4	端部縦状擦痕		SS 38	323	K
47	蔽石	93.0		93.0		33.0	339.00	緑色岩		3	A	4			130	313	K
48	磨石・蔽石	106.0		88.0		46.0	558.00	輝石安山岩		5	A 拡	4 下部	磨減痕		SS 106	302	K
49	石鎌	13.0		△15.0	16.0	3.0	0.35	赤色硅質岩		4	A	5			SS 64	9・58	K
50	石鎌	18.0		14.5		3.5	0.48	サヌカイト(外)		4	A	5			S 65	8	K
51	石鎌	18.0		△18.0	19.0	3.5	0.67	金山?サヌカイト		4	A	5			S 63	56	K
52	凹石・蔽石	82.0		72.0		32.0	300.00	緑色岩		4	A	5		90	190	301	K
53	石鎌	17.5		21.0		3.5	1.08	赤色硅質岩		4	A	6 上部			414		K
54	有茎尖頭器未成品	44.0		29.0		10.0	10.84	赤色硅質岩	尖	4	A	6		504	398		K
55	有茎尖頭器未成品	66.3		44.5		15.1	36.20	無斑晶質安山岩		5	A 3	6			SS 245	145	K
56	有茎尖頭器	43.0		25.5		6.0	4.76	無斑晶質安山岩	下半	4	A	6			409		K
57	石槍	56.7		20.3		5.9	5.42	赤色硅質岩		4	A 2	6		1024	SS 132	198	K
58	エンドスクレイパー	38.3		26.3		6.1	7.34	硅質頁岩		4	A 3	6		103	SS 124	227	K
59	エンドスクレイパー	36.7		27.7		7.7	10.89	硅質頁岩		4	A	6			404		K
60	エンドスクレイパー	39.5		47.5		10.5	25.34	無斑晶質安山岩		4	A	6			403		K
61	エンドスクレイパー	62.0		39.0		19.0	47.40	赤色硅質岩		4	A	6			410		K
62	石篋	57.0		34.5		10.5	22.93	無斑晶質安山岩		4	A	6			411		K
63	石篋	52.5		45.3		16.6	31.99	無斑晶質安山岩		4	A	6 上部			SS 258		K
64	石篋	65.3		51.7		19.5	51.61	無斑晶質安山岩		4	A 3	6		503	SS 121	261	K
65	石篋	39.0		40.5		7.5	13.38	無斑晶質安山岩	上半	4	A 1	6		106	SS 257	231	K
66	石篋未成品	67.1		44.6		23.7	56.03	無斑晶質安山岩		4	A	6			SS 123	221	K
67	スクレイパー	62.0		58.5		18.0	63.88	無斑晶質安山岩		4	A	6 上部			408		K
68	蔽石	72.5		53.0		50.0	217.67	デイサイト		4	A 4	6			405		K
69	石鎌	17.2		15.7		3.6	0.64	安山岩		4	A	7		506		4	K
70	石鎌	21.7		20.2		2.5	0.76	チャート	左	4	A	7		316		5	K

日本海側産石材

再確認

加工痕の訂正

第3部 出土遺物  
第2章 石器

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
71	有茎尖頭器	24.0		△23.5	28.0	3.8	1.72	サスカイト	左辺	4	A 1	7		171	SS 260	39	K
72	有茎尖頭器	37.5		28.2		5.6	6.32	赤色硅質岩		4	A 3	7	2重基端			140	K
73	有茎尖頭器	38.0	43.4	△23.0	25.5	4.8	3.77	硅質頁岩		5	A	7		V-Y-4		108	K
74	有茎尖頭器	△40.0	54.9	28.6		7.0	7.49	硅質頁岩		5	A	7				103	K
75	有茎尖頭器	36.0		△21.3	25.0	3.5	1.84	チャート	下半	4	A 1	7				112	K
76	有茎尖頭器	△45.21	49.6	△20.0	21.0	4.0	3.72	赤色硅質岩	フラ シット	4	A	7			W 47	132	K
77	有茎尖頭器	40.5		△22.3	29.0	5.0	3.61	赤色硅質岩	下半	4	A	7		126		40	K
78	有茎尖頭器 未成品	△30.0	43.5	25.2		3.2	3.62	赤色硅質岩	尖	4	A 2	7		165		110	K
79	有茎尖頭器 未成品	42.0		32.0		8.2	11.31	赤色硅質岩		4	A 2	7		128		104	K
80	有茎尖頭器 未成品	45.0		27.5		10.0	9.87	硅質頁岩	左辺	4	A 2	7		162		225	K
81	有茎尖頭器 未成品	53.8		32.0		8.9	13.00	無斑晶質安 山岩		4	A 3	7		309	SS 251	259	K
82	有茎尖頭器 未成品	67.5		34.6		12.3	26.46	無斑晶質安 山岩		4	A 2	7		164	SS 57	216	K
83	有茎尖頭器 未成品	34.1		26.1		5.9	5.86	赤色硅質岩		4	A 1	7			SS 12	228	K
84	石槍	44.0		19.0		4.1	2.98	無斑晶質安 山岩		4	A 4	7		504	W 39	88	K
85	有茎尖頭器 未成品	51.0		27.3		7.3	10.63	硅質頁岩		4	A 3	7	斜状並行 剥離	177	SS 248	223	K
86	有茎尖頭器 未成品	50.5		27.0		6.9	12.05	チャート		4	A 1	7			W 53	138	K
87	エンドスク レイパー	60.5		50.1		12.7	29.41	輝緑岩		4	A 3	7		363	SS 252	215	K
88	エンドスク レイパー	40.6		△39.0		21.0	26.09	赤色硅質岩	上半	4	A 3	7		402	SS 256		K
89	スクレイ パー	31.8		15.7		5.7		赤色硅質岩		不明	不明						K
90	加工痕ある 石器	33.2		△46.5		11.9	3.85	硅質頁岩	左辺	4	A 3	7			456		K
91	スクレイ パー	△39.0		△30.0		3.96.0	6.06	金山?サス カイト		5	A	7		5-A- 4087	SS 70		K
92	加工痕ある 石器	34.2		28.5		8.6	8.86	硅質頁岩	上半	4	A 3	7	有茎未成 品?	122	SS 247	226	K
93	エンドスク レイパー	27.0		△28.2		9.0	5.97	硅質頁岩		5	A	7		12	SS 78		K
94	エンドスク レイパー	31.5		△21.1		6.9	11.64	硅質頁岩		4	A 3	7			457		K
95	スクレイ パー	100.5		54.5		15.0	88.69	無斑晶質安 山岩		4	A	7			227	268	M
96	エンドスク レイパー	46.5		21.2		10.8	17.75	赤色硅質岩		5	A	7		1	SS 82	218	K
97	石篋	51.0		36.0		16.0	27.11	脈石英		4	A	7				257	K
98	石篋	32.0		30.7		8.7	8.91	無斑晶質安 山岩	下半	4	A 3	7		202		258	K
99	石篋	44.2		34.3		8.7	11.58	サスカイ ト?	刃	4	A 3	7		IV-P· 49		260	K
100	石篋	36.0		35.9		8.7	9.67	無斑晶質安 山岩	上半	4	A 3	7		18		185	K
101	石篋	51.5		35.3		11.7	16.88	無斑晶質安 山岩	刃	4	A 4	7			SS 242	230	K
102	石篋	△66.0		40.2		13.2	34.41	無斑晶質安 山岩	基	4	A	7		176		217	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
103	石鐮	51.7		36.2		8.6	16.61	無斑晶質安山岩	刃	4	A1	7		172	SS 259	219	K
104	石鐮	50.3		34.1		10.5	18.60	無斑晶質安山岩	刃	4	A3	7		173	SS 249	224	K
105	石鐮	△35.0		42.0		9.0	14.88	無斑晶質安山岩	上半	4	A1	7	裏面ハジケ	147	SS 11	264	K
106	石鐮未成品	70.7		42.2		16.5	38.22	無斑晶質安山岩		4	A3	7			SS 246	262	K
107	石鐮未成品	63.0		42.8		19.7	40.32	硅質頁岩		4	A3	7		193	SS 250	180	K
108	剥片	△42.8		△60.5		9.0	19.85	金山?サヌカイト		5	A	7		3	SS 67		K
109	加工痕ある石器	85.3		36.0		15.3	32.18	赤色硅質岩		4	A	7			458		K
110	加工痕ある石器	81.8		55.5		14.0	93.30	無斑晶質安山岩		5	A	7		15	SS 69	263	K
111	礫器	101.6		108.0		34.0		輝緑岩		5	A	7		10	SS 93		K
112	敲石	56.0		58.4		34.0		細粒砂岩?		5	A	7		18	SS 83		K
113	敲石	42.2		28.0		21.8		細粒砂岩?		5	A	7		19			K
114	敲石	73.0		40.0		20.4	115.23	細粒砂岩		4	A1	7		132			K
115	石核	31.0		△33.6		12.0	9.49	硅質岩		5	A	7			S72		K
116	石核	33.0		70.4		21.8	45.54	赤色硅質岩		4	A	7			459		K
117	石鎌	38.3		△16.0	23.0	4.0	1.37	金山?サヌカイト	左	5	A	8c			SS 81	2	K
118	石鎌	16.2		14.2		4.0	0.48	赤色硅質岩		2	B2	1			215		K
119	石鎌	16.0		△15.0	19.1	3.0	0.49	赤色硅質岩	左	2	B2	1			211		K
120	石鎌	18.5		15.0		2.5	0.63	金山?サヌカイト		2	B2	1	未成品か		210		K
121	石鎌	18.0		19.0		4.0	0.69	赤色硅質岩		2	B2	1			213		K
122	石鎌	18.0		17.5		4.5	0.75	硅質頁岩		2	B2	1			214		K
123	石鎌	23.5		△15.9	17.0	5.5	1.30	赤色硅質岩	左	2	B1 トレ	2			SS 208		K
124	石鎌	27.8		△18.0	21.0	5.2	1.44	サヌカイト	左	2	B2	1			212		K
125	石鎌	26.0		25.0		6.8	2.77	赤色硅質岩		2	B1 トレ	1	未成品か		SS 206		K
126	石鎌	12.4		16.5		3.8	0.53	赤色硅質岩		2	B1 トレ	2			SS 207		K
127	石鎌	19.9		△14.2	18.9	3.5	0.45	流紋岩	左	2	B1 トレ	2			SS 205		K
128	石鎌	17.5		16.9		3.9	0.72	赤色硅質岩		2	B1 トレ	2			SS 204		K
129	有茎尖頭器	30.0		24.0		5.0	3.23	緑色チャート		2	B1 トレ	2	再加工・混入				K
130	石鎌	15.2		△14.5	15.5	4.0	0.49	赤色硅質岩	左	2	B1 トレ	2			SS 203	41	K
131	石鎌	19.9		16.1		3.7	0.67	無斑晶質安山岩		2	B	4			SS 129		K
132	石鎌未成品	27.0		23.0		5.4	3.02	赤色硅質岩		2	B	4			SS 128		K
133	石鎌	23.0		12.8		5.0	1.01	無斑晶質安山岩	右逆刺	2	B3 トレ	6					K
134	石錘	54.0		40.2		5.0	35.41	緑色片岩		2	B1 トレ	4	短軸折り		202	304	K
135	石鐮	60.2		45.5		8.1	30.84	頁岩		4	B	6			407		K
136	石鎌	22.5		15.5		3.5	0.95	チャート		4	B	8			SS 122	3	K
137	石鎌	39.7		△17.5	23.0	3.9	2.04	チャート		4	B	8	長脚鎌		438		K
138	尖頭器未成品	△39.8		30.1		11.0	10.58	チャート~ 硅質頁岩		4	B	8			395		K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
139	石籠	△54.0		43.9		12.0	36.18	頁岩	基	4	B	8			436		K
140	石籠未成品	92.4		64.7		23.8	131.88	無斑晶質安山岩		4	B	8			SS 131	203	K
141	石鏃	17.7		18.3		5.2	1.30	輝石安山岩		4	B	9			SS 90	1	K
142	有茎尖頭器	26.0		20.0		4.0	1.60	金山?サヌカイト	基	4	B	9			SS 269		K
143	有茎尖頭器	△30.0		19.0		5.3	2.02	無斑晶ガラス質安山岩	基	4	B	9	サヌカイト外来か		SS 36	126	K
144	有茎尖頭器	△44.9	49.9	22.3		7.3	5.54	赤色硅質岩		4	BC	9	考古学ジャーナル		A-114-5	83	R
145	有茎尖頭器	△28.1	43.0	23.8		9.0	4.50	赤色硅質岩	尖	4	B	9				116	K
146	有茎尖頭器	33.0		△19.2	23.0	4.1	2.77	金山?サヌカイト	逆刺	4	B	9			W 41	90	K
147	有茎尖頭器	△27.0	37.0	△18.5	22.7	4.0	1.68	赤色硅質岩	基	4	B	9b			SS 42		K
148	有茎尖頭器	△30.0		△29.0		5.2	4.62	赤色硅質岩	尖	4	B	9b			SS 43	125	K
149	有茎尖頭器	△34.48	36.8	29.7		6.5	5.22	赤色硅質岩	尖	4	B	9			W 54	139	K
150	有茎尖頭器未成品	△32.0		35.5		8.9	9.62	赤色硅質岩	尖	4	B	9	未成品か		SS 5	212	K
151	有茎尖頭器未成品	52.0		29.3		10.3	11.73	無斑晶質安山岩		4	B	9			SS 268	210	K
152	有茎尖頭器	△66.1		20.9		6.1	7.81	サヌカイト	基	4	B	9		91		154	K
153	有茎尖頭器	83.5		29.2		11.2	22.92	無斑晶質安山岩		4	B	9		82	W 16・223	151	M
154	有茎尖頭器?	32.0		△23.5		8.9	4.81	赤色硅質岩	基	4	B	9		87	442		K
155	有茎尖頭器未成品	55.2		27.0		9.0	6.85	赤色硅質岩		4	B	9			W 42	91	K
156	有茎尖頭器未成品	63.0		37.0		10.0	16.54			4	B	9	鈴木道之助抽出			177	K
157	有茎尖頭器原形	56.6		38.6		7.8	19.96	赤色硅質岩		4	B	9			SS 274	207	K
158	有茎尖頭器	44.0		△22.5		5.8	5.68	赤色硅質岩	左逆刺	4	B	9			420		K
159	有茎尖頭器未成品	△55.7		40.9		11.0	24.45	無斑晶質安山岩	基	4	B	9		70	W 49	134	K
160	有茎尖頭器未成品	87.5		44.1		15.0	41.69	無斑晶質安山岩		5	B	10		73	W 50	135	K
161	有茎尖頭器未成品	36.5		24.2		7.1	5.38	無斑晶質安山岩	基	4	B	9			SS 265	205	K
162	有茎尖頭器未成品	△47.1	51.0	37.5		7.8	12.20	スレート		2	B1トレ	9	褐色土			105	K
163	石籠	△39.0		39.0		12.0	19.77	頁岩	基	4	B	9			444		K
164	石籠	△46.5		△57.0		14.5	4.42	頁岩	刃	4	B	9			439		K
165	剥片	97.3		13.8		9.0	14.15	赤色硅質岩		4	B	9b	縦長剥片		312		K
166	スクレイパー	97.5		70.2		24.5	156.62	無斑晶質安山岩		4	B	9			427		K
167	石籠	89.7		57.5		15.8	75.04	頁岩		4	B	6下部			434		K
168	石籠	62.0		40.3		12.8	31.10	無斑晶質安山岩		4	B	9		72	396		K
169	石籠	△33		39.5		11.3	9.53	硅質頁岩	刃	4	B	9			440		K
170	石籠	46.8		33.0		13.2	15.75	無斑晶質安山岩		4	B	9			421		K
171	石籠未成品	90.2		56.7		18.0	74.68	無斑晶質安山岩		4	B	9		60	423		K
172	石籠	63.3		40.3		9.9	34.90	頁岩		4	B	9		78	425		K
173	石籠未成品	105.0		62.0		24.8	154.14	赤色硅質岩		4	B	9			446		K
174	石籠未成品	91.5		57.4		26.2	134.20	赤色硅質岩		4	B	9			399		K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
175	スクレイパー	42.5		18.3		7.5	5.61	赤色硅質岩	右半	4	B	9			424		K
176	石籠未成品	100.0		40.2		26.3	65.84	頁岩		4	B	9			445		K
177	スクレイパー	52.5		24.0		7.2	5.63	赤色硅質岩	左半	4	B	9			429		K
178	エンドスクレイパー	53.0		30.2		29.7	13.26	金山?サスカイト		4	B	9			311		K
179	スクレイパー	36.0		32.0		15.8	21.25	金山?サスカイト		4	B	9			401		K
180	石錐	39.0		28.0		7.3	6.03	金山?サスカイト		4	B	9			419		K
181	石籠	73.0		47.7		29.2				4	B	9					R
182	石籠	△52.0		40.8		9.2	19.28	無斑晶質安山岩	刃	2	B1 トレ	9	黄褐色土 粘土			109	K
183	石籠未成品	66.2		45.0		29.8	54.15	サスカイト		4	B	9		112	SS 132	308	K
184	石籠未成品	69.0		49.5		20.0	48.91	無斑晶質安山岩		2	B1 トレ	9	黄褐色土 粘土			159	K
185	石籠	△66.0		46.5		12.3	44.35	無斑晶質安山岩	基	4	B	9		64	SS 6	208	K
186	石斧	133.5		60.1		28.5	189.67	無斑晶質安山岩		4	B	9			A- 114-8		R
187	石籠	△40.8		40.0		7.6	8.65	秩父帯頁岩	基	4	B	9		58	SS 266	189	K
188	石籠	△45.0		43.9		9.3	17.46	無斑晶質安山岩	基	4	B	9		88	SS 267	211	K
189	石籠	70.2		45.4		12.8	33.49	無斑晶質安山岩	基	4	B	9			SS 270	201	K
190	石籠	57.4		45.5		18.6	43.50	無斑晶質安山岩		4	B	9		85	SS 264	209	K
191	石籠	59.2		31.5		10.4	18.96	無斑晶質安山岩		4	B	9		82	W 14	269	K
192	石籠	△31.7		30.5		10.6	13.26	サスカイト (外来)	基	4	B	9d			SS 41	213	K
193	石籠	△49.5		44.0		9.0	21.26	輝石安山岩	基	4	B	9		50	SS 4	214	K
194	石籠	△42.0		42.6		13.5	24.95	無斑晶質安山岩	基	4	B	9		47	SS 262	206	K
195	石籠	△73.5		42.3		16.7	52.45	頁岩	基	4	B	9	受熱による ハジケ	33	SS 272	202	K
196	石籠	81.0		33.3		16.5	38.85	サスカイト	刃	4	B	9		68		188	K
197	石籠	88.0		33.9		13.0	35.00	無斑晶質安山岩		4	B	9			A- 114-9		R
198	石籠未成品	84.0		64.5		21.0	74.46	緑色岩		4	B	9		31	SS 271	204	K
199	石籠未成品	96.0		61.0		19.5	112.22	無斑晶質安山岩		4	B	9		132	W 20	266	K
200	石籠未成品か	78.8		41.4		16.5	87.47	赤色硅質岩		4	B	9	攪乱か	20		158	K
201	スクレイパー	37.5		34.5		6.8	9.04	無斑晶質安山岩		4	B	9		30	SS 163		K
202	有溝砥石	77.4		30.9		21.0		砂岩		4	B	9				290	R
203	石核	147.1		114.0		32.1		無斑晶質安山岩		4	B	9			SS 92		K
204	敲石	82.6		61.0		34.5	234.49	輝石安山岩		4	B	9		37	417		K
205	敲石	92.5		68.5		52.0	410.00	輝石安山岩		4	B	9		45	426		K
206	石核	66.0		82.5		27.3	163.98	無斑晶質安山岩		4	B	9			SS 189	307	K
207	石核	122.7		58.5		52.5	201.07	頁岩		4	B	9		97	418		K
208	台石	196.0		194.5		68.5	4000.00	デイサイト		4	B	10 上面	打痕凹部	690811. No.133	W 85		M

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石 材	欠	調査 次	出土 区	層位	備 考	注記	整理No	写真 No	所蔵
209	剥片	53.0		19.5		7.5	4.19	無斑晶質安山岩		4	B	11	旧石器?		310		K
210	剥片	79.5		49.5		16.5	69.79	輝石安山岩		4	B	11	旧石器?	124	309		K
211	石鏃	△13.9	21.0	△19.9	20.0	3.0	0.58	金山?サヌカイト		2	C1 トレ	?			SS 111	71	K
212	石鏃	△21.0	25.0	△17.5	23.0	3.9	1.26	チャート		2	C1 トレ	?			SS 112	35	K
213	石鏃	13.1		10.1		3.2	0.34	赤色硅質岩		2	C1 トレ	2			SS 117		K
214	石鏃	△16.0	17.0	△17.4	18.0	3.0	0.60	赤色硅質岩		2	C4 トレ	4			SS 87	42	K
215	石鏃	△17.0	16.0	13.2		2.8	0.48	凝灰岩		2	C4 トレ	4			SS 89	62	K
216	石鏃	15.9		13.4		4.4	0.67	硅質頁岩		2	C4 トレ	4			SS 86	43	K
217	石鏃	21.0		△16.5	17.0	3.0	0.74	硅質頁岩	右逆刺	2	C4 トレ	4			SS 88	66	K
218	石鏃	21.1		△21.5	23.0	3.6	1.99	赤色硅質岩	左逆刺	2	C4 トレ	4			SS 85	44	K
219	石鏃	30.9		18.5		3.0	1.28	金山?サヌカイト		2	C4 トレ	4			SS 84	65	K
220	スクレイパー	41.4		71.8		9.0	28.33	金山?サヌカイト		2	C4 トレ	4			W 89	253	K
221	石錘	69.6		48.3		9.9	64.37	緑色片岩		3	C	4			SS 40	321	K
222	楔形石器	75.0		60.3		27.6	137.90	金山?サヌカイト		3	C	4	受熱		389		K
223	石鏃	26.1		16.0		3.4	0.95	赤色硅質岩		3	C 拡	6			SS 162	6	K
224	石鏃未成品	24.9		15.1		6.0	1.60	サヌカイト		3	C	6			SS 125	7	K
225	楔形石器破損?	51.9		14.7		8.4	5.73	赤色硅質岩		2	1 トレ	6			SS 230		K
226	敲石	38.2		39.2		24.8	52.57	脈石英		3	C	6 上部	引掻きキズ		SS 102		K
227	石鏃未成品	38.2		40.0		24.8	149.93	無斑晶質安山岩		3	C 拡	6			SS 161	305	K
228	石鏃未成品	93.0		58.5		25.5	115.54	無斑晶質安山岩		3	C	6		3-C-3540	491		K
229	石鏃未成品	87.3		45.9		22.8	80.77	頁岩		3	C	6		3-C-3580	493		K
230	スクレイパー	79.5		72.6		22.5	132.88	無斑晶質安山岩		3	C	6			492		K
231	スクレイパー	28.8		50.4		8.8	9.66	金山?サヌカイト		2	C4 トレ	6			SS 119	196	K
232	石鏃未成品	81.6		76.8		19.5	119.59	頁岩		3	C	6		3-C-3578	490		K
233	凹石・敲石	△263.6		68.0		42.0	470.00	緑色片岩		3	C 拡	6			110		K
234	凹石	130.0		60.4		20.0	240.21	緑色片岩		3	C 拡	6			194	296	K
235	凹石・磨石	117.6		71.2		28.0	382.00	緑色岩		3	C 拡	6			195	299	K
236	凹石・敲石	154.0		70.4		20.0	390.00	緑色片岩		3	C	6			482		K
237	凹石	126.6		48.0		21.6	210.48	緑色片岩		3	C	6			486		K
238	凹石	161.0		55.0		41.0	660.00	緑色片岩		3	C 拡	6	楔状の凹部		SS 106		K
239	台石・敲石	180.0		58.2		26.4	490.00	緑色片岩		3	C	6	裏面押圧痕		480		K
240	凹石・磨石	109.8		76.0		36.2	531.00	緑色岩		3	C 拡	6	楔状凹部, 摩滅		193	297	K
241	凹石・磨石・敲石	121.6		88.0		42.0	660.00	緑色岩		3	C 拡	6	円錐状凹部, 摩滅		196	293	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
242	凹石・磨石	121.6		84.0		44.0	774.00	緑色岩		3	C	6 上部	円錐状凹部、摩滅			295	K
243	台石・蔽石	126.0		78.0		45.0	700.00	緑色片岩		3	C 拡	6	凹部未形成				K
244	凹石・蔽石	136.0		104.0		60.2	1120.00	緑色片岩		3	C 拡	6	楔状の凹部		108		K
245	凹石・蔽石	152.0		60.6		42.0	622.00	緑色片岩		3	C 拡	6			105		K
246	凹石・磨石・蔽石	176.4		70.0		16.0	350.00	緑色片岩		3	C 拡	6	円錐状凹部、摩滅				K
247	蔽石	138.2		57.8		32.0	331.00	硬質砂岩		3	C 拡	6			SS 111		K
248	凹石	142.0		64.2		25.8	455.00	緑色片岩		3	C 拡	6	楔・円錐状凹部		197		K
249	凹石	172.8		52.2		32.2	350.00	緑色片岩		3	C 拡	6	円錐状凹部		101		K
250	台石	129.8		46.4		21.4	256.29	緑色片岩		3	C 拡	6					K
251	凹石	△108.8		45.0		20.2	198.00	緑色片岩		3	C 拡	6	円錐状凹部		198	298	K
252	台石・蔽石・磨石	155.8		△91.0	94.0	41.0	1000.00	緑色片岩		3	C 拡	6					K
253	蔽石	90.0		62.5		35.0	240.25	緑色片岩		3	C	6			487		K
254	蔽石	116.0		51.0		20.0	152.85	緑色片岩		3	C	6			489		K
255	蔽石	112.0		49.0		21.0	149.30	緑色片岩		3	C	6			352		K
256	蔽石	179.0		86.5		245.0	616.40	緑色片岩		3	C	6			479		K
257	蔽石	152.0		56.5		29.5	350.00	緑色片岩		3	C 拡	6			102		K
258	蔽石・台石	111.5		62.5		30.5	327.19	緑色岩		3	C	6			488		K
259	蔽石・台石	90.5		81.0		32.0	371.76	輝石安山岩		3	C	6			484		K
260	蔽石・台石	83.0		74.0		33.0	250.05	輝石安山岩		3	C	6			485		K
261	蔽石・礫器	92.0		110.0		36.4	430.00	頁岩		3	C	6 上部			355		K
262	凹石・磨石	100.2		80.9		39.0	611.87	輝石安山岩		3	C 拡	6	浅い凹部		323		K
263	砥石	120.0		73.0		37.5	558.86	輝石安山岩		3	C	6	両面研ぎ痕		483		K
264	有茎尖頭器	△39.5	42.0	23.4		5.6	3.96	硅質頁岩		2	C4 トレ	9			SS 9	148	K
265	有茎尖頭器	△47.6	49.3	△26.0	26.4	7.4	7.43	チャート	右逆刺	2	C4 トレ	9			SS 10	147	K
266	有茎尖頭器	38.1		17.0		5.8	3.56	サスカイト(外)	基	2	C4 トレ	9			SS 8	149	K
267	有茎尖頭器 未成品	54.0		29.0		8.0	19.21	頁岩?		2	C	9	中央横断 状赤化	II-P・30	A- 114-11		R
268	有茎尖頭器	29.4		20.0		3.5		チャート		2	C4 トレ	9			W 6	99	M
269	有茎尖頭器	26.2		14.0		3.0	1.07	赤色硅質岩		2	C4 トレ	9		II-Y・6	W 7	96	M
270	有茎尖頭器	39.2		24.8		5.7	4.10	チャート		2	C4 トレ	9			A- 114-4	86	R
271	有茎尖頭器 未成品	64.5		30.5		10.5	17.11	赤色硅質岩		2	C4 トレ	9				248	K
272	石鏃未成 品?	34.2		24.6		9.0	6.57	チャート		2	C4 トレ	9				195	K
273	有茎尖頭器	37.0	△39.1	23.0		5.2	3.88	硅質頁岩	茎	2	C1 トレ	9		II-Y・07	W 44	93	K
274	有茎尖頭器	△26.5	36.0	△16.0	18.0	3.9	1.26	チャート	基	2	C1 トレ	9			SS 118	179	K
275	有茎尖頭器 未成品	43.0		35.0		11.5	16.70	チャート		2	C1 トレ	9		II-P・11	339		K
276	有茎尖頭器 未成品	59.2		29.6		11.2	32.69	無斑晶質安 山岩		2	C1 トレ	9			SS 2	249	K

第3部 出土遺物  
第2章 石器

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
277	石鐮?	48.0		29.5		8.1	11.01	無斑晶質安山岩		2	C4 トレ	9		II-P・14	SS 1	199	K
278	石鐮	70.0		42.0		15.0	52.51	赤色硅質岩		2	C1 トレ	9			341		K
279	石鐮	58.1		44.7		13.7	30.56	無斑晶質安山岩	刃	2	C1 トレ	9		II-P・05	SS 200	247	K
280	石鐮	42.0		41.0		10.0	14.07	チャート	刃	2	C1 トレ	9			340	256	K
281	石鐮	50.8		41.0		9.7	19.69	無斑晶質安山岩	基	2	C1 トレ	9			SS 201	234	K
282	石鐮未成品	60.0		34.0		7.0		サヌカイト?		2	C4 トレ	9			W 90	254	K
283	石鐮	27.9		20.5		7.5	13.00	無斑晶質安山岩	刃	2	C4 トレ	9				191	K
284	スクレイパー	36.9		21.0		9.4	20.58	赤色硅質岩	左半	2	C4 トレ	9				200	K
285	石斧	△67.8	75.0	54.0		24.0	74.71	サヌカイト	基	2	C4 トレ	9			W 91		K
286	有茎尖頭器	△30.1	40.1	23.2		3.8	2.62	赤色硅質岩	尖	4	C	9 攪乱		IV-YC・01		111	K
287	有茎尖頭器	△28.2	33.0	△25.2	25.8	3.0	2.48	チャート	尖・茎	4	C	7				12	K
288	有茎尖頭器	△30.99	31.9	21.6		4.0	2.12	赤色硅質岩	茎僅に	4	C	7				114	K
289	有茎尖頭器未成品	49.9		31.1		7.2	10.90	赤色硅質岩		4	C	7				106	K
290	有茎尖頭器	44.5		24.8		6.9	7.07	チャート		4	B	9			A-114-3	84	R
291	有茎尖頭器	△53.5	62.0	△22.0	23.0	5.0	5.02		基	3	C 抔	9		III-Y・10	W 88	252	K
292	石槍未成品	49.6		23.0		3.1	4.28	赤色硅質岩		3	C	9 I	斜行剥離		357		K
293	石槍	55.3		15.5		4.3	3.72	ガラス質安山岩		3	C	9 I	サヌカイト?		SS 3	162	K
294	石槍未成品	52.0		27.5		14.0	24.52	輝石安山岩	尖端・茎	3	C	9 I			359		K
295	石鐮	51.5		40.0		10.0	22.03	無斑晶質安山岩	右辺	3	C	9 I			358		K
296	石核	124.2		93.8		57.0	710.00	無斑晶質安山岩		3	C	9 I		11-309	374		K
297	砥石・礫器	192.0		155.0		40.0	1901.97	緑色片岩		3	C	9 I	表裏線条痕多数	14-325	383		K
298	石核	63.2		106.0		41.0	330.00	赤色硅質岩		3	C	9'			322		K
299	石核	83.8		97.2		34.2	360.00	無斑晶質安山岩		3	C	9'			321		K
300	有茎尖頭器	30.8		23.2		5.8		赤色硅質岩	基	3	C 抔	9 II	尖端再生		W 9	98	M
301	有茎尖頭器	31.2		23.7		4.3	2.27	赤色硅質岩		3	C	9 II			SS 30	131	K
302	有茎尖頭器	35.0		△23.8	25.4	4.4		赤色硅質岩	右逆刺	3	C 抔	9 II			W 8	97	M
303	有茎尖頭器	△20.0	35.0	23.9		4.6	1.88	赤色硅質岩(赤玉)	上半	3	C 抔	9 II		III-Y・5	SS 16	122	K
304	有茎尖頭器	△42.43	43.1	△21.5	22.0	4.5	3.55	緻密質安山岩	左逆刺	3	C	9 II	斜行剥離	32-328	SS 32	130	K
305	有茎尖頭器	△17.6	38.0	24.7		4.1	1.86	赤色硅質岩	上半	3	C	9 II			SS 189	124	K
306	有茎尖頭器	△58.2	64.1	△24.2	24.8	4.1	4.76	硬質砂岩	尖・右逆刺	3	C	9 II	斜行剥離	22-314	W 45	94	K
307	有茎尖頭器	△37.2	55.0	△25.0	26.0	4.9	3.78	サヌカイト	下半	3	C	9 II		24-329			K
308	有茎尖頭器	25.7		21.9		5.7	3.15	赤色硅質岩	上部・下部	3	C	9 II	斜行剥離	30-325	SS 164	165	K
309	有茎尖頭器未成品	41.1		31.9		4.1	5.01	サヌカイト(外)		3	C	9 II		32-328	SS 31	129	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
310	有茎尖頭器 未成品	△36.8		29.9		5.4	6.12	硅質頁岩	尖	3	C 拡	9 II		11-361, III-Y・8	SS 15	123	K
311	有茎尖頭器 未成品	△61.2	64.0	△30.1	32.0	8.9	11.71	チャート～ 硅質頁岩	基	3	C	9 II	斜行剥離	21-312	334		K
312	有茎尖頭器 未成品	38.8		28.9		8.6	9.06	チャート～ 硅質頁岩		3	C	9 II		3-C- 5415	454		K
313	有茎尖頭器 未成品	39.3		38.8		8.4	14.78	無斑晶質安 山岩	上半	3	C	9 II		32	SS 168	169	K
314	有茎尖頭器 未成品	40.6		25.2		8.0	7.70	赤色硅質岩		3	C	9 II			SS 17	164	K
315	石槍	△41.1	43.0	19.0		6.6	5.58	金山?サス カイト	尖端・ 基端新	3	C	9 II		29-324	W 56	157	K
316	石篋	32.1		29.4		10.0	8.72	チャート		3	C 拡	9 II	上端礫面	13-393		127	K
317	石篋	57.6		25.5		9.0	12.65	金山?サス カイト		3	C	9 II		III- P・11	A- 114-2		R
318	石篋	54.2		37.1		9.8	16.92	無斑晶質安 山岩		3	C	9 II		36-331	SS 165	235	K
319	石篋	△45.0		41.4		6.8	11.18	無斑晶質安 山岩		3	C	9 II		22-314	W 46	95	K
320	石篋	23.5		38.1		8.7	9.49	赤色硅質岩	上半	3	C	9 II			SS 166	168	K
321	石篋	39.0		36.2		11.4	16.46	無斑晶質安 山岩	上半	3	C	9 II		53	SS 167	175	K
322	石篋	41.9		35.9		12.7	19.66	無斑晶質安 山岩	上半	3	C	9 II		31	SS 170	171	K
323	石篋	35.7		42.2		11.8	18.72	無斑晶質安 山岩	上半	3	C 拡	9 II		360		176	K
324	石篋	△103.2	117.0	61.5		18.0	122.90	無斑晶質安 山岩	刃	3	C	9 II		22-314	SS 34	241	K
325	石篋	96.0		51.0		22.5	96.45	無斑晶質安 山岩		3	C 拡	9 II		9-356		222	K
326	エンドスク レイパー	67.5		48.9		13.5	52.35	頁岩		3	C	9 II		28-329	W 52	137	K
327	スクレイ パー	39.0		32.4		8.8	11.46	金山?サス カイト		3	C	9 II		32	335		K
328	石錘未成品	35.9		35.8		5.1	12.40	緑色片岩		3	C	9 II	上端加工	3-C- 5413	SS 192	325	K
329	矢柄研磨器	△55.8		△43.5		20.0	37.61	砂岩	上部・ 右辺	3	C	9 II			SS 29	292	K
330	楔形石器?	42.0		22.5		6.0	7.92	チャート～ 硅質頁岩		3	C	9 II		27-329	337		K
331	石核	54.2		48.2		20.1	58.48	赤色硅質岩		3	C	9 II	上部脈石 英	35-331	SS 169		K
332	石核	171.0		243.0		58.5	3000.00	無斑晶質安 山岩		3	C	9 II				309	K
333	有茎尖頭器	△18.8	42.0	25.6		3.9	2.18	赤色硅質岩	上半	3	C	9 III				142	K
334	有茎尖頭器 未成品	44.9		24.4		10.5		サスカイト	下半	3	C 拡	9 III	摩滅痕				M
335	有茎尖頭器 未成品	40.0		32.1		5.5	5.11	無斑晶質安 山岩	下半	3	C	9 III	上端礫面	46-331	SS 179		K
336	有茎尖頭器	24.9		23.4		6.0	2.65	チャート	下半	3	C 拡	9 III		18-67	367		K
337	有茎尖頭器	△23.2		△20.0		3.1	1.15	チャート	下半	3	C 拡	9 III			364		K
338	有茎尖頭器 未成品	△32.5		30.0		7.1	7.26	チャート	上半	3	C	9 III		51	SS 180	232	K
339	有茎尖頭器 未成品	△43.0		37.9		8.4	12.41	赤色硅質岩	上半	3	C 拡	9 III			SS 24	167	K
340	有茎尖頭器 未成品	40.3		30.0		6.1	6.19	無斑晶質安 山岩	下半	3	C	9 III				181	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
341	石篋	64.5		34.5		9.0	15.33	赤色硅質岩	刃	3	C	9Ⅲ		43		152	M
342	石篋	99.3		42.6		15.0	51.50	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9Ⅲ			SS 25	242	K
343	石篋	△72.0		45.0		26.4	42.68	無斑晶質安山岩	下半	3	C	9Ⅲ				187	K
344	石篋未成品	63.0		33.3		20.4	35.86	頁岩		3	C	9Ⅲ		3-C-6276	347		K
345	石篋	46.9		35.8		8.0	13.11	無斑晶質安山岩	下半	3	C 抃	9Ⅲ			SS 181	236	K
346	石篋	△43.2		30.0		9.0	9.99	無斑晶質安山岩	下半	3	C 抃	9Ⅲ			SS 27	237	K
347	石篋	△28.5		33.3		6.9	6.68	無斑晶質安山岩	下半	3	C 抃	9Ⅲ		15-363	SS 182	163	K
348	石篋	△46.2		37.8		12.0	20.93	無斑晶質安山岩	上半	3	C 抃	9Ⅲ		28-352	SS 26	172	K
349	石篋	△34.5		41.4		9.9	17.46	無斑晶質安山岩	上半	3	C	9Ⅲ		49-331		183	K
350	石篋未成品	△66.6		56.7		13.5	41.78	無斑晶質安山岩	上半	3	C	9Ⅲ			351		K
351	石篋	△37.5		33.0		10.5	13.50	無斑晶質安山岩	上下	3	C	9Ⅲ		50-331		182	K
352	石篋未成品	88.5		51.3		15.3	54.65	無斑晶質安山岩	刃	3	C 抃	9Ⅲ	刃部破損後再生?		315		K
353	石篋未成品	74.4		56.4		20.4	85.84	無斑晶質安山岩		3	C	9Ⅲ		44-331	SS 35	240	K
354	石篋	16.2		30.0		7.2	13.42	赤色硅質岩	刃部破片	3	C	9Ⅲ		47	350		K
355	石篋	33.3		42.0		10.8	11.14	硅質頁岩	刃部破片	3	C 抃	9Ⅲ		3-C-6300	369		K
356	石篋未成品	60.6		51.3		21.0	58.89	頁岩		3	C	9Ⅲ		42-331	345		K
357	スクレイパー	153.6		△86.4		36.0	333.00	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9Ⅲ	線条痕有・砥石転用?		SS 183	312	K
358	スクレイパー	45.0		30.6		7.5	8.93	流紋岩		3	C	9Ⅲ		3-C-6285	349		K
359	スクレイパー	51.9		37.2		9.3	13.42	頁岩		3	C	9Ⅲ		3-C-6284	354		K
360	石核	40.5		52.5		16.5	33.64	チャート		3	C	9Ⅲ		3-C-6236	372		K
361	石篋	△25.5		34.5		9.2	9.61	硅質頁岩	基破片	3	C 抃	9Ⅲ		35-360	373		K
362	加工痕ある剥片	67.5		61.5		19.2	77.34	頁岩		3	C	9Ⅲ			346		K
363	石篋	68.4		56.4		18.2	67.42	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9Ⅲ		3-C-6059	365		K
364	石核	46.0		84.0		60.0	227.34	サスカイト(在)		3	C	9Ⅲ		40-331	SS 103	306	K
365	石核	36.0		61.0		32.8	65.70	硅化流紋岩		3	C	9Ⅲ			SS 178		K
366	石核	25.0		34.0		32.0	20.90	赤色硅質岩		3	C	9Ⅲ			SS 175		K
367	石核	42.4		34.2		16.2	18.25	硅質頁岩		3	C 抃	9Ⅲ	裏面ハジケ		SS 28		K
368	石核	54.0		18.0		22.0	38.96	硅質頁岩		3	C	9Ⅲ			SS 177	174	K
369	石核	64.3		30.9		35.5	重 77.28	硅質頁岩		3	C	9Ⅲ			SS 176		K
370	石核	78.0		31.0		30.0	97.86	サスカイト		3	C	9Ⅲ		48-331	353		K
371	石篋未成品	98.2		80.0		30.0	222.62	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9Ⅲ		3-C-6060	377		K
372	石核	98.0		99.2		26.4		無斑晶質安山岩		3	C 抃	9Ⅲ		3-C-6058			K
373	石核	121.6		92.0		42.0	472.00	輝石安山岩		3	C	9Ⅲ		41-331	104		K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
374	敲石	116.0		60.0		37.8	269.17	緑色岩		3	C 抃	9 III			319	238	K
375	敲石	98.0		66.0		56.0	490.00	砂岩		3	C 抃	9 III			316		K
376	敲石	69.8		62.8		36.0	172.02	デイサイト		3	C 抃	9 III			317		K
377	有茎尖頭器	△47.54	48.1	29.1		4.8	4.42	無斑晶質安山岩		3	C	9 IV		31-360	W 48	133	K
378	有茎尖頭器	△28.11	43.8	24.3		4.2	3.30	赤色硅質岩		3	C	9 IV			W 51	136	K
379	有茎尖頭器 未成品	23.1		26.5		6.0	5.71	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9 IV		34-382	467		K
380	有茎尖頭器 未成品	37.5		28.6		8.1	10.34	金山?サスカイト		3	C	9 IV			393		K
381	石槍	38.1		15.1		3.2	1.62	赤色硅質岩		3	C 抃	9 IV		32-369	W 40	89	K
382	石鐮	△34.5		30.8		7.5	6.81	無斑晶質安山岩	刃	3	C	9 IV		54	343		K
383	石鐮	△42		34.8		9.2	12.33	無斑晶質安山岩	刃	3	C	9 IV		56	344		K
384	エンドスクリーパー	40.5		38.2		10.4	19.83	輝石安山岩	上半	3	C	9 IV			455		K
385	石鐮	44.1		34.0		9.0	16.34	頁岩	基	3	C	9 IV	風化	55	SS 188	173	K
386	エンドスクリーパー	63.0		47.1		16.8	37.41	無斑晶質安山岩		3	C	9 IV	刃部円鑿状		392		K
387	スクレイパー	100.0		38.4		25.0	85.75	流紋岩質凝灰岩		3	C	9 IV	石核転用か		468		K
388	凹石・敲石	76.0		46.0		40.0	169.11	砂岩		3	C 抃	9 IV	磨減痕	36-9	SS 91		K
389	敲石	158.0		82.0		46.0	800.00	緑色岩		3	C	9 IV			378		K
390	砥石・礫器	109.5		150.0		61.5	1019.00	無斑晶質安山岩		3	C	9 IV	線条痕有・砥石転用?		275	314	K
391	凹石・敲石	142.2		60.4		23.6	320.00	緑色岩		3	C 抃	9 IV			466		K
392	敲石	123.6		54.4		42.2	425.00	緑色岩		3	C	9 IV			376		K
393	石槍	69.6		27.1		10.5	17.01	サスカイト	基	3	C	9 V			SS 235	166	K
394	石鐮	82.5		30.9		14.7	34.44	赤色硅質岩		3	C 抃	9 V			SS 20		K
395	エンドスクリーパー	55.9		44.0		15.3	34.66	硅質頁岩		3	C	9 V					K
396	エンドスクリーパー	58.5		49.7		20.0	60.28	赤色硅質岩		3	C 抃	9 V	石核転用か			233	K
397	スクレイパー	62.2		39.1		10.0	22.09	頁岩	下半	3	C	9 V			SS 120	239	K
398	楔形石器?	103.2		37.5		16.8	72.42	赤色硅質岩		3	C 抃	9 V			SS 19		K
399	石鐮	42.6		34.8		11.4	11.33	流紋岩	刃	3	C 抃	9 V			320		K
400	石鐮未成品	85.2		59.4		18.9	117.73	無斑晶質安山岩	刃	3	C	9 V			382		K
401	礫器・石核	101.8		75.0		38.2	281.71	頁岩		3	C	9 V			333		K
402	敲石	54.4		60.0		21.4	188.74			3	C	9 V		41-374		303	K
403	有茎尖頭器 未成品	115.0		86.4		30.0	26.57	無斑晶質安山岩		3	C	9 VI			W 55	156	K
404	敲石破損品?	△62.2		32.2		17.0	36.83	緑色岩		3	C 抃	9 VI			380		K
405	石鐮未成品	70.0		45.8		12.2	36.69	無斑晶質安山岩		3	C 抃	9 VI			379		K
406	敲石	56.8		56.0		39.0	132.66	デイサイト		3	C 抃	9 VI			381		K
407	石核	108.0		96.2		35.8	20.65	頁岩		3	C	9 VI上		57-344	328		K
408	敲石	86.6		81.0		68.6	610.00	輝石安山岩		2	D	1			397		K
409	石鎌	14.1		13.3		4.2	0.54	チャート		2	D	6			SS 226	73	K
410	石鎌	16.9		13.7		3.5	0.63	無斑晶質安山岩	尖	2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 221	78	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
411	石鏃	23.9		19.7		4.4	1.93	サスカイト		2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 218		K
412	石鏃	21.9		14.5		3.9	1.09	無斑晶質安山岩	右	2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 220	69	K
413	石鏃	22.6		17.6		5.4	1.96	サスカイト	尖	2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 219		K
414	石鏃	19.7		17.0		3.0	0.88	金山?サスカイト		2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 217		K
415	石鏃	14.7		12.0		3.3	0.43	無斑晶質安山岩		2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 227	72	K
416	石鏃	28.0		17.1		3.0		無斑晶質安山岩		2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 222	74	K
417	石鏃	18.1		19.0		3.6	1.05	金山?サスカイト		2	D	6			SS 115		K
418	石鏃	22.1		20.4		4.5	1.39	赤色硅質岩		2	D	6			SS 110		K
419	石鏃	19.0		14.8		2.3	0.45	金山?サスカイト		2	D	6	日本の洞穴遺跡記載		SS 109	34	K
420	石鏃	16.8		△8.5	10.0	3.1	0.29	金山?サスカイト		2	D	6	両面研磨, 左脚ガジリ, 日本の洞穴遺跡記載		SS 116	37	K
421	石鏃	20.0		13.5		4.2	0.73	無斑晶質安山岩		2	D	6			SS 114		K
422	石鏃	22.0		13.9		4.2	0.93	無斑晶質安山岩		2	D	6			SS 113	36	K
423	有茎尖頭器	44.9		24.4		5.9	4.82	無斑晶質安山岩		2	D	9		II-Y-11	W 43	92	K
424	有茎尖頭器	△36.38	40.5	△24.68	24.4	6.4	5.28	金山?サスカイト		2	D1 トレ	9(粘土層)	粘土層		SS 22	144	K
425	有茎尖頭器	△25.48	48.9	△29.56	31.1	7.0	3.61	硅質頁岩	上半	2	D4	9(粘土層)	粘土層	41	SS 21	141	K
426	有茎尖頭器	△29.17		△29.41	31.1	7.0	6.04	頁岩	上半	2	D	9			W 2	121	K
427	有茎尖頭器	△30.10	42.6	25.2		5.4	3.89	安山岩質凝灰岩	上半	2	D	9(褐色土)	褐色土	II-Y-4	SS 14	128	K
428	有茎尖頭器	△25.30	35.2	24.5		4.3	2.77	硅質頁岩	上半	2	D2	9		II-Y-8		113	K
429	有茎尖頭器	△27.63	41.1	△21.77	22.9	3.9		チャート	上半	2	D	9(褐色土)	褐色土		W 11・220	100	M
430	有茎尖頭器	△31.98	41.3	25.0		5.1	3.85	チャート	上半	2	D1 トレ	9(黄褐色土)		II-Y-11	W 5・219	120	M
431	有茎尖頭器	△44.76	45.4	23.4		4.2	3.61	赤色硅質岩	茎端	2	D	9					E
432	有茎尖頭器	△45.85	61.1	30.4		9.2	10.44	赤色硅質岩	尖	2	D1 トレ	9(黄褐色土)			W 3・219	118	M
433	有茎尖頭器	△27.84	47.5	27.9		5.5	3.71	チャート	上半	2	D1 トレ	9(黄褐色土)				115	M
434	有茎尖頭器	△25.66		27.1		6.0	4.31	頁岩	上半	2	D	9(褐色土)			W 10・220	101	K
435	有茎尖頭器	△30.79	41.5	25.3		4.9	3.26	赤色硅質岩	尖	2	D	9		II-Y・10		117	K
436	有茎尖頭器 未成品	18.0		32.0		10.7	16.54	赤色硅質岩		2	D3	9(褐色粘土)		67	SS 23	146	K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
437	有茎尖頭器 未成品	43.9		32.0		9.1	11.58	硅質頁岩		2	D1 トレ	9(黄褐色土)		53	SS 126	190	K
438	石槍	△30.0		△13.9	14.0	4.9	1.27	サスカイト (外)	下半	2	D1	9(黄褐色粘土)		50	SS 127	51	K
439	石槍	70.8		△28.5	29.5	10.5	17.79	安山岩質凝 灰岩		2	D1 トレ	9(黄褐色土)		II-P・4	SS 158	246	K
440	石槍	62.0		29.0		10.5	18.71	輝石安山岩		2	D3	9(黄褐色粘土)		43	331		K
441	石槍未成品	71.8		29.6		8.4	45.24	無斑晶質安 山岩		2	D	9(黄褐色粘土)		II-P・28		160	K
442	石槍未成品	64.3		30.0		11.5	19.09	赤色硅質岩		2	D4	9(黄褐色土)		II-P・13		107	K
443	局部磨製石 斧	61.1		23.9		13.0	12.90	硅質頁岩		2	D	9	両面研磨		221	153	M
444	石篋	△37.8		40.2		7.5	15.37	無斑晶質安 山岩	基	2	D1 トレ	9(黄褐色土)		II-P・26	361		K
445	石篋	△33.9		33.0		9.0	7.95	無斑晶質安 山岩	刃	2	D3	9(黄褐色粘土)		42, II-P・20	330	182	K
446	石篋	71.1		34.8		10.5	22.58	無斑晶質安 山岩		2	D1 トレ	9	日本の洞 穴遺跡記 載			155	M
447	石篋	115.8		46.5		19.2	85.61	無斑晶質安 山岩		2	D1	9(黄褐色土)		49		186	K
448	石篋	172.5		38.1		22.5		無斑晶質安 山岩		2	D	9	2点接合			161	M
449	石篋	40.2		39.1		6.9	12.54	無斑晶質安 山岩	基	2	D1 トレ	9(粘土層)			SS 157		K
450	石篋	33.4		40.1		11.4	15.90	サスカイト	基	2	D3	9(褐色粘土層)			SS 107	245	K
451	石篋	48.5		34.4		8.2	12.91		基	2	D1 トレ	9(黄褐色粘土)		II-P・18	SS 159	244	K
452	石篋未成品	75.1		47.1		20.2	69.06	無斑晶質安 山岩		2	D3	9(褐色粘土層)			SS 107	250	K
453	スクレイ パー	100.5		176.8		19.8	105.21	無斑晶質安 山岩		2	D1 トレ	9			W 19	265	K
454	石核	68.4		226.5		22.5	83.61	無斑晶質安 山岩		2	D1 トレ	9(黄褐色粘土層)			386		K
455	剥片	69.0		91.5		24.3	224.66	チャート		2	D3	9(褐色粘土層)	石器素材 か		190	311	K
456	石核	30.3		17.8		8.1		姫・黒曜石		4	A	3					K
457	楔形石器	60.0		18.2		12.0		赤色硅質岩		4	A 拡	4		人骨付 近			K
458	石核?	93.0		66.0		28.2		?		3	C	6					K
459	石篋	59.4		31.8		11.8		硅質頁岩		2	C4 トレ	9 (灰分)					K
460	石斧	116.7		45.9		23.7		?		2	C1 トレ	9 黄褐色土					K
461	敲石	57.0		37.2		39.6		不明		4	B	4		西南落 込み			K
462	石核	42.0		52.5		15.0		不明		4	B	8					K

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
463	石籠	33.0		32.4		7.2		不明		2	C4 トレ	9(黄色 粘土)					K
464	有茎尖頭器	△32.1	47.0	△27.9	29.0	7.9	6.33	チャート	尖	4	F	9?				275	E
465	有茎尖頭器?	△21.9		18.2		4.2	1.52	?	下半	4	F	9?				276	E
466	有茎・未成品	152.8		31.4		12.0	17.64	無斑晶質安 山岩		4	F	9?				274	E
467	有茎尖頭器	△29.10	33.2	△21.96	22.6	4.5	2.13	金山?サス カイト	尖	不明	不明	9?				87	R
468	石匙	56.5		17.0		7.1	4.60	赤色硅質岩	尖	1	1 トレ				W 13・ 222	271	M
469	石匙	20.0		31.9		5.2	7.78	硅質頁岩	右	1	A2				W 22・ 214	270	M
470	石鎌	16.5		△11.0	11.5	2.2	0.25	金山?サス カイト	右	2	A				SS 134		K
471	石鎌	19.0		17.2		2.9	0.51	金山?サス カイト		2	A				SS 133	49	K
472	石鎌	19.1		13.0		2.7	0.47	赤色硅質岩		2	A				SS 138	70	K
473	石鎌	△22.0	25.0	△15.1	16.0	3.1	0.66	硅質頁岩	尖端右	2	A				SS 136	75	K
474	石鎌	22.1		18.9		3.5	0.66	サスカイト		2	A		石材外来		SS 137	53	K
475	石鎌	24.1		△15.0	21.0	3.5	0.99	硅質頁岩	右	2	A				SS 135		K
476	石鎌	△16.0	21.0	△14.5		3.2	0.77	硅質岩	尖	2	A				SS 139	77	K
477	石鎌	△23.6		△20.0		4.0	0.88	赤色硅質岩	尖	2	不明						K
478	石鎌	23.9		9.0		2.9	0.48	赤色硅質岩	両	不明	不明					193	K
479	石鎌	19.0		14.0		2.7	0.67	頁岩	基	不明	不明				SS 225	10	K
480	石鎌	18.0		16.0		3.5	0.75	無斑晶質安 山岩		不明	不明				SS 224	76	K
481	石鎌	15.0		△11.0	13.0	3.4	0.55	赤色硅質岩	右	2	不明				SS 223		K
482	石鎌	15.2		10.6		3.0	0.35	頁岩	右逆刺	2	不明				SS 228	52	K
483	石核・礫器	111.0		138.0		36.5	1260.00	無斑晶質安 山岩		不明	不明				W 21・ 229	310	M
484	石籠	93.3		41.4		12.6	40.59	無斑晶質安 山岩		不明	不明				W 15	150	M
485	スクレイ パー	84.0		49.8		30.0	113.14	無斑晶質安 山岩		2・1	不明	9			225	267	M
486	石錘	△64.2	67.2	38.1		8.1	36.96	緑色片岩		不明	不明	4?			W 82	319	M
487	石錘	△51.0	55.5	34.5		9.0	29.14	緑色片岩		不明	不明	4?			W 83	320	M
488	石錘	△57.3	61.5	33.9		9.0	36.53	緑色片岩		不明	不明	4?			W 84	318	M
489	凹石	122.0		87.0		45.0				2	D2 トレ					300	M
490	礫器・敲石	238.0		103.0		44.0	1650.00	緑色片岩		2	D2 トレ				325		K
491	砥石	231.8		114.0		34.0	1510.00	緑色片岩		不明	不明		表裏線条 痕		307		K
492	台石	253.0		△179.0	250.0	42.0		?		不明	不明					316	M
493	凹石	153.0		120.2		56.0	1170.00	?		不明	不明				W 86	315	M
494	石鎌	△25.0	27.0	15.8		4.0	0.79	金山?サス カイト			採集				W 35	21	T
495	石鎌	17.0		15.0		3.1	0.54	赤色硅質岩			採集				W 73	25	T
496	石鎌	21.0		16.5		4.5	0.68	サスカイ ト?			採集				W 75	27	T
497	石鎌	17.0		13.2		3.9	0.36	赤色硅質岩			採集				W 78	30	T
498	石鎌	18.3		16.7		3.0	0.65	角閃石安山 岩			採集				W 36	22	T
499	石鎌	△16.3	18.3	14.8		2.0	0.43	姫・黒曜石			採集				W 37	23	T
500	石鎌	12.0		15.7		4.1	0.37	赤色硅質岩			採集				W 77	25	T

図No	器種	長さ (mm)	推定長 (mm)	幅 (mm)	推定幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	石材	欠	調査 次	出土 区	層位	備考	注記	整理No	写真 No	所蔵
501	石鎌	△26.0		△14.9		3.0	0.84	赤色硅質岩	左半		採集				W 79	31	T
502	石鎌	△15.8	22.0	17.5		3.3	0.84	頁岩?	尖		採集				W 74	26	T
503	石鎌	16.5		16.8		4.1	0.96	赤色硅質岩			採集				W 38	24	T
504	石鎌	17.1		15.3		5.0	1.17	赤色硅質岩			採集				W 80	32	T
505	石鎌	20.1		16.0		4.9	0.92	?			採集				W 76	28	T
506	有茎尖頭 器・未成品	64.0		△34.5	36.0	5.5	12.05	赤色硅質岩			採集				W 34・ 304	288	T
507	有茎尖頭 器・未成品	47.0		30.9		11.5	14.52	赤色硅質岩			採集				W 30・ 302	284	T
508	有茎尖頭 器・未成品	52.1		30.5		10.1	13.90	無斑晶質安 山岩			採集				W 26・ 300	280	T
509	両面加工ス クレイパー	39.9		30.0		19.1	50.39	無斑晶質安 山岩			採集				W 24・ 299	278	T
510	両面加工ス クレイパー	34.0		27.6		13.0	34.64	赤色硅質岩			採集				W 25・ 299	279	T
511	石籠	72.0		43.8		16.7	50.53	無斑晶質安 山岩			採集				W 33・ 304	287	T
512	石錘	△66.0	69.0	30.0		6.8	30.62	緑色片岩			採集				W 29・ 302	283	T
513	石籠	91.2		49.5		18.0	75.80	無斑晶質安 山岩			採集				W 28・ 301	282	T
514	石籠	46.8		39.9		18.0	33.82	赤色硅質岩			採集		破損		W 81	289	T
515	石籠	66.0		59.4		11.4	36.41	無斑晶質安 山岩			採集		破損		W 31・ 303	285	T
516	スクレイ パー	108.0		37.5		16.8	55.85	無斑晶質安 山岩			採集				W 23・ 298	277	T
517	スクレイ パー	50.4		61.2		19.5	56.39	無斑晶質安 山岩			採集				W 32・ 303	286	T
518	矢柄研磨器	△73.8		47.4		21.0	87.78	砂岩			採集		破損		W 1・ 218	291	T
519	有茎尖頭器	△41.87	42.7	23.1	25.4	3.8	3.8	赤色硅質岩		不明	不明	9	破損				R
520	有茎尖頭器	△40.13	51.2	26.3		5.5	6.27	赤色硅質岩		3	C 拡張区	9-2	破損	621015, No. 6- 357			M

出土区：図の調査区に準ずる、トレ→トレンチ、2次調査次のD1・2についてはD区1トレ・2トレかD1区・D2区のいずれかは不明  
所蔵：慶應義塾大学民族考古学研究室→K、久万高原町（美川村）教育委員会→M、愛媛県歴史文化博物館→E、竹口渉氏→T、国立歴史民俗博物館→R  
長さ・幅・厚さ（mm）△残存値 重量（g）、欠：欠損部分 尖→尖端・茎→基部・右→右脚・左鎌左脚・両→両脚・刃→刃部・基→基部



